

ISVD~Infinite  
Stratos Verdict Day~

高二病真っ盛り

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしも第二回モンド・グロツソで誘拐された一夏がACVDの世界に行ってそして帰ってきたら。

そんな私の妄想の塊です。

※注意！

この小説には主の独自解釈が入ります。

遅い警告なのは理解してますが、自分に合わないと思ったらブラウザバックを推奨します。

# 目次

	M I S S O N O 1	H o l e I n O			
	n e				
	0 1 1 0 1	プ ロ ロ グ			1
	0 1 1 0 2	家 族 の 再 会			8
	0 1 1 0 3	入 学 騒 動			13
	0 1 1 0 4	一 発 逆 転			18
	M I S S O N O 2	O n e A f t e r			
	A n o t h e r				
	0 2 1 0 1	自 己 紹 介			24
	0 2 1 0 2	生 徒 会			32
39	0 2 1 0 3	狂 笑、部 屋 に 響 き			
	M I S S O N O 3	W i l d C a r d			
	0 2 1 1 1	無 自 覚 の 罪			103
	0 2 1 1 2	自 覚 し た 罰			112
	0 2 1 1 0	勝 ち 戦 負 け 戦			94
	0 2 1 0 9	お 呼 び じ ゃ な い			84
	76				
	0 2 1 0 8	華 人 娘 襲 来 (後 編)			
	70				
	0 2 1 0 7	華 人 娘 襲 来 (前 編)			
	0 2 1 0 6	蠢 く ナ ニ カ			63
	56				
	0 2 1 0 5	設 定 説 明 & 主 任 の 真 意			
	0 2 1 0 4	依 頼 受 注			46

03112	コンピネーション	206	05103	権利と義務	274
03111	決着の七日目	198	05102	予測不能	266
03110	チームワーク	190	05101	奪われた白式	258
03109	慈悲なきパイル	181	n		
03108	秒殺の一夏	173	M I S S O N 0 5	D a r k R a v e	250
03107	交錯する真想	165	04103	崩れる関係	242
03106	目標を定めて	157	04102	直る関係	237
03105	決意表明	147	04101	変わる関係	
03104	あからさまな思惑	138	l a t i o n		
03103	学園案内	130	M I S S O N 0 4	C h a n g e R e	229
03102	要注意人物	122	03114	姉という存在	220
03101	イライラする	212	03113	ブリュンヒルデ	

05104	規格外兵装	280
05105	決心する者、すべき者	289
05106	昔話をしてあげる	298
05107	ファンタズマ・ビーイン	306
05108	過去と未来	313
M I S S O N 0 6	One Summe	
06101	姉弟喧嘩	320
06102	ごめんね	329
06103	噂と真相	338

06104	夏休みの過ごし方(前編)	346
06105	夏休みの過ごし方(後編)	352
06106	夏休みの過ごし方(特別編)	360
06107	夏休みの過ごし方(完結編)	368
M I S S O N 0 7	Heavy Day	
07101	慌ただしい初日	378
07102	アンタッチャブルな文化祭	383
07103	交わる死線	394

484	07-10	鴉は仇を忘れない	473	07-09	I r e a d y f o r	465	07-08	生徒会長は胃が痛い	452	07-07	セシリアさんは裏表のな い素敵な貴族です。はい復唱！	436	07-06	病室内ではお静かに	419	07-05	サイレント・ゼフィルス	407	07-04	アラクネ
-----	-------	----------	-----	-------	-------------------	-----	-------	-----------	-----	-------	-------------------------------	-----	-------	-----------	-----	-------	-------------	-----	-------	------

08-02	D I E O R K I L L	533	08-01	K I L L I N G D A Y	War	M I S S I O N 0 8 V e r d i c t	う (後編)	07-14	星のワルツを踊りましょ	522	う (前編)	07-13	星のワルツを踊りましょ	496	07-12	運命の D r i v e !	490	07-11	疾風の主は妖しく笑って
-------	-------------------	-----	-------	---------------------	-----	---------------------------------	--------	-------	-------------	-----	--------	-------	-------------	-----	-------	-----------------	-----	-------	-------------



969	09102	THE BARGAIN	
	949		
	09101	DARE DEVIL	
		M I S S O N O 9	O r i g i n a l
	08124	刻限の鐘が鳴る	923
	08123	その祈りは慟哭	900
	878		
	08122	時限のベルが鳴る	
	856		
	08121	ジャイアントキリング	
	08120	ゴリアテ	837
	08119	黒金の刃	814



# MISSION 01 Hole In One 01-01 プロローグ

SIDE：一夏

『お〜れ〜はファットマン♪戦場の〜運び屋〜♪』

通信越しに聞こえる歌を聞き流しつつ、コクピットでページをめくる。本を読み進めながら沸いた疑問を口に出す。

「なあファットマン」

『ん？どうしたイチカ？』

「俺がアンタに拾われてからどれくらい経つ？」

『さてなあ、結構前だが詳しくは覚えてねえなあ』

「そう…」

『どうした？』

「いや、ちよつと気になった」

『そうかい』

第二回モンド・グロッソで誘拐され、空中に開いた謎の穴に落ちた俺は傭兵としてこ

の世界で生き延びてきた。

フアットマンに拾われて、マギーにオペレートしてもらいながらたくさん敵と戦った。

『行くぞおおお!!』

『こ、来いよ… あ、穴だらけにしてやる』

『さつさと黒焦げになりなさい!』

『悪いが、アンタが死んでくれると助かる』

『アタシは小細工つてのが苦手なんだよ』

『たかが知れてんだよ、実際は』

『せいぜい飛び跳ねろ、低脳が』

色々なAC乗りと戦った。

『いいか、焦りも恐れも無用だ』

『いつもどおり、やってみせるさ』

『おい、ホントに全開でいいんだな?』

『打ちまくれ』

『逃がすな、必ず殺せ』

『旦那と息子の仇討ちね。古風なこと』

『仕事つてのは辛いね』

『2人がかりでよく言う』

『いつもどおり、ご遠慮なく』

『アンタが死のうが、アタシどうでもいいから』

2対1の数の差も全て叩き潰した。

『ただ勝つだけでは意味がないこと、私が証を立てて見せよう。』

『勝つた者が強者、所詮それが全てよ』

『戦いは頭脳と技能 AC同士なら、なおさらのこと』

『我もそなたも泡沫の夢に過ぎぬ』

『老骨を引きずり出した報い、その身で味わうが良からう』

依頼で怪しい集団を蹴散らしたこともあった。

『長年戦場を生き延びた勘、どれほどのものか』

『あーでも、やっぱり死ぬのは困るな』

『嬉しいのか、私は』

『頼むから、避けんな…って言ってもダメだよな』

『ただの傭兵、そういう風にはもう生きられん時代か』

『それは他人が決めることじゃなからうき、生き死にと同じによ』



『もういい、言葉等既に意味を成さない、見せてみる貴様の力を』

あいつらとの最終決戦。

俺は全てを焼き尽くして、勝利した。

『タワーを巡る戦いは既に始まった 止まることはない。』

そして始まった評決の日。<sup>ヴァーディクトデー</sup>

俺は傭兵として戦いそしてその結果は—

『まさか半年で休戦なんてなあ、てつきり十年そこらは引退出来んと思つたが』

「一時休戦だしいつ再開するかはわからないよファットマン」

『だな、まあまずは今日の仕事だ。間もなく投下ポイントだ』

「了解、オペレーティングシステム起動準備」

MIDDLE EAST

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

『スキャンした、依頼はここにいる自律兵器の殲滅だ。ちつちえのが東に五体、西に四

体。でけえのが北に一匹だ』

「了解」

西の奴らにヒートハウザーを放つ。北、東と順番に殲滅していき一分とただず奴らは

全滅した。

『周辺に敵影はない。終わりだな』

「……」

『どうした？』

あたりを見渡す俺にファットマンが気付く。

「あの報酬でこの程度……？」

あの報酬ならもつと居てもいいはずなのに……？

『確かに嫌な空気だ、さっさと帰ろうぜ』

「ああ」

『ミツシヨン完了 システムを通常モードに……なっ☒イチカ!!？下から高エネルギー反

応だ!』

「っ!」

ACの下に謎の穴が開き機体を吸い込もうとする。ブーストを使えど逃れられない。

『待ってる!!？今助けにー』

「きちやダメだ!ヘリも吸い込まれる!」

『クソが!どうすれば!』

「……」

この穴はこちらに来る時のと同じだ。だとすれば、帰る時が来たのだろうか。

『イチカ!!? 何があった!』

「ファットマン」

『あ?』

「今までありがとう」

『おい!』

「異世界から来たって言うのを信じてくれて、ACを与えてくれて、パートナーになってくれて本当にありがとう」

『……』

「しばらくは会えないと思うけど必ず会いに行く。だから…またね」

『…ああ、美味しい酒を用意しとくさ』

ファットマンの言葉と同時にエネルギーが切れる。

ACと共に俺は穴に落ち、意識は闇に沈んだ。

“幸運の男”と呼ばれた運び屋<sup>ストーカー</sup>。ファットマンはこの日を境に引退。  
名酒集めを趣味にしながら隠居生活をしているらしい。

## 01-02 家族の再会

SIDE：一夏

『おい！あのガキ逃げやがった！』

『逃がすな!!？捕まえろ!!？』

『おいボウズ、何泣いてんだ？』

『おうこつち来い。腹膨れりや笑えるだろ？』

『俺はファットマン。ちよいと有名な運び屋だ』

『おいおいファットマン、いつの間にかみさんもらってんなデケエガキ作つたんだ？』

『何言つてんだレイフ、拾つたんだよ。何でも異世界から来たらしい。』

『マジかよ…って信じてんのかよ!!？』

『嘘にしちやあ凝つてたし、吐く理由もねえからな』

『マグノリア・カーチス。マギーって呼んで』

『どうしたイチカ、顔赤くしちまつて。まさか…惚れたか？』

『何言つてんのよファットマン。私みたいな隻腕に惚れる訳無いでしょう』

『もう2年前か、私がお前を撃つたのは』



『お前！お前が私を!!?』

(懐かしいなオイ)

夢の内容にツツコミを入れつつ起き上がる。自分が地面に寝ていたということとはAから放り出されたはずなのだが、辺りを見回しても機体の破片すら見当たらない。あ  
るのは鳥居と見覚えのある神社だ。：神社？

「篠ノ之…神社」

記憶の中の姿そのままの篠ノ之神社があった。

(帰ってきたんだ…俺)

あの穴に落ちた時に予測はしてたが、こうもすんなり帰ると拍子抜けだ。

あれからどれだけ経っただろう。

ヴァーデイクトデイ

評決の日が半年、その前のマギーと死神部隊隊長

の会話と合わせれば最低2年半以上は経っている。

(引つ越してないよね千冬姉)

これで引つ越されていたら無一文で彷徨う羽目になる。千冬姉の地元愛を信じつつ  
俺は家路についた。

—————

織斑邸

S I D E : 千冬

『一夏の搜索を打ち切った!?? どうしてですか!!? アイツは、アイツはきつと生きています!・お願いします、再開してください!!?』

『謎の穴に落ちた? ふぎけるな!!? 一夏を何処へやった貴様等!!?』

『東、ああ私だ。: : そうか、" 見つかつてない" か』

『私はお前の思うような強い人間じゃない。弟一人守れないちっぽけな女だ』

(情けない女だな、私は)

暗い気持ちを飲み込むように酒を煽る。しかし、飲めど飲めど気持ちは晴れない。

あれからどれだけ経つただろう。第二回モンド・グロツソの開催日から逆算すればわかるが、それをする気力がない。

「散らかったな、この家も」

元から家事技能の無かった私の代わりに一夏が家事をしていたのだ、当然一夏がいない今は散らかる。

それにこうやって散らかっていれば一夏がひよっこり家事をしに帰って来てくれるかもしれないという意味不明な理由もあった。

(一夏、お前は今どこにいるんだ: :)

女々しい思考に陥っていると呼び鈴が鳴る。誰だろうか、真耶や五反田が来るとは聞いていないが。

腰を上げ服装を整え外に出る。玄関口にはどこからどこまで弟の印象を残す青年が立っていた。

「……」

「あの……えつと……ただいま？」

「い……ち……か？」

「うん」

目の前の青年は自身を一夏と言った。いったいこれはなんだ？酒の飲み過ぎで頭がおかしくなったのか？

「一夏……なのか？」

「うん」

「一夏……なんだな？」

「うん」

「一夏……一夏あ!!？」

「グエツ」

目の前の弟を抱きしめる。目から涙が溢れてくる。もう二度離すものかという思いを込めて更に強く。「千冬姉!!?ギブ!ギブ!」…命が危なそうなので離した。

「ゲホツゲホツガハツ!……ただいま、千冬姉」

「ああ、お帰り…一夏」

今までどこにいたのか、何をしていたのか、聞きたいことは山ほどあった。だが今はどうでもいい、帰って来たという事実が堪らなく嬉しいのだ。

「上がれ、散らかってるがな」

「台無しだよ千冬姉」

## 01103 入学騒動

織斑邸

SIDE：一夏

「えっと、ISの世代毎の違いは……」

帰宅から3日後、俺はISの事を勉強していた。

あれから色々あった。それこそ千冬姉が散らかした家の掃除より大変なことが。

『一夏、その腕輪は何だ？』

『気づいたら付けてた』

この世界に帰って来た時に付けてた謎の腕輪。外せないので調べてもらおうとISの類いだとわかり、それと同時に俺にIS適性があることが判明した。

謎のISと世界初の男性操縦者、科学者達はこぞって調べようとしたが、『深く調べようとしたら、外そうとしたら一夏ごと死ぬ（意識）』というメッセージが謎のISに表示されたため断念された。

千冬姉は俺の身を守るためにIS学園への入学を提案、俺はそれを承諾し、そして明日の入学試験のために現在ISの事を勉強している。

千冬姉は『政府は知識を期待していない、男性操縦者と謎のISのデータを取りたいのだろう』と言ったが学んで損はあるまい。

(ACよりは安全そうだな)

そもそもIS(正式名称「インフイニット・ストラトス」とは「宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツで開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワードスーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要に移っていったものである。間違っても背後にジェネレーターが付いてたりするような動く棺桶ではない。

(そして最大の特徴にして欠陥がこれか……)

前述したISには兵器としてはあつてはならない二つの欠陥がある。

まず一つは『女にしか動かせない』である。これにより各国は女性優遇制度を導入、女尊男卑の世界が生まれた。操縦者を選ぶ兵器は代替性に欠け、戦場に配備するのに躊躇いが生じる。それでは本末転倒だ。無論、数十機で国家を解体できるなら別だが……ん？(何で数十機とか国家解体とか浮かんんだ?)

まあいいか、もう一つの欠陥は『量産出来ない』である。これはもう言うまでもあるまい。現在ISの核たるコアの総数は467個、俺のを含めりや468個。これだけ

だ。

その他の詳しいことはブラックボックスになっており、解析は進んでないらしい。よくまあ使おうと思つたな。

(いや、こ<sup>A</sup>つちも言えないか)

俺が戦つた時代でこそ財団の解析で量産されてたが、それより前は発掘品をそのまま使つてたらしい。発掘品の癖に整備で動くのは聞いて驚いた…あふう。

(クソ眠い…寝よう)

明日からはルートを間違えればモルモットかホルマリンのデスゲーム(リセット不可)である。生きねば。

—————

試験会場への道中

「おくれくはくいくちか♪」

行方不明になつてた間のことは千冬姉には整理がついてから話そうと思う。

そもそも異世界に言つてた等どう話せばいいのかわからない。

その旨を千冬姉に伝えたら、了承してくれた。ゴメン千冬姉、心配かけたのに。

「ぶ〜ん♪ぶ〜ん♪…ん？」

「織斑一夏さんですね？案内します」

「はい」

係員に案内されてピットに到着。

男性用の特注 I S スーツに着替え謎の I S を展開……どうやって？

「背中を預けるように、座る感じで良い」

見送りに来てくれた千冬姉の忠告に従ってみる……うんともすんとも言わない。

薄々感じていた心当たりを試してみる。

(オペレーターイングシステム、起動準備)

【おはようございます。メインシステム、パイロットデータの認証を開始】

【メインシステム、通常モードを起動 作戦行動を開始】

【あなたの帰還を歓迎します】

思わず頭を抱える。

そうじゃないかとは思ってた、帰って来た時に周りになかったし。

だがどうして信じられよう、

ACが、I S になっていると。

「どうした一夏、気持ち悪いのか？」

「いや……大丈夫」

(装着)



【了解しました】

謎のIS、いやACを装着する。

教科書には感覚がリンクするとあったが、思ったよりその感覚がない。

「全身装甲か、珍しいな」  
フルスキャン

真つ白な機体を眺めた研究者が呟く。たしか全身装甲が採用されてるのは大分初期か軍用くらいだっけ。

「一夏」

「何？ 千冬姉」

「アリーナにいるのは元代表候補生でIS学園の教師だ。負けても悔やむことはない」

「……」

動かしただばかりの素人と元とはいえ国家代表候補クラスの玄人、勝敗は明確だろう。

「分かった、負けるつもりで行ってみる」

「バカモン、勝ちに行け」

「ハーイ♪」

苦笑する千冬姉を尻目にカタパルトに着く。

入学試験が、始まった。

# 01-04 一発逆転

アリーナ

SIDE：一夏

「メインシステム 戦闘モードを起動します」

ブースターを起動しアリーナに出る。

先にいた試験相手の教師に会釈をし武器を構える。教師からも返答が来た。

『や、山田真耶です！ふ、不束者ですがよろしくお願いします！』

「落ち着いてください」

なんかすごい衝撃的な発言が飛び出した。それこそ十代の身で「ブサイクなおっさ

ん」と言われるよりも衝撃的な発言が。

失礼な、顔には自信があるのだぞ。

『おおお織斑君！緊張しなくていいからね！』

「あんたが一番緊張してんだろ」という雰囲気ピットからも伝わってくる。

同感だが、落ち着いてもらわないと試験にならない。

「…すみません、タイムお願いできますか？」

『え？タ、タイムですか？』

「ええちよつと、緊張……してるんで（誰がとは言わない）」

『ええいいですよ……スウゥ、ハアゥ』

山田真耶さん改め山田先生に落ち着いてもらってる間に動作確認をする。手にある武器は小さくなつてはいるが、穴に落ちた時に装備していたものだ。

【システム スキャンモード】

【システム 戦闘モード】

【システム スキャンモード】

【システム 戦闘モード】

モードの切り替えやブースターのオンオフは思考で行える。リコンの射出も同様に。この時、ある事に気付いた。 索敵機

（ハンガーがない）

予備の武器を収納するハンガーユニットが両肩にない。

何処に有るとACCに問うと目の前にディスプレイが表示され拡張領域パススロットに収納されているのを確認、右手のA<sub>ヒート</sub>U<sub>ハウザー</sub>F<sub>ザイ</sub>—K<sub>ハ</sub>I<sub>ウ</sub>6をA<sub>ヒート</sub>U<sub>ハウザー</sub>—Q<sub>ザイ</sub>—D<sub>ブ</sub>68に切り替え、左手のA<sub>ヒート</sub>U<sub>ハウザー</sub>—K<sub>ハ</sub>I<sub>ウ</sub>6はA<sub>ヒート</sub>U<sub>ハウザー</sub>—M<sub>マ</sub>—K<sub>シ</sub>a<sub>ン</sub>—G<sub>ガ</sub>lon<sub>ン</sub>gに切り替える。

本来なら左肩に付いていたこれは右手に付けられないはずだし、逆も同様のはずなのだ

が、IS化による改良だろうか、それが行える。

改良点と言えばもう一つ。

(エネルギーが減ってない…)

ブースターを吹かしてるとはいえ、このアセンは重量二脚。こんなフワフワ長時間浮けるものではない。

これもIS化による改良なのだろう。

【システム スキャンモード】

リコンから得た情報を使いスキャン解析を今のうちに行う。

卑怯というかもしれないが、ここで無様に負ければモルモットかホルマリンの可能性があるのだ。慣れない機体だが、せめて一矢報いなければ。さて、スキャン結果は…

NAME:Rafale Revive

KE:750

CE:1500

TE:1390

R ARM UNIT:sniper rifle

L ARM UNIT:heat howitzer

(あれ、イッピーけつこうピンチ)

今持っていないK<sup>運動エネルギー</sup> E<sup>化学エネルギー</sup>属性が一番脆く、持っているC<sup>熱エネルギー</sup> E<sup>熱エネルギー</sup>属性とT<sup>熱エネルギー</sup> E<sup>熱エネルギー</sup>属性に強いという相手だった。

くわえてこちらでもKEが脆いが、相手はスナイ<sup>K</sup>パーライ<sup>E</sup>フル<sup>属性</sup>を持っているのだ、素人と玄人という差を含めればかなりピンチである。

そして懸念事項がもう一つ。

(予備の弾が買えねえじゃん)

今自分が使っているのは異世界の武器だ。当然、予備弾など買えるはずも無い。肩に予備弾装を積んでいればマシンだったが何も積んでいない。

つまりこれから自分はレーザーブレード一本で戦うはめになるのだ。

そんな変態戦法なぞやりたくない、やるのは千冬姉で充分だ。

なんとか対応策を考えてると通信が入る。

『織斑君、もう大丈夫です』

「えっ、あつ、はい！」

山田先生が落ち着いてしまった。

ゴチャゴチャした頭をリセットし向き直る。

公開処刑が、始まった。

—————

【深刻なダメージを受けています 回避を優先してください】

ACから警告音声が流れる。

アーマーポイント

それと同時に弾が当たり、A Pが減少する。

【エネルギー 残り30%】

【システム スキャンモード】

ハイブーストを使い回避に徹する。

相手は引き撃ち、こちらはアクセント程度にしか普段使わないレーザーブレード、こちらは弱点を突かれ、相手は耐性がある、そしてそもそも回避に向かない重量二脚、さらに根本的に練習不足なIS操作、まだ堕ちないのとそれでもブレードを当てたのを褒めてほしい。

【左腕 残弾30%】

ヒートマシンガンも撃つが全然当たらない。

いくらFCISの補助があろうと、レバー&ペダル操作のACと自分の動きで操作するISではかなり勝手が違う。

生身で銃を扱えはするがそれはあくまで護身用、こんな実戦は想定してない。

【稼動限界まであと僅かです 回避を優先してください】

フイストドライブ

壁蹴りを使いアーリーナを蹴り登る。

「いい的よ、貴方」と言わんばかりに狙撃されるが、構わず上に行く。

山田先生の行動。パターンはもう読めた、あとはこれで一発逆転だ。

ヒートマシンガンをヒートハウザーに持ち替え、それを撒く。

山田先生は瞬時<sup>イグニッションブースト</sup>加速を使い回避。そして回避した場所にはー

俺がハイブーストで急降下していた。

呆気にとられる先生目掛けて、<sup>ブーストチャージ</sup>飛び膝蹴り。ガイインという小気味よい音と共に山田

先生は吹っ飛びI.S.が解除される。

『山田真耶、<sup>シールドエネルギー</sup>S E エンプティ。』

『勝者、織斑一夏』

「パターンを見極め、重量級のブーストチャージ」

一番最初に考えたこの作戦が上手く決まり、俺は勝利した。

ちなみに筆記試験は英語以外全滅。

イツピー数年間勉強してないもん…

[MISSION 01 COMPLETE]

MISSON02 One After Another

02-01 自己紹介

IS学園 一年一組教室

SIDE：一夏

「こんにちは！織斑一夏です！趣味は読書、嫌いなのは不味い料理。男性ながらISが動かせたことにより、この学園に入学しました。ですが、ISに対する知識や学力そのものに乏しいので教えていただければ幸いです。一年間、よろしく願います！」

パチパチパチパチパチ

(よし、第一印象はバツチリだ)

自己紹介と共に頭を下げる、起こった拍手を聞きながら椅子に座り次の人の自己紹介を聴き流す。

入学試験から早二週間、俺はIS学園入学式を終え自分の所属する一年一組にてとびきりの営業スマイルで自己紹介をしていた。



「あふう……ん」

あくびを噛み堪えようとして失敗する。今の俺はとても眠い。

筆記試験の様子を見かねた千冬姉が、参考書を買ってくれたので、I Sの勉強と並行して、徹夜でやっていたからだ。

教室のドアが開いて、千冬姉が入ってきた。まさかの千冬姉が担任である。

「すまない、会議が長くなつた。今どこまでいった？」

「あ、織斑先生。いま如月さんが自己紹介を終えたところですよ」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえ。副担任ですから当然ですよ」

どうした山田先生。織斑先生を見る目が熱っぽいぞ。

人の趣向をとやかく言う趣味はないが、多分織斑先生はノーマルだぞ？

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物の操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんという暴力発言。ここヴェニデだっけ？

俺の疑問と共に、黄色い声援が響く。

「キャーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導頂けるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ぬます！」

声援ならぬ騒音に対して耳を塞ぐ、人の趣味に口を出さないと前述したがこれはひどい。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

心中お察しします織斑先生。というか毎年これなのか、日本始まつてるな。

「きゃあああああつ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

ゴメン日本終わってた。と同時にチャイムが鳴る。

「さあS H Rは終わりだ。一時間目はI S基礎理論だ、準備をしておけ」

せんせー、如月さん以降の自己紹介が終わってませーん。

—————

一時間目終了後

「……ちよつといいか」

臉をこすりながら終えた一時間目の教材を片付けていると、(こちら基準で)六年ぶりの再会になる幼稚な之じみに話しかけられた。

「どうした箒?」

「…話がある」

「廊下でいい?」

「ああ」

そうして廊下に出たのはいいが箒は一向に話し出さない。仕方ないのでこっちから切り出す。

「久しぶり、六年ぶりだっけ?」

「ああ、久しぶりだな」

「……」

なんかこう色々ときまずい雰囲気になった。

頼むよ箒、俺もコミュ力はないんだ。

「…よ、よく私だとわかったな。六年ぶりなのに」

「いや、殆ど直感だよ。こんな別嬪さんになってるなんてすごく驚いたさ」

容姿を褒めると箒が顔を赤らめる。

薄々気づいていたが、箒は俺に惚れているらしい。

しかし、箒の思いには答えられない。俺が愛しているのはたつた一人だけだからだ。  
マグノリア・カーチス

キーンコーンコーンコーン

二時間目の開始を告げるチャイムが鳴る。時間切れか。

「戻ろうぜ」

「わ、わかってる」

チクチクチクチク良心が痛む。

—————

二時間目

「ーであるからして、I Sの基本的な運用は国家の認証が必要であり、逸脱したI S運用をした場合は、刑法によって罰せられー」

山田先生がすらすらと教科書を読んでいく。俺の徹夜は無駄ではなかったらしくすんなり理解出来る。

「ここまでで何かわからないことはありませんか?……お、織斑君は大丈夫かな?」

怯えた調子で山田先生が尋ねてくる。

どうやら顔面跳び膝蹴りはかなりのトラウマだったらしい。ゴメンナサイ  
ブレストチャージ

「いえ、大丈夫です。わかりやすく助かります」

「そ、そうですか!…よかったです」

俺の返答に対して安堵する先生。恐怖心からの解放に対してか、自分の授業の出来に対してか。…前者だったら本当にゴメンナサイ!

「ちよつと、よろしくて?」

二時間目終了後の休み時間、一時間目終了後と似た文句がかけられた。

違う所は幼なじみじゃない今時の女子女尊男卑系という所だが。

「えつと…何の用かな?」

「まあ!なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら?」

素晴らしい欧米金髪ロール(イツピー命名)は憤慨する。

いやホントに誰だよあんた。昔の知り合いか?

自己紹介は如月さんで終わってしまったので、それ以降の人なのは確かだが。

「失礼ですが、どなたでしょうか?」

「わたくしを知らない?このセシリア・オルコットを?イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを?!」

知り合いですらなかったよ。

大方、国の方から男性操縦者織班と関わりを持つよう言われたのだろうか、好意的でない奴に関わる義理はない。とつとと会話を終えて退散願おう。

「で、オルコットさんは私わたくしめに何の用でしょう?」

「わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげようと思いませんね。ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリートですから」

予想通りの答えが返ってくる。

「いえいえ、オルコットさんのお手を煩わせる必要はありません。わからないことは教師に教えるを乞いますよ。教師は、生徒を教えるのが仕事ですから」

用意した言葉を返す。

織斑先生も「出来ない者には出来るまで指導する」といつていた。その発言に素直に甘えよう。

ちなみに俺も教官を倒したが、ここでいって問題を大きくするつもりはない。沈黙は金、雄弁は銀だ。

もつとも、今の彼女には雄弁の方が有り難かっただろうが。何故かって?

Bannon!!?

次の授業は織斑先生が教壇に立つからだ。しかもとつとくに開始のチャイムは鳴って

いたのだ。オルコットの脳天に出席簿が決まり、オルコットは頭をおさえた。

「席に戻れ。オルコット」

「はい……」

セシリア・オルコットが涙目でこちらを睨みつけてくる。

こつち見んな、自業自得だ。

（大丈夫かねえ、俺）

女尊男卑の根は深い。女子だらけのこの学園で自分はこの先生きのこれるのやら。シャーペンを取り出しながら大きく溜め息を吐いた。

# 02102 生徒会

一年一組 三時間目

SIDE：一夏

「さて、今から授業と行きたいところだが、その前に再来週のクラス代表戦に出る代表者を決めたいと思う」

織斑先生が何やら重要そうなことを言う。

授業中に決めることでも無さそうだが。

「先生、クラス代表とはなんですか？」

如月さんが質問する。他のみんなも聞きたそうだ。

「クラス代表者とは文字通り、クラスの代表だ。今言った対抗戦だけでなく、生徒会会議や委員会に出席するクラス長のようなものだ。ちなみに、一度決まれば一年間は変わらん。自薦や他薦は問わん、誰かいるか？」

本当に文字通りのものだった。しかし、嫌な予感がする。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」



予想通りの発言に机に突っ伏す。

やっぱりか、そこまで俺を殺したいかお前ら。

操縦者としての腕が無いと判断されれば、その時点で俺は研究室送りの可能性があるのだ。自分の発言が人を殺すことを自覚してほしい。

レーザブレードだけで元代表候補生に勝つことも出来ない今の俺では、現役代表候補生が出てくるであろうクラス代表戦など自殺行為だ。

Bannon !!? 」

「待ってください！それでは納得がいきませんわ！」

机を叩きながらオルコットが文句を言い始める。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと!!? 」

割と問題発言がとびだした。まあ否定しない、というか出来ない。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります。わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来たのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

暴言が俺だけでなく、日本にまでいった。

なんてスタイリッシュな自殺行為なんだ。見てて惚れ惚れする。

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」  
うんそろそろやめとけ。

クラスの半数以上を占める日本人生徒が切れているぞ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって  
は耐え難い苦痛でー」

これ以上はさすがにマズイ。俺は口を挟んだ。

「お、織斑先生!!?」

「…なんだ、織斑」

ヤバイ。織斑先生も切れてた、よく見たら山田先生もだ。

「やる気も自信も実力もあるみたいですし、ここはオルコットさんをクラス代表にしま  
しょう」

「……いいだろう。クラス代表はオルコットだ。オルコット、この件について話がある。  
放課後職員室まで来い」

「ええ、分かりましたわ」

グッバイオルコット

お前の蛮勇を俺は明日まで忘れない。

—————

昼休み 食堂への道中

俺と箒は逃げるように食堂に向かった。

理由は簡単だ。俺が織斑千冬ブリュンヒルデの弟である事と、箒が篠ノ之束天災の妹である事がばれたのだ。

織斑千冬は公式戦無敗にして、ドイツでの教官実績もある実力派の I S 操縦者。

篠ノ之束は I S の開発者にして、世界中から指名手配されている科学者。

そんな二人の弟と妹なのだ。気になって当然である。

おかげで質問責めにあいそうになり、命からがら逃げおおせたというわけだ。……”

誰かさん” にはつけられてるが。

「……」

「どうした一夏。食堂はもつと先だぞ？」

「…悪い箒。先行って席を取つといてくれ」

「?、わかった。あまり待たせるなよ」

「ゴメン」

箒と別れ、人気のない廊下に入る。

クルリと振り向き” 誰かさん” に向かって言い放つ。

「出ていけ」

昼休み 人気のない廊下

SIDE：誰かさん

「出ている」

織斑一夏の言葉に従い姿を現す。

驚いた、データ上の彼なら気付くはずはないのに。

「これは驚いた、生徒会長様が一生徒に何の用で？」

腕を広げたオーバーリアクションで彼は驚きを表現する。

「あら？おねーさんのこと知ってるのかしら？」

「知ってるも何も、入学式で挨拶してたじゃないですか…更識楯無生徒会長？」

ニコリと音がしそうな笑顔を彼は浮かべた。

なるほど、過去のデータなんて参考にもならないということか。

「それじゃあ私が何の用で貴方の前に現れたかは、わかるかしら？」

色気を振り撒くのではなく、真面目な顔で質問する。

彼は少し考え答えた。

「白鴉しろからすを、鳥籠からすかごに入れに…とか？」

白鴉、なんらかの理由で羽毛が白く変色した希少なカラス。

どうやら、入学試験で見せた白い機体と、唯一の男性操縦者である事と掛けているら

しい。

中々な洒落だが、自分が生徒会に勧誘されていることは理解してららしい…鳥籠という表現には若干の皮肉を感じるが。

「鳥籠に入るのは嫌？」

「嫌じゃありませんよ。鳥籠が、自分を守ってくれるものなら」

発言内容を見るに彼は学園に危害を及ぼす気は無いらしい。

それに、こちらが彼の立場を保証するなら生徒会にも入るようだ。

「フフツ、勧誘成功…でいいのかしら？ 生徒会へようこそ、歓迎するわ新しい副会長さ

ん♪」

「はい、それと頼みがありますが」

「何かしら？ エッチなのはダメよ？」

「空いている時間でいいので、I Sの練習と、勉強を教えてください!!？ 割とピンチなんですー！」

さつきまでのかっこいい顔は何処へやら、そこには高校一年生の青年がいた。

その後「人を待たせてる」と言い、彼は去っていった。

しかし…彼のあの目、どこかで見たことがあると思つたらー

(歴戦の、傭兵の目ね)

いったいいつあんな目を身に付けたのだろうか、個人的な興味が湧いてきた。

## 02103 狂笑、部屋に響き

昼休み 食堂

SIDE：一夏

「悪い、待たせたな」

「…遅い。何をしに行ってた？」

食券でチキン南蛮定食を購入し、箸が取ってくれた席に着く。

生徒会長との話が思ったより長くなってしまったらしく、箸は苛立っていた。

「ゴメン、財布を忘れててさ」

「…それにしては長かったな」

「まさか机の中だとは思わなくてさあ アハハ」

「フン、まあいい」

割り箸を割り、ごはんを頬張る。

女子用の定食は男子にはいささか物足りない。例え、食堂のおばちゃんの厚意で特盛りになってもだ。

「まったく、口を開けば姉さん姉さんと、私は姉さんの付属品ではない！」

デザートの一ロゼリーを口に放り込みながら箸が愚痴る。

どうやらご立腹の理由は俺だけではないらしい。

「ほひふへほひ (落ち着け箸)」

「お前は飲み込め」

「ごもつともです。」

—————

放課後 一年一組

SIDE：一夏

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

授業が終わり、今日の復習用の教材を鞆に詰めていると山田先生に呼びかけられる。

「なんだろうか？」

山田先生の手にある紙とキーで察しはつくが。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

「ああ、ありがとうございます。で、俺は何号室ですか？」

山田先生から紙とキーを貰う。

キーには『No. 1025』とあった。

「お、驚かないんですね」



「はい、予測はしてましたから。ところで山田先生」

「はい？」

山田先生が俺を見上げる。やっぱちっちゃいなこの人。

「二度帰っていいですか？荷物を持ってこないとー」荷物なら今頃お前の部屋の中だろう。織斑先生、勝手に人の荷物を持ってこないでくださいよ」

「よく言う。トランクケースは運びやすいように玄関に置いてあったし、ご丁寧に『いちかにもつ』と書いた紙が貼ってあったぞ」

てへぺろ♪

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね」

「風呂は部屋のを使え、大浴場はまだ使えん」

「はい」

生徒会に挨拶してから行くか。

◇

放課後 I S学園寮1025号室

S I D E : 箒

ザアアアア

剣道部で出した汗をシャワーで流す。部活棟にもシャワーはあるが、どうにもあつち

だと落ち着かない。

(一夏……)

脳裏に六年ぶりの再会となる幼なじみの顔が浮かぶ。

姉さんの妹ということでIS学園に強制入学だった私にとって「世界初の男性IS操縦者 織斑一夏」というニュースは朗報に他ならなかった。

同じクラスとわかった時は飛び跳ねたいほど嬉しかった。

再会した時も、すぐに自分だと分かってくれた。それに――

『こんな別嬪べっぴんさんになつてるなんて』

「~~~~っ!」

思わず顔が赤くなる。少々シャワーを浴び過ぎたようだ、決して照れているわけではない。

のぼせる前に早く出なければ。

バスタオルを巻いて部屋に出る。その時、ガチャリとドアが鳴った。

(同室の者か?)

だとしたら挨拶をしなければ、勝手にシャワーを先に使ってしまった非も詫げるべきだろう。

「同室の者か? すまない、勝手だが先にシャワーを使っていた。私は篠ノ之一」

「…箒?」

入口にいたのは今日再会を果たした幼なじみだった。

「…ゴメンナサイ」

そう言い、幼なじみは静かにドアを閉めた。

—————

夜 I S 学園寮 1025号室

S I D E : 一夏

「すまない、ちよつと出かける」

「うん」

どういうわけか知らないが、箒が部屋を出る。それを確認しながらページをめくる。文字を覚えるために始めた読書だが、今ではすっかり本の虜だ。

あの後、俺は着替えた箒に謝罪をして、彼女もそれを了承してくれた。

その後、ベッドの割り振りや風呂の使用時間などを取り決め、他愛もない会話をしていた。

だが、さっきの会話以降、箒はずつと怒っている。

『剣道を辞めた?』? どういうことだ一夏!!?』

『ゴ、ゴメン箒。ちよつといろいろあつてさ』

『いろいろとは何だ!』

『いろいろは…その…いろいろだよ』

『くっ!ならいい。今すぐ剣道部に入れ!鍛え直す!』

『ゴメン。勉強と生徒会があるから…』

『なぜ生徒会には入った?』

『自分の身を守るためだよ!』

『もういい!、フン!』

うん怒って当然だな。箒の質問には全然答えてないし。

いつか箒にも話さないといけないな、俺を数年間を。

(まずは身を落ち着けないとな…)

生徒会に所属することで、学園での立場は出来た。

可能なら立場が保証されているこの三年間の間にファットマンの元に行く方法を見つけた。だが日本政府の監視下でそれをするのは骨が折れることだろう。

そのためにも休息はしっかり取らなければ、そう思い本を閉じベッドに入ろうとした時だった。

『ハハハッ 見てたよ傭兵!それとも“イチカ”かな? ま、どっちでもいいよね!

ギヤハハハッ』

「っ！鳥野郎!!?」

右腕のACから声が発せられる。

ヴァーディクトディ

評決の日にて戦った鳥のよう<sup>で</sup>悪魔のよう<sup>な</sup>特殊兵器<sup>が</sup>

EXUSIA<sup>エクスシア</sup>

の声<sup>が</sup>。

「なんで…なんでテメエが…」

『アハハハッ アーハハハハハハ!!?』

狂笑が、部屋に響き渡る——

# 02104 依頼受注

ヴァーレディクトデイ  
評決の日

F A R

E A S T

S I D E : 一夏

【不明なユニットが接続されました】

最終兵器を起動させる。

鳥野郎の行動パターンは全てわかった。あとはこれを叩き込むだけだ。

『さあ……ケリを……ようじや……ねえか。最後……<sup>ラスト……</sup>黒……<sup>ブン</sup>鳥』

アイツが、俺に突進を仕掛けるタイミングを見計らう。

【直ちに使用を停止してください】

A Cの警告音声を無視して構える。

『見……みな、お前に……の力……があるなら!!?』

E X U S I Aの突進に合わせて俺は右腕の暴力を突き出した。

—————

現在 I S学園寮 1025号室

S I D E : 一夏

「なんで…なんでテメエが…」

『アハハハツ　アーハハハハハ!!?』

生きていたことには驚かない。“アレ”を喰らってもエイリークのように生きている奴は生きている。

だが、何故こいつの声がACから発せられているんだ☒

「……」

『あーあー、えつとお聞こえてるかな?』

『主任、先程の発言は挨拶には不適切かと』

呆然としていると謎の女性の声まで聞こえてきた。

一体全体どういうことだ?

『ああそうなんだ。で?それが何か問d『問題です』:キャロりん冷たい』

『ハア、困った方です。……申し遅れました、私はキャロル・ドーリーと言います。先程のやかましいのは主任です』

「…イチカ・オリムラだ」

相手の名乗りに応える。

鳥野郎は主任、謎の女性はキャロルと言うらしい。

「……で?俺に何の用だ?」

『用件の説明をする前に貴方にはお話しすることがあります。』

「何だよ」

キャロルの言葉に身構える。

こういう時は大抵トンデモな「話」だからだ。

『貴方が、何故我々の世界に来たか、という話です』

「……」

本当にトンデモな「話」だった。

棚からぼた餅とはこのことか。

来た理由がわかれば行く方法もわかるかもしれないのだ。

だが、罠の可能性もある。

偽の情報を使い俺を良いように利用する気かもしれない。

「…わかった、話を聞かせろ」

数秒思案し応える。

罠だろうと構うものか。

少ない情報でも今は欲しい。そう思い俺は耳を傾けた。

—————

夜 IS学園寮 寮長室前



## SIDE：箒

コンコン 『誰だ』

ドアの向こうから千冬さんの声がする。

「織斑先生、篠ノ之です」

『篠ノ之か、少し待て』

数秒後、織斑先生が寮長室から出てくる。

「待たせたな　で、何の用だ？」

「千冬さん、どうしてアイツは、一夏は剣道を辞めたのですか？」

「ん？何の話だ？」

「実はー」

千冬さんにさっきの会話を説明する。

どうして私とアイツの唯一の繋がりである剣道を一夏は辞めたのか。

一夏に聞いてもはぐらかすばかりだった。なら知ってる人物に当たればいい。

そう思い千冬さんを訪ねたがー

「悪いが、それは知らない」

返ってきたのは、期待と違う答えだった。

「どうしてですか!? アイツとずっと一緒にいたのでしょうか!?」

「……篠ノ之、耳を貸せ」

「……え？はい」

言葉に従い耳を貸す。

（これから話す事は口外するな）

（…はい）

（第二回モンド・グロツソで私が棄権したのは知ってるな）

有名なニユースだ。確かそのすぐ後に千冬さんは現役を引退したのだ。

確か理由は不明だったはずだがー

（棄権した理由は、一夏が誘拐されたからだ）

（っ!!??）

一夏が誘拐!!?? いったいどういうことだ!!??

（誘拐した奴らの要求通り私は棄権した。だが一夏は発見されなかった）

（……）

衝撃的な事実の連続に思考がフリーズする。

（発見されなかったって、じゃああの一夏は!!??）

（落ち着け、今から二週間半ほど前にアイツは帰ってきた）

（そこまでの間アイツはいったい何を…）

(わからん、一夏は『整理がついたら話す』と言っていた。だから、今はそつとしておけ)  
(……はい)

あまりの事実に頷くしかできない。

「……話はもう無いな？就寝時間だ、部屋に戻れ」

「……はい」

そのままふらふらと部屋に戻る。

一夏、お前に何があつたというのだ？

幼なじみである私だけではなく、姉である千冬さんにも話せないようなことなのか？

(私では、力にならないのか……?)

なあ……一夏。

—————

夜 IS学園寮1025号室

SIDE：一夏

『……以上で全てです』

キャロルが説明を終える。

彼女の話を整理するところだ。

・数年前、主任やキャロルが所属する“企業”がタワー内で用途不明な装置を発見す

る

・周囲の制止を聞かず主任が勝手に起動させ装置から強い光が発生する  
 ・その後の解析でその装置が「異世界へ物質を送迎する物」と判明。同時に成功時には強い光を発する事も判明

・企業はその装置を使ってみたがいずれも失敗した  
 ・そこで成功した初回の起動でなにかがこちらに来てないかを調査。俺が異世界から来たことを知る

・彼なら成功するのでは？という疑問の下、依頼で俺をおびき出して装置を使用、見事に成功した

・そして現在、装置を使いACに通信する形で連絡をとっている  
 つまり総括するトーー

「だいたいお前らのせいじゃねえか」

『否定はしません』

『いーじゃん！終わったことだし〜ギヤハハハッ』

「……ハア」

この手の輩にいくら怒ったって無駄だ。

とつとつ話を進めてもらおう。

「で？俺への用は何だ」

『依頼です、貴方にはこの世界の調査をしてもらいます』

だろうな。此方こちらからすれば彼方あちらが異世界なのと同様に、彼方からすれば此方も異世界なのだ。

調査したいのは当たり前だろう。

「調査の期間は？報告はどうすればいい？」

『調査期間は貴方がその学園を卒業するまで、報告は此方こちらがそのACを通じて観察するので不要です』

「……トイレとか、風呂とかは止めろ」

『ええ、承知してます』

プライバシーも何もない調査方法である。トイレと風呂は死守したが。

「報酬は？タダで、とは言わないよな？」

『依頼中のパーツや武器の調達、修理費と弾薬費は我々が請け負います。又、完了した暁には貴方を此方の世界に招きましよう』

一気にきな臭くなった。手当があまりにも厚すぎる。

「話が良すぎるな、何が目的だ？」

『勘違いなさらぬよう。我々は“企業”です。対価に見合うだけの成果は期待します』

これ以上言う気は無いつてか。いいだろう、俺は受ける依頼を選ばない。

「…わかった、依頼を受けよう。調査に当たって行動方針はあるか?」

『いえありません。では、ご健闘をお祈りします』

『じゃあ、頑張つてね。アハハハッ』

通信が切れると同時にACからメッセージが表示される。

【無銘ノネームの一次移行を完了しますか?】

【YES NO】

ノーネーム、彼方の世界でコロコロ機体を換えていた俺に付けられたあだ名。

(これが俺の専用機の名前か)

苦笑しながら迷わずYESを押す。

『一次移行ファーストシフトを完了しました。単一仕様能力ワンオフアビリティ // 機体換装アセンブルを解禁します』

メッセージウィンドウを閉じ、息をつく。

彼方の世界に行く方法は出来た。

あとは…あとはこの三年間で別れを告げるだけだ。

前の様に突然消えるのではない。千冬姉や箒、弾や鈴音に挨拶するのだ。

チクリと胸が痛む。

(寮長室に行くか…)

まずは、ファーストシフト一次移行した事を織斑先生に知らせなければ。  
そうして夜は過ぎた。

## 02-05 設定説明&主任の真意

織斑一夏

【プロフィール】

身長：178cm

体重：72kg

年齢：16?歳

IS適正：B

役職：IS学園生徒会副会長

趣味：読書

大切なもの：自分自身

嫌いなもの：自分を否定される事

専用機：無銘ノネーム

【設定】

我らがイッピーにして黒い鳥。職業は傭兵兼アーキテクト。

第二回モンド・グロツソで誘拐され、主任のせいでACVD世界に飛ばされ、帰って



きたらモルモット寸前で、感想欄では無茶な要求をされる不憚な主人公。

スペックは大体は原作一夏の上位互換だが、ラッキースケベ率や鈍感度、人殺しへの抵抗感、剣の腕などは原作よりも低い。

マグノリア・カーチスに惚れており、彼女を殺した時に「自分の一生の恋をマギーに捧げる」と決めている。

自分の正確な年齢を覚えておらず、とりあえず16歳を名乗っている。

AC世界では機体をコロコロ換える仕事スタイルから“ノーネーム”と呼ばれた。どんなアセンでも十分に乗りこなすが、そのアセンの専門には劣る腕前。

観察眼に長けており、時間を掛ければ人間の思考パターンですら読みきれる。山田先生戦など対格上の時はこれで勝利を掴んでいる。

現在は企業の依頼を受け、学園生活を全うしようとしており、又、親しい人たちに別れを告げようとも考えている。

あとコジマの影響を受けない体質という本編で一切役に立たない才能がある。

### 【一夏目線の時系列】

第二回モンド・グロツソで誘拐され主任のせいで出来た穴に落ちる。

←

ファットマンに拾われ、レイフやハワードにACを教わる。ここら辺でマギーと出会

い一目惚れ。

←

← ACVD本編&サブミッションをこなす。

←

← タワーを巡る戦い、ヴァーデイクトデー評決の日に参加。特別出撃を全てこなす。

←

休戦、そして帰還。以後本編へ。

【性格】

冷めてるようで冷めきれない三枚目。物腰穏やかだがノリのいい常識人で、独白が若干ウザい。

ただし戦闘中はとて静か、話すとしても「了解」など報告程度。

朴念仁時代に惚れさせてしまった女の子達に申し訳なく思っており、以後誤解の無い言動を心がけている。

仕事に対してはかなり真面目。共闘相手を背後から撃つ事こそしないが、盾にはする。

いい人そうだがかなり自己中心的な所もある。「お前の考えは否定しないから、俺の考えも否定するな」の精神の持ち主。

【専用機 無銘（ノーネーム）】

一夏の専用機。待機状態は白い腕輪。そして外せない、いわば呪いの装備。

機体の色は白が基調、武装や形状は後述の単一仕様能力によって不定。

ちなみに世代区分は後付け装備が主体なので第二世代。

【単一仕様能力 ワンオフアビリティ 機体換装 アセンブル】

通常モード時（待機状態）でのみ使用可能な単一仕様能力。戦闘モード時やスキャンモード時では使用不可。

『ガレージ』と呼ばれる バサスロット 拡張領域に似た特殊空間にあるパーツを使い、機体そのものの組み替えが行える。ただし、人体の構造上、武器腕は使用不可。

『ガレージ』には多数のパーツがあるが戦闘に持っていけないのは腕武器、肩武器、バサスロット 拡張領域に詰められるものだけ。ようはVACに詰められる分だけ。

【ACのIS化による影響】

グライドブーストに空中版と上を含めた全方向版が追加。余裕で無限グラブが可能に。

武器の攻撃力や装甲の防御力はIS化によって下がっている。それでもIS側からすれば充分高い。

反面、起動力は上がっている。しかし軽量級でなければ、ISと同等の空戦能力は得

られない。

索敵能力はISには完全に劣る。リコンがなければ無理。ただし解析能力は上。

—————

前回の通信後 タワー内

『主任、質問したいことが』

『ん〜？な〜に〜キャロりん♪』

タワー内で一体のAC“ハングドマン”から男と女の声が出てくる。

その様は一人相撲同然だが本人たちはまるで気にせず話を続ける。

『何故あの傭兵、イチカ・オリムラに調査の依頼と物資の援助を？』

『あれ？それ聞いちゃう？』

『ええ』

女の方の疑問は当然だ。

織斑一夏に依頼をせずとも右腕のACからISの世界を調査すればいい話なのだか

ら。

『俺と同じ機体を使ってたから…とか？』

『答えになっておりませんが』

『ゴメンゴメン、ギャハハ』

何が可笑しいのか男が笑う。

『質問を質問で返すようだけどさ、財団：アイザックくんが持ち出した“アレ”…なんて言っただけ？』

『N—W G I X / v…分類は“旧世代機”<sup>ネ</sup>でしたかと』

『そうそう、ネクストネクスト』

うんうんと、男は一人で納得する。

『して、それと何か関係が？』

『いやさあ、ネクストが初めて出てきた“国家解体戦争”ってあつたじゃん』

『はい……っ！主任、まさかとは思いますが』

『多分、キャロリンの考える通りだよ。ん〜♪楽しみだ』

なんたる事か。

この男は織斑一夏に、黒い鳥イキキュウに暴れるだけの“力”を与えてI Sの世界を戦乱に落とすつもりなのだ。

それこそ、国家解体戦争レベルのものを。

『上手くいくかどうかはともかく、何故そのようなことを？』

『何度も言ってるじゃん、「戦いこそが人間の可能性だ」って…それに…』

『それに？』

女が先を促す。

『ISなんてものは人間にはいらなんだよ。そう、いらなんだよ、あんな、可能性<sup>たたかい</sup>を否定するものはね』

男の声がふざけた調子から急激に低くなった。

そしてー

『あああいしてるんだあああ人間をおおお！ ハハハハ!!』

十分前と同様に狂笑が響いた。

誰よりも、何よりも、人間を愛する人形の笑い声が。

## 02106 蠢くナニカ

???

????

SIDE :???

「素晴らしい。それしか言いようが無い」

あのお方がモニターを見ながら呟く。

映っている映像は世界で唯一の男性IS操縦者 織斑一夏の入学試験のものだ。

「所詮はISを動かせるだけ……と思ったが、大きな間違いだ。間違い無い、彼こそ、彼こそが！我々の目指すべき」到達点だ!!？」

あのお方が感情を高ぶらせている。だが、私は認めたくない。

こんなポツと出があのお方に見初められるなど。私より認められるなど。

「アイツ」よりも、「姉さん」の方が「到達点」だと私は思います」

だから私は反論する。

しかし返ってきた答えは――

「いや違う。『織斑千冬』は『到達点』にはならないんだ。彼女は、違うんだ」

返ってきた答えは、否定だった。

織斑一夏、あのお方に見初められた男。認められた、男認められない、認めたくない、認めてたまるものか!!?

お前なんか私の居場所をとられてたまるものか!!

(織斑一夏、私はお前を、お前を否定するー!)

怒りを込めた私の握りこぶしから血がしたたり落ちた。

—————

放課後 一年一組

SIDE：一夏

「え？俺に専用機?？」

「ああ」

織斑先生から言われた言葉に思わず聞き返す。

入学式から一週間、とくに大きな問題もなくすごしてきた俺にその発言は少々衝撃的すぎた。

起こった事といっても、寮長室から帰ってきた箒に謝罪された事だったり、入学式翌日から前の<sup>白業自得</sup>発言でオルコットがクラスで孤立した事だったり、<sup>ノネーム</sup>無銘の登録申請でゴタゴタした事だったり、捏造<sup>マ</sup>新聞部<sup>ス</sup>副部长<sup>コ</sup>をとつちめた事だったり、如月さんがパイルバンカーについて一時間講義した事だったり、e t c e t c



……あれ？意外と問題だらけ。

「聞いているのか？織斑」

「あつ、はい！でもなんでですか？」

俺のデータを取るために無銘ノネームが不向きだというのはわかる。

だがそれなら訓練機で問題はない。

わざわざ専用機を与える必要などないはずなのだ。

（おそろくだが、この件。"束"の奴の差し金だ）

（束さんが!?）

織斑先生の耳打ちに驚愕する。

篠ノ之束、箒の姉でISの開発者で俺や千冬姉など限られた人しか「人間」と認識しない科学者。

そんな束さんが何故こんな事を？考えれば考えるほどわからない。

「…とにかく、今からアリーナに来い」

「すいません織斑先生、会長にメールしていいですか？」今日は生徒会を休む"つて"

「構わん、早くやれ」

まあ見せてもらおうじゃないか。その専用機とやらを。

◇

アリーナ

SIDE：一夏

「あつまましたね、織斑くん」

「あれ？山田先生」

なんか姿が見えないと思つたら、準備していたのか。

「お疲れ様です。山田先生」

「だ、大丈夫、織斑くん！これも先生の仕事だから!!？」

まだ俺の事が怖いらしい。

元々男子が苦手なのかな？

「山田君、準備は出来てるな？」

「はい！これが織斑くんの専用IS『白式』びやくしきです!!？」

ガコンツと重苦しい音と共に開いたピット搬入口にその『白式』びやくしきはいた。  
名前通りの純白の体で鎮座する白式。

見た事も無いはずのソレに俺はどこか“懐かしい”と感じた。

「第三世代機『白式』。製作は倉持技研です」

「武器は何を？」

「ええと…き、近接ブレード一本です…」

「ハア!?？」

なんだその変態アセン!??

まさか入学試験でレーザブレード主体に戦ったからか!??

それとも千冬姉の弟だからか!??

「お、織斑先生 s」では、早速だが初期化と最適化処理を行う。織斑、乗ってみろ……はー  
い」

気は進まないが仕方がない。

織斑先生の言葉に従い、白式に近寄る。

「乗り方だが、無銘ノーマムとそう変わらんだろう」

(それは無理だと思う)

絶対、起動方法が違うもの。心中苦笑しながら右手で白式に触れるー

バチイッツツツン

「グワアツツ!?？」

「織斑!!？」

「織斑くん!!」

白式と俺の間に火花が散り、俺は吹っ飛ばされた。

先生二人が俺に駆け寄る。

「大丈夫ですか!!?」

「くッッ! 右手を、火傷しました」

「見せてみる……この程度なら、冷やせば大丈夫だろう。…だが、何故、吹っ飛ばされた?」

「俺にも、わかりません……」

痛む右手を抑えながら立ち上がる。

どういう訳か知らないが、どうやら俺は白式には乗れないらしい。訓練機には乗れるのだが。

「ッ!!? とりあえず、保健室に行つてきます」

「ああ、あとはこちらが調査する」

フラフラと保健室に向かう。ズキズキと右手が痛む。

まったく、恨むぞ束さんー

—————

五分後『我輩は猫であるく名前はまだないく』

「あれれ? あれれれれれ?」

多種多様な装置の前でウサミミをつけた女が一人、唸<sup>うな</sup>っていた。

「おかしいなあ。もう白式からいつくんのデータが送られてくる時間なんだけどなあ」

その女の名は篠ノ之束。「天才」ならぬ「天災」である。

「なくんでなのかな、カタタタカターン♪……………ふうん」

織斑一夏に『白式』びやくしきを送った張本人である束は手元の端末を操作し、不機嫌そうに顔をしかめる。

「アレ」が「白式」を拒絶…ねえ。どこの誰とも知らないけど、どうして束さんの邪魔をするかなあ」

ゾツとするほど冷たい声と共に束は一夏の右腕の無銘ノミネームを睨みつけた。

「名無しのゴンベエだかなんだか知らないけどさ。アレ」、やっぱいつかぶつ壊してやる」

だっていつくんには必要ないもん♪と彼女は続けた。

決意と共に束は装置に向き直る。

「キミもそれを望んでるよね、紅椿」あかつばき？」

装置の中には赤い、紅い、朱いISが鎮座していた。

# 02-07 華人娘襲来 (前編)

夜 IS学園正面ゲート前

SIDE：鈴音

「ふうん、ここがそうなんだ……」

ボストンバッグを肩に背負い、私『フアイレンシン鳳鈴音』は呟いた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

今日ここに来た理由はIS学園への編入手続きのためだ。

上の人から渡された紙を上着のポケットから取り出した。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからどこにあるのよ」

字だけ書かれたクシャクシャの紙に思わず愚痴る。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

考えるよりも前に足を動かす。こういうのは考えたって仕方ないのだ。

(誰かいないかなあ、先生とか生徒とか案内できそうな人)

時刻はとうに八時、こんな時間に生徒が外にいる訳がー

「だから……のこが……」

あった。IS関連施設の入口から人の声が聞こえたのだ。

(ちよよいいや。場所聞こつと)

受付の場所を聞くために小走りして近寄ろうとする。

「あのさあ、どうしてわかんないかなあ」

聞き覚えのある「声」が、聞こえた。ドクンと胸が高鳴る。

三年前から二度と聞けなくなった幼なじみの声が。

(あたしってわかるかな。たった三年間……わかるよ……ね?)

記憶に思い出すは三年前の彼との最後の会話。

『鈴！今度俺モンド・グロツソでドイツに行くんだ!!?』

『ドイツ!!?……そっか、世界大会だもんね。気をつけてね一夏』

『お土産、楽しみにしてろよ』

その会話の後、一夏は消えた。

じんわりと目頭が熱くなる。慌てて涙を拭いた。

(大丈夫、大丈夫。わかんなくつてもあたしが美人になっただけだし!!?)

ポジティブ思考に切り替え、深呼吸。

覚悟を決めて声をかける。

「いちー」

「だからな筈。きのこは負け組なんだ」

「きのこを愚弄して悦ぶか、たけのこ派が！」

「黙れよ。茶番は終わりだ。ケリをつけようじゃねえか」

「認めない。たけのこ派など私は認めない」

そこにいたのは自分の知らない女子と仲良く話す一夏の姿だった。

(誰? あの女の子。なんで嬉しそうなの? っていうかなんで名前で呼んでんの?)

さつきまでの胸の高鳴りは嘘のように消え、ひどく冷たい感情と苛立ちが雪崩れ込んでくる。

「らちがあかん! 寮で決着をつける!」

「上等だ。まずは寮まで競走するぞ!」

「ハッ、生徒会が剣道部に敵うものか!」

◇ そう言い幼なじみと見知らぬ女は走り去る。

夜 本校舎一階総合事務受付

SIDE: 鈴音

本校舎一階総合事務受付はその後すぐ見つかった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、鳳鈴音さん」



愛想のいい事務員の言葉もどこか遠くにあつて意識に届かない。

あたしはその事務員に聞いた。

「織斑一夏つて、何組ですか？」

「ああ、噂の子？　一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの生徒会長にスカウトされて副会長になったんですつて。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね」

噂好きは女性の性。聞いてもない事をペラペラと話す事務員を冷ややかに見ながら、あたしは質問を続ける。

「二組のクラス代表つて、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

丁度いい。本当に、丁度いい。

「名前は？」

「え？　ええと……聞いてどうするの？」

あたしの様子のおかしさに気づいたらしく、事務員が戸惑う。それもこれもあいつが悪い。

「お願いをしようかと思つて。代表、あたしに譲つてつてー」

散々心配かけておいて……お灸を据えてやるわ!!

翌日 一年一組

SIDE:一夏

「フワア〜ア」

「見つともないわよ織斑君。そういえば、今日二組に転校生が来るらしいわ」

「ソントおはよう如月さん。……転校生?」

びやくしき ノーネーム  
白式が無銘に拒絶されてから早六日、教室で大あくびをかいていた俺は、如月さんこと  
きさらぎすすみ  
如月奨美に指摘され慌てて口を閉じる。

寝不足の原因は間違はなく昨夜の箒との不毛な論争だ。  
きのこたけのこ戦争

「転校生……?この時期にか? フワア〜」

どうやら箒も眠いらしい。ちなみに論争の結果は「どちらも美味しい」という甘さも  
サクサクさも無い結果だった。

「知ってるく確か中国の代表候補生でく無理矢理二組のクラス代表の座を奪つたんだつ  
て〜」

会話を俺と同じく生徒会の布のほとけほんね本音(通称のほほんさん)が混ざろる。

しかし、中国ねえ……なんかひつかかる。

「まあ心配はいらないわよ。なんとつて、あんなに自身満々な代表候補生様がいるんで

すもの」

如月さんが皮肉を込めた言い回しをしながらオルコットを見やる。クラスの半数以上を占める日本人生徒を敵に回す発言で、セシリア・オルコットはクラス代表でありながらクラスの鼻つまみ者だった。

まあ自業自得だな。いじめが起こつてないだけまだマシだろう。

「如月さんの言うとうり心配無いと思うよ。専用機持ちのクラス代表、一組ウチと四組だけだしー」

「その情報、古いよ」

「[[[[?]]]]」

俺の言葉が誰かに遮られる。誰だろうかと四人で振り返る。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

「誰〜?」

「誰かしら?」

「誰だ貴様?」

「鈴!? なんでここに!?」

(こちら基準で) 約三年ぶりの再会となる幼なじみ、鳳鈴音フエイルインがドアにもたれ、片膝を上げ、腕を組むというなんとも似合わぬポーズで立っていた。

# 02-08 華人娘襲来 (後編)

SHR後 一年一組

SIDE：一夏

「どういふことよー！」

その後すぐにSHRということで鈴は教室に帰っていった。

そして、SHRが終わり次第再度乗りこんできた訳である。尚、何故か俺が怒られているが。

「どうしてあんたがクラス代表じゃないのよー！」

「どうしてつて……自薦者がいたから譲ったんだよ……」

クイツとオルコットの方を指す。ギロリと睨み返された。おおコワイコワイ。

「自信も実力もあつて、更には入学試験で教官を倒した実績付きだぜ？俺だつて推薦するよ」

「あんただつて教官倒してるつて話じゃない。しかも初めて乗る初期状態の機体でつておまけ付きで」

「バツ、鈴!?」

この状況では問題にしかならない発言が飛び出した。クラス内に波紋が生まれる。

あちこちで「やっぱり織斑君の方が…」とか「オルコットさんよりも…」とかがヒソヒソ聞こえる。嫌な空気だ。

「と、とりあえず続きは昼にしよう。食堂で待ち合わせでいいか？」

「? いいけど…」

「じゃあ一時間目の準備をするから、鈴も教室に戻ったら？」

「わ、わかったわよ……」

鈴が立ち去り、オルコットがこちらに来る。

「ちよつとー」

「一夏、今のは誰だ？」

オルコットの言葉が箒に遮られる。ありがとう箒、なんか怒ってるけど。

「鳳鈴音、お前と入れ違いに転校してきた友達だよ」

「……友達割にはずいぶん嬉しそうだったな」

怒ってる原因はそれかい。俺はともかく、やきもち焼きは男に嫌われるぞ？

「そりゃまあこの学園、知らない人だらけだからな。箒みたいに話せる知り合いってありがたいんだよ」

「そ、そうか……フフッ」

今度は頬を赤らめてる。この恋が失恋決定な事を考えると自分のイケメンフェイスが憎い。

(いったい俺はいくつのフラグを建てたんだ?)

Jでも主任でもいいから答えて欲しい。

『誰も彼も惚れさせる定めか……ンツフツフツフツ』

『いいじゃん、面白いよお〜ギャハハハハ!』

……(声的に) 女のKやキャロルの方が適任かもしれない。

――――  
 昼休み 食堂

SIDE:一夏

「待ってたわよ、一夏!」

「悪いな鈴。授業が長引いた」

食券でチキン南蛮定食を買い、箸と共に鈴がとつてくれた席に着く。ちなみに箸は焼き魚定食。鈴はラーメンセットだ。

「久しぶりだな。三年ぶりか。元気にしてた?」

「それはこつちのセリフよ。でも、元気みたいね……ところで」

鈴が箸をジッと見た。そして箸も見返す。

「一夏。この子、誰？」

「篠ノ之箒。ほら、お前と入れ違いに転校していった友達だよ」

「ふーん……よろしく」

「ああ」

「……」

何この修羅場。誰が作ったんだ？……俺か。

「……ねえ一夏」

少し話すと鈴が耳を貸すようジェスチャーする。それに従い耳を貸す。

（何があつたの？教えて）

当然、いなくなった三年間の事を聞かれた。

（……ゴメン。今ゴタゴタしてるからさ、整理がいたら千冬姉と一緒に話すよ）

（でも……！）

（お願い。頼むよ鈴）

（……わかつたわよ）

「……話は終わったか？」

箒が少し悲しそうな眼で俺を見る。

千冬姉から行方不明の件を知らされている箒は俺達の様子で大体の事情を察したら

しい。

「……食べようぜ。冷めるし」

「ああ」

「うん」

箸を割りごはんを頬張る。やはり、男子には少ない。

「「……」」

……会話が、続かない。

「そ、そうだ!!? 親父さん元気? 日本に帰ってきたってことは料理屋を再開するのか? またあの料理を食べたいよ」

この微妙な沈黙をどうにかせねばと思い、やや早口で話題を出す。

しかし、

「あ……。うん、元気だトー思う」

まさかの地雷を踏んだ。やっぱり俺にコミュ力無いわ。

「こつちからも、質問なんだけど」

「?」

俺のコミュ力の無さで拭えなかったとよんとした空気を変えるように鈴が話を切り出す。



「あのオルコット？つて子。なんかクラスで疎まれてたけどさ、どういふこと？」

「あー。えつとな、教室で話した“自薦”が問題でさ……」

鈴に入学式の事を話した。

「うわあ。そりゃ孤立するわよ」

「いじめられないだけ幸運じゃね？」

「わからんぞ一夏。女子のいじめは陰湿だからな」

「まじかよ」

難儀なもんだねと思う。会長によるとオルコットは先の発言の件で日本から抗議が飛び、英国政府からかなりきつく怒られたらしい。

「そんだけの大口叩ける実力なの？」

「わからん、オルコットが戦っている所を私達は見たことない」

「鈴の機体がどういふのかは知らないけど、戦うなら懐に潜り込めば楽だと思うよ」

「なんでよ」

「昨日の実習でさ、アイツ 近接武器を素人のやり方で出してたから」

無論、俺はしつかり無言で出せたが。

「ま、誰が相手でも明日の試合。あたし勝つから」

「おう頑張れ。明日は一組と当たらん限りは応援するぜ」

「健闘を祈る」

デザートの一口ゼリーを食べながら答える。個人的にはオルコットよりも鈴に勝つてほしい。

「で、でさ一夏」

「なんだよ」

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

歯切れ悪く鈴が指南を申し出る。

「あー、うん。気持ちは嬉しいけど、間に合ってるんだよ」

「え？」

鈴と箒が驚く。そういえば箒にも話してなかったな。

「えつとな、ISの事は生徒会長から教わってるんだ。ほら、ロシア代表の更識楯無さん」

「そ、そう……なら、仕方ないわね……」

「な、ならば……仕方ない、な……」

納得してくれたようで何より。てかなんで箒まで残念がってたんだ。

お前IS嫌いだろ！

「む？そろそろ昼休みが終わるぞ」

「そつか。じゃあ鈴！明日は頑張れよ」

「頑張る!!？」

互いにビシツと決めて解散した。

—————

翌日 生徒玄関前廊下

「フツ」

「どうした一夏。いきなり笑ったりして」

「いやなに箒。〃 運命〃 っであるもんだなっ、さ」

「確かにな」

生徒玄関前廊下に貼られた大きな紙。

『クラス對抗戦日程表』と書かれたそれによれば、一組の最初の相手は――

鳳鈴音率いる二組だった。

# 02-09 お呼びじゃない

試合当日 第二アリーナ

SIDE：一夏

(流星の満席だな……)

英国と中国の代表候補生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。通路には、まばらに生徒が立って見ている事態である。

そんな最中、俺はドア付近で立ち見を決め込んでいた。クラス席があるのに立ち見をしている理由は二つある。

「やつぱ……オルコットさん……やなくて……」

「織斑く……方……有名……」

一つは、あのギスギスした一組の空間に居たくないのだ。同じ理由で、のほほんさんや如月さんも立ち見だ。

恨むなオルコット、むしろ俺は止めた方だ。

【システム スキャンモード】

そしてもう一つは無銘ノーマムの展開をあまり見られないためだ。頭部のみの部分展開とは

いえ見られていいものではない。

何せ俺からすれば初めて生で観るIS同士の試合なのだ。見て盗み取れる事は多い、落ち着いて全てを観る為にこうして後方を陣取っているのだ。

(さて、まずオルコットのデータは……)

NAME: Blue Tears

KE: 1134

CE: 1326

TE: 1287

R ARM UNIT: laser rifle (TE)

L ARM UNIT:

UNIQUE UNIT: blue tears (TE)

UNIQUE UNIT: blue tears (CE)

どうやら性能は前に実習で見た時と同じらしい。

オルコットの専用IS、ブルー・ティアーズの特徴的な点は、機体と名を同じくする

第三世代型兵器『ブルー・ティアーズ』である。

『ブルー・ティアーズ』とは四機の自立起動型と二機の弾道型からなるビット状のそれを第三世代特有のイメージインターフェースを利用し、それぞれ別の動きと射撃を可能に

するといふものだ。攻撃属性はTEオンリー、イギリスはレーザー好きなのか？

(…んで。鈴の方は、つと……)

NAME: Syenron

KE: 998

CE: 1475

TE: 1113

R ARM UNIT: blade (KE)

L ARM UNIT: blade (KE)

SHOULDER UNIT: ryuhō (――)

(龍咆?)

鈴のISは甲龍シエンロンというようだが、俺の関心は肩部武装の『龍咆』りゅうほうに向いていた。

無銘ノイネームの解析によると、空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、余剰で生じる衝撃自体を砲弾化して撃ち出す無属性の第三世代型兵器だそうだ。

これには驚愕した。何せハイパーセンサー等があるISにさえ有効な不可視性なのだ。目視に頼りがちなAC戦に十分な威力で持つてこられたら堪らない一品だ。

ちなみにまったく関係無いが、今解析を行ったスキャンモード、IS化によつて対人性がアップしたらしく相手のバイタルや身長に体重、さらにはBバスターウエストヒツンW Hまでスキャン

出来るらしい。……最後のいるのかなあ。

「隣をいいか？」

「ん？……いいよ」

くだらん思考にふけていると隣に箒がやってきた。

立ち見に隣も何も無いと思うが。

「どしたの？」

「いや……あの空気がな……」

どうやら箒もあの空間に居たくないらしい。ぶつちやけるなら一組のクラス席の半分に他のクラスの女子が座っている。

日本に思い入れの無い外国人生徒や俺のような一部の日本人生徒はあの空気を嫌い立ち見をしているのだ。

「なあ一夏」

「何？箒」

「今のお前、すごく間抜けだぞ？」

「……」

今展開しているHEADパーツはスキャン性能が高いKAGERO mdl. 1だ。

つまり今の俺は、側から見れば人の頭の上にちよこんとアンテナが立っているという

感じだ。

……うん、間抜けだ。

【システム 通常モード】

解析は終わったので無銘を待機状態に戻す。それと同時にアナウンスが響いた。

『両者、試合を開始してください』

合図のブザーと共に二人が動く。やはり先手を撃つたのはオルコットの方だ。

『踊りなさい!』

四機のビットを繰り、鈴に射撃を繰り出すオルコット。だが俺はここであることに気付いた。

(本体が動いてない…?)

ビットで鈴の動きを抑えてる間に本体であるオルコットが射撃をすれば、かなり有利なはずなのにそれをしない。

舐めプレイの可能性も考えたが、同じ代表候補生の鈴にするとは考えにくい。

つまりオルコットの『ブルー・ティアーズ』は本体とビットの同時攻撃が出来ないのだ。まあ試作機だしね。

『負けるかあ!!?』

負けじと鈴も反撃に転じる。ほぼ無制限の射角を利用しアリーナを飛び回って回避



と攻撃を同時に行っている。

だが、やはり鈴にも付け入る隙があった。

(攻撃する場所を見てるな……)

『龍咆』もまた射撃武器だ、着弾点を目視するのは当然だろう。だが、隠密性が売りの『龍咆』に着弾点を予想されるのはあまりにも痛い。

「つまり、お前が言いたいのはー」

「どちらがより早くペースを握るか」

オルコットが鈴の弱点を見抜くが早いか、鈴がオルコットの弱点を見抜くが早いか。

オルコットが先に見抜けば、『龍咆』しか遠距離攻撃の無い鈴はただの的になる。

鈴が先に見抜けば、『龍咆』で思考を荒らし、オルコットをただの木偶に出来る。

「!」 「夏!」

「!」

オオツと観客が沸き立ち、箒の言葉に俺は現実には引き戻される。

鈴が被弾覚悟で突っ込み、オルコットの苦手なショートレンジに潜り込んだのだ。

『イ、インターセプト』

『させない!』

オルコットのショートブレードを鈴が双剣で弾き飛ばす。最後の切り札である弾道

型もこの至近距離では使えない。

『逃がすかあー!』

『くっ』

鈴がここぞとばかりに双剣でラツシュを仕掛ける。レーザーライフルで攻撃を受けるが、オルコットの顔には苦悶の二文字があつた。

「…決まったな」

「どこに行くつもりだ？」

「帰る」

「そうか」

生徒証をコンソールにかざしドアを開ける。

魅力的だったんだけどなあ、デザートフリーパス。まあ参考になったしいつか。

ズドオオオン

「!??!」

出口が混む前に帰ろうとした時、アリーナ全体に衝撃が走つた。

それと同時に開いたドアが閉まり、ガチャリとロックがなされる。

「なんだ?!?!」

『き、緊急事態です!生徒の皆さんは今すぐ避難してください!!?!』

アナウンスト同時にアリーナと観客席を隔てるシールドに物理障壁が張られる。何が起こったのか知りたいが、山田先生のアナウンスに従い再度、生徒証をコンソールにかざす。

……が、反応は無い。

(アセンブルを<sup>速</sup>変更。HEADを<sup>ス</sup>KAGERON<sup>重</sup>mdl<sup>視</sup>1から  
H12 Swallowtailに！)

HEADパーツを変更しコンソールに<sup>ノイネーム</sup>無銘をかざす。

ドアのロックを解除しようしているとコア・ネットワーク通信が入った。

『織斑、聞こえるか!??今どこにいる!』

「三番ドア!今ハックして開けようとしている!!?」

『開けれそうか?』

『勿論!』

『そうか、避難場所は体育館だ。そこに行くよう言ってくれ』

『了解!』

コンソールにかざしながら、後ろに振り向き叫ぶ。

「避難場所は体育館!お・か・し・もを守って逃げて!」

H12 Swallowtailがドアをロックしていたウイルスプログラムを発

見し、破壊。

生徒証をコンソールにかざすと今度こそドアは開いた。

「待て、一夏！」

我先にと逃げようとする生徒をかわし出口とは別方向に向かう俺を箒が止めた。

「どこに行く気だ!?」

「見回り。生徒会役員だしね」

「なら私も！」

「箒は逃げて！遮断シールドを突き破るんだよ、アイツ!!」

「だが…」

「いいから！」

「くっ！わかった……」

箒が避難する生徒の波に入ったのを確認し、走る。

生徒がいなくなったのを確認して別ゲートから観客席に戻る。

目的は何が来たのか、それを探るためだ。

『システム、スキャンモード』

物理障壁で阻まれた視界をスキャンモードで見通す。アリーナの中にいたのは鈴と

オルコットともう一機。

N A M E : G o l e m I

K E : 5 0 0

C E : 5 0 0

T E : 5 0 0

R A R M U N I T :

L A R M U N I T :

W A R M U N I T : G o l e m I ( T E )

「ゴーム……レム……？」

謎の未確認機が、そこにいた。

## 02-10 勝ち戦 負け戦

襲撃時 アリーナ

SIDE：鈴音

「ああもう、すばしっこい!!?」

『よく狙っておくんなまし!!?』

あたしが『龍咆』を撃ち放ち、オルコットが『ブルー・テイアーズ』で狙撃する。

だが、未確認機はそんなあたし達を嘲笑うようスイスイ避ける。

効果は無い訳ではない。

アリーナの遮断シールドを突き破ったあのビーム砲撃を撃たせる隙は粗雑ながらも

連携で潰している。

だけど、あと一步。あと一步が届かないのだ。

『鳳さん！オルコットさん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちが

ISで制圧に行きます！』

一組の副担任、山田先生のアナウンスが響くが生憎その指示には従えない。

『ピット口が閉まってますのよー』

理由をオルコットがイラついた口調で答える。

そう、脱出経路のピット口が閉まつてるのだ。これでは逃げることも、救援部隊が来ることも出来ない。

『え、ええと。でしたら……』

『おーい、聞こえてるかなー?』

『!?!?』

どうしようかと悩んでいると既に避難したはずの一夏から通信が入る。

『織斑!?!? 何処にいる! 何故避難してない!?!?』

『すみませーん織斑先生。今観客席です。それよりも報告が。アレ、無人機です』

『!?!?!?!?!』

反省も何も感じられない声で一夏はとんでもない事を口にした。

『あともう一つ、アイツを倒す方法を見つけました』

『本当!?!?』

『本当ですの?』

『ああ、だから協力しろ。鈴、オルコット』

◇

襲撃時 観客席

SIDE：一夏

『ゴレム？』

「それがあの無人機の名前だ」

『信じられませんわ……無人で動くISだなんて……』

「あるんだから信じろ。第一、通信中の無防備なお前らを攻撃してこないのがいい証拠だ」

『あ……』

納得のいかなそうな二人に説明する。まあ納得はいかんだろう。

何せ目の前にいるのは技術的に不可能なはずの無人ISなのだ。正直俺も困惑してる。

俺が未確認機が無人機だと確信した理由だって、傭兵として有人無人問わず戦ってきた経験とアーキテクトとしての知識を総合した直感だ。

だが、この直感が間違いではないと断言できる。

「とにかく、今言ったのが作戦の内容」

『つまり、あたし達はアンタの言った時間に言った場所に撃てばいいのね？』

「うん、予想通りなら狙った場所に行くから」

俺が建てた作戦とは鈴とオルコットの射撃で無人機の挙動を誘導し、認識範囲外の俺



が撃ち抜くというものだ。

UNAC無人ACにも言えることだが、認識範囲外からの攻撃に無人機は総じて弱い。今回はそこをつく。

「二人ともいける?」

『まあ今は? 緊急事態ですし? 貴方に従ってあげても良くてよ』

「頼むぜ、英国代表候補生セシリア・オルコット」

『頼んだわよ……一夏……』

「任せな、中国代表候補生鳳鈴音」

どうやら、この作戦に二人は納得してくれたようだ。

『カウントはわたくしが致しますわ』

『わかったわ』

「了解」

【システム 戦闘モード】

スキャンモードから戦闘モードに切り替え、右手のX000レザ KARASAWAライフルのチャージを開始する。

チャージ中はスキャンモードで壁を見通すことができないので、完全に勘での狙撃となる。

(力を貸してくれ…マギー)

傭兵時代の狙撃の腕にはまだ遠い。

だからこそ、もつと狙撃に向いたアセンではなく願掛けを込めてマギーのアセンにしたのだ。

自分の一撃が当たるように。

執念で再起動した彼女のような一撃を撃てるように。

『3!』

オルコットのカウントが始まった。

『2!』

フルチャージしたレーザーライフルを予測狙撃地点に向ける。

『1!』

落ち着け、無人機のロジックパターンは既に見切った。あとはこのまま当てるだけだ。

『0!』

ワンテンポずらし引き金を引く。

放たれたレーザーは、物理障壁を貫き、遮断シールドを砕き、そして—

『やりましたわ!!?』

『当たった!!?』

見事、無人機に着弾した。

『! アイツ、まだ動くの!!?』

しかし、当たりどころが良かった?らしく、グググと無人機が動く。

再度、チャージを開始した。

『総攻撃ですわ!この機を逃せば終わりですよ!!?』

『わかってるわよ!』

二人も考えは同じようで、無人機に銃口を向ける。

鈴の『龍咆』が、オルコットの『ブルー・ティアーズ』が、そして俺の『KARAS

AWA』が紙装甲の無人機に突き刺さる。

俺たちの即席コンビネーションで、無人機はあえなく爆散した。

—————

事件後 屋上

SIDE：一夏

「今日は…風が騒がしいな……」

無風の屋上で一人眩く。

事件の事情聴取が終わり、俺たち三人は『今回の事件を口外しない』という誓約書を

書かされた。

避難をしなかった事は怒られたが、その後の事とトントンという扱いで済むらしい。んで、どうにも部屋に帰る気にもなれずこうして屋上で黄昏ている訳だ。

「一夏……？」

「ん……？鈴？」

どういう訳か、鈴も屋上に上がってきた。

「え、えつとき……今日はありがとう。あたし達だけじゃ危なかった」

「いや、俺だつて二人がいなきや倒せなかったさ。だからお礼はいいよ」

この発言については本当だ。

機動力でISに劣る無銘ノーマムと今の俺ではあの無人機にはどう足掻いても勝てないのだ。

……まぐれに頼ればワンチャンあるけど。

「は、話は変わるんだけどさ」

「？」

「約束……覚えてる……かな？」

約束？

鈴と別れる前の約束？

記憶を探るが、『お土産を買う』という絶対ありえない選択肢が頭を占める。

「やっぱり…覚えて…」

「まっつて！今出そうだから！」

そう、思い当たる節が一つあった。

約束した場所は小六の教室で時刻は夕方、確か内容は――

『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』!!?」

「そ、そう。それよ！」

やっとこさ思い出した時特有の感覚が脳を満ちた。アハ体験って言うんだっけ？

同時に、“思い出さなきや良かった”という考えが生まれる。だって内容と状況を見るに、どう考えても告白なんでもん……。

「で、でさ…返事は…」

「あーえつと、鈴？」

「な、何？」

「自惚れと思つて聞くよ？この約束つて、告白とかそういう類？」

一抹の希望に賭けて質問する。

赤く染めた頬が明らかに否定しているが、それでも賭ける。

「そうよ…あたしは、鳳鈴音はアンタの事が好きなの」

「……」

……まあ、だろうね。

俺としても、嬉しいのだがー

「……ゴメン、その告白は……受けれない」

「えっ……」

俺に受け入れる選択肢は、ない。

## 02-11 無自覚の罪

夕方 屋上

SIDE：一夏

「……ゴメン、その告白は…受けれない」

「えっ…」

鈴が困惑する。この後の事を思うとズキリと胸が痛んだ。

「えっ…えっ。なん…で…?」

「あーえつとき。俺、好きな人がいるんだ」

「えっ…」

またもや鈴が困惑する。

まあ当然だろう、誘拐される前の俺は筋金入りの鈍感で朴念仁だったし。

「だ、誰なの…? その好きな人って…」

「ゴメン、それは言えない」

我ながら、最低な返答だと思う。

行方不明の間の事や、この告白の事。散々心配をかけたのにもかかわらず、何一つ話

してやいない。

(俺はもういいけどさ、千冬姉や鈴にはアンタを殴る権利があると思うぜ。主任)  
心の中で元凶に呟く。

もつとも、一番殴られるべきなのは俺なのだが。

「……から」

「えっ?」

自己嫌悪に陥っていると鈴が何か呟く。

「諦めないから!絶対に、アンタを振り向かせてみせるから!!?」

鈴の口から出たのは、あまりにも真っ直ぐな、眩しい思いだった。

「またねっ!」

「ちよ、鈴!?」

そう言い放ち、鈴は泣きながら屋上から降りていった。

「……最低だな……俺……」

でもさ、鈴。

たとえ三年後に消えなくても、俺は、彼女や恋人を作っちゃいけない人間なんだぜ。

—————

夜 IS学園寮1025号室



## SIDE：一夏

「…ただいま」

「!?？」 一夏!

部屋に戻ると箒が慌てて駆け寄ってきた。そういや、こいつにも心配かけてたな。遅かったな、…何があつたのだ？」

「悪い、『今回の事件を口外しない』って誓約書を書かされたからさ」

「そ、そうか…」

なんか最近、『それは言えない』としか言っていない気がする。

女は秘密を着飾って美しくなると言うが、男が秘密を纏った所で何になるだろう。

「ハア……飯食ってくる」

「ま、待て一夏!」

「……何?」

荷物を置いて食堂に行こうとしたら箒に呼び止められた。

「その…だな。お前がいけない間に飯を、作つたんだ…」

「えっ?……あつ!!?」

部屋に備え付けのキッチンには二人分のオムライスが出来上がっていた。

部屋中に充満する食欲をそそる香りに俺はまったく気付いてなかった。

(疲れてたのかな…俺)

いままで犯した〃無自覚〃の罪が精神的に俺を追い詰めていたのだろう。だからだろうか、箸の心遣いに思わず涙が出そうになった。

「…ありがとうございます」

少し冷めてしまったオムライスを一口、口に入れる。

……ん？

「あ、味はどうだ？」

「…しない」

「えっ？」

「味が…しない…!?？」

「えっ!?？」

確認の為にもう一口頬張る。しかし、味がしない。

鼻をくすぐる香りも、舌にご飯やチキンの触感もあるのに、噛めども噛めども味だけが無いのだ。

「ば、馬鹿な!」

俺からスプーンをひったくり箸がオムライスを食べる。しかしー

「味が…ない…!?？」

結果は同じだった。

いったい、このオムライスは何だ？財団製の新しいナニカか？

何処かで、『いやいや、僕をなんだと思ってるんだい？』と聞こえた気がしたが無視した。

「……」

コンコン

「ハ、ハイ!!？」

二人で呆然としているといきなりドアがノックされた。

驚きのあまり、ハモって返事してしまう。

「織斑くん？篠ノ之さん？ 部屋に……うん、いますね」

「山田先生？」

ノックの主は山田先生だった。

箸がドアを開けて招き入れる。

「えつと……事情聴取の続きですか？」

「あ、いえお引越しです」

「お引越し？」

「またもやハモってしまった。」

夜 I S 学園秘密研究室

S I D E : 千冬

「無人機、か」

戦闘映像を見ながら呟く。

あの事件後、未確認機はすぐさまこの研究室に運び込まれ解析が開始された。

出てきた解析結果は織斑の言う通り、無人機だった。

織斑は『スキャンモードで見抜いた』と言っていたが、そんなことまで見抜けるとはやはりあの機体は謎だ。

世界中で日々進化する I S 技術でも、未だ届いてない技術。リモートコントロール スタンドアローン 遠隔操作か独立稼働の

技術が使われていた事実はすぐさま箝口令が敷かれるほどの事態だった。

また、致し方ない状況だったとはいえ、織斑、鳳、オルコットの攻撃が激しすぎて修復は不可能と判断された。

そして一番の問題点――

「無登録の、コアとはな」

未確認機、ゴーレムに使われていたコアはどこの国にも登録されていないコアだったのだ。

こんな傍迷惑なことをしでかす心当たりは一人しかいない。  
(束…お前は何を考えてる…)

返ってくる言葉は、何もなかった。

—————

夜 IS学園寮1025号室

SIDE：一夏

「……」

急に同居人がいなくなった部屋で俺は読書をしていた。

「何故、急に引越し？」と言う言葉に山田先生からの返答は「年頃の男女が同室なのはまずい」と言う至極当然のものであった。

これに関しては、俺も同意のだが箒は嫌そうだった。だが、俺と同室になった初日に箒自身が言った言葉『男女七歳にして同衾せず』を引き合いに出したら渋々だが納得してくれた。

(明日から鈴にどんな顔で会えばいいんだろう)

明日の事は明日考えようと布団に入ったその時、

コンコン

(前にもあったな、このシチュエーション)

確か主任との会話もこのシチュエーションだった気がする。

「……」

「箒?」

ドアを開けると先刻引越したばかりの箒が立っていた。

「どしたの? 忘れ物?」

「い、いや。違う」

「んじゃ何?」

「……」

箒はだんまりしてしまふ。

どうしよう、なんか嫌な予感がする。

「用が無いなら寝るよ?」

「ろ、六月末の学年別個人トーナメントだが……」

「?」

ああ、あつたねそんなの。

その時までにはACとISの技術の擦り合わせを終えないと。

「わ、私が優勝したら……その……つ、付き合ってくれ!!?」

「えっ!!?」

あまりの衝撃的な発言に口の中に残ってた虚無ライス（俺命名）の感覚が吹っ飛んだ。  
「っ！」

「えっ？ちよ！箒？！」

言うだけ言つて箒は走り去ってしまった。

「……ハハッ、ハハハ」

自嘲するような笑いが口からこぼれた。

（まさか、箒まで今日告白してくるなんて）

笑うしかない。誰でもいいからこの女たらしをぶん殴つてくれ。

いったい俺は、何人の友達を不幸にすればいいのだ。

（そうだ、休みを作つて弾親友の所にも行こう）

こんな気持ちを一人で抱えていたら、いずれ俺自身が壊れてしまう。

誰かの助けが無けりゃ、俺は無力なのだから。

「もしもし、会長ですか？…いえ、六月頭のレッスンを休みに出来ますか？……すみません、迷惑かけてばかりで」

そのあとの俺の行動は、早かった。

## 02-12 自覚した罰

六月頭 五反田食堂

SIDE：一夏

「すいませーん」

そんなこんなで久しぶりの休日、別世界の黒い鳥からの挑戦状が届くこともなく、俺は親友の五反田弾ごたんだんの実家『五反田食堂』を訪れていた。

「いらつしやい……ボウズか」

「お久しぶりです。厳さん」

出迎えてくれたのは弾の祖父であり、『五反田食堂』の大将でもある五反田厳ごたんだげんさんだ。

「厳さん、ご心配かけてすみませんでした」

「その言葉は弾や蘭にいつてやれ……ボウズ、お前いままでどこに行つてた?」

「すみません、それはちよつと……」

「……そうか」

また『それは言えない』か。

つくづく秘密の多い男だな俺は。秘密を羽織つた所で、何になるわけでもないのに。



「座んな、ここは食堂だ」

「ハイ。あ、これ家族でどうぞ」

「……お前ホントにあのボウズか？」

心配をかけたお詫びの品である煎餅を渡したら怪訝そうな顔をされた。

失礼だな厳さん。俺だって迷惑かけた人にお詫びするぐらいの礼儀は持つてる。

「なんにすんだ？」

「えつと……じゃあ『業火野菜炒め』を」

「あいよ」

注文して席に着く。厳さんがリズム良く野菜を切る音をBGMに店を見渡す。

お昼にはまだ早いようで、店内の客は俺一人だった。

懐かしいな……弾と一緒にバカやって千冬姉と厳さんにゲンコツ貰ったっけ……。

「なあボウズ」

「はい？」

回想に浸っていると厨房の厳さんから声がかかる。

何だろうか？

「お前さん、何を悩んでんだ？」

「……！」

年の功、と言うのだろうか。

フアットマンや厳さんみたいに歳と一緒に苦勞を重ねてきた人特有の雰囲気は俺に話さざるを得ない空気を作る。

いや、これはむしろちょうどいい。

もともとこの気持ちで一人で抱えない為にここにきたのだ。

吐き出すだけでも楽になるだろう。

「実は…」

◇

「…なるほど、今ボウズは幼なじみ二人に告白されて且つ二人ともフリたいと言う訳か

…」

「ハイ」

結論から言えば吐き出しても楽にはなれなかった。

今まで犯してきた事を“自覚した”罰なのだろうか、話せば話すほどに自分自身が最低な男だと再認識していく。

「ボウズ、どうしてお前は彼女や恋人を作っちゃいけないんだ？」

厳さんが質問する。

そんなの簡単だ。

「俺は世界唯一の男性操縦者です。そんな俺の彼女となると世界中から狙われます。

だからって、別れたとしてもその人はずっとその人じゃなくて『織斑一夏の元カノ』としてしか見られませんか。それに……」

「それに？」

延々述べたがこの次が一番の理由だ。

「俺、好きな人がいるんですよ。だから……その……」

「ぶっちゃけ困ると」

「……ハイ」

身も蓋も無いです。 巖さん。

「なあボウズ」

「ハイ？」

「お前さん、何か勘違いしてないか？」

勘違い？俺がなにを？

「お前さん『自分がフツたから相手が泣いている』と思ってるんだろ？」

そんなの当然だ。

俺だつてマギーがヘリを降りた時は悲しかった。

「あのかなボウズ、誰が誰に惚れるのなんてそいつの勝手だ」

んなこと分かってる。

だから俺は鈴をつつたんだ。

「いやわかってねえ。『自分が惚れさせちまった』そういう思いでお前さんは全部背追い込もうとしている」

「……」

否定は出来ない。

確かに俺は全部背追い込もうとしていた。

だけどそれは惚れさせてしまった者としての当然の――

「……あれ？」

自分の思考が矛盾している事に気付いた。

惚れた奴鈴の勝手なら、どうして惚れられた奴俺が責任を感じてるんだ？

「今のお前さんは、他人の分まで責任をお負うとしてるだけだ。んなの贖罪通り越して自己満足でしかねえ」

鈴や箒が俺に惚れたのは二人の勝手に、俺は悩む必要なんてないのか？

「厳さん」

「なんだ？」

「俺は……悪くないんですか……？」

俺は罪悪感を抱える必要はないのか？

「まあ良いとは言わねえ。だがな、責任の大体は惚れた奴に有ると思うぜ」

「……」

結論が、出た。

いや、最初から出ていたのだ。

「何悩んでんでしようね、俺」

「よくある修羅場だろ」

つまり、惚れた鈴や箒にこそ責任があつて俺は気にする必要はない、ということ、織斑一夏です。

あと巖さん。修羅場がよくあつても困る。

「ただいま……!!? 一夏!!?」

「あ、弾」

「いいい一夏さんんん!!?」

「蘭、お久しぶり」

タイミング良く二人が帰って来た。

…そーういや最初は弾に相談しようとしてたな。

「お、お前。生きてたのは知ってたけどなんで!!?」

「飯が食いたくなくなった」

「ホントに…ホントに生きてた…ウワアアアン」

「ちよ、蘭<sup>!!</sup>?」

なんかこうさつきまでの雰囲気が一気に消し飛んだ。

でも日常ならこんなんでいいんだと思う。

後から考えてみると次から次へと色んな事がありすぎて俺自身が限界だったのだろう。

突然の異世界からの帰還、突然の世界唯一の男性操縦者になる、突然の幼なじみとの再会、突然の保身に回らなければ生きられない環境。

色んな“突然”が積み重なってきたものが“突然の”鈴の告白で一気に崩れてきたのだろう。

(ただいま)

心の中で日常との再会を祝った。

—————

夜 織斑邸への道

SIDE：一夏

「おくれは〜い〜ちか♪」

外泊許可を貰ってあるので家に帰ろうと道を歩く。

不思議と一歩が軽く、口から自然と歌が出る。

『おう、また食いに来い』

『絶対！IS学園に行きますから!!?』

『また来てね』

『今度は鈴や数馬も呼ぼうぜ!』

帰り際に言われた言葉が頭の中に響く。

(寂しかったんだろーな。俺)

自分を自分として見てくれる人が、こんなにもいた。

織班一夏

自分の心からの味方が、いた。

(思えば、あつちでは孤独とは無縁だったなあ)

常にそばにはファットマンやマギーがいた。

やはり俺には孤独がなによりの毒なのだ。

「ん?」

心配を感じ後ろを見やる。

「……!」

瞬時に構える。

覆面を被った誰かが右手のナイフと共に突進してきたのだ。  
「死ね、織斑一夏!!?」

言葉通りに死んでやる義理は無い。

あまりにも単調な銀光を躲す。

さて一体どこの手先だ?

「男のくせに…おとなしく死になさいよ!!?」

正解発表ありがとう。なるほど、女尊男卑の過激派か。

しかも声と体型から同年代。…もしかして同級生か?

「避けんじやないわよ!」

嫌どす。(A A 略)

思えばこいつらも俺のストレスの原因だったな。

……丁度良い。

「ヤアアア!!?」

大振りな一撃に合わせて脚を振り上げる。

瞬間、危険物ナイフは過激派の手から飛んだ。

「えっ!!? ギャフツ!!?」

呆然とした過激派の顔面にストレートを決める。



ふらつuitた過激派の髪を掴み、そのまま地面に叩きつける。

「グハツ」

「このまま帰って仲間に伝えろ」

こいつらと争えば問題になるからと思い、逃走だけで反撃はしなかったが、もう我慢の限界だ。

「次に来た奴は殺す」

殺す気なんだ、殺される気でもいろ。

男一人殺すぐらい女様なら楽勝だろ？

「ツッ?」

「あばよ」

まったく、一つ解決したと思ったら次から次へと。

気に入らないのなら来なきや良いのに。

[MISSION 02 COMPLETE]

MISSON03 Wild Card  
03-01 イライラする

放課後 生徒会室

SIDE：楯無

「いや、身勝手と言いますか、自分勝手と言いますか、ここまでくると感心しますよ」  
一枚の書類をピラピラ揺らしながら、織斑君が呟く。

表情も態度も口調も笑っていたが、眼には苛立ちがありありと見えた。

無理もない。

彼自身、この学園に来てから何度も襲われかけているのだから。

ロッカーの中の物が盗られかける。体育シューズがトイレに入れられかける。食事に毒を盛られかける。教科書が破られかける。成績が改竄されかける。暴力を振るわれかける。

ざつと挙げててもこんな調子である。全部未<sup>かける</sup>遂なのがまだ救いか。

無論、危害を加えようとした生徒や教諭には、見せしめの意味も込めて退学や懲戒免職など重い処分を下しているし、事件数自体も減少傾向だ。

学園外の大半は私が付けた護衛がどうかしているが、それは計画性を持った集団相手、思いつきの個人相手は護衛対象たる彼がどうかするということなんとも情けないのが現状だ。

そもそも、ISに携わるのなら女尊男卑などといった思想は捨てなくてはならないのだ。

『開発』『整備』『補給』『運用』e t c e t c : 『操縦』以外のすべてに（織斑君を除き）“男”は関わっているのだから。

そんなこんなで先日の六月頭、織斑君はついに反撃した。

「すみません！我慢の限界でつい……」と彼は電話口で後始末をするこちらに謝罪していたが、こちらとしてはむしろ好都合だった。

『織斑一夏はただ殺られるだけの木偶ではない』。それを女尊男卑派に示したのだから。話を戻そう。

最初に出てきた書類。それは、女性権利団体、通称『女権団』からの書類だ。

本来なら弾かれる筈のそれは、なんらかの手違いで生徒会室に届き、織斑君の手に渡ったという訳だ。

内容は簡単。「織斑一夏は本当はISを動かせないという事実を公表しろ」との事だ。

……織斑君のIS適性を証明したのは公的機関なので国に喧嘩を売る発言だと気づ

かないのだろうか？

「ハア…捨てていいわよソレ……」

「ハイ……ポイツと」

思わずため息が出る。

別に織斑君の素行に問題がある訳ではない。むしろ彼は優等生だ。

授業態度は熱心そのもの、力仕事を率先して引き受ける、生徒会業務はそつなくこなす、教えた事はすぐに理解する。

正直なことを言うと男性操縦者じゃなくって部下として欲しい人材だ。

「ね〜オリム。対戦しよ〜」

ヴァーストスカイ

「ISSで？ いいけど…のほほんさんが俺に勝てる？」

だからこそ気が重い。

ここまで苦勞してきた彼に、一度限界を迎えた彼に、さらなる苦勞をもたらす事態を伝えなければいけないのだから。

「む〜。オリムのラファールが強すぎるんだよ。ホントに弱体化したの〜？」

「のほほんさんのテンペスタが弱いだけだよ。あと弱体化してるから、Cループを返して」

「ちよつといいかしらっ？」

「?」

だからと言って伝えない訳にはいけない。

織斑一夏の護衛役として、彼の先輩として、放っておく訳にはいかないのだから。

「明日、貴方達のクラスに転校生が二人来るのだけどー」

「……!」

何かを察してか真面目モードに切り替える二人。

まったく、なんていい子達なのだろうか。

—————

翌日 一年一組

SIDE：一夏

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

「お、男……?」

(どう見ても女です。本当にありがとうございます)

目の前の金髪女子を睨みながら妙ちきりんなことをほざいた誰かさんに心中でツツクむ。

『明日、貴方達のクラスに転校生が二人来るのだけどね。そのうちの一人が〃二人目の

男性操縦者”なの』

『おかしいと思うでしょう？そんな人物の存在がニュースにもならないなんて』  
『とにかく、そのシャルル・デュノアには警戒してちょうだい』

昨日、会長に忠告された通り目の前の男子は”男子”ではなく”男装女子”だった。  
サンキュー会長

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入をー」

(まあ、粗製ではないな)

とはいえ、事前情報が無ければもしかしたら男と勘違いするかもしれないレベルには  
様になっている。

だが流石に、この男装を勘付かない程、目が節穴な奴がそうそういる訳が――

「「きゃあああああ——————つー！」」

いたよ、大量に。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった〜！」

今の流行は節穴海のリハク系女子なのだろうか？

しかし、クラスを見渡すとポツポツ勘付いているのが数人いる。聞かされているのほほんさんは当然として、箒もおかしいと感じているようだし、オルクットに至っては「やつぱりねえ」といった調子だ。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんから〜！」  
喧しい生徒に注意が飛ぶ。お疲れ様です山田先生。

そしてもう一人の小柄で銀髪な転校生に全員の視線が移る。

「……………」

まさかの自己紹介をしない転校生である。

新しいな、オイ。

「……………挨拶しろ。ボーデヴィツヒ」

「はい、教官」

教官…ねえ。

織斑先生をそう呼ぶと言うことはドイツ軍関係者か。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

何か話せ。

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

山田先生が泣きそうになっている。

まったく、自己紹介も満足に出来ないのか？そんな奴に俺はならないぞ？

「！ 貴様が——」

ふと目があつた瞬間にボーデヴィツヒはつかつかとこちらに近寄ってきた。

何をするかの察しはつくよ？あんなに殺気を出してるのだから。

バシイッ

「なっ!?」

殺気全開で出されたビンタを右腕で防ぐ。

「何?」

ボーデヴィツヒに問う。

理由はわからないけど、ドイツ軍人にビンタをされる筋合いは無いはずだ。

「私は認めない。貴様があの人の弟などと、認めるものか」

「お前に認められる筋合いは無いよ?」

いきなり何を言うかねコイツ。

つーか、質問に答えるよ。

「……」



「……戻れ、ボーデヴィツヒ」

「…ハイ」

「フン」

互いにメンチを切りあっていると織斑先生から静止の声がかかる。

……あのアマいつかブツコロバス。

「織斑、デユノアの面倒を見てやれ」

「ハ—イ」

まったく、二人の転校生がどちらも要注意人物だなんてねえ。

あ—イライラする。

## 03-02 要注意人物

SHR後 一年一組

SIDE：シャルロット

「と、言う訳で。こちらですデユノアさん」

「ハ、ハイ！」

目の前の任務対象<sup>ターゲット</sup>、織斑一夏の丁寧な言葉遣いに思わず声の上擦ってしまふ。

なにせ目の前にいるのは、世界唯一の男性操縦者であり、ついさっきまでドイツ軍人と睨み合いをしていた男なのだ。単純に怖い。

「ああ、そう硬くならないでくださいね。同じ男子同士、気楽に気楽に」

「う、うん…」

ニコリと音のしそうな笑顔でこちらの緊張をほぐす織斑一夏。

データ通りの優しいお人好しらしく、声色はとても優しい。

「では急ぎませうか。男子の更衣室は、少々特殊なもので」

「わかった、僕の事はシャルって呼んでよ」

「わかりましたよ、シャル。ならば私の事はイツピーとお呼びください」

「イ、イツピー？」

……どうやら、データよりはかなりフランクな性格らしい。

しかし、自分が女だと怪しまれてはいないようだ。

重要な第一段階を無事クリアした事に心の中で胸を撫で下ろす。

—————

昼休み 食堂

SIDE：一夏

「あゝ疲れたゝ」

「あんな気持ちの悪いキャラを作っていたら、疲れるに決まっていますわよ」

午前の授業が終わり、デユノアと別れた後。俺は食堂でチキン南蛮定食を購入し、オルコットと鈴の三人で机を囲んでいた。箸？照れて何処か行ったよ。

ちなみにオルコットは日替わりBセット、鈴はチャーハンセットだ。

「気持ち悪いってどんな感じよ？」

『『おやおやオルコットさん。いかがなさいました？』こんな感じでしたわよ』

「待て、弁解させろオルコット。「気付いてますよ」ってアピールするためのあのキャラだったんだ」

だから気付かないあつちが悪いんだ。

我ながら気持ち悪いのはわかっている。

「うわあ……」

「やめろ鈴。幼なじみに蔑まれて悦ぶ趣味はない」

クラス対抗戦の縁でオルコットは鈴と仲良くなったらしく、その関係で俺とも交友を持った。

……やめろ。俺もオルコットもクラスで浮いている同士とか言うな。

「しかし、二人もデユノアの事を知らされてたなんてねえ」

「ハッ、当たり前ですわ！我が英国の情報収集能力を舐めていらして？」

「だって、英国代表候補生が俺の入学試験の事を知らなかったんだもん……」

「あ、あれはですねえ!!？」

というか、告白の件でギクシャクした俺と鈴の中を取り直してくれたのがオルコットだ。

それになんだかんだコイツをいじるのは予想以上に楽しい。

「どうどう。そういや今日の模擬戦、良い連携だったじゃん」

「あー……あれね……」

「ハア……」

今日の模擬戦とは、午前の授業で行われた山田先生VS鈴&オルコットの試合だ。

俺が半ば運ゲーで倒した相手を二人は連携で、余裕を持って倒したのだ。それにしてもなにやら嬉しくなきそうだが。

「あのねえ。私達は専用機持ち、量産機は圧倒しなきやいけないの」

「そういうもん？」

「そういうものですわ…」

専用機〈量産機〉のこの考えは、俺には理解出きない。

カタログスペックで勝敗が決まるのなら、俺は何回も死んでいるからだ。

大体ISの兵器としての歳は若いのだ。ならば、多数の人が乗る量産機の方が、自分で強くなる道を見つけないければいけない専用機の方より強くなりやすいのは当然だ。

キーンコーンコーンコーン

「あら、そろそろ昼休みも終わりですわね」

「うん…気を付けてね一夏」

「ああ」

鈴が心配そうな声で注意を促す。

「……さて、どうするかね。」

（確か箒や如月さん、それに上級生の人達も気付いていたな…）

あのスパイは近くに何処かの国が仕留めるだろうが、それでは遅い。

よつぼどのアホならともかく自分を狙うスパイと部屋が一緒なのは俺は嫌だ。会長も、自分の伝手でデユノアの事を調べている。

一日で進展があるとは思えないが相談がてら聞きに行くのもいいだろう。

(あとはドイツ軍人か……)

デユノアの方が危険度は上だが、苛立たせ度はボーデヴィツヒの方が上だ。

とはいえ身元ははっきりしているので「何かあったら抗議」程度でいいだろう。

やはり目下の障害はデユノアか。

(最悪殺すか)

本当に「最悪」の時だが。

—————

夜 IS学園寮 1025号室

SIDE: シャルロット

「ハア……」

部屋の中で一人ため息を吐く。

イツピー……じゃなくて織斑一夏は僕に部屋番号と注意事項を伝えて生徒会の方に  
行ってしまいずっと一人なのだ。

『たった二人の男同士、仲良くしましょう』

「…っ！」

悪意の無い笑顔で友好の言葉を述べる任務対象を思い出しズキリと胸が痛む。

あの優しい人を騙して、尚且つ危害を加える予定なのだ。痛まないほうがおかしい。

『いいか。絶対に織斑一夏の操縦者データか無銘ノネームを奪って来るんだ』

『でも、あのISは外したら死ぬって…』

『フン、ハツタリに決まってる』

いや、危害を加えるどころじゃない。

最悪、彼を殺すのだ。

自分が殺人者になるかもしれない。

その予感に身震いを抑えることを許さなかった。

「ハア…」

再度ため息。

行けど地獄、行かずとも地獄のこの状況でどうすればいいのだろう。

(助けて…母さん…)

ガチャ

「ああシャル。起きていましたか」

天国の母さんに助けを求めていると、イッピーが帰ってきた。

「おかえりイッピ、遅かったね」

「ええ。これでも私、副会長ですから」

まだまだ仕事があるのだろう。脇には大量の書類が抱えられている。

「ところでシヤル。明日、なにかご予定は？」

「ううん無いよ」

「ああ、ならちようどいいです」

「？」

ちようどいい？何が？

「いえいえ、明日の半日授業を利用して学園を案内しようと思ひましてね」

「えっ!!？」

「おや、迷惑でしたか？」

「ううん、嬉しいよ!!?...ありがとうございますッピ」

これは幸運だ。

あちらの方から交流を深める機会を作ってくれた。

「ふふ、喜んでいただけただけでなによりですよ。では、明日は食堂で」

「うん、おやすみ」

「ええ、おやすみ」



机に向かうイッピーに挨拶をしてベッドに入る。

(明日のチャンス、物にしなくっちゃ)

僕の意識は闇に沈んだ。

—————

夜　　IS学園寮　1025号室

「フウ…やつと終わったか」

織斑一夏は机の上の書類を片付けながら呟いた。

「…フフ」

そして、ベッドの中のシャルロット・デュノアを見て妖しげに笑った。

「まったく、憐れと言いますか、不幸と言いますか」

事情を知らない人からすれば意味不明の言葉を言いながらファイルに書類をしまう。

「ま、貴方が上手くやれば、明日にでも全て終わりますよ。シャルロットさん」

本来なら知らない筈の名前を口にしつつ、織斑一夏は自分のベッドに入った。

## 03-03 学園案内

放課後 食堂

SIDE：一夏

「「ごちそうさまでした」

食後の挨拶をして、食器を回収口に入れる。

ちなみに俺はチキン南蛮定食、デユノアは焼きうどんセットだ。

「説明するまでもありませんが、ここが食堂です。」

メニューは4000種程ありますので、今度来る時は予め頼む物を決めておいた方が  
よろしいかと」

「アハハ：ゴ、ゴメン」

どうしてデユノアが謝っているのかというとメニュー決めに時間がかかり、後ろから  
文句を言われたからだ。

「いえ、伝えなかつた私が悪いのです。まあ過ぎた事ですし、学園案内、始めましょうか」  
「うんー」

こうしてロマンもロマンスも無いデートが始まった。



「時間もありませんし、次に行きましょう」

「うん」

◇

「ここが剣道場です。おや、これはこれはジェリーフィッシュ部長」

「おう。ハンサムボーイ」

「誰？」

「この剣道部の部長、ジェニー・ジェリーフィッシュさんですよ。」

「箒の奴が、そそくさと部室に戻ったと思ったたらお前さんかい」

「ええ、私ですよ。ああこちらは噂の男性操縦者です」

「……今日のハンサムボーイはずいぶん と、気持ち悪いじゃないか」

「もしもくし？私も、傷つく心はあるんですよ」

◇

「ここが整備室です。ISに関する大体の事がここで行えます」

「イチカか…ほう、それが噂の」

「ああ、クローバー整備主任。ええ、噂の男性操縦者ですよ」

「よ、よろしくお願ひします」

（何で仮面被ってるんだろう）

「ふむ…なるほど、興味深い。ところでイチカ」

「はい、なんです？」

「頭でも打ったか？」

「その反応は酷くありませんかね、レリアスさん」

◇

「ここがカフェです。食堂がガッツリならこちらは小腹を、といったところです」

「は〜い。カフェへようこそ！二名様ですね。キャハ☆」

「……今日も、壮絶にフリツフリツですねえ、奈々さん」

「ハイ！奈々はナウでヤングな十七歳ですから!!？」

「…とりあえず、今日は案内なので入りませんよ」

「あの、副会長。そんなキャラを作って、体調が悪いですか？」

「……奈々さん」

「ハイ？」

「ダツダーン」

「ボヨヨンボヨヨン……ハッ!?？」

「ではシャル。次に行きましょう」

「ま、待つて下さい〜！奈々は永遠の十七歳です〜！」

◇

放課後 廊下

SIDE：シャルロット

「……その敬語。キャラだったんだ……」

「ええ、作ったキャラですよ。ご不満ですか？」

正直に言えば不満だ。

なにか、誤魔化されている感じがして。

「誤解の無い様に言っておきますが、別に貴方を騙そうと思っていた訳ではありません。

ただ、私は貴方を警戒しなくてはいけない立場なもので」

その意見にはグウの音も出ない。

だって、その警戒される目的を僕は持っているのだから。

(なにがキャラを作られて不満だ)

キャラを作って相手を騙すのは、僕自身が、彼に現在進行形でやっていることじやな

いか。

身勝手にも程がある。

「……ゴメン」

「いえいえ、構いませんよ」

「……」

沈黙。会話が途切れてしまった。

「あ、副会長」

沈黙したまま廊下を歩いていると前方の上級生からイッピースーに声がかかる。

「おや、どうしました渋谷先輩」

「今度、部室に新しい花を買おうと思ってるんだけど、なにがいいかな？」

「うーん。生憎と花は詳しくないんですよ」

「そう…残念。その子は？」

「ああ、噂の子ですよ」

「ふーん。あんたが転校生？私は渋谷凛。よろしくね」

「よ、よろしく」

「じゃあね、副会長。そのキャラ、似合っていないよ」

「余計なお世話ですよ」

まただ。

彼がどこかに行くたびに、その上級生が決まって声をかける。

そして、その全員が彼に對しかなり友好的なのだ。

「皆と、仲がいいんだね」

「…今でこそ仲がいいですが、初めは私一人だったんです」

「えっ?」

「少し、語ってもよろしいですか?」

彼が、イツピーが語り始めたのは入学してから今までの経緯だった。

イジメを越えて犯罪そのものをぶつけてくる女尊男卑派。

自分を珍獣か何かのように見てくるミーハーな女子。

一部を除き、無いに等しいクラス内の居場所。

それでもめげずに副会長として人と関わり続け、ようやく得られた上級生達からの信用と信頼。

それでもなお、得られない同級生の友好的な感情。

「人は一人では生きられません。無論、私もです。」

だから、私は、人との関わりを求めるのです。いざという時に助けてもらえるように。いざという時に誰かを助けられるように」

ああそうか。

僕がイツピーを見た時に何故か惹かれた理由がわかった。

彼もまた、選べなかったのだ。

偶々、妾の子に生まれた僕。



偶々、世界唯一になった彼。

僕達は、この学園に来る事を拒めなかった。

「同級生の子はどうするの？」

「仲良くなるのは諦めます。なので、今月末のトーナメントで優勝して、力を認めさせます」

だけど、彼は違う。

人脈を作り、実力をつけて現実女尊男卑に立ち向かおうとしている。

「……」

「どうしました？もうすぐ屋上ですよ」

「あ、うん……」

こんな気持ち言える筈が無い。

立ち向かえる君に、立ち向かえない僕が嫉妬しているだなんて。

—————

夕方 屋上

SIDE：一夏

「ここが屋上です。この学園一の告白スポットとして有名です」

「う、うん……」

「……」

(作戦その一。成功だな)

この学園の魅力を伝え「通いたい」と思わせること。

自分のやっていることは「罪深いもの」と思わせること。

当初予定していた事項のクリアを確認し、デュノアの方を向く。

「…シヤル」

「何? イツピー」

「いえ、少しお話が」

さて、ここからが作戦その二だ。

失敗は許されない。

「社長令嬢でありながら、妾の子として蔑まれる男装女子のお話です」

「!?」

俺の言葉にデュノアが凍る。

さあ、始めよう。

## 03104 あからさまな思惑

夕方 屋上

SIDE：シャルロット

「社長令嬢でありながら、妾の子として蔑まれる男装女子のお話です」

「!?？」

イッピーの言葉に思考がフリーズする。

「…知ってた…の？」

「……」

自分の質問にイッピーは笑顔のままだ。

これは肯定と言うことだろう。

(そっか…知ってたんだ…)

その事実を知っても絶望は無かった。

むしろ、もう誰も騙さなくてもいいと言う安心感が自分を包み込んでいた。

「うん、そうだよ。僕は女。男装してこの学園に来たんだ」

これからの自分の未来は、良くて監獄、悪くて射殺だろう。

いや、母さんの元に行けるなら射殺の方がいいかもしれない。

「ごめんね、騙してて。でも、もう消えるから「シャル」……え？」

「私の話はまだ終わってませんよ」

自分の謝罪がイッピーに遮られる。

これ以上何を話すと言うのだ？

「え〜コホン。彼女はとある田舎で生まれました。」

彼女は片親ながらも心優しき母親の元でスクスク育ちました」

それは僕の生い立ちだ。

そんなものよくわかつている。

「しかも彼女は国家代表候補クラスの適性があり、又、ついぞと言ってはなんですが非常に美しい。」

正に、大いなる物語のヒロインそのものではありませんか」

「そ、そうかな……」

自分の事をこうもべた褒めされるとなんだかムズツ痒い。

「ですが」

彼の言葉に照れていると急にトーンが変わる。

「デュノア社の業績低迷を受けて貴女は男装してこの学園に来る羽目になってしまっ

た。

それでも、貴女は健気に耐えて耐えて。

…耐えた処で、行く先はどこも地獄なのをわかった上で」

「！」

確かにそうだ。でも、覚悟は出来てる。

自分の未来に天国は無いのだから。

「そうだね…」

「嘆かないでください。これは貴女の責任ではないのですから」

「…え？」

何を言ってるんだ？

「だってそうでしょう？」

業績が低迷したのは社長が無能な所為で、貴女が妾の子なのも社長の浮気性の所為で、

一体、貴女の、どこに、責任があるというのですか？」

「ち、違…」

「嘘はいけません。言ったでしょう？貴女は何も悪く無いと。」

「貴女は、何も選べなかつただけなのです」

彼の言葉にゾワリと鳥肌が立つ。

これ以上聞いちやダメだと脳が警鐘を鳴らすのに足は一步も動かない。

「だから、選べ」

今迄丁寧だった口調が一変する。

「ロシアに亡命する準備は整えてもらった。後は、テメエの意思次第だ」

「……」

「あー、言っておくが。良い待遇受ける保証もあるぜ。

なんたって、テメエの存在自体がフランスの命綱だからなあ」

「どうして…?」

「あ?」

「どうして、僕を助けるの?」

だって、イッピーに僕を助けるメリツトはない。

そんな彼がどうして僕を助ける手筈を整えた?

「決まってるんだろ。お前に手駒てまごになってもらうためだ。勿論、俺じゃなくて会長のな。

代表候補生レベルの実力の手駒が欲しかったんだとよ」

到底話して良くなさそうなことをサラリと話すイチカ。

その言葉に僕は惹かれ始めていた。

「無論、ここで楽に死ぬのもありだ。

俺だつて人間だ、慈悲を持ってテメエを殺してやる」

「ううん」

もう心は決まった。

僕の人生は、何も選べずに利用されて終わる筈だったのに、彼は選択肢を用意してくれた。

なら生きよう。母さんの分まで。

「わかった。僕はロシアに亡命するよ」

「……ふーん。じゃ、生徒会室に行きな」

「……またね。イツピー」

「おう」

彼はニヤニヤと僕を送り出した。

ありがとうイツピー。僕を生かしてくれて。

—————

夕方 屋上

SIDE：一夏

「……如月さん。出てきなよ」

「わかったのね…」

物陰から出てきた如月さんに一礼する。

彼女が偶然にも屋上に居たのは誤算だったが止める訳にもいかなかったので、今の内に口止めしておこう。

「あー、えつとさ…」

「この件は私は何も見ていない。これでいいのでしょうか？」

「ありがとう」

どうやら如月さんは察してくれたようだ。

ほつと胸を撫で下ろす。

「ちよつと聞きたいのだけど」

「？」

「特記事項第21は使えなかったの？」

「…如月さん。デュノアは企業戦士だよ。企業の介入無しは無理だつて」

「…：…：そうね」

大人は嘘をつきません。間違えてしまうだけなのです。

「…：…：最後にもう一つ。丁寧な貴方にチンピラな貴方、そして今の貴方、どれが本当の貴方なのかしら？」



「今の」

どれも自分だ。なんて厨二発言は演技で充分だ。

さて、後は頼みますよ。会長。

—————

翌朝 一年一組

SIDE：セシリア

「え、えつと…デュノアくんは家庭の事情で帰国しました…」

「「え〜!?」」

クラスメイトの叫び声に耳を塞ぐ。

（お早いお帰りなことですわねえ。

ああ、『三日以内にフランスに帰る』に賭けた鈴さんの勝ちですか）

とはいえ、遅くて四日だった勝負だ。

ちなみに私は彼女の奮戦に期待して『四日以降、七日以内にフランスに帰る』に賭けた。

（まあスパイの事なんてどうでもいいですわ。今は…）

チラリと織斑さんを見る。

周囲がデュノアの事で騒ぐ最中彼の口はほくそ笑んでいた。

……成る程、デユノアさんはまだ奮戦した方でしたか。

「……SHRはここまでだ。各々、次の授業に遅れるなよ」

クラスの様子を見かねて織斑先生が強制的にストップをかける。お疲れ様ですわ。

「織斑さん。ちよつとよろしくくて？」

「何？オルコット」

「生徒会所属の貴方ならば知ってると思いますが、今月末の学年別トーナメントがタッグ制になりましたわ」

理由？勿論、自分達三人で撃破したあの無人機のせいだ。

「知ってる知ってる。…で？」

「そのトーナメント。是非私と組んで欲しいのですの」

◇

SIDE：セシリア

「ふーん。俺と組んでトーナメントで優勝しないと代表候補生としての地位が危ない…

と？ピンチだな」

「ええ、ピンチですわ」

説明を終え相槌を打つ。

彼は変に言葉で取り繕われるよりは正直に話してくれる方を好んでいるのは知って

いる。

「…割と自業自得だよな、お前」

「笑ってもよろしくてよ？」

理由は簡単。

入学式当日にかました問題発言で、自分の首を絞めただけだ。

『オルコット、絶対に織斑一夏と組んでトーナメントで優勝なさい。』

その手柄さえあれば貴女を代表候補生の地位に残せるわ。

貴女のお母さんの、セリカ・オルコットの家を守る為にも…お願い』

教導官のレイシエルさんの言葉が頭に蘇る。

「誰が笑うか。それに、俺も優勝しなきゃいけないんだ。代表候補生としての力、頼りにしてるぜ」

「礼を言いますわ。…ところで、優勝しなきゃいけない理由はもしかしてあの噂ですの？」

あの噂、『優勝したら織斑一夏と付き合える』という下らない噂だ。

なんでも、号外として張り出された物らしく大半の人が本当だと信じてしまっているのだ。

「あー、あれね…。何で、皆して俺を狙うかね」

「世界でたった一匹の珍獣を手に入れられるチャンスですの。それはそれは欲しいでしよう?」

「…人権寄越せ」

「無理ですわね」

適当な雑談を交わしているとそろそろ時間が危なくなる。

「では、放課後。第四アリーナで待ってますわ」

「アイアイ」

先ずは、タッグを組めた。後は優勝するだけだ。

## 03105 決意表明

放課後 整備室

SIDE：一夏

「……」

ドスツベキツドゴオ

「落ち着けオルコツト。壁に罪は無い」

無言で壁ドンを繰り返すオルコツトに制止の言葉を投げる。

「愛機をバカにされて怒るのはわかるが、そろそろ落ち着け。作業の邪魔だ」

「ほら、マーキュリー先輩も言っているし。…ね？」

「……わかりましたわ、織斑さん……」

拗ねた表情で椅子に座るオルコツト。

彼女がこうなってしまったのは第四アリーナでの一件が原因だ。

—————

放課後（回想） 第四アリーナ

SIDE：一夏

「んじゃ、何から始める？」

「失礼ですが、織斑さんの射撃の腕を見たいですわ」

「俺の？」

「ええ、止まった状態の狙撃の腕はあの時見ましたが、動きながらの腕は見ておりませんの」

「あ、なる」

あの時の俺たち二人は、早速コンビネーションの訓練をしようと計画を立てていた。

「よし、見てろよ。……ん？」

「……」

「あれは……ドイツの第三世代機ですわね」

そんな時、ラウラ・ボーデヴィツヒは現れた。

「おい、織斑一夏」

「えーと……何？」

「貴様、専用機持ちらしいな。ちようどいい、私と戦え」

有無を言わさない口調でこちらに勝負を挑んできたボーデヴィツヒ。

「嫌だ。戦う理由が無い」

「貴様に無くとも私にはある」

ちなみに俺はドイツという国が嫌いだ。

理由は第二回 I S 世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦の日のことだ。

何度か回想で出たけど俺はあの日、謎の組織に誘拐された。

誘拐犯達の隙をつき、命からがら逃げだし主任の所為である世界に行つたが、問題は俺ではなく千冬姉の方だ。

ドイツは、『織斑一夏を搜索した代償』として千冬姉にドイツでの教導を求めたが、別にそこはいい。

重要なのは俺が誘拐されてから犯人達の居場所を見つけるまでの時間が一時間半と異常に早いのだ。

どこをどう考えてもこの誘拐事件はドイツのマッチポンプなのだ。

そんな訳で俺はドイツが嫌いだ。

超偏見に溢れてるのは自覚してるけど。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしただろうことは容易に想像できる。」

だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

「どうぞご勝手に、気に入らないのならお互いのためにも来るな」

【システム、スキャンモード】

「ふん。ならば——戦わざるを得ないようにしてやる」

話を回想に戻そう。

言うが早いか、ボーデヴィツヒは俺に銃口を向け発砲してきた。

ギャウツ

「何をやってますの?」

「邪魔をするな。セシリア・オルコット」

オルコットが弾を相殺してくれたので俺に被害は無かったが、この後が問題だった。

「イギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

「……ドイツでは弾を撃ってから罵倒するのが挨拶のトレンドなのですか?」

「ふん、下らん」

ボーデヴィツヒの暴言を火蓋に言い争いが始まりそうになったのだ。

「皮肉もわからないだなんて、残念な頭ですわね。貴女、友達いないでしょう?」

はい今ここでブーマランと思っただ奴。

先生怒らないから謝りなさい。

「はっ……。二人がかりで量産機を圧倒できん専用機持ちとはな。古い誇りに囚われた国はよほど人材不足と見える」



「な……」

「その上、下らん種馬に媚を売らざるを得ないとはな。なんなら貴様が来るか？ 私が勝手に決まってるがな」

なんかサラサラと俺まで罵倒された。

オルコットといい、デユノアといい、ボーデヴィツヒといい、欧州の代表候補生は問題行為をしなきゃいけない義務でもあるのだろうか。

「……本気でいきますわよ……」

「やってみろ。メスが……」

「あーストップストップ。止まれオルコット」

とりあえず、これ以上はマズイと思い俺は制止をかけた。

「お、織斑さん……」

（どうどう。今のお前、入学当日に戻ってたぞ）

（ツ！）

（アリーナ出るぞ。頭冷やせ）

（……わかりましたわ）

コア・ネットワーク通信で俺はオルコットを説得し、ボーデヴィツヒから離れるように促した。

放課後 整備室

SIDE：一夏

「やっぱり、納得いきませんわ…」

「優勝したら、俺が甘い物を作ってやるよ。だから機嫌直せ」

「…美味しくないと許しませんわよ」

「任せろ、俺を誰だと思ってる」

「女子を騙すのに抵抗のないクズ」

「正答な評価、ありがとう」

そんなこんなで現在に至る。

やっぱりドイツってクソだわ。

「…決めましたわ。織斑さん」

「ん？なーに？」

回想に浸りながらパソコンを操作しているとシリアスな口調でオルコットが話しかけてきた。

…絶対決め台詞だよな、コレ。

「わたくし、『勝たなきゃいけない理由』で貴方を誘いましたわ」

知ってますがな。

「でも、ついさつき、『勝ちたい理由』ができましたわ」

「……」

「改めてお願いしますわ…：わたくしと優勝…いえ、ラウラ・ボーデヴィツヒをぶつ飛ばし  
てくださいまし、一夏さん」

俺だつて『勝たなきやいけない理由』と『勝ちたい理由』がある。

『勝たなきやいけない理由』は箒を含めた噂に踊る女子を優勝させないため。

『勝ちたい理由』は自分の実力を女尊男卑の連中に知らしめるため。

「おう…やつてやろうぜ。セシリア」

そして、俺の恩人<sup>セシリア</sup>を助けるため。

目的ついでに協力できるのなら俺は喜んで力を貸そう。

「ありがとうございますわ。…：とところで、これは一体？」

「これ？ これね…：フツ」

セシリアが俺のパソコンを覗き込んで質問する。

その興味津々な様子に思わず笑いが漏れる。

「…キモチワルイ笑いをしないでくださる？」

「ゴメンゴメン。これはね…」

自分の様子を察してか照れ顔を誤魔化すように罵倒するセシリア。

…別に痛くも痒くも無いよ？心に針が刺さるだけで。

「ブルー・ティアーズをもっと強くするものさ」

名付けてAEOSauto extension operation system（自動子機管制システム）!!？

……まんまだな、コレ。

## 03106 目標を定めて

早朝 第二アリーナ

SIDE：一夏

カタカタカタカタ

「うーん。やっぱり、改良点は多いな」

「…たった二時間の模擬戦でわかる改良点というのもどうかと思いますわ」

ボーデヴィツヒとの騒動の翌日。

俺とセシリアは早朝からアリーナを借りてAEOSの試運転をしていた。

俺が開発した自動子機管制システム、AEOSの主な目的は『オルコットの負担を減らす』ことにある。

聞くにセシリアはブルー・ティアーズのピットを始めから全部制御するように訓練していたらしい。

これを日常に例えるなら、『自転車を補助輪無しで練習する』に等しい事だ。

だからこそ、俺は補助輪<sup>AEOS</sup>を用意した。自らのアーキテクトとしての知識と経験を生かして。

「とりあえず、応用オペレーションの目処は立ったな」

「ですわね。あら？もうすぐ、八時ですわ」

とはいえ、AEOsもまだ万能ではない。そもそも、ビットとUNACでは基本が違う。

いってしまえばAEOsは、『対一人用』『対近接用』『対軽量機用』などのオペレーションをセシリアが使い分けるだけのものだ。

当然、使い物にするためにはこれから何戦も行い、データを集めて成長させなくてはならない。

「時間ないし、食堂行こうぜ」

「ええ、行きましょう」

しかし、セシリアはAEOsの成長の為に色々なタイプと戦いたいし、俺は色々なアセンを使って慣らしたい。

何戦も戦う事にデメリットは無いのだ。

「そーいや、セシリア。大会終了後の甘い物、何が良い？」

「スイーツ版の満漢全席を所望しますわ」

「…太るよ？」

「ご心配なく。全部胸に行きますわ」

打倒、ラウラ・ボーデヴィツヒ。

目標の日まで、残り二週間半。

朝 一年一組

SIDE：箒

「……」

現在午前八時二十分。私は誰よりも早く午前六時から教室で待機していた。

理由は一夏に自分とトーナメントのタッグを組んでくれるようにお願いするためだ。

昨日はシャルロツ・デュノアの件で話せなかったのだ。

(どう話を切り出そう…)

あの告白以来、一夏との距離は離れてばかりだ。

そして、その一夏にした告白が巡り巡って『優勝すれば一夏と付き合える』という噂にまで発展してしまっているのだ。

これはマズイと思い、こうして誘おうと思っているのだが――

「遅い……」

それにしても遅い。

いつもの一夏ならば、七時半には教室で駄弁っているはずなのに。

「あくオリムー。遅いよ〜」

「おはよう、のほほんさん」

来た。意を決して立ち上がる。

「一夏。ちよつと…」

言葉を言いかけて止まる。

別に臆した訳ではない。一夏の隣にいるセシリア・オルコットに止まったのだ。

「おはよう箒。なにか用？」

「……一夏。何故オルコットと一緒になのだ？」

「何故って…今度のトーナメントでタッグを組んだから、二人で朝練してたんだよ」

朝練？オルコットと？二人で？

なんで？何で？ナンゾ？

「わたくしの諸事情と一夏さんの諸事情がかみ合った結果ですわ」

何故お前は一夏を下の名前で呼んでいる？そんなに仲良くなったのか？

「諸事情とは…なんだ？」

「話すと長くなるからえーと…互いに専用機持ちだから」

「つー…そう、なのか…」

「えつとさ…その…ペア探し、頑張ってるね」



同情にも似た視線を一夏が投げかける。

違う。そんなことで私は悩んでるんじゃない！

「ちが…」

「お前ら、そろそろ座れ。SHRの時間だ」

しかし、言葉は千冬さんによって遮られた。

仕方がないので席に着く。

『互いに専用機持ちだから』

脳内に響くのはさっきの一夏の言葉。

専用機があれば、私はお前の隣に入れたのか？

「おい」

「……」

バアツン

「くっっ！」

「SHRは一日の予定を知らせる大事なものだ。真面目に聞け」

「…ハイ」

—————

昼休み 廊下

SIDE:セシリア

「セシリア!!?」

「…なんですか?鈴さん」

後ろからの鈴さんの呼びかけに応える。

今の自分は、さぞウンザリした顔だろう。

「アンタ、一夏と組んだってホント!!?」

理由はこの鈴さんの質問だ。

一夏さんと組んだ事が周囲に知られた途端に根掘り葉掘りこういう風に聞かれ続け  
れば、返事もおさなりになる。

「本当ですわよ…でも、ちゃんと理由がありますわ」

「何!!?」

「…わたくしは代表候補生の地位、一夏さんは噂の阻止のために組んだだけですわ」  
「…わたくし達に何を求めているのだろう。」

自分と一夏さんはなんてことのない友達だ。そんなことを期待されても困る。

「そ、そっか…よかつた」

「それに、友達の貴女が一夏さんのことが好きなのに、それを裏切る訳無いでしょう?」

「アハハ…」

「大體、昔馴染みの鈴さんや篠ノ之さんならともかく、出会って二ヶ月でよく知らない相手とどうして付き合おうと思えるのだろう。」

「おーい、セシリアー。鈴ー。食堂行こうぜー」

「今行きますわー」

「うん、今行くー」

まったく関係ないですけど、一夏さん、ずっとチキン南蛮しか食べてないのです？

五時間目 一年一組

SIDE：ラウラ

「目玉焼きには、醤油派ですか？ソース派ですか？ ハイ、織斑君！」

「どちらでもいいんじゃないかと」

「その通り！どちらでもよろしい！」

（下らん…何故教官はこのような場所に…）

まったくもっての疑問だ。

ISをファクションか何かと勘違いしている生徒、生温い実力の教師、平和ボケした空気、どれをとっても教官に相応しくない。

「…先生。授業してください」

そして、織斑一夏。

教官の…弟。

『私はお前の思うような強い人間じゃない。弟一人守れないちっぽけな女だ』

否！断じて違う!!？

教官にあのよ様な顔をさせるものなど、教官の弟であつていいはずがない。

(今日の放課後にでも、教官を説得するしかあるまい)

教官の進むべき道は私知知っている。

ならば、教官に伝えなくてはならない。

それが、教官のためにもなるのだから。

## 03107 交錯する真想

放課後 廊下

SIDE：一夏

「あつさり〜しつじみ〜メツガロドン〜♪」

放課後、俺は職員室で所用を済ませてアリーナに向かっていた。

「なぜこんなところで教師など!」

「やれやれ…」

…曲がり角の先から織斑先生とボーデヴィツヒの声が聞こえてくる。

「何度も言わせるな。私には教師としての役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があると言うのですか!」

ボーデヴィツヒが織斑先生に文句を言い放つ。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生か

せません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が低く、危機感に疎く、ISをファツションか何かと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど」

「ーそこまでにしておけよ、小娘」

「っ……………」

織斑先生の怒気に気圧されてボーデヴィツヒが後ずさる。

しかし、まあ、よくもここまで千冬姉に執着するものだ。

「少し見ない間に随分と偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

家を掃除した時にわかったけど、千冬姉の好みはアーールド・シュワルツェ〇ツガーだ。

もし千冬姉を貰ってくれるシ〇ワちゃんがいたら、一報入れて欲しい。

「さて、この話はここで終わりだ。下がれ」

「……………」

しよーもない事を考えていると、ボーデヴィツヒが無言で立ち去った。

さて、俺もアリーナに行きますかね。

「…いるのだろう？一夏」

「さらつと気配感知しないでよ。千冬姉」

「こちらも立ち去ろうとしたら、千冬姉から制止の呼びかけが入った。

「なあ、少し時間いいか？」

「まあ、十分ぐらいなら」

◇

「と、いうわけなんだ」

「ふーん」

千冬姉の口から語られたのはボーデヴィツヒの出自だった。

・ラウラ・ボーデヴィツヒは遺伝アド子強化試験ヴァ体として生み出された試験管ベイビー。

・最強の軍人として君臨していたが、IS適合率を高めるために移植したナノマシン

『ヴォータン・オージェ越界の瞳』との適合に失敗。以後、最強の立ち位置から墮ちる。

・しかし、ドイツで教官を行った千冬姉の教導で再び最強の軍人に君臨する。

「その後、自分を最強に戻した千冬姉に心酔して現在に至る…と？」

「ああ」

驚かなかった訳ではない。

ぶつちやけ、もつとアレなモノを見てきたので感動が薄いのだ。

『恐れるな、死ぬ時間が来ただけだ』

『その予定はキャンセルだ。傭兵』

『これが使命だからな』

『ソツフツフツフツ』

おうお前らだよ。わかってんじゃねーよ。

「で？千冬姉はそれを俺に話してどうするの？」

「一夏、お前にラウラを助けて欲しい」

……だろうね。予測はしてた。

「あいつは、『最強の私』に囚われている。」

きつと、『教師の私』の言葉に耳を貸してはくれないだろう」

「……」

「身勝手なのは重々承知だ。だが……」

「千冬姉、」

「ん？」

「悪いけど、その頼みは聞けない」

俺に受ける気など、ない。

—————



二週間半後 第三アリーナ

『皆様！大変長らくお待たせしました！』

『これより！学年別トーナメント、一年生の部を開始します！』

ワアアアアアア!!

アナウンズの軽快な声にアリーナの観客席全てが沸き立つ。

IS学園の副収入源『抽選制の観戦チケット』に幸運にも当たった各国の人々の声だ。

『それでは、今大会のルールを説明します』

『百二十人、六十組を四つのブロックに分け、五日間で予選トーナメントを行います』

『その後、各ブロックの優勝組と準優勝組。総勢八組で二日間の決勝トーナメントを行

います』

『試合時間は予選は三十分、決勝トーナメントは四十分、決勝戦と三位決定戦は六十分と

なっております』

『申し遅れました。わたくし、放送部二年生のアルテミスです！』

ワアアアアアア!!

キヤーアルテミスセンパイ

そうして、各々の思いと願いが詰め込まれたトーナメントが開催された。

「フン、篠ノ之といったか？期待はしとらん、精々足掻け」

「ボーデヴィツヒ…貴様…」

ある者は、今日決められたペアと組み。

「頑張ろうね、鈴！」

「優勝するわよ。テイナ！」

ある者は、ルームメイトと共に優勝を夢見て。

「織斑一夏…私の打鉄を奪った人…」

「か、かんちゃん…」

ある者は、憎悪を燃やし。

「如月…私達勝てるのかしら？」

「やるつきやないわよ。鷹月」

ある者は、不安を抑え。

願望も切望も、希望も絶望も、自信も不安も等しく飲み込まれていく中、主人公チーム一夏とセシリアはとうとう…

◇

アナウンス中 ラウンジ

「おおい、セシリア。こつちこつち。で、何番だった？」

「Cブロックの七番ですわ」

「ラッキーセブンに上品Chicとはまさに俺たちだな」

「貴方は災Calamity 厄厄でしょう」

仲良く茶をしばいていた。

「…それで、本当にやるんですの?」

「そりゃやるさ。そうじゃないと意味がない」

呆れた様に苦笑するセシリア。

そんなことを構わずに一夏は笑っている。

「正気とは思えませんわ。対専用機以外で、無銘ノーマムを使わずにラファールを使うだなんて」

「でも、効果は抜群だろ?」

「はあああ…」

なんというアホだろう。

この男は『自分は専用機に頼らずとも強い』事を見せるために対専用機戦以外では自身の専用機を使わないというのだ。

「ま、危なくなったら援護射撃程度はしてさしあげますわ」

「援援誤誤射撃は止めろよ?」

「誰がしますか」

『それでは! Aブロック一回戦と、Bブロック一回戦を行いたいと思います!』

「……………始まるな」

「ええ」

二人が観るモニターに映し出されているのはBブロック一回戦のラウラ&箒とルーシー&ジェニーの光景だった。

『世に平和のあらんことを』

「なんだこいつら…」

『なんだこいつら…』

偶然にも倒すべき敵と感想が被った。

『それでは！バトルスタートです!!?』

## 03108 秒殺の一夏

トーナメント一日目 第三アリーナ

SIDE：一夏

『けつちやあーく！ルーシー&ジェニー シールドエネルギーエンプティ！』

Bブロック一回戦第一試合勝者、ラウラ&箒ペア！』

(なんだ。出落ちだったか…)

ボーデヴィツヒが一回戦落ちしなかった事とアレが勝ち上がらなかつた事に安堵する。

「結局、ただの的当てでしたわね」

「だな」ピピッ

NAME：Schwarzer Regen

KE：900

CE：1120

TE：1063

ARM UNIT：laser blade (TE)

L ARM UNIT: laser blade (TE)

SHOULDER UNIT: rail cannon (KE)

UNIQUE UNIT: wire blade (KE)

UNIQUE UNIT: active inertia canceller (—)

ボーデヴィツヒの専用機、『シユヴァルツエア・レーゲン』のデータ自体は以前の騒動のドサクサに紛れて入手してあつた。

なので、今回の試合で実際に動いている所を見たかつたのだが、見れたのは肩部のレールキャノンのみだつた。

「この分ですと、AICが見れるかもわかりませんわね」

「それは嫌だなあ」

慣性停止能力<sup>A</sup><sub>I</sub><sup>C</sup>。アクティブイナーシャルキャンセラーと呼ばれるそれはシユヴァルツエア・レーゲンの第三世代型兵器だ。

データ上では『物体の慣性を停止させる事で防御と拘束を同時に行う兵装』とあるが、ぶつちやけそれで全容が解るわけではない。

「ま、明後日に期待だな」

「そうですわね…あら？次は鈴さんの試合ですわ」

「ん？ ホントだ」

~~~~~♪

(この着メロ。鈴か…)

それと同時に鈴からのメールだ。スマホを開く。

『次はあたしの試合だよ！十秒以内に倒してみせるね！』

「……」サツサツ

『頑張れ。当たったらこっちが勝つけどなw』

~~~~~♪

『(ブロック的に) 決勝トーナメントで会おうね！』

「……」サツサツ

『死亡フラグを建てんなwww』

~~~~~♪

『りょーかい☆じゃ、行ってくる♪』

「……」

「…レディーの前でそれは、マナー違反でなくて？」

「あ…悪い…」

「こうして一日目は偵察に終わった。」

-----

## トーナメント二日目 第三アリーナ

## SIDE：一夏

『それでは！CブロックとDブロックの一回戦第三試合を開始します！』

「ねえ、次が男性操縦者だよね！」

「フン…男風情が…」

『それでは！ピットインをお願いします！』

ワアアアアアアア!!

アナウンスに従いピットイン。

先にいた対戦相手に一礼する。

「おい、あれって…」

「えっ…ラファールじゃん」

観客がざわめく声が聞こえる。

専用機無銘ではなくラファール量産機を使っていることこのインパクトは充分なようだ。

『ISなんて、慣れちゃえば簡単よ。』

装甲さえ固めればあとは問題無いつて姉貴が言ってたわ。アハハッ』

『やっときたわね！偉そうにしちゃって、マジで強いのか？』

今日で道を譲ってもらおうわよ、男風情が!!?』



『それでは！バトルスタートです!!?』  
んじゃ、見せてやるよ。俺の力を！

◇

『け、けつちやあーく！オリンピックア&ジェシカ シールドエネルギーエンプティ！  
Cブロック一回戦第三試合勝者一夏&セシリア！』

意外なほどあっさり勝てた。

俺の力の一割も見せないまま。

ウオオオオオオオオ!!

『これは凄まじい！開始から僅か五秒での決着！さらに、セシリアは一步も動いておりません！』

あいつらがザコなだけな気がする。

「宣言通りですわね」

「たりめーだ」

この分なら、目的の一つである『織斑一夏は専用機に頼らずとも強いと示す』も充分果たせそうだ。

こうして二日目も順調に終わった。

—————

トーナメント三日目 第三アリーナ

『アイツか、妹をやったのは……』

姉貴と妹の装甲の違いを教えてあげるわっ！アハハッ』

『ふう……なかなか強そうじゃないの

まあ面倒にならなきゃいいけど……』

(アイツ双子だったんだ……)

(てつきり『姉貴』は上級生だと思いましたが)

こうして、結局A I Cを見ること無く三日目が終わった。

—————

トーナメント四日目 第三アリーナ

『あいつら中途半端だったからね……』

こっちが倒れる前に相手を倒せばいい……なんで出来ないのかしらねえそれが!!?』

『……押忍……』

……ホオアタアアツ!』

(三つ子!!?)

(驚きですわ……)

こうして、驚愕の中、四日目が終わった。

## トーナメント五日目 第三アリーナ

『あいつかい。うちのバカ共が世話になったのは

あんなんでも身内だからね。仇は討たせてもらおうよ』

『どこまで耐えられるか。見せてもらおうぞ』

(四ツ子…)

(もう驚きませんわ…)

五日目夜 IS学園寮1025号室

SIDE：一夏

「「カンパニー！」」

予選トーナメント決勝の夜。

俺とセシリア、鈴と鈴のルームメイト、如月さんと鷹月さんの六人で全員の決勝トーナメント進出を祝っていた。

残念ながら、のほほんさんは用事あるらしく来れなかった。

「すごいわね。全部織斑君が勝ってたじゃない」

「それほどもある」

如月さんの褒め言葉に謙遜？で応える。

結局、専用機持ちと当たらなかつたので全戦ラファールだったが、全部俺一人で終わった。しかも十秒以内で。

「まあ、決勝トーナメントからはわたくしも戦いますわよ。精々やられないことですわね」

「そんなこと言ってるあたしが足をすくうわよ？」

「なら、踏みつけて差し上げますわ」

そういや、俺との特訓以来セシリアがかなり（精神的に）逞しくなった気がする。

多少の挑発には平然としてるし、皮肉には皮肉で返すなど色々成長しているようだ。

「あたし、ティナ・ハミルトン！よろしくね」

「私は鷹月静寐、よろしく」

そして、向こうで俺のクラスメートの鷹月静寐さんと鈴のルームメイトのティナ・ハミルトンさんが談笑している。

…残念ながら、俺は彼女たちのことをよく知らない。

ただ、出来るなら友達になって欲しいと思う。

友達は多くて損は無いのだから。

こうして、五日目が終わった。

## 03-09 慈悲なきパイル

トーナメント六日目 第三アリーナ

『さあお待たせしました。学年別トーナメント一年生の部、決勝トーナメントを開始します！』

ワアアアアアア!!

『それでは、決勝トーナメントのルールを説明します』

『各ブロックの優勝組と準優勝組を二グループに分けてのトーナメント戦を行い、それぞれのグループ優勝組同士で決勝戦を行います』

『グループ分けは、ACブロック優勝組とBDブロック準優勝組がAグループ。

BDブロック優勝組とACブロック準優勝組がBグループとなります』

『尚、試合時間はトーナメントは四十分、決勝戦と三位決定戦は六十分です』

ワアアアアアア!!!

『今までの激戦を勝ち抜いてきた猛者たちは、はたしてどのような試合運びを見せるのか！まもなく、バトルスタートです!!?』

—————

トーナメント六日目 アリーナ廊下

SIDE：一夏

ワアアアアアアア!!!

「やっぱこの歓声には慣れないなあ…」

「あれだけ暴れて何を言うんですの」

十分後に試合を控えた俺たちはピットに向かっていた。

「あ…オリム…」

「あ、のほほんさん」

歩いていると次の対戦相手ののほほんさんに出くわした。

様子から見て、トイレの中の相方待ちなのだろう。

「次の試合、お手柔らかに頼むよ」

「あ、うん…」

「……………」

どうにもものほほんさんの様子がおかしい。

セシリアも気づいたようだ。

「なんかあったんですの?」

「う、ううん。なんでもないよ!」

おかしい。のほほんさんが語尾を伸ばさない。

「ホントに大丈夫？保健室行く？」

「だ、だから平気だって…」

ガチャ

「ゴメンネ本音。待たせちゃつ…て…」

そんな時、のほほんさんの相方がトイレから出てきた。

更識簪。会長の妹にして日本の代表候補生、そして四組のクラス代表だ。

「織斑…一夏…」

彼女の眼が俺を捉え、丸くする。

そして、その眼はすぐに憎悪に染まった。

「ツ…」ビュン

「つ…」タンッ

彼女のビンタをバックステップで躲す。

え、何？どういうこと？

「……」

「かんちゃん…」

「織斑一夏…私はあなたを許さない…」



「かんちゃん！」

「行こう、本音」

「…うん。ゴメンネ、オリム」

立ち去る二人を俺たちは、ただ呆然と見送るしかなかった。

「なんでしたの…今の…」

「わからねえ…」

更識は『許さない』と言った。

だが、俺に心当たりがない。

「……」

「一夏さん」

「ん？」

「次の試合。作戦がありますわ」

考え込んでいるとセシリアが提案してきた。

「わかった、聞くよ」

とりあえず、今は試合に集中だ。

—————

トーナメント六日目 生徒会室

SIDE：楯無

『それでは！ピットインをお願いします！』

画面の中のアリーナに入場する二組を見て複雑な気持ちになる。

「簪ちゃん…」

口から漏れた言葉は虚しく空気と消えた。

『それでは！バトルスタートです!!?』

自分の気持ちの整理もつかぬまま、試合が始まった。

『おーつとおー！夏の特攻だー!』

相も変わらずラファールの織斑君が右手の近接ブレード一本で簪ちゃんに突撃を仕

掛ける。

あまりにもミエミエな突撃に、簪ちゃん呆れながら構えたその瞬間だった。

ギヤイン

『っ!』

なんとということか。

今の今まで静観を決め込んでいたオルコットさんが、簪ちゃんにレーザーを放ったの

だ。

『くっ…』

なんとか避けた簪ちゃん。

だが、瞬間インシュンブレイク加速を使ったであろう織斑君が、いつの間にか左手に展開したパイルバンカーと共に簪ちゃんの懐に潜り込んだ。

『あつ…』

無論、避けられる訳も無く土手つ腹にパイルバンカーを打ち込まれる。

『か、簪。シールドエネルギーエンプティ！』

この間僅か三秒。

たった三秒で国家代表候補生を二人は墮とした。

『さあ残った本音……ここからどう出る？』

「……」

その後、逆転劇など無く、本音も墮とされた。

私は、呆然とするしかなかった。

妹の負け姿も、悪魔のような織斑君も全部夢だと思いたかった。

—————

トーナメント六日目 控え室

SIDE：一夏

「お前って、意外と容赦無いよな…」

「今さらですか」

着替えたセシリアと控え室で談笑する。

今回の容赦無い作戦はセシリア立案だ。

以下、立案風景。

『今までの試合で少なくとも一夏さんがラファールの時には、わたくしは手を出さないと思われてますわ』

『今回はここを突きますの。』

まず、一夏さんが近接武器で突撃、身構えた相手にわたくしがレーザーを放ちますわ』  
『そうして動揺した相手をパイルバンカーで屠りますの。』

最低一機、良ければ二機とも墮としてくださいまし』

以上。いやーエグいエグい。

「ところで、一夏さん。どうしますの？」

「何が？」

「更識簪のことですわよ。貴方、何をしたんですの？」

「何をつて…何もしてねーよ」

そもそも、面識に関しても今日初対面の相手なのだ。

どこで恨みを買ったんだ？

「まあ、後で会長に聞くなり。それよりも…」

「それよりも？」

「鈴を倒すための作戦会議だ。次は無銘ノネムを使う」

次の対戦相手は鈴だ。

これは気を引き締めなくっちゃな。

# 03-10 チームワーク

トーナメント六日目 第三アリーナ

SIDE：一夏

『それでは！バトルスタートです!!?』

決勝トーナメント二回戦第一試合。

実質準決勝のこの試合で俺たちと鈴たちがぶつかった。

『はああああ!!?』

『やああああ!!?』

開始早々、セシリアと鈴が中断されたクラス対抗戦を取り戻すように撃ち合う。

そうやって遠くに行つた二人を一瞥し、構える。

「じゃ…俺たちも始めようか」

『う、うん…』

強張つた声で応えるハミルトンさん。

いい笑顔してるんだろーなー今の俺。

◇

## SIDE：鈴

(すごい…すごいよセシリア！)

ライバルの成長に心の中が興奮に満ちる。

どういう理屈かはわからないけど以前まではできなかったビットとの同時攻撃をセシリアは可能にしていた。

(でも、あたしも負けないよ！)

あの日、あたしは無人機に手も足も出なかったことを悔やんでいた。

だからこそ、あたしはあたしの弱点を克服しようと必死に練習した。

その結果が『龍咆』の非視認での使用だ。

まだ完全とは言い難いけど、実戦に組み込めるレベルにはなっている。

現に今だって『ブルー・ティアーズ』のレーザーを撃ち落としている。

(だけど…このままじゃジリ貧…)

『龍咆』をハイパーセンサーで感知してから回避できるようセシリアはかなりの距離をとっている。

このまま遠距離戦を続けても先に消耗するのは自分だろう。

(どこかで、隙を見つけて…)

前回みたいに飛び込むしかない。

「!」

あった。

レーザーの雨の中に一つ穴を見つけた。

どう見ても罨だが罨ごと切り刻む!

「やああああ!!?」

意を決して加速。

しかし、飛べど飛べどレーザーが飛んでこない。

もしかして、罨ではなくホントに穴だったのか?

(丁度良いわ…)

どちらにせよ。近づけばこちらのものだ。

更にブースターを吹かし両手がガラ空きのセシリアに肉薄する。

…両手がガラ空き?

『デュランダール!』

ガキヤアン!

◇

SIDE:セシリア

「デュランダール!」



ガキヤァン！

狙い通りに突っ込んできた鈴さんの双刀を両手に展開した双剣で受け止める。

『嘘!!?』

やはり、鈴さんはわたくしが未だに近接戦が苦手だと思い込んでいたらしい。

「鈴さん」

『……』

「わたくしも弱点を克服してますのよ」

わたくしだってあの日、あの戦いで悔しい思いをしたのだ。

「自分だけ強くなっていると思ったら、大間違いですわ!」

『くっ!!?』

ビットとの同時攻撃の答えは一夏さんが用意してくれた。だからわたくしは自分の

もう一つの弱点である『近接戦が苦手』を克服しようと訓練したのだ。

「てやあああ!!?」

◇

SIDE：鈴

『てやあああ!!?』

セシリアが双剣で斬りかかってくる。

「くうっっ！」

この状況では防御するしかない。

自分の双刀は威力は高いが小回りが利きにくく、逆にセシリアの双剣は威力は低いが小回りがかなり利く。

『まだまだですわあ！』

それに双剣の隙をビットで全て潰している。

嵌められた。

元々、不意を打って接近戦に持ち込むつもりだったのだ。

「フンッ！」

上に向かって瞬間イグニッションブースト加速。

ここは引いて体制を立て直さないとー

ドヒャア

「え……」

バジウウツ

「きゃああッ？」

強い衝撃と一緒に地面に叩きつけられる。

横を見ると金属ブレードを構えた一夏がいた。

「いち…か…?」

『けつちやあーく! 鈴 シールドエネルギー エンプティ 勝者 一夏&セシリア!』

え…? 負け…た…?

『チームワークの勝利だ。鈴』

『ゴメン鈴。一秒で負けちゃったあゝ』

ああなるほど、そういうことか。

まずセシリアがあたしを引きつけ、その隙に一夏がティナを倒す。

そして、隙を見てあたしを倒す。

初めからそういう作戦だったんだ。

「謝らないでよティナ。専用機相手にフォローしなかったあたしが悪いんだから」

『で、でも…』

「いいって」

敗因の全てはあたしにあった。

個人同士の決着に気を取られて、チームプレイを疎かにすれば負けるに決まってい

る。

『試合には勝ちましたが、勝負はついてませんわよ』

「うん、いつかつけようね。セシリア」

『ええ』

差し伸べられたセシリア好敵手の手を取る。

『これは素晴らしい！』

皆様、この二組に盛大な拍手を!!?』

パチパチパチパチ

こうして、あたしのトーナメントは終わった。

—————

トーナメント六日目 控え室

SIDE：一夏

『けつちやあーく！如月 シールドエネルギーエンプティ 勝者ラウラ&箒！』

『如月、見事にパイルを当てましたが惜しくも敗退です！』

『見たか、セシリア』

『ええ、見ましたわ』

準決勝第二試合の如月さん&鷹月さんとボーデヴィツヒ&箒の試合。

俺たちはそれを見てニヤリと笑った。

「勝てますわ…」

「ああ…」

俺は箒を、セシリアはボーデヴィツヒを、それぞれの目標を見据えて呟いた。そして、決着の七日目が訪れる。

## 03-11 決着の七日目

トーナメント七日目 第三アリーナ

『ついに…ついにこの日がやってまいりました!』

『学年別トーナメント一年生の部、三位決定戦と決勝戦を開始したいと思います!』

ワアアアアアア!!

『それでは、まず三位決定戦を行いたいと思います!』

『右コーナー鈴&ティナ!』

『左コーナー如月&鷹月!』

『それでは、バトルスタート!』

-----

トーナメント七日目 管制室

SIDE：千冬

『悪いけど、その頼みは聞けない』

『え…?』

『千冬姉はアイツに言ってたよね。』私には教師としての役目がある』って』

『あ、ああ』

『そして、入学式の日でこうも言ってたよね『出来ない者には出来るまで指導する』って。そんな千冬姉がアイツを指導しなくてどうすんのさ！』

『だ、だが…』

『千冬姉！今の千冬姉は“教官”じゃなくって“教師”なんでしょ！』

“教師”が“生徒”を指導するのを放棄しちゃってどうするんだよ！』

『……』

『相談に乗ったり、悩みを聞くことは俺でいいよ。』

でも、解決するべきなのは俺じゃなくって千冬姉だ』

『……』

『大丈夫ですか？織斑先生』

『ああ…』

山田君の言葉に生返事を返しつつ、モニターを見る。

ついにこの日が来てしまった。

一夏とラウラが直接ぶつかる日が。

三週間半前のあの日、一夏に叱責された私はラウラと話し合おうと思った。

だが、どこからなにを話せばいいのかまるでわからずに只々時間だけが過ぎていつ

た。

私は教師としてラウラを導かなくてはいけないのに。

『おーとおー！ここで如月のパイルが炸裂ーッ！』

「なあ山田先生」

「ハイ？」

「私は…どうするべきなのだろうな…」

「この三位決定戦がずっと続けばいいのにと叶わぬことを私は考えていた。

—————

トーナメント七日目 第一ピット

SIDE：ラウラ

『さあ、いよいよこの瞬間がやってまいりました！』

ワアアアアアアア!!

「フン…」

まったくもって下らん。

こいつらはISをなんだと思っているんだ？

(理解ができない…なぜ教官はこのような者共を相手に…)

昨日のような骨のあるやつならば、まだしもこの平和ボケした連中に教官が付き合う



必要などないはずだ。

『決勝戦。ラウラ&箒対一夏&セシリアを開始します！』

やはり織斑アヤ一夏イツか、教官をここに留めている原因は。

(ならば、倒すしかあるまい)

教官の汚点は私が排除する。

それが、私から教官への恩返しだ。

「シユヴァルツェア・レーゲン、起動する！」

—————

トーナメント七日目 第二ピット

SIDE：一夏

『決勝戦。ラウラ&箒対一夏&セシリアを開始します！』

「いよいよ、だな」

「ええ」

ピットで無銘ムネナを起動し、機体の確認をする。

HEAD：HF—227

CORE：CA—225

ARMS：AE—118

LEGS:Le2L|B|V15

R ARM UNIT:pulse machinegun

L ARM UNIT:plasma gun

SHOULDER UNIT:added magazine

HUNGER UNIT:laser rifle

如月さんがボーデヴィツヒに肉薄してくれたお陰でAICの特徴とボーデヴィツヒの動きがわかった。

まず、AICの弱点は、

・光学武器を防げない。

・止められる対象は一つ

の二つである。

それを考慮し、消費ENの低い軽二と光学武器のみで構成。

因縁的に俺を重点的に撃ってくるであろうボーデヴィツヒを、躲しながら引きつけるのが俺の役目だ。

ちなみに対TEは捨てた。

レザブレの範囲に入る気は無いし。

「終わりましたの?」

「ああ」

機体の確認を終えたセシリアが様子を見てくる。

いつも使っているレーザライフル『スターライトmkⅡ』を背中の急造ジョイントに収め、両手には二丁のビームマグナム『スターブレイズmkⅢ』を装備している。

『それでは！ピットインをお願いします！』

「いくぜ」

「堕ちないでくださいね」

アナウンスに従い、カタパルトに着く。

これで、最後だ。

【メインシステム、戦闘モードを起動します】

## 03-12 コンビネーション

トーナメント七日目 第三アリーナ

『それでは、バトルスタート!』

『織斑…一夏アアーツ!』

キーン

試合開始のアナウンスとほぼ同時にラウラがレールカノンを放つ。それを躲した一夏とセシリアは互いに目配せして二手に分かれる。

◇

SIDE：箒

「セシリア…オルコット…」

『怖い目で睨まないでくださる?』

ボーデヴィツヒが一夏を追うのを見て自分も追おうとするとオルコットが立ち塞がる。

「……」ギリツ…

刀を正眼に構える。

昨日の戦いで、コイツの目立った弱点は全て無くなったのは知っている。だが、それで戦い方をホイホイ変えられる程、私は器用ではない。

『準備はよろしくって?』

近付いて、斬る。

それだけだ。他はいらない。

「ああ、いいぞ」

さあどこから撃ってくる?

『それっ!』

プシユッ

「!・煙幕!!?」

身構えていると、オルコットが煙幕弾を投げた。

消える視界に一瞬焦るがすぐに平静を取り戻す。

(落ち着け…どこから撃ってくる…)

『デュランダル!』

「そこか!!?」

ビュン!!?

展開時の掛け声がした方向に斬撃を放つ。

しかしー

ギャウツ

『かかりましたわね!』

「グウツ!!?」

実際に声が飛んできたのは、後方だった。

どういふ訳だと斬った方向を見るとそこにはセロテープでCレコーダーを貼り付けたビットがあつた。

「な…」

思わず絶句する。

自分の武器にそんな細工をするなんて。

『終わりですわ』

「クツ…」

オルコツトがレーザーライフルを構える。

多方からのレーザーを避ける術も無く、私は撃墜された。

◇

SIDE:一夏

『どうしたあ!教官の弟だと言うなら、撃つてこい!!?』

ボーデヴィツヒの言葉を無視して、回避行動を続ける。

さて、そろそろかな？

『篠ノ之箒 シールドエネルギー エンプティ！』

残るはラウラ・ボーデヴィツヒ一人となりました！』

『待たせましたわね』

ようやく、セシリアのご登場だ。

敵方の動きが止まったので、左手のA<sup>ブ</sup>U<sup>ラ</sup>N<sup>ズ</sup>I<sup>マ</sup>C<sup>ガ</sup>85をX<sup>レ</sup>000<sup>ザ</sup>0 K<sup>ラ</sup>A<sup>イ</sup>R<sup>フ</sup>A<sup>ル</sup>W<sup>ル</sup>に切り替える。

『ああ、それと…一度とゼロテープは使いませんわ』

えー、いい作戦だと思っただけだな、録音機作戦。

『…貴様に用は無い。失せろ』

『あら？タッグ戦で相方を助けるのは当然ですわよ？』

さて、これで二対一だ。

『そうか…ならば、貴様も潰してやる!!？』

キーン

放たれたレールカノン避け、すれ違う形でH<sup>バ</sup>A<sup>ル</sup>T<sup>ス</sup>S<sup>マ</sup>U<sup>マ</sup>K<sup>シ</sup>A<sup>ン</sup>R<sup>ガ</sup>I<sup>ン</sup> m<sup>ン</sup>d<sup>ガ</sup>l<sup>ン</sup>—l<sup>ン</sup>を放つ。

『無駄だっ！』

ボーデヴィツヒに当たりはしたが、気にすることなくワイヤーブレードを放つてく  
る。

だが、その武装は準決勝で見せている。ハイブーストを繰り返して避ける。

『おーつとお、これは個別連続瞬時加速だあーっ！』

いえ、只の連続ハイブーストです。

『ハッ、そんな曲芸でA I Cが躲せるか！』

俺をA I Cで捕らえんとボーデヴィツヒがこちらに向かってくる。

『デュランダル！』

『無駄だ！』

セシリアが双剣の一本をボーデヴィツヒに向かって投げが、片手間のA I Cで止め  
られる。

だが、

ドガアアン

『グアツッ？！』

同時に飛んできた『弾道型ミサイルのブルー・ティアーズ』をもろに喰らい、その隙に俺は距  
離を取る。



『ハアアアア！』

落ちていく剣を掴み、双剣でセシリアが斬りかかる。

斬撃を両手のレーザーブレードで受け止めるボーデヴィツヒ。

『今ですの！』

セシリアの合図を受けてフルチャージして置いたレーザーライフルを放つ。

セシリアは瞬間加速で上空に退避し、ボーデヴィツヒも躲そうとするが、『ブルー・テイアーズ』の射撃がそれを許さない。

『グウウウッ！』

『まだ終わりではありませんわ！』

左手を再度プラズマガンに切り替える。

セシリアの『スターブレイズ』と『ブルー・テイアーズ』が、

俺の『HATSUKARI mdl』と『AUNIC85』が、ボーデヴィツヒに突き刺さる。

『貴様…』

（！ セシリア！）

手負いの獣になってきたのに気づき、セシリアにコア・ネットワーク通信で指示を出す。

(なんですの?)

(今から、俺の言うタイミングで撃って)

(わかりましたわ)

快く了承するセシリア。

ホント、いい友達を持ったものだ。

『きいさあまああああ!』

(今だ!)

レーザーブレードを構え、こちらに瞬間加速するボーデヴィツヒに合わせて、前方にハイブースト。

瞬間、ボーデヴィツヒの顔は驚愕に染まった。

それもそのはず、瞬間加速は後部スラスタ翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出し、その時の慣性エネルギーを利用するのが原理だ。

それはつまり、加速に使うのは外部のエネルギーでもいいということだ。

そしてセシリアは、俺の言うタイミング通りボーデヴィツヒの後部スラスタ翼にレーザーを放った。

今のボーデヴィツヒは10のつもりで力を入れたら15の力が出ている状態だ。

無論、想定していた飛距離も速度も飛び越しただろう。

ガイイン

そして、軽二の軽さを補って余りある相対速度を纏い、飛び膝蹴り。

派手に吹っ飛んだボーデヴィツヒはアリーナの壁に叩きつけられた。

『けつちやあーく！ ラウラ・ボーデヴィツヒ、シールドエネルギーエンプテイ！』

学年別トーナメント一年生の部。優勝は無銘ノネームとブルー・ティアーズ、織斑一夏とセシ

リア・オルコットです！』

ワアアアアアア!!

『…やりましたわね。わたくし達』

「…ああ。俺たちの勝利だ」

これで、あの噂も効力を失った。

セシリアも代表候補生の地位を守れた。

「…セシリア」

『なんですかの？』

「ありがとう」

『…こちら、ですわ』

## 03-13 ブリュンヒルデ

トーナメント七日目 第三アリーナ

SIDE：ラウラ

『けつちやあーく！ ラウラ・ボーデヴィツヒ、シールドエネルギーエンプティ！』

学年別トーナメント一年生の部。優勝は無銘ノーマムとブルー・ティアーズ、織斑一夏とセシ

リア・オルコットです！』

（負けた…この私が…負けた？）

確かに相手の力量を見誤った。それは間違えようのないミスだ。

だけど、

（私は…負けれられないのに…負ける訳にはいかないのに…）

『お前に認められる筋合いは無いよ？』

『どうぞご勝手に、気に入らないのならお互いのためにも来るな』

『…ああ。俺たちの勝利だ』

『あら？タッグ戦で相方を助けるのは当然ですわよ？』

『今ですの！』

『…やりましたわね。わたくし達』

(教官織班一夏の汚点セシリアに…馴れ合いしかできない奴オルコットに…負けるなんて…)

『ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。』

一カ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな』

『私はお前の思うような強い人間じゃない。弟一人守れないちっぽけな女だ』

(私は…負けては…いけない…負ける筈が…無い)

倒さなければ、あの男を。

完膚なきまでに、叩き伏せなければ。

(力が、欲しい)

ドクン……と私の奥底でナニカが蠢く。

『——願うか……?』

汝、自らの変革を望むか……?』

より強い力を欲するか……?』

寄越せ。比類なき力を。

寄越せ。唯一無二の力を。

寄越せ。アイツを潰す力を。

そのためなら——

こんな空つぼの私など、全部くれてやる!

Damage Level …… D.

Mind Condition …… Uplift.

Certification …… Clear

《Valkyrie Trace System》 …… boot

◇

SIDE:「夏

「あああああつ!!!」

「!?」

「!?」

ボーデヴィツヒの身を引き裂かんばかりの絶叫に何事かと振り返る。

『ここ、これは一体…何が起こっているのでしょうか…』

困惑する実況に同意だ。

目の前の事象が、あまりにも異質すぎる。

『ISが…溶けている…?』

そう、セシリアの言うとうりボーデヴィツヒのIS、シュヴァルツェア・レーゲンがドロドロに溶けて変形しているのだ。

「:つ!」

【システム、スキャンモード】

NAME: S a r e r R e g n

KE: 900

CE 20

TE: 1063

R A U N I T : l a s e r b l a d e ( T E )

R M U N I T s e r b l a d e ( T E )

S H O U L D E R U i l c a n n o n ( K E )

U E U N I T : w i r e b l a d e ( K E )

U N I Q U E U a c t i v e i n e r c a n c e l e r ( |

|)

(スキャン結果が、書き換えられていく:?)

そしてシュヴァルツエア・レーゲンだったものは流動を止めスクツと立ち上がった。

NAME: V T S K u r e z a k u r a

KE: 1253

CE: 1111

TE: 833

R ARM UNIT: blade (KE)

L ARM UNIT:

ONOFF ABILITY: reirakubyakuya

「暮桜……!」

流動を止めたその姿は、かつて千冬姉が繰っていた専用機『暮桜』に酷似していた。  
「何が……どうなってるんだよ……」

『……』

—————

トーナメント七日目 管制室

SIDE: 真耶

「非常事態発令! 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込みます! 来賓と生徒は今すぐ避難を!」

上からの発令に従い、指示を飛ばす。

正直、この指示が無ければ呆然としていただけかもしれない。

「織斑、オルコット、聞こえるか?」

隣で織斑先生がアリーナ内の二人に連絡を取る。



『聞こえてますわ。それで、アレは一体なんなのですか?』

「わからん。今、教師部隊がそちらに向かうが、それまでの時間を稼げるか?」

『幸い、二人揃ってノーダメだし、残弾も、追加弾倉のお陰で余裕があるよ』

「よし、頼む」

織斑先生が通信を切り、こちらに向き直る。

「すまない山田先生。ここの統括権を一時預ける」

「え?」

そしてなんとんでもないことを言いだした。

…よく考えたらしいものことでした。

「預けるって…どこに行くんです!?」

「私の、生徒の元だ」

—————

トーナメント七日目 アリーナ内

SIDE：一夏

『ええい、教師部隊はまだなのですか!』

「どーせ、着替えんのに手間取ってんだろ」

セシリアと雑談しつつ、偽暮桜（俺命名）の攻撃をかわす。

暮桜のワンオフ・アビリティ『エネルギー消失零落白夜』も再現しているらしく、遠距離攻撃がレーザーのみの俺たちの攻撃は全て切られるか、躲されるかなので、攻撃することを揃って諦めた。

ふと、スクリーン画面を見るとリコンにこちらに近づく打鉄の反応があった。

おせーよホセ。少しは文句を言わせろ。

『あら、よーやく来たみた…』

『やれやれ、遅いです…』

『織斑先生…?』

そこにいたのは、打鉄を纏った千冬姉だった。

—————

トーナメント七日目 アリーナ内

SIDE：千冬

『織斑先生…?』

なぜか疑問文の二人の無事を確認する。

どうやら、傷一つついてないようだ。

「よく耐えたお前たち、後は下がれ」

『う、うん…』

『は、はい…』

「…一夏」

『?』

隣を通り過ぎる一夏に話しかける。

私は、もう迷わないと決めた。

「お前は前に言ったな 『解決するべきなのは俺じゃなくて千冬姉だ』と」

『…うん』

「その言葉を今果たす。見ていてくれ」

私は結局、なにか事件がないと動けない愚か者だ。

だがそれでも、私は教師だ。

苦しむ生徒を見捨てることなんてできない。

「さて、そこのバカ者。」

教師からの愛の鞭だ。存分に受けろ」

刀を構え、ラウラの前に立つ。

「ラウラ。今からお前の望む姿に、ブリュンヒルデになってやろう。

だから…とつとつと目を覚ませ！」

元々、ウダウダ考えるのは性に合わん。

やはり私は、考えるよりも動いた方が早い。

## 03-14 姉という存在

トーナメント七日目 第三アリーナ

その日、その場所、その時間を見た人は全員固まった。

方や、明らかに全盛期の最<sup>ブリュンヒルデ</sup>強の再現、

方や、全盛期の最強から衰えた教師<sup>織斑千冬</sup>、

機体差を含めれば余りにも絶望的な状況が、

『はあああああああ！』

ひっくり返された。

◇

SIDE：千冬

「はあああああああ！」

振られた一撃をいなし、カウンターを決める。

「甘いー」

自分の斬撃だ。

どこから、どうやって、どのタイミングで振るのはわかっている。

「無駄だッ！」

『雪片』を弾き、偽暮桜を守勢に追い込む。

これで終わりだ。

「私の！」

偽暮桜のガードを上から強引に押し潰す。

「生徒から！」

体勢が崩れた所を狙い、『雪片』を弾き飛ばす。

「出ていけええーっ！」

偽暮桜に唐竹割りを決める。

すると、

「ラウラッ!?」

黒い闇の中からラウラの身体が見えた。

刀を放り、その身体を掴む。

「ラウラ！しっかりしろ！」

身体の方に傷はなさそうだが、早く医務室に運ばなければ！

ドロオ…

「クッ…」

しかし、ラウラを取り込んでいた闇が、再度取り込もうとこちらを取り囲む。マズイ。武器はさつき捨ててしまったし、そもそも両手が塞がっている。

ドロオ…

「……」

ギャウツ

カアオツ

『早く逃げて！』

『千冬姉え！』

どうしようかと思っていた時、二本のレーザーが闇を貫いた。

穴の中からは、一夏とオルコツトがレーザーライフルを構え、避難を促す。

「すまない！」

二人が作った穴から脱出し、ラウラを教師部隊の一人に渡す。

向き直ると教師部隊の一斉射によって崩れていく闇があった。

「……………」

トーナメント七日目 医務室

SIDE：ラウラ

「う、あ……………」

ぼやっとした光が降りているのを感じて目を覚ます。

「気がついたか」

敬愛してやまない教官の声を聞き、思わず飛び起きようとする。

「グッ…」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。

しばらくは動けん。無理をするな」

どうして私はここに…

『より強い力を欲するか……?』

思い出した。

あの声に全てをくれてやったのと同時に意識を失ったのだ。

「何が……起きたのですか……?」

痛みを堪え上半身を起こし、教官を見つめる。

「重要機密なのだが…VTシステムは知ってるな?」

「はい…」

VTシステム。

正式名称はヴァルキリー・トレース・システム。

過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きトレースするシステムだ。



だが、VTシステムはIS条約で現在どの国家、組織、企業において研究、開発、使用の全てが禁止されていたはずだ。

「そのVTシステムがお前のISに積まれていた。巧妙に隠されてな」

「……………」

言葉が出ない。

自分に語りかけて来たのはそのシステムだったとは。

「操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志…………いや、願望か。

それらが揃うと発動するようになっていたらしい」

ああなるほど。

あの時の私は織斑一夏を潰すことを心から望んだ。その結果か。

「…ボーデヴィツヒ」

「…はい」

教官が神妙な表情で口を開く。

「すまなかつた」

「え…………？」

出てきたのは、謝罪だった。

「今回のお前の一件は、お前に『暴力』だけを教え込んだ私の責任だ。

「謝らせてくれ」

目に涙を浮かべながら私に頭を下げる教官。  
違う。私は、あなたを、

「ち、ちが…」

「ボーデヴィツヒ」

「教官…」

自分の否定も呼びかけに遮られる。

「“教官”として最後の命令だ」

「……」

「織斑千冬を一人前の教師に育てろ」

「教…官…」

「ラウラ…頼む…」

「はい…ごめん…なさい…先生」

—————

トーナメント七日目 医務室前

SIDE：一夏

「はい…ごめん…なさい…先生」

「……」

医務室の中の様子を見てドアを閉める。

この場に自分が行くと言うのは、余りにも無粋だ。

「入らないの？」

「あ、会長」

時間を持て余し、ブーツとしてしていると前から会長がやってきた。

「それで、どうでした？」

「……『ラウラ・ボーデヴィツヒなる者は我がドイツに存在しない。』

V T システム？それはボーデヴィツヒが勝手につけたものだろう』ですって……」

「ふーむ」

トカゲの尻尾切りか。まあ珍しい事でもあるまい。

「……その割には随分と嬉しそうな顔じゃない」

「……あれ見てくださいよ。いい顔してるじゃないですか」カララ

「……そうね」

医務室の中には互いに泣きながら笑う千冬姉とボーデヴィツヒがいた。

「姉が成長して嬉しくない訳ありませんよ」

「ッ！……そう、ね」

「……………」

『姉』と言う単語を聞いた瞬間、会長の声が震えるの感じた。

『織斑一夏…私はあなたを許さない…』

(もしかして…)

なにかが、繋がった気がする。

後で、のほほんさんに聞いてみよう。

[MISSON03 COMPLETE]

MISSON04 Change Relation  
04-01 変わる関係

放課後 医務室

SIDE：セシリア

「お見舞いに来ましたわ…あら？」

「よう」

「…む」

「イギリス代表候補か」

医務室に入るとちょうど一夏さんと織斑先生が部屋を出る所だった。

「じゃーな、ラウラ」

「……！」

一夏さんがボーデヴィツヒさんの事を名前呼びしている。

何かあったのだろうか？

「何かあったんですの？ドイツ代表候補」

「…私は、もうドイツ代表候補ではない」

「……降ろされましたの?」

『ラウラ・ボーデヴィツヒなる者は我がドイツに存在しない。』

V T システム? それはボーデヴィツヒが勝手につけたものだろう』だ、そうだ」

トカゲの尻尾切りですか。

どうせ、同じ欧州のわたくしに手が出た時点で手遅れなのですが。

「はいこれ」

「何だ?」

「フアツション誌ですの。聞いた限り貴女、お洒落したことないでしょう?」

パラパラとページに目を通しボーデヴィツヒさんは近くの机にフアツション誌を置

いた。

「……すまなかった。あんな事を言っ……」

「随分と毒気が抜けましたわねえ」

「笑いたくば笑え」

一体、何があればこんな風になるのでしょうか?

「誰が笑いますか。それで、国籍無しでどうするつもりで?」

「……織斑先生が、私を養子縁組にするらしい」

養子縁組。ということとは

「貴方、一夏さんの姪になるんですの?」

「まあ…そう言うことだ」

初日からビンタをかましたクラスメートが、いきなり姪になった一夏さんの心境はにかに。

「まあそんなことよりも、絶対に許しませんわよ」

「当然だ。あれだけお前の国をバカにしたのだからな」

一夏さんからボーデヴィツヒさんの出自を聞いて思った事は『少し似ている』だった。

『男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ!』

出自から生まれた黒い感情に突き動かされた事、

『あんなに自身満々な代表候補生様がいるんですもの』

それが原因で失った物があるという事、

『代表候補生としての力、頼りにしてゐるぜ』

『いつかつけようね。セシリア』

でも、わたくしにはそれでも一緒にいてくれる友達がいた。

「ええ、絶対に許しませんから。」

罰として、わたくしと、友達になりましょう?」

「え…?」

今度は、自分が誰かと一緒にいる番だ。

そう思ったのだが、

「フ、フハハハハ！」

盛大に笑われた。

「何がおかしいのですの？」

「いや…織斑一夏に…叔父にさつきこう言われてな」

『絶対に許さない。』

許して欲しけりや、ちゃんと親孝行しろ』

…一夏さん。

暗にラウラさんを家族と認めた発言ですわね。

「てか。決め台詞が盗られましたわ！」

「フ、フフ、フハハハハ！」

「ええい。笑わないでくださいまし！」

というかよく考えたら、かなり恥ずかしい台詞でしたわね。

「…で。どうするんですの？」

「ああ、その罰を受けよう」

「では、よろしく。ラウラさん」



「ああ、よろしく。セシリア」

握手を交わすわたくしとラウラさん。  
新たな友の誕生に乾杯。

## 04-02 直る関係

夕方 夕焼けの河川敷

SIDE：一夏

「……」

夕方、俺の家からそう遠くない河原の土手で俺は救急箱と頭を抱えていた。  
まさか自分の軽率な発言で、

ベキイ ドゴオ

会長と会長の妹が殴り合う事態が起こるなんて。

原因？

それは、昨日に遡る。

—————

昨日の放課後（回想） 生徒会室

SIDE：一夏

「えーと……会長と妹さんの関係を総括すると……」

・日本の暗部、更識家に生まれたとても優秀な姉の会長とそこそ優秀な妹の簪さん

はつねに比較されてきた。

・妹さんは比較されるのを嫌い、会長に対して悪感情を抱く。

・会長は会長で、妹さんを裏社会から守ろうと何もさせないように手を回してしまい、その件で姉妹仲が険悪になる。

・そして、俺の登場で『白式』<sup>びやくしき</sup>の開発に人を取られ妹さんの専用機の開発は中止になってしまい、妹さんは会長を越してみせると自力で専用機開発に勤しんでいる。

「つまり、俺が姉妹仲にトドメを刺したってことでFA？」

「ええ……」

「うん……」

あの時の俺は、のほほんさんと虚さんに会長の事情を聞いていた。

しかし、こうも振り返るとあれだけお世話になった会長に、こんな所で迷惑をかけてたなんて思いもよらなかった。

それに妹さんにもだ。

自分の人材を奪われてまで作られた物が、事実上の凍結状態だなんて、そりゃ許せない。  
い。

ピンタはまだ有情だ。

「倉敷に連絡して、本格的に解体してもらおう……」

確か、白式は『どうして無銘ノイネームに拒絶されたのか?』という名目で調査されていたはずだったので、これを止めれば、妹さんの開発計画も再開するだろう。

「とりあえず、メールで千冬姉に…」

「ねえ、オリム、お姉ちゃん」

「?」

そう思い、倉敷技研に中止してもらおうと千冬姉にメールを送ろうとしていると、のほほんさんが口を開いたのだ。

「私ね、もうかんちゃんとなつちちゃんが、ギスギスしているのが嫌なの」

「本音…」

「のほほんさん…」

確かに、友達が友達の姉との仲が悪いのは嫌だろう。

「だから、仲直りさせよ」

「そうね…織斑君。協力してくれない?」

「ハイ」

俺としては、当人同士で解決すべきだと思ったが、俺も原因の一つだ。

ここは一肌脱ごうと俺は思った。

ここまではまだ良かった。

だが、この後が問題なのだ。

この後、二人を和解させる為にはどうすればいいか、三人で案を出し合い議論していった。

しかし、これといったアイディアが浮かばず、半ば冗談で俺はある意見を出してしまつたのだ。

『もう古い青春物みたいに川原で殴り合えばいいんじゃない?』

すぐに冗談だと訂正しようとしたら二人が『それだ!』となり。

どういう手を使ったのかはわからないけど、こうして二人を決闘に臨ませたのだ。

—————

夕方 夕焼けの河川敷

SIDE:一夏

「お姉ちゃんはいつもそう!」

私をお人形かナニカみたいに!」

ガスッ

「私は! 簪ちゃんを! 危険に近づけたくないだけなの!」

ドカッ

んで、現在に至る。

まあ本音は言い合えているので、成功は成功だろう。

この二人の間の問題は、いわば膿みみたいなもので、出し切れればスッキリするタイプなのは確かだ。

「ハア……ハア……」

「……ハア……フウ……」

だが、ここまで続けて止めないのはいかがかと思う。

最初の内は暗部の家らしく、技巧を凝らした体術での組み合いだったが、今や唯のテレフォンパンチの応酬だ。

「おーい、一夏ーッ！」

「弾!?」

キヤットファイトをボーツと眺めていると、弾がこちらに声をかけ、走り寄ってくる。

俺の家に近ければ、そりゃ弾の家も近いはずだ。

「女の子同士が殴り合ってるって噂があったから、来てみたらどうということだよ！」

「……決闘」

「決闘!?」

ええい。耳元で叫ぶな。

「と、止めねーのかよー！」

「…主宰者が、お前で言う蘭ちゃんだもん…」

「…悪い」

そんなことを話していると、二人がグツと構えた。

「はああああああああ！」

「やああああああああ！」

バキツツ

全力の右ストレート。

互いの頬に決まったそれは意識を完全に刈り取った。

ドサツ

「お嬢様！」

「かんちゃん！」

「弾！お前は眼鏡の人を手伝って！」

「お、おう！」

更識簪の側に救急箱を置き、中の物を使って止血や消毒を行う。

「お、織斑いち、痛っ」

「口ん中切ってんじゃねーか。えーと、口内用の軟膏は…」

「これだよ」

「サンキュ」

とりあえず、身体の方はこれで大丈夫だろう。

精神的な方は本人達で解決してもらおうしかない。

(さて…会長の方は…?)

「あ、あの…私…布仏虚です…」

「え、えつと俺…五反田弾って言います…」

「……」 ↑会長

「……」 ↑俺

弾よ。俺の事をモテ男と言う割には、随分な堕とし神つぶりじゃないか。

とはいえ会長も、糖分を鬱陶しがれるだけの元気はあるようだ。良かった。良かった。良かった。

……良かったのか、コレ?

夜 IS学園寮

SIDE:楯無

「ただいま…」ガチャ

「お帰り…ってどうしたのその顔!?!」



「大丈夫…心配しないで…」

ルームメイトの心配に生返事して、ベッドに倒れ込む。

学園に帰る車の中で久しぶりに簪ちゃんとお話が出来た。

簪ちゃんの話の聞こえと自分がいかに過保護だったのかがわかった。

あれでは嫌われて当たり前だ。

『あなたは何もしなくていいの。私が守ってあげるんだから』

今思えばなんて傲慢な発言なのだろう。

これでは簪ちゃんの全てを信じていないのと同義だ。

いや、本当に信じていなかったのだろう。

妹を守ろう守ろうと考えている内に、私は鳥籠に無理矢理入れるような真似をしてい

た。

「ホントに大丈夫？」

「大丈夫…夫」

意識が闇に沈む。

全身がズキズキ痛むのに、心はこれ以上ない程に晴れ渡っている。

今夜は良い夢が見られそうだ。

## 04-03 崩れる関係

休日 レゾナンス

SIDE：一夏

「ふう…お腹いっぱいですわ♪」

「…ホントにスイパラで良かったの？」

日曜日。

俺はセシリアの誘いでショッピングモール、『レゾナンス』に出かけていた。

約束していた、『スイーツ版の満漢全席』は本人の意向で『スイーツパラダイス』に変わった。

「ゴメン一夏。あたしたちまで奢って貰って」

「叔父よ。本当にすまない」

鈴もラウラも、セシリアに誘われたらしい。

…何故かセシリアの意図が見えた。

「ああ！お店に忘れ物をしてしまいましたわ！ラウラさん。一緒に来てくださいますか！」

「なぜだ？」

「いいから！」

わざとらしくセシリアが慌てる。

おい、演技しろよ。

「さ、行きますわよ！」

「あつ、おい！引つ張るな！」

「……」

鈴と二人、連れて行かれるラウラを見つめる。

「え、えつと……行こう……」夏

「……そうだな」

二人きりの状況に赤面する鈴。

お前が勝手に仕組んだのかよ、セシリア。

—————

ゲームセンター

「ねえ一夏。これ撮ろう！」

「プリクラ？別にいいけど」

『ハイ、チーズ♪』

映画館

「映画を見るの？」

「いや、めぼしい物の確認」

「あれなんかどう？ 『劇場版 熱血硬派かにおくん』」

「んなもんあるんだ…」

ゲームコーナー

「こ、これは… 『ISTD 《インフィニット・ストラトス・ザ・デストラクション》！』」

「そ、そんなに凄いものなの？」

「あまりのクソゲーっぷりに 『ISTD 《いかんそいつには手を出すな》』 って言われた  
伝説のゲームだよ」

水着売り場

「ね、ねえ…これ…似合う…？」

「中々、でもこつちもいいんじゃない？」

「そ、そう…？」

「別嬪さんなんだから、そりや似合うさ」

夕方 レゾナンス入口の物陰

SIDE：セシリア

「あー遊んだなー」

「そうだね…」

シヨップिंगモールの出入口から二人が出てきたのを確認する。

鈴さんにアピールするチャンスを作るために演技をしたが、一体どうなったのだろうか。

「ねえ一夏」

「ん？」

「やっぱりあたし。あんたの事が好き」

鈴さんからのまつすぐな告白。

だが、一夏さんのあの眼はもう迷わないと決めた眼だ。

「鈴」

「うん」

「俺は、お前と付き合う気は無い」

「そっか……」

口では平気そうだが、目には涙を浮かべる鈴さん。

「……「発良い？」」

「おう」

バチイン

ラウラさん。更識さん。と防がれ、躲されたピンタは、三度目の鈴さんによって当たった。

「……またね」

「ああ」

走り去る鈴さん。

それを見るだけの一夏さんの背中、少し寂しく見えた。

◇

SIDE：一夏

「一夏さん」

「セシリア」

どこかで隠れていたであろうセシリアが俺に話しかける。

「派手にやられましたわね」

「まあな」

今日一日のデートで再確認したが、やはり俺は鈴に恋愛感情をこれっぽっちも持ち合わせていない。

「振り方も少し考えてくださる？鈴さんを慰めるのはわたくしですよ」

思えば、セシリアには頼りっぱなしだな。

「悪いな」

「帰りましょう。そろそろ門限ですわ」

「ああ」

セシリアと共に帰路につく。

こうして、鳳鈴音の恋は終わった。

—————

夜 IS学園寮

SIDE：箒

「……」

部屋の中でスマートフォン画面を見つめる。

『篠ノ之束』

「……」 ～～♪

表示された姉の名前に『通話』をタップする。

『やあやあやあ！久しぶりだねえ！』

ずっとずーっと待つてたよ！』

「……姉さん」

電話口から響く姉の声を聞き、返事を返す。

『うんうん。用件はわかっているよ。欲しいんだよね？』

君だけのオンリーワン、代用オルタナティブ・ゼロ無きもの、箒の専用機が』

「ああ」

『えーと……互いに専用機持ちだから』

専用機が無いから置いていかれるのも、

『箒ノ之箒 シールドエネルギー エンプティ！』

専用機が無いからついていけないのも、

『セシリア……ありがとう』

一夏の隣を盗られるのももう沢山だ。

「専用機……あるの……？」

『モチロン用意してあるよ。最高性能ハイエンドにして規格外仕様オーバースペック。そして、いっくんと並び立つ

もの。



『紅椿』  
その名は——』

[MISSION 4

COMPLETE]

MISSION 05 Dark Raven  
05-01 奪われた白式

臨海学校一日目 バス内

SIDE：一夏

「海っ！見えたあっ！」

「……」ペラ

クラスの女子の叫びを聞き流しページをめくる。

『白式は、貴方の要望で引き取ったって……』

会長の件の後、俺は白式を解体してもらおうよう倉持技研に連絡を入れたらこんな返答が返ってきた。

無論、俺は白式を引き取ってなどいない。

『ホントに俺だったんですか？』

『はい、貴方の声で引き取りたいと……』

「……」ペラ

「——かさん！」

俺の声を使つて、誰が一体こんな事を…

「一夏さん！」 ガシッ

「ウワツッ!? ……セシリア?」

読みながら考えているとセシリアに肩を揺すられる。

耳元で叫ぶな。

「…何?」

「何もつて…そろそろ降りる準備をなさい」

「あ…悪い」

本を閉じ、荷物をまとめる。

ちなみにこの本はこちらの世界に戻る時に読んでいたものだ。

『ガレージ』を漁つてみたらあったので取り出したのだ。

……残念ながら、あの『暴力』は無かったが。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと座れ」

「「ハイ」」

これから楽しい臨海学校だ。無粋な事など今は置いてこう。

臨海学校一日目 海岸

SIDE:セシリア

「……鈴さん。何を言いますの」

「いや、一夏が好きなのってセシリアかなーって」

一日目が自由行動オンリーなのをいいことに砂浜で遊んでいると、鈴さんが理解不能な事を言った。

「ねーですわよ。絶対にねーですわよ」

「あれだけ仲良いんなら、あるかなーって」

「ムカつくんでその語尾やめてくださる?」

そんなことは絶対がない。

一夏さんはわたくしを友達と思っているし、わたくしも一夏さんを友達と思っている。

あの、よく見ると、露骨にもほどがある男が、自分を好くわけがない。

「……ないの?」

「ありませんわよ」

鈴さんの他にも何人かに聞かれたが、返す言葉は常に同じだ。

それにあの距離感が気持ちいいのだ。

「……む。叔父がきたぞ」

「……………」

ラウラさんの言葉に振り向く。

そこにいた一夏さんはパーカーを羽織り、脇に本を抱えたスタイルだった。

「じゃ…楽しめよ」

わたくし達に一言言っただけでビーチパラソルの下で座り込む。

一カ月一緒にすごしてわかりましたが、この人用事が無いと引きこもりに走りますわね…。

臨海学校一日目 大広間

S I D E : 箒

「グオオオオオ……」プルプル

「……正座が無理なら椅子席に行けよ」

「叔父の言う通りだぞ、セシリア」

「一夏さんとはもかく、なぜラウラさんは平気そうなんですの…」

楽しそうに話す三人を見る。

「フツ…義母の国の文化だ。学んだに決まっている」

「最近、図書室に入り浸っていると思っただら…」

「そういうことでしたの……」

「……」ギリツ……

思わず歯ぎしりが漏れる。

悔しい、あそこに加われないのが。

「……ともかく。話し相手はあなた達しかいないんですの。

この席から離れる気はありませんわ」

「悲しい事を言うなよ……」

「知ってるぞ、叔父よ。これを『ぼっち』と言うのだな」

「お黙り」

「……」ガタツ

「あれ、篠ノ之さん。まだ残ってるわよ？」

「……いらぬ」

「……そ、そう」

胸の黒い感情を抱え、部屋に戻る。

嫌な奴だな、私。

—————

臨海学校一日目 教員室

S I D E : ラウラ

ジョインジョインジョインジャギイデデデザタイムオブレトビューションバト  
 ワンデツサイダステニーヒヤツハーペシツペシツペシツペシツペシツ  
 ペシツペシツヒヤツハー ヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒ  
 ヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒ  
 ヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒ  
 ヒヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒーツヒヒ  
 テバイイ

バトートウーデツサイダステニー ペシツヒヤツハーバカメ ペシツホクトセン  
 ジュサツコイツハドウダアホクトセンジュサツコノオレノカオヨリミニククヤケタダ  
 レロ ヘエツヘヘドウダクヤシイカ ハハハハハ

F A T A L K . O . マダマダヒヨツコダア ウイーンジャギイ (パーフェク  
 ト)

「まだ…勝てないんですの…」

「百年早いぜ。お前が、コレで俺に勝つのは」

仕上がっている叔父にセシリアが屠られていくのを一瞥し、布団に座る。

叔父は唯一の男の為、部屋は義母かあさんとの相部屋になっている。

そして、義母<sup>かあ</sup>さんが黙っているのをいいことにテレビゲームをしているのだ。

「クウツ…なら！」 ジョインジョイントキイ

「無駄だ」 ジョインジョインジョインジャギイ

しかし、これで十三戦目か。

どういうわけか、叔父はレバー操作のゲームに滅法強いのだ。

これについて叔父は一言『練習だ』と答えた。

…どこのムーミン谷の白い悪魔だ。

「…そろそろ就寝時間だ。部屋に戻れ」

「待ってください！ 今度こそ、勝てそうですの！」

「……」 ペシーン

「ぴにゃあああ」

あの日、義母<sup>かあ</sup>さんの娘になって以降。織斑先生が指導に使うのが出席簿からハリセンになった。

理由は『さすがに痛過ぎるだろう』との事だ。

痛みでしか解決できない事もあるとは思いますが、これはこれでいいことなのだろう。常識人の叔父が喜んでいたし。

「お前も戻れ。ボーデヴィツヒ」



「ハイ先生。おやすみなさい」  
さて、明日は訓練か…。

# 05-02 予測不能

臨海学校二日目 海上

SIDE：千冬

ギユイイン

アメリカの第三世代機『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』の攻撃をストレスで躲す。

『織斑先生！次は右から！』

ギユイイン

織斑の警告通り右から追撃が襲いかかる。

避けながら近寄ろうと加速するが、左腿に攻撃が掠る。

(『白式』が私についてこれてない…！)

思わず歯噛みするが、それで事実が変わらない。

『千冬さん！大丈夫ですか!?!』

「篠ノ之！お前は下がってろ！オルコット！」

『はい！』

「何秒いける？」

『3秒!』

「頼む!」

二人に指示を出した後、『雪片一式』を構え、福音を見据える。まったく…どうしてこんなことに…。

—————

回想

SIDE：千冬

「ち————ちや————ん」

事の始まりは束<sup>アイツ</sup>だった。

臨海学校の二日前、『臨海学校中に篠ノ之箒に専用機を渡す』と言う一方的な連絡のとうりアイツはやってきた。

専用機の名は『紅椿』。

アイツは、未だどこの国も開発に成功してない第四世代機を惜しげもなく妹に与えた。

ここまでならまだいい。

「お、織斑先生!!大変です!!」

そんな時だった。山田君が血相を変えて走ってきたのは。

話を聞くとハワイ沖で試験運用をしていたアメリカ・イスラエルによる共同開発第三世代軍用 I S、銀の福音シルバリオ・ゴスベルが原因不明の暴走、制御を受け付けずに日本に急速接近中とのことだ。

これに対し I S 委員会は I S 学園に対処を要請。日本政府及び学園上層部がこれを承諾したようだ。

福音は広域殲滅を目的とした特殊射撃型。しかもオールレンジ攻撃を可能とし、機動力もある故に移動しながら広範囲に攻撃することを得意としており、偵察は不可能。

幸いにも、オルコットが高速戦闘用の換装パッケージをもっていたことで一撃は攻撃可能になったが一撃で福音を仕留められる機体が無かった。

一番火力があるのは織斑のパイルだが、近接専門ではない奴に当てると言うのは苦だ。

「せめて、暮桜があれば——」

「暮桜は無くても、同じ物はあるよ。ちーちゃん」

全員がそれで悩んでいると、どこからか入り込んだ束が口を開いた。

『白式』にちーちゃんが乗れば、墜とせるよ。それに『紅椿』は、高速戦闘にも対応できるからバックアップ要員としていくくんもいけるし」

「待て、『白式』は——」

「あるよ、今ここに」

「……」

私は絶句した。

だが、迷っている暇は無かった。

「よし！織斑とオルコット、私と篠ノ之で出撃。

織斑とオルコットは私の援護、篠ノ之は私の運搬が済み次第退避だ！」

—————

臨海学校二日目 海上

S I D E : 千冬

ギユイイン

「ぐっ……」

『キャツ……』

別に強襲作戦は失敗した訳ではない。

初期状態の白式を束が手を加え、使用可能になった『零落白夜』で私は銀の福音を墜

とした。

『……！。織斑先生。密漁船が！』

「何!?？」

だが、墜としたはずの福音は二次以降セカンド・シフトを行い、再び立ち上がった。

ご丁寧に私を第一に警戒し、私を近づけない事を優先しており、初期状態の白式では追いつけないのだ。

「織斑。お前は密漁船の避難に当たれ」

『了解』

『待て一夏！ そんな犯罪者など見捨てればいい！』

攻撃を受け、吹き飛ばされかけたところから復帰すると、福音の照準が篠ノ之に向かった。

『！ 箒、前！』

『え……？』

『篠ノ之さん！』

ギューイン

『ぐあつ……』

『オルコツト？！』

身を呈してオルコツトが庇う。

シールドエネルギーを失ったのか、オルコツトは海に落ちていく。

「オルコツ 『千冬姉！！？』……！」

一夏の言葉に福音が隙だらけだと気付く。  
好機！

「落ちろおおお！」

ザンツ！

—————

臨海学校二日目 海上

SIDE：一夏

『……篠ノ之、後で話がある』

『……はい』

福音の操縦者とセシリアを抱えた織斑先生が厳しい目つきを箒に向ける。

『一夏……』

「……悪りいが、擁護はできねーよ」

結果的に隙を作れたとはいえ、今回の箒の行動は危険そのものだ。

退避しろと言う命令の無視に周りへの不注意、あまつさえ同隊の俺に身勝手な指示。

「これが軍隊なら処罰物だ。」

『まあいい。帰るぞ』

『はい……』

「はい」

【システム、スキャンモード】

帰るために省エネしようとスキャンモードに切り替えた時、リコンがあるものを捉えた。

「……織斑先生。箒。急いで逃げて、時間稼ぐから」

『?……?』

俺の向いた方向にハイパーセンサーを使った二人の顔が驚愕に染まる。

『なんだ……あれは……?』

俺たちの目の前の海。そこから、無数の無人機がこちらに向かっていった。

『くっ！ 織斑、倒れるなよ!?!?』

『一夏……』

「……了解」

箒が織斑先生を乗せ、高速で飛んでいく。

さて、時間稼ぎでいいらしいが――

――別に倒してしまってもかまわんのだろうか？

――

「うんうん、これでよーやく実行できるね！」



「いづくんたら、あんな無<sup>名無しのゴンベエ</sup>銘に取り憑かれちゃって」

「でも安心して！そんな物、この束さんが壊してあげるから」

「そしたらいづくんは束さん特製の白式を使うんだ……うん、想像しただけで似合いそう！」

「これで、箒ちゃんもいづくんと並び立てるね！」

「さあ、やつちやえ、ゴーレムⅡ！」

## 05-03 権利と義務

臨海学校二日目 海上

SIDE：千冬

「篠ノ之！もつと早くならんのか！」

「これが限界です！」

篠ノ之を急かし歯噛みをする。

脱出用の篠ノ之は当然として、乗り慣れない機体で負傷者を抱えた私と一夏自身ではどちらが残ればいいのかは明らかだ。

「せめて…せめてオルコットが無事なら…」

一対多が可能で、一夏とコンビネーションがとれるオルコットが墜ちなければ楽に援軍を要請できたであろう。

だが、無い物ねだりをしてもしようがない。ここは早く逃げなければ。

◇

SIDE：箒

「せめて…せめてオルコットが無事なら…」

千冬さんの眩きに心がズキンと痛んだ。

もし、もしあの時私が前線に出しやばらなければ一夏は残らずに済んだのだろうか。

(違う……)

私は、一夏を助けるために専用機を欲した。

(違う……)

私は、一夏の隣にいるために専用機を買った。

(違う……！)

だが現実はどうだ。

助けるどころか、隣にいるどころか、迷惑しかかけていないではないか。

(私は……私は……)

一体、何の為に専用機を望んだのだろう。

後悔と絶望が胸の中で踊り狂う。

「う、うわあああああーっ！」

《絢爛舞踏、始動》

無我夢中で、私は飛んだ。

もう何もかもを忘れたかった。

—————

臨海学校二日目 旅館

SIDE：簪

『山田君！今すぐにあのポイントにI S部隊を送れ！』

三千機以上の無人機と一夏が交戦している！』

「了解です！……二人とも、出れますか？」

「はい」

一組の副担任、山田先生の質問に頷く。

「……アంత、機体が未完成って聞いてたけど……」

「大丈夫。主武装が無いだけ」

「……ツッコまないわよ」

あの日、お姉ちゃんと本音で語り合って以来自分の心が軽くなった。

機体も、お姉ちゃんのコネで新しい所を紹介してもらい八割方完成した。

それもこれもあの織斑一夏のお陰だ。

ピンタをかまそうとしたのにこちらの問題を解決してくれたあの人には足を向けて

眠れない。

(今、恩を返すから)

だからこそ、今度は私が助ける番だ。

## 臨海学校二日目 海上

## SIDE：一夏

【深刻なダメージを受けています、回避を優先してください】

ACから警告音声が流れる。

それと同時に弾が当たり、アーマーポイント A Pが減少する。

【エネルギー、残り30%】

【システム、スキャンモード】

ハイブーストを使い回避に徹するが、四方八方を数千機に囲まれた今となっては無駄な足掻きにしかない。

だが、こちらとてただ追い詰められていた訳ではない。

福音戦の時に出てきた密漁船。

あれが、途中かなりおかしかったのだ。

無人機達は一向に密漁船を狙わず。かつ、船への流れ弾には身を呈して守る。

気になってスキャンすると、密漁船が無人機達に指示を出していた指令部だったのだ。

【肩部、残弾無し】

しかし、悲しきかな。俺にこの状況をひっくり返す手はない。

四方八方からの弾幕は衝撃で俺に攻撃の隙を与えないし、撃てたとしても防がれるだけだ。

【稼動限界まであと僅かです、回避を優先してください】

せめて、あの船が司令船だと援軍に伝えなければ。

だが、無情にも弾幕は装甲を剥がしてゆく。

(終わり……か……)

なんとも呆気ない死に方だ。

呆気なさ過ぎて、頭は酷く冷静だ。

(ゴメン……ファットマン……千冬姉……)

鳴り響くエラー音をBGMにAPを失った俺は海に落ちた。

〔BREAK DOWN〕

『いやいやいや』

『何を勝手に死のうとしてるんだい？』

『僕はある時言ったはずだ』

『もし君が例外だと言うのなら』

『君には、生き延びる権利と義務があると』

# 05-04 規格外兵装

????  
????

S I D E : 一夏

「……………」

気がつくとも俺は見知らぬ場所に立っていた。

右を見ても白、左を見ても白。

白 白。ただその中にいた。

俺はなんでこんなところに…

「…！ そうだ。思い出した！」

確か三千機以上の無人機と交戦して…

そして、死んだはずだ。

「……………」

「やあ、おはよう。元気かな？」

「っ！ 誰だ!!？」

声をかけられ振り向く。



そこには二十代から三十代の研究員然した男が立っていた。

「いやいや、警戒しなくてもいいよ。僕はもう、人の可能性を認めているからね」

「…財団…なのか……？」

この声、この口調、そしてなりより『人の可能性』という発言。

こんなことを言う知り合いは一人しかいない。

財団、あの世界でUNACと未確認兵器を使って評決の日の火蓋を切った張本人。  
ヴァーティクトイ

こいつしかいないのだ。

「そうだよ。もつとも、前に一回話しかけたんだけどね」

「…は？」

そんなバカな。こいつの声などあの決戦以来一度も——

『いやいや、僕をなんだと思ってるんだい？』

あつた。

箒のマハオンライスの時の声だ。

「…そんなことはどうでもいい。」

「ここはどこだ。なんでお前がいる」

「質問が多いね。一つずつ答えるよ」

「こいつは本当に財団か？」

あまりにも正直だ。

「まずは、何故僕が生きていたかだけだ——」

「どうせデータコピーだろ。お前、人格を電子化してるし」

「察しがいいね。決戦後、君のACの中にコピーの一つを入れておいたんだ」

「ぶっちゃけこいつの生存は知っていた。」

「ヴァレディクトデイ  
評決の日の中で三大勢力に属さない傭兵を死神部隊に勧誘のメールを送るR、I、

P、という存在がいたのは聞いていた。」

「次にここは、無銘ノーネームの中。まあ精神世界と想ってくればいいよ」

「ISの自己意識の世界ってことか？」

「それで構わないよ。ちなみに僕が無銘ノーネームのコア人格だ」

「ってことは俺はまだ死んでないと。」

「財団、無銘ノーネームを再起動できるか？」

「別にできるけど……どうしてだい？」

「決まっている。依頼をこなすためだ」

「俺は傭兵だ。ただ、依頼をこなす存在であればいい。」

「復帰を歓迎するよ、黒い鳥。傭兵っていうのは本当に仕事に律儀だね」

「財団がその皮肉な笑みを強める。」

その顔はどこか嬉しそうだ。

「じゃ…パイロットデータの認証を開始するよ。メインシステム、通常モード起動。作戦行動を再開」

笑みを浮かべながら、無銘（システム）に起動コードを財団が打ち込む。

「さあ…一緒にメチャクチャにしようじゃないか」

かつてマギーを唆した台詞を財団は俺に向ける。

……いいだろう。乗ってやる。

「ああ、メチャクチャにしてやる」

その言葉と共にメッセージウインドウが開く。

『未知なる領域に進みますか？』

Yes No

迷わずYes。

瞬間、白の世界が黒に染まって…いや、焦げてゆく。

「さて、どうするんだい？」

「アセン変更。全防ガツチガチのガチタンで持ち堪える」

そう思い、『ガレージ』を漁ると…

「…!??!?!いつは！」

「ああ…それも、君と同じく人の可能性だったね…。使うのかい？」

「ああ、使うさ。これは、俺の右腕だからな」

これなら、あの司令船を潰せる。

「じゃ…いつてらっしやい」

『メインシステム、戦闘モードを起動します』

「いくぜ…黒い鳥！」

臨海学校二日目 海中

SIDE：一夏

ゴポゴポゴポ

「〜〜!？」

『君、自分が海に沈んだのを忘れてたのかい？』

目が覚めたら青一色だった。

思わず取り乱すが、すぐに落ち着き直す。

(司令船の場所は…)

【システム、スキャンモード】

スキャンモードで司令船の位置を確認し浮上。

どういふ訳か無人機達の攻撃が飛んでこない。  
(構うか…)

むしろ好都合だ。あの撃墜には俺も屈辱を感じている。

【ページします】

起動パスを入力。左腕部の装甲が弾け、量子と化す。

【不明なユニットが接続されました】

露出した左腕部と左肩部のジョイント部に背中から伸びたアタッチメントが接続される。

六基のチェーンソーが円状に束なり回転を始める。

【システムに深刻な障害が発生しています】

背中の“ソレ”がジェネレーターを限界まで駆動させ、無限に近いエネルギーを生み出させる。

同時にバイザーに幾多のノイズが走った。

【直ちに使用を停止してください】

オールドウェポン  
規格外兵装

グレインドブレード  
六連超振動突撃剣

数多の戦いを共に粉碎した右腕を携え、司令船に向かってグライドブースト。

ようやく無人機達が動き出したがもう遅い。

そのまま、暴力を司令船に突き出した。

ギューイイイイン!!!

—————

臨海学校二日目 司令船内

S I D E : クロエ

「束様、織斑一夏の撃墜を確認しました」

『りよ〜か〜い。じゃいつくん回収してアレぶっ壊してね』

「わかりました」

通信を切り、無人機達に司令を入力する。

ドイツでの遺伝子強化試験体アドヴァンストの実験で失敗品と処分されそうになった私は束様に偶

然助けてもらい現在に至る。

今回束様から下った司令は『織斑一夏の専用機 無銘ノーネームの破壊』だ。

聞くに外したら死ぬという呪いの装備を無理矢理つけられていたらしい。

早く外してあげなければ。

そう思った時だった。

「え…?」

なんと沈んだ筈なのに熱源反応があつたのだ。

とりあえず、東様に指示を仰ぐ。

「東様！」

『はろはろークロちゃんどしたのー？』

「無銘ノネームが再起動しました。数値を見るに二次以降セカンド・シフトも……」

『えー……ムカつくなあ。ぶつ壊しちやえクロちゃん』

「わかりました」

通信を切り、再度モニターを見る。

「!?」

おかしい。

モニターからの数値がISが出せる限界を軽く超えている。

「た、東様！」

『……どしたの？』

「無銘ノネームが異常な数値を……」

ギューイイイイン!!!

「!?」

そこまで言ったところで、赤い暴力が船内に突撃してきた。

瞬間、全てがスローモーションになる。

(逃げなきや…)

どこに?狭い船内に逃げ場所はないのに。

(躲さなきや…)

いつ?躲す時間などないのに。

(防がなきや…)

どうやって?防ぐ方法はないのに。

(どうしよう どうしよう どうしよう。)

思考がループするが時間は止まらない。

刻一刻と暴力が迫ってくる。

「いや…」

その言葉を最期に、私は黒く焼き尽くされた。



## 05105 決心する者、すべき者

臨海学校二日目 海上

SIDE：一夏

「……ふう」

背中に元通りに収納されるグラインドブレードを見てため息を吐く。

『ミツシヨン完了。なかなか上々じゃないか』

「まーな」

財団の言葉に返事しつつ後ろを振り返る。

赤く燃える司令船と司令を失った無人機が次々と海に墜ちてゆく風景があった。

「結局、なんだったんだ?」

『まあ、君狙いだろうけどねえ』

結局、相手の目的はわからずじまいだ。

間違いない俺を狙っているが、心当たりは東さんするメリットが無いし。

『ミツシヨン完了。システム、通常モードに移行します』ヒュン

「え?…ウワツ!?」

ドボオン

感傷に浸っているといきなり黒い鳥ダークレイヴンが解除され海に落ちる。

「プハッ……何で？」

『どうやらオーバードウエポンの反動みたいだねえ』

「まじか……」

元からそうだったが、ますます気軽に使えなくなつたな…。

『一夏ツ！無事!!』

『織斑一夏!!?』

「おせーよ。全部……終わつ……た……」

援軍が到着した安心感からか、急に意識が闇に沈む。

ちようどいいや、言っちゃえ。

(…財団)

『なにかな?』

(マギーを……傭兵として……死なせてあげてくれて、ありがとう……)

『……え?』

財団が固まるのと同時に意識を投げ出す。

今日は疲れた。寝させろ。

## 臨海学校二日目 旅館

「いつまでそうしているつもりですか?」

「……」

織斑一夏が鳳鈴音と更識簪に救助されている頃、旅館の一室で体育座りで下を向く篠ノ之箒と膝立ちのセシリア・オルコットが話していた。

「……スマナイ」

「謝罪は要りませんし、そもそも怒っていませんわよ」

「……」

冷たい口調でセシリアは言葉を続ける。

「わたくしは『高度な囃作戦』として今回の件を処理するつもりですわ。

聞いているのは、『どうしてそう塞ぎ込んでいるのか?』ですの」

「……私は」

「私は?」

一瞬の間を置いて箒が叫びだす。

「私は!一夏の隣に居たかった!アイツと一緒に居たかったんだ…置いて行かれたくなかったんだ!」

ああそうさ！お前が羨ましかったよ！一夏とずっと一緒に、ずっと隣に居て、ずっと並んでいるお前が！

だから専用機を買ったんだ！お前を追い抜けるように、一夏の隣に居れるように！  
なのに……なのに……どうして……」

叫び始めの勢いは徐々に下がっていき最後の方は聞き取れない程になっていく。

セシリアは、それを無表情で聞いてハアとため息を吐いた。

「篠ノ之さん」

「……なんだ」

「貴女、バカですわね」

「っ！」

真っ直ぐな言葉を箒にセシリアは投げつける。

「一緒にいようとせせず、隣に行こうとせせず、ただ嘆くだけの貴女の願いが叶う訳ないでしょう」

「違う！私は……」

「違いますわ。だって貴女、ここ最近一夏さんとまともに話しておりまして？」

「っ！」

あまりにも痛い所をセシリアは突いた。

篠ノ之箒は、あの告白以来織斑一夏とずっと話していないのだ。

「自分からは恥ずかしくて話しかけられない。でも一緒にはいて欲しい。よくそんなことを言えますわね」

「黙れ！お前に何がわかる！」ガッ

「わかりませんわよ！」ガッ

「っ！」

声を荒げ、浴衣の襟に掴みかかる箒をセシリアは激昂しながら掴み返す。

彼女の眼にはありありと怒りが見えていた。

「でもですねえ！一夏さんはわたくしの大事な友達ですよ！」

別に貴女が一夏さんを好きというのも、コネで専用機を貰うのも、悪いと言つてませんわよ！

でも、好きと言わずに他の女と一緒にいるのが許せないだなんて身勝手にも程がありますわ！

今までの箒へのイラつきを全て吐き出す勢いでセシリアが叫ぶ。

「うるさい！姉さんのせいで私は一夏と離れ離れになつたんだ！始めから専用機を持っていて、初対面で一夏をバカにしていたお前に、何がわかると言うんだ！」

「えー今わかりましたわ！貴女は、“一夏さんとの楽しい思い出に固執して、依存してい

るだけです” って!”

「違う!……違う!……」

セシリアの言葉に何かを気づいた筈の語尾が弱くなる。

「違う……私は……」

「……思い出は、アルバムですわ。『こんなこともあったな』そう振り返る為の物なのですよ。」

決して、『その時』にしがみつく物ではありませんの」

昔の記憶を思い出すようにセシリアが呟き始める。

彼女の脳裏には今は亡き両親の姿が映っていた。

「時間は決して止まりませんの。だから皆、過去きのうではなく未来あしたを見るんです。俯くだだけで、掴める物はありませんのよ」

「私は……どうすれば……」

「自分で考えなさい。」

少なくとも、このままでは一夏さんに負い目を感じて、ビクビクするだけの毎日ですわよ」

「……」

「臨海学校が終わるまでに決めることをお勧めしますわ。貴女の未来あしたを決めるのは”姉

さん”でも”一夏”でもありませんわ」

言いたい事を全て言い終えたセシリアがホウと息を吐く。

「……一夏さんが帰ってきたようですわ。わたくしは迎えに行きますの」

「……」

「…残念ですわ」

ピシヤリ

襖が閉まった。

「私が……一夏に……依存……」

部屋の中には箒が一人、へたり込んでいた。

—————

臨海学校二日目 旅館

SIDE：一夏

「ん……あ……」

「一夏さん！」

「一夏！」

目を覚ますとセシリアと鈴が側にいた。

えーと……確か海上で気絶して……。

「ああ、無事引き揚げられたのね。俺」

「自分を魚か何かのように言うな」

「…千冬姉」

目を覚ました報告を受けたのだろう。

襖を開けて千冬姉が入ってきた。

「織斑先生だ。…それよりも、無人機の件だが…」

そこから、織斑先生の説明が始まった。

「まず、領域内に偶然浸入したと思われた密漁船は無人機達に命令を送る司令船だった事がわかった。

そして、織斑と交戦した無人機の総数は4567機だともわかった。

どの無人機にも本来必要なコアが無く、おそらく司令船がコアの役目を果たしていたと我々は見ている」

なるほど…半ばヤケクソのグラインドブレードだったけど最適解だったって事か。

「次に本来の目的である銀シルバーの福音オルゴニクスについてだが、残念ながら暴走の原因ははつきりしとらん」

考えられるのは財団のようにウイルスを仕込んだとかかな？

そもそもISにウイルスが効くのが疑問だけだ。



(効くよ)

(ありがとう)

そんなことを考えていると財団からの返答があつた。

なにこの財団。綺麗すぎて違和感。

「大まかなのはここまでだ。他にあるか？」

「ハイ、千冬姉」

「……どうした一夏」

俺が名前呼びを続けるのに疑問を覚えたのか、千冬姉の呼び方が名前に変わる。

「ここにラウラと箒を呼んで欲しい」

「…作戦に携わつた篠ノ之はともかく、何故ラウラを？」

「その二人と、ここに居る三人に話そうと思う。いなくなつた、三年間を」

「「!？」」

もう決心はついた。

タイミングもちょうどいい。

話すのなら、ここしかない。

## 05-06 昔話をしてあげる

『神様は人間を救いたいと思つてた』

『だから、手を差し伸べた』

『でもその度に、人間の中から邪魔者が現れた』

『神様の創ろうとする秩序を壊してしまう者』

『そいつは、「黒い鳥」って呼ばれたらしいわ』

『何もかもを黒く焼き尽くす死を告げる鳥』

『好きなように生きて、好きなように死ぬ』

『それが、俺らのやり方だったな』

『目的はタワ―への進行だ！』

『急げ！敵を鎮圧しろ！』

『三大勢力の直轄だからって私たちには関係無い。特にこの状況では』

『ただの傭兵。そういう風には、もう生きられん時代か』

『それは他人が決めることじゃ無かろうさ』

『我々が先に決める。後方を警戒しつつ援護、各機合図と共に突っ込め。一機も逃がす』



『ブルーマグノリア』

『タワーにだけは絶対に近づかせる訳にはいかん』

『一機も逃がすな!』

『そつちには僕らが用意したUNACをつけるよ』

『多分戦いにならないからさ』

『ぶつ壊れた人形があ!』

『俺が! 貴様等如きに!』

『まるつきり子供だな』

『傭兵と言うのは、無礼なのが売りなのか?』

『次はこつちに来る! 気を抜かないで!』

『迎撃して、全部よ!』

『状況は知つての通りだ』

『各地のUNACが制御不能に陥っている』

『見せてもらおう、お前の持つ力を』

『死神部隊!? 何故ここに!?!』

『何? 何が起きてるの?』

『お前で28人目』

『恐れるな、死ぬ時間が来ただけだ』

『振り切れない！』

『被弾した！被弾した！』

『幾ら何でもヤバイぜ』

『マギー、なんとかなんねえのかよ！』

『怯んだら負けよ！』

『チツ！やるだけやるしか…って奴かよ！』

『ハハツハハハツ』

『この程度、想定範囲内だよ！』

『アハツハハハツ、アハアハア！』

『あの青いACにはもう乗らんのか？』

『マグノリア・カーチス』

『お前…お前が私を！』

『これだけの戦力を相手に挑むとは…』

『ただの愚かなのか、それとも…』

『一度引いた身で、素晴らしい執念だ』

『やるなら早くしろ！機体が吹っ飛ぶぞ！』

『好きに生き、理不尽に死ぬ』

『それが私だ』

『ここが、貴方の魂の場所よ』

臨海学校二日目 旅館

SIDE：一夏

「つて言うのが今までなんだけど…」

「……」

あらかた客観的事実を話し終わり、ふと見渡すと千冬姉も、箒も、鈴も、セシリアも、ラウラもポカーンと口を開けていた。

「ゴメン。やっぱ信じらんないよね」

いきなり、こんな話を信じろってのが無茶か。そう思った時だった。

「信じますわ。貴方は誤魔化しはせど、嘘は吐かないって知ってますもの」

「むしろ合点がいった。道理で束でも見つけられない訳だ」

「あーあ、そんな人相手じゃ勝てない訳ね」

「叔父よ。どこを疑えと言うのだ」

「私は…信じる…」

「…………え？」

意外な事に皆あっさり信じしてくれた。

……………なんで？ いや有難いけどさ。

「だが一夏。一つ聞きたい」

「何？ 千冬姉」

「お前は、『企業』の依頼でこの世界を調査してると言ったな。

……………調査を終えたらどうする気だ？」

「…………」

そんな事は決まっている。

「あっちの世界に行くよ。仕事の報酬だからね」

「…そうか。わかった、帰ってから続きを話そう」

どう考えても千冬姉は反対だろうなと思う。

たった一人の家族が戦火に飛び込もうとしている訳だし。

「他に質問ある？」

「そうですね…三大勢力ってなんなのですか？」

「その名の通り、あの世界を三つに分ける勢力だよ。」

大まかに言うなら、秩序による統率を目指すシリウス・エグゼクティブス。武力によ

る統率を目指すヴェニデ。信仰による統率を目指すEGFって感じ」

「なるほど……」

ちなみにマギーは元EGF所属らしい。

俺的にはあの司令官が無能だったなーとしか覚えてないけど。

「……叔父よ。そのマギーは左腕を失ったからオペレーターになったのだろうか？

なら何故、叔父と戦えたのだ？」

「あーえつと……」

『僕が説明するよ』

ラウラの質問の説明に困っていると財団から助け船が入った。

「誰だ!?？」

『やあ、さっきの話にいた財団だよ?。』

ちなみに、ノーネーム無銘改め黒い鳥のダークレイヴンコア人格は僕さ』

「……」

『それじゃあ。本題を説明する前に『デザインド』と『カルティベーター』について説明するよ』

啞然とするラウラを放置し、声だけの財団は笑つてるとハッキリわかる口調で説明を始めた。



どうしよう、凄く嫌な予感がする。

# 05-07 ファンタズマ・ビーイング

臨海学校二日目 旅館

SIDE：一夏

『まず『デザインド』言うなれば改造手術さ。』

手法は工学的なものと、生理・薬学的なものハイブリッドをベースにした物が主流だね。

最終形態としては、情報工学の手法を大胆に取り入れることで、肉体のほぼ全てを機械化し、脳組織の大半をもコンピュータに置き換えた例も存在したらしいけど、僕はそこまでは知らないよ』

「……っ！」

「なっ……」

鈴と箒が信じられないとばかりに目を見開く。

「一夏！お前は！」

「安心して千冬姉。俺はしてないから」

「そ、そうか」

俺が改造人間じゃない事に安堵する千冬姉。

……残念ながらエグいのはここからなんだよなあ。

『説明を続けるよ。『デザインド』は最も伝統的な手法ともいえる方法で、程度の軽重はあれど、一定数以上の実戦投入例が記録されてたんだ。』

中には、一種の特殊部隊として、デザインドのみで構成された部隊もあったみたいだねえ』

それについては分けるマギーの何代も前のお婆ちゃんの話にもあったな。

確か……『ゾディアック』だっけ？

『次は『カルティベーター』だけど……その君がそうじゃないかい？』

「私が？」

声だけで笑つてるとハッキリわかる財団がラウラを指す。

まあそうっちゃそうか。

『『カルティベーター』はクローニングによる才能の再現を主とする手法さ。』

過去に名をなしたパイロットのクローンを生み出し、育成の過程において教育と言う名の洗脳を行うことで、管理できる才能を育成を目指したみたいだね。

だから……正確に言うなら君とVTシステムを組み合わせたようなものさ』

「……」

「非道い……」

今度は改造手術ぐらいは予測していたらしいラウラとセシリアが目を見開いた。

『この『カルティベーター』はある程度の成果を収めたみただけで、クローンの反復による再現性の低下等のクローニング技術の不安定さや根本課題である管理リスクの不徹底さが問題視されて頓挫したよ』

「……」

財団の説明で部屋の中に沈黙が立ち込める。

明るい話題でも無いしね。

『何黙り込んでいるんだい？ 話はまだ終わって無いよ』

「あれでか……」

財団の言葉に千冬姉が声を震わせる。

『最後、この話題の本題で、僕がブルーマグノリアに施した手法にして死神部隊の正体。

そして世界を破滅に導く人類の罪『ファンタズマ・ビーイング』』

「ファンタズマ……」

「ビーイング……」

『前述の2つのプロジェクトを踏まえ、両者の手法を組み合わせる立案された手法さ。

クローニングによって生み出されたもののうち、理想に近い試験体の意識・思考を完

全に電子化するという計画だよ』

改めて聞くと狂ってんな。

『電子化により、外部からの観察と修正を容易にすると共に、安定した複製の生産の実現を理論の完成に置いた、いわば自我を完全にプログラムへと置き換えることを目指した計画さ。』

ただ、その実現は困難を極めたみたいでねえ。かろうじて実現にこぎつけて、汚染の原因となった戦争の末期には、実戦への投入が行われたと言われてるけど、ほぼロボット同然な状態にまで個性を消滅させてしまうと著しい戦闘性能の低下がみられるなどの問題も生じていたよ。

もう予想できたと思うけど、ブルーマグノリアが再度、戦場に立てたのはこれを受けたからさ』

ただほぼロボット同然な状態にまで個性を消滅させてしまうと著しい戦闘性能の低下がみられるというのは俺にとっては嬉しい情報だった。

あの日、あの時に戦ったのは、確かにマギーと言えるのだから。

「……………んで」

「鈴?」

財団が説明を終えると鈴がなにか呟く。

「なんで…なんでそんなことをしたのよ…」

真つ直ぐで常識的で当然な鈴の疑問。

『怖かったからさ』

それに財団が答えた。

『かつて存在した巨大な権力機構には、驚異的な戦闘能力を發揮した戦闘の天才たちが切り札として存在していたんだ。

彼らは常人には乗りこなすことすら不可能な特殊な兵器を操り、世界のパワーゲームの中心的存在となっていたみたいだね。

だけど彼らは、その強すぎる個の力によつて、コントロールを逸脱した際のリスクを危険視される存在でもあり、そして実際にその幾人かは、管理者の支配下から逸脱し、世界に甚大なるダメージを及ぼす騒乱の源となった。そこの彼みたいになえ』

「だからって…」

『その対策として管理者達が立案したのが、彼らに匹敵する天才を人工的に生みだし、管理可能な形で量産するという計画さ。

計画は『先天的に優れた戦闘適性をもつ人間の存在』を前提として、その人工的な再現と安定的な量産、そして完全なコントロールの実現を目的とするもので、複数のアプローチによる研究が行われたよ。

それが、『デザインド』であり『カルティベイター』であり『ファンタズマ・ビーイング』であると言う訳さ』

「人間を…なんだと思ってるのよ!」

「落ち着け」

激昂する鈴を宥めながら周りを見渡すと、皆の目には非人道的な研究に対する怒りがあつた。

「一夏!アンタホントにこんな物がある世界に行く気?!」

「まあな。俺は傭兵だ。ファットマンとの約束も、企業との依頼も破る気はない」

「やめてよ!なんでアンタがそんなロクでもない世界に!」

「ロクでもないのは確かだけど…」

「やめんか!」

「!?!」

俺と鈴が言い争っていると千冬姉から制止が入った。

「話はここまでだ。部屋に戻れ」

有無を言わさぬ千冬姉の言葉に部屋にいた全員は部屋から出て行く。

「一夏」

そして俺も教員室に戻ろうとしたその時、千冬姉が俺に声をかけた。

「さっきの鈴音は止めたが…私も同じだ。お前にそんな世界に行つて欲しくはない。…  
考えてくれ」

「考えはするよ…」

わかつてる、この返事が逃げなことぐらい。

でも、俺はもう止まれないんだ。何を失おうと、何を無くそうと。決して。



## 05108 過去と未来

臨海学校二日目夜 海岸

SIDE：箒

「……」

夜の海。月明かりだけが雲の間から差し込む砂浜で私は一人佇んでいた。

『好きと言わずに他の女と一緒にいるのが許せないだなんて身勝手にも程がありますわ  
！』

『貴女は、〃一夏さんとの楽しい思い出に固執して、依存しているだけです〃 って！』

『貴女の未来を決めるのは〃姉さん〃でも〃一夏〃でもありませんわ』

頭の中で響き続けるのはオルコットの説教。そして——

『あつちの世界に行くよ。仕事の報酬だからね』

一夏の言葉だった。

「依存……か……」

結局自分は、何のために専用機を欲したのだろう。

今思えば、やはり一夏への依存だったのだろう。

『こんな別嬪さんになつてゐるなんてすごく驚いたさ』

入学式の日。一夏は私のことを忘れずにいてくれた。

それも、あんな世界を体験した後にだ。

姉さんがISを発表して、白騎士事件が起こり、私は一夏と離れ離れになつた。

そして私は、一夏との思い出に執着して剣道にこだわり続けた。

『勝者、篠ノ之箒！』

いや違う。アレを剣道と呼べるものか。

アレは一夏と離れ離れになつた事に対するただの八つ当たりだ。

「私も…進まなければ……」

シユル

リボンを解き、海に投げる。

しばらくは海風に吹かれて飛んでいたが、やがて海に落ちた。

「さようなら、『私』…」

この髪型は一夏との思い出で、依存の形の一つだ。

もう私には必要ない。

未来を、明日を『私』が決めるんだ。

—————

## 臨海学校二日目 東ラボ

SIDE：東

「……」

クーちゃんが、死んだ。

原因はいつくんのあの“武器”だ。

念には念をと司令船に搭載しておいた絶対防衛を容易く貫いた。

「……」

わからない。どうしてあの武器が絶対防衛を貫けたのか。

わからない。どうしていつくんが人が乗ってる船を戸惑わずに壊せたのか。

わからない。どうしてクーちゃんが死ななきやいけなかったのか。

ぱらりろぱらりらぺろ〜♪

ゴッドファザーのメロディーが鳴る。

この着メロはちーちゃんに設定しておいたはずだ。

「……もしもし」

『東か?』

「うん、私だよ。ちーちゃん」

『『白式』を倉敷技研に返却しようと思う。構わないな?』

「あー……いいんじゃない？」

『……そうか』

電話を切り、ぼうつと天井を見上げる。

……ああ。『白式』の事でちーちゃんに言い忘れた事があつたな。

ガチャ

その時、研究室のドアが開いた。

—————

振り替え休日 生徒会室前

SIDE：一夏

「それでは会長、また明日」

「ええ、また明日」

生徒会室の前で会長に挨拶を告げる。

何故わざわざ休日にも生徒会室を訪れているのかと言うと、会長にも俺の過去を話すためだ。

一通りの説明を終えると会長は、

『逆に納得した』

と言った。

曰く、『あの経歴であんな事を平気でするのだから、それぐらいの過去はあるだろうと思つてた』そうな。

……俺、そんなに変な事したかなあ？

「一夏……」

「……ん？」

そんな事をふと考えていると後ろから箒の声がかかる。

「どしたのほう……き……？」

「……」

なんとということでしょう（ビフォーアフター風）

振り向くとそこには、短髪の箒がいるじゃありませんか。

「えつと……箒……さん？」

「さんを付けるな」

「アツハイ」

えーと、これはどういうことだ？

何故かはわからないが、箒があつた髪をバツサリ切つてるのだ。

「その……似合うか？」

「……ああ。似合うよ」

「そうか……」

俺の言葉に箒は満足そうに微笑む。

その顔は、何か吹っ切れたようで。

「どうしたのいきなり」

「……イメチェンと言う奴だ。昔の自分に、別れを告げようと思つてな」

イメチェン、ねえ…。

しかし、あれだけの長髪を切ると凄く印象が変わるな。

「一夏、私はお前の事が好きだった」

「今は違うと？」

「ああ。気付いたんだ。結局私は、過去にしがみついていたただけだな」

「そうかい」

印象が変わつた原因は精神的なものもあるようだ。

笑顔にも明るさがある。

「今度の休み、神社に戻ろうと思うのだが、オルコット達も誘いたいんだ」

「んで？」ニヤニヤ

「お前も来てくれないか？一人では心細いんだ」

「いいぜ」

箒と雑談しながら皆の元へ向かう。

久しぶりの箒との会話は、スーパーボールのようによく弾んだ。

~~~~~♪

「ん？メールだ」

スマホを開き文面を読む。

『消えろよ偽物』

「……は？」

そこには、発信者不明の謎のメッセージがあつた。

[MISSION 05      COMPLETE]

MISSON06 One Summer  
06-01 姉弟喧嘩

SHR前 一年一組

SIDE：如月

「……て訳なんだけど……」

「わかった。受けよう」

「悪いね箒」

教室のドアを開けると、織斑一夏と篠ノ之箒がなにやら話していた。

「おはよう。二人とも。何話してたのかしら？」

「おはよう如月さん。えっとね……内緒♪」

口到人差し指を当てウインクをしながら織斑一夏が答える。

……ウゼエ。

「一夏、如月。席に座ろう。そろそろSHRだ」

「おう」

「ええ、……ところで織斑君。あの噂は本当なの？」



「あの噂？」

「二週間後の終業式の日には貴方達姉弟が闘うって噂よ」

「ああ。本当さ」

「……そう」

しかし、あのシスコンの織斑一夏が織斑千冬と闘うとはねえ…。

もしかしてこの織斑一夏は——

—————

六時限目 一年一組

SIDE：一夏

「と言う訳で。この総合の時間を使って、文化祭の出し物を決めたいと思いますわ。

何か案のある人！」

六時限目。その総合の時間に夏休み明けに行われる文化祭についての意見会が開かれた。

本来は夏休み明けに決めらしいが、夏休みを使って準備出来るように今決めらしい。

「はいー」

そんな中、元気に手が挙がった。

「はい、大西さん」

「織斑君との握手会が良いと思うじえ！」

久々に机に突つ伏す。

「そういやお前、クラス代表の時も俺を挙げてなかった？」

人を勝手に話題のタネにしないでほしい。

「却下ですわ」

「ええ〜なんじえ〜！」

そして、当然の如くセシリアに却下された。残当。

「あのですねえ…。一夏さんもこのクラスの一員ですよ？」

そんな出し物。一夏さんの自由時間はないと言っているようなものじゃありませんか

「それとも…まさか『織斑一夏は一組の所有物』とでも言うつもりですか？」

「ほう…私の弟を『所有物』とな…」

「ご、ごめんなさいだじえ！」

セシリアと千冬姉の眼光に案を出した生徒は慌てて謝る。

「…本気で俺はなんだと思われてんだ？」

「それに…そんな案を採用したらこの人はバックレるに決まってるじゃありませんか」

ヤダナー。ソノ日ダケ体調ガ悪クナルダケダヨ。

まあマジレスすると生徒会の仕事もあるしね。時間が必要だよ。

「はい」

「はい、篠ノ之さん」

「喫茶店などはどうだ？この広い学園だ。休憩所は需要があると思うが…」

箒からかなりまとまな意見が出た。

確かに需要がありそうだ。

「そうですね…とりあえず喫茶店は書きましよう」

そう言いセシリアは電子黒板に『喫茶店』と書く。

「さて、他に案は——」

その後、紆余曲折を経て結論は『コスプレ喫茶』になった。

ちなみに俺は、鎌に変身する白髪のキャラのコスプレをする事になった。

—————

終業式後 第一アリーナ管制室

SIDE：楯無

「凄い人の多さですね。お嬢様」

「当然よ。なにせ、織世界唯一と織世界最強が闘うのだからね…」

「……どうして、あの二人が闘うの？お姉ちゃん」

「ノーコメントよ」

管制室で観客席を眺めながら簪ちゃんや虚と話を続ける。

織斑君の過去は、私は他の人に話してない。

『別にのほほんさんとかには話して良い』と言われはしたが、話して利があるかと言われれば疑問がある話題だからだ。

情報はいつどこから漏れるかはわからない。

なら、いらぬ混乱を与えるよりも前に情報を出さなければいいのだ。

「ノーコメントって……お姉ちゃんのケチ」

「かんちゃんく拗ねちゃダメ！だよ」

話を試合に移そう。

そもそもこの姉弟が闘う理由は『意見の相違』だ。

織斑君はあちらの世界に行きたい。

織斑先生はあちらの世界に行かせたくない。

まったく逆の意見は、話し合いで擦り合わせることなく、この日を招いた。

『勝った方の意見を優先する』その結論を持って。

なんで私がこの事情を知ってるかって？

私は織斑君の味方として対織斑千冬の作戦を織斑君やオルコットさん達と一緒に考えていたからよ。

「簪様、最近すっかりお嬢様にベツタリですね…」

「べ、別にお姉ちゃんが好きな訳じゃないんだからね!」

しかし、私みたいに事情を知らない人から見ればいきなり起こった大イベントだ。

どこから嗅ぎつけたのか知らないが、何台ものテレビ局のカメラが回っているし、各国のIS関連の主要人物が大勢VIP席に座っている状態だ。

……許可? 学園長が出したわ。

「……頑張つて、織斑君…」

個人的には織斑君の方を私は応援している。

織斑君のあの眼は戦場に取り憑かれた人の眼だ。

ならば、せめてその墓標は戦場に建てられるべきだろう。

「……お姉ちゃんつて、もしかして織斑一夏の事が好きなの?」

あ、それは無い。絶対に無い。

—————

終業式後 第一アリーナ

SIDE:一夏

『さあ、これから始まるのは織斑一夏対織斑千冬のドリーイイムマッチイイ！』

実況はわたくし、アルテミスがお送りしまあああす！』

喧しい実況を無視して目の前の白式を纏った千冬姉を見据える。

『…凄い人だな』

「そうだね」

どうやら千冬姉も辟易しているようだ。

まったく、どこから俺たち姉弟の姉弟喧嘩を嗅ぎつけたのかやら。

『…一夏。もう一度聞く。どうしてもあの世界に行くのだな？』

なんて千冬姉らしからぬ愚問だ。

答えは、決まっているのに。

「ああ。俺は、あの世界に行く」

『何故だ。お前があの世界を、殺し合いを求める理由は一体なんなんだ』

「……それは」

『それは……』

理由なんていくらでもある。

好きな人がいたから。父親と呼べる人と約束したから。宿敵に義務を言い渡されたから。

そして傭兵として依頼を受けたから。だけど——

「俺が傭兵だから。これ以外に俺の“答え”は無い」

コア・ネットワーク通信を使い千冬姉に言葉を続ける。

「確かに千冬姉の言うことには賛成だよ。」

でも、その道を選んで諦めたら、俺はきつと壊れちゃう」

「私は……私は、ずっと諦めたふりをしていた」

「ああそうだよ。俺がおかしくて、千冬姉が正しいのだなんてよくわかってるさ。」

でもね、だからって曲げたくない事があるんだ。言わなきゃいけない事があるんだ」

「私の魂は、ずっと戦いに惹かれていたくせに」

「あそこが！」

「ここが！」

「あの世界が！」

「この戦場が！」

「俺の魂の場所だ！」

「私の魂の場所よ！」

『……わかった一夏。お前の答えは、確かに受け取った。だから私も言うぞ。』

父さんもいなくなって、母さんもいなくなった私に唯一残されたのはお前だった。こんなことを言う資格は無いだろう。だが、私は、私はもう失いたくないだけだ。誰も、何も』

『始めよう。倒すぞ、お前を』

『メインシステム、戦闘モードを起動します』



## 06102 ごめんね

終業式後 第一アリーナ

SIDE：一夏

『バトル、スタート!』

『システム、スキャンモード』

NAME：Byakusiki

KE：1253

CE：1111

TE：833

R ARM UNIT：blade (KE)

L ARM UNIT：

HUNGER UNIT：flash grenade (――)

ONOFF ABILITY：reirakubyakuya

開始早々にスキャンモードに切り替え、右方に移動。

ビュンッ

瞬間、さつきまでいた場所に白い光筋が瞬く。

(早い…でも！)

『システム、戦闘モード』

この斬撃なら、想定内の範囲だ。

両手にブレードMURAKUMOを携え千冬姉に突撃を仕掛けた。

—————

終業式後 第一アリーナ管制室

SIDE：楯無

『こ、これはあ…？』

「ええっ…？」

「どうして…？」

実況と虚と簪ちゃんが驚愕する。

それはそうだろう。触れられたらアウトの織斑千冬に対し、近接戦を仕掛けているのだから。

「お姉ちゃん！これどういうこと…？」

「落ち着いて簪ちゃん。be kooーよ」

とはいえ、私も織斑君も考え無しにこんな真似はしない。

確かに近接戦に強く、一撃で相手を屠れる刀『雪片式型』を持つ織斑千冬に対し遠距離戦に徹するのは定石セオリーだろう。

だが考えて欲しい。

はたして、世界最強ブリュンヒルデはそんなテンプレ戦法で倒せる相手かどうかを。

現に対策を立てる為に現役時代の織斑千冬の映像を見てみたが、遠距離戦を選んだ対戦相手は弾を切られ、防がれ、避けられと散々なものだった。

だが逆に、織斑千冬に近接戦を挑む相手はいなかった。

織斑君はここを突こうと言った。

無論、あのVTシステムの時でわかるように織斑千冬は対近接が苦手な訳ではない。

だけでも織斑千冬に対近接戦のノウハウ自体は少ないはずだ。

動きを全て頭に叩き込み、斬り方を予測しきれば倒せると。

その為の特訓はこうだ。

まず、現役時代の織斑千冬の映像から『どう動くか』『どう動けばいいか』のシミュレーションを行う。

その後、武道の心得がある私がシミュレーション通りに動き避けて捌く練習をする。

後はこれの繰り返しだ。

『これは凄まじい！織斑千冬、まさかの一方的な守勢だあー！』

だが、この作戦は言つて仕舞えば一発芸と同じだ。

今でこそ一方的にダメージを与えているが、対応されれば瞬く間に逆転されるだろう。

これは織斑千冬との勝負ではない。時間との勝負だ。

「織斑君……焦らずに急いで……」

アリーナの中で前に後ろに、右に左に、上に下に『雪片式型』を避けて両肘の刃で捌く織斑君に眩く。

……頑張つて。

「……ねえ。ホントにお姉ちゃんつて織斑一夏の事が好きじゃないの？」コソコソ

「なんでも、『可愛い弟分』だそうですね。後、織斑君用のアルバムもあるとか……」コソ

コソ

「シスコンとくブラコンをく併発してるく」コソコソ

そこ、聞こえてるわよ。

てか、それは生徒会用のアルバムよ！

—————

終業式後 第一アリーナ

SIDE：千冬

『これは凄まじい！織斑千冬、まさかの一方的な守勢だあー！』  
(さすがだ…一夏…)

罅迫り合いを強引に弾き、距離を取る。

てつきり銀シルバリオゴスベルの福音戦で見せた射撃の腕で勝負してくるか思ったら、まさか自分の得意な距離に入ってくるとは思いませんでした。

『私』に対する戦法研究を重ねてきたのは動きでよくわかる。

放つ斬撃は全て空を斬る。交えたフェイントは全て看破される。畏として作った隙には徹底して踏み込まない。逆に意図せずにつけてしまった隙には容赦無く斬り込む。

どれもこれも『私』を理解し切らなければ出来ない芸当ばかりだ。

それだけ、あの世界に対しての思いが強いのだろう。

(だがな…一夏…)

今からお前は負ける。それは決定事項だ。

理由は簡単だ。

昔から一夏は調子に乗ると左手を握っては開く癖がある。

そして、今武器を握っている左手をグッパ―しているのだ。

この時に不意を打てば勝てるだろう。

普段こそしないが今日の私はなりふり構う気など無い。

（横暴と言えばいい、傲慢と罵ればいい、だが、私はここでお前を戦場から引きずり出す  
！）

ヒュン カッ！

『!!?』

懐に隠しておいた閃光手榴弾を放る。

放たれた強烈な閃光は辺りを包み込んだ。

（止めだ！）

固まっているであろう一夏のいる場所に『雪片式型』を振るう。

これで、決着した

ビュン

……………筈だった。

「な…!!?」

刀を振り抜き驚愕する。

そこにいる筈の一夏がいないのだ。

ガシユン

「!!?」

着弾音。

自分から見て右後方で、一夏が銃口を向けていたのだ。そのまま右手のパイルと共に一夏が突っ込んでくる。

だが、ハンドガンの衝撃が私に回避を許さない。

『ごめんね』

その言葉と同時にパイルが私に突き刺さる。

パイルは、一撃でS シールドエネルギー Eを消し飛ばした。

『けつちやあーく！織斑千冬シールドエネルギーエンプティ！』

勝者、織斑一夏！』

「負け……た……？」

『なんとということでしょうか！』

伝説のブリュンヒルデが、まさかの敗北ウー！』

アナウンスを聞くも、感覚は未だに何処か浮いたままだ。

『大丈夫？千冬姉』

「……ああ」

一夏の手を取り地上に降りる。

漠然と残っていた浮遊感は、徐々に消えていった。

「……ハア」

ため息と共に理解する。

始めから、一夏に嵌められていたのだ。

近接戦で私に触れれば倒せると思わせ、焦らした所に私が知っている癖で私に大振りな攻撃をさせる。

ただそれだけの策。それに一夏は引つ掛けたのだ。

(結局、私は一夏の事を理解しきれてなかったということか…)

今思えば、あちらの世界で殺し合いをしてきた一夏が、そんな癖を直さずに放置する訳無い。

『一夏はずっと変わって無い』その思い込みが私を敗北に追い込んだのだ。

『千冬姉…』

「一夏、私の負けだ。だがな、戦死はするn——」

『ごめんね』ギョッ

「!?？」

自分の負けを認めて去ろうとすると一夏が私を抱き締めた。

「い、いち…か…?」

『ごめんね。千冬姉を一人にしちゃって、寂しかったよね。悲しかったよね』

「……」



啞然とする私をそのままに一夏は言葉を続ける。

『でもね。俺は自分で決めた道に行く。絶対に戦死したりしない。

だから……安心して』

「……ああ、行つてこい」

ギュツと一夏を抱き返す。

前みたいに離さないようにはなく、優しく包むように。

きつと大丈夫。このぬくもりが、確かに『私』にあるから。

06-03 噂と真相

???

????

S I D E : ??

「眩しい風のなかで♪描くよ 君の笑顔♪」

♪♪

部屋の中で一人心地良く歌っていると、スマホが鳴る。

…確か、この着メロは。

「…もしもし」

『ああ、君かね？朝早くすまない』

「やはり、“アナタ”か。用はなんだ？」

『お礼だ。織斑一夏の活動データを送ってくれた事だな』

心にも無い事を良く言う。

利用しようとしている僕が言えたことではないが。

「礼はいい。……そうだ、一つ聞きたい事がある」

『なんだ？』

「以前『M』に『織斑千冬は到達点にならない』と言ったな。あれはどういう意味だ？」  
『ああ、あれか……。ふむ、良い機会だ。教えよう』

「……」

僕はこいつが苦手だ。

変に理屈っぽいのもそうだが、一番の理由は男なのか女なのかはつきりしない見た目と声だ。

『とはいえ、そう複雑な事ではない。織斑千冬の『強さ』は、ライオンやヒグマの『強さ』と同じ。

それだけだ』

「…相変わらず、訳がわからないな。『アナタ』は」

『そうかね?』

「ああ、ではな」

『ああ。……君の活躍を期待するよ、』 『T』』

ピッ ギシッ

通信を切り、ベットに寝転がる。

悪いな、織斑一夏。お前の事は、友達としては好きだ。

でも、

『またね、——!』

ごめん、——。

『私の!生徒から!出ていけええーっ!』

僕は決めたんだ。

この世界を守るって。

—————

夏休みの昼 五反田食堂

SIDE:一夏

「と、言う訳なんだ…」

「[……]」

夏休み序盤。

俺は、五反田一家と御手洗数馬に自分の事情を説明した。

「えっと…冗談だよ…な…?…」

「残念ながら、本当だ」

弾の言葉に千冬姉が答える。

「え…え…?…」

「あ…目を覚ましなさい…」

放心する蘭に鈴が呼びかける。

「…あの、どちら様？」

「織斑ラウラ、織斑千冬の義理の娘だ」

うん、その質問は話す前にしようか数馬。

「……………」

「んで？ポウズは結局、どうすんだ？」

困惑に包まれた空気を厳さんの一言が吹き飛ばした。

「行きます。あの世界に」

「…嬢ちゃんは？」

「私は、認めました…」

「…そうかい」

そう言うのと厳さんは、厨房に入っていった。

「今日は俺の奢りだ。あっちに行くのを後悔するぐれえの飯食わしてやる」

「厳さん…」

その日の昼食は、涙が出るほど美味しかった。

無論、決意を鈍らせはしなかったが。

◇

夏休みの夜 織斑邸

SIDE：一夏

『なあ一夏。本当に行くのか?』

食事も話も終わり、家でくつろいでいた時。

弾が俺に電話で話しかける。

「ああ。本当だ」

『お前さ……おかしいよ……』

”イカれてるよ、お前”

「……その何が悪い」

結局の所、俺もあいつらとそう変わらないのだ。

戦いに取り憑かれ、戦場で命を燃やす。

『俺の墓標に名はいらぬ。死すならば、戦いの荒野で』と言えば聞こえはいいが、詰まる所は唯の命知らずの戦闘狂だ。

千冬姉や弾を責めることは誰も出来ない。俺の方が間違っているのだから。

『一夏……お前……』

「話が変わるがお前。虚さんとの仲はどうだ?」

『なっ、ちょ!?!?今は関係無いだろ!!?』

ちなみにこの男と虚さん。

二人の共通の知り合いが俺なので、よく『これを聞いてくれないか』と頼まれる。

弾から『虚さんの好きそうな物ってなにか？』と言うメールの後に、虚さんから『君の好きそうな物って知ってる』と言うメールが来た時には壁ドンならぬ壁グラ（壁にグラインドブレード）をやってやろうかと思った。

…無論財団からの制止が入ったが。

「関係無い…ねえ。丁度、うちのラウラがのほほんさんを家に招いているのだけど…」

『申し訳ございませんでした。織斑一夏あめのみなかぬしのおおかみ天之御中主大神様』

「俺何者だよ」

伊邪那岐と伊邪那美の性別が産まれる前の最高神じゃねーか。

「まあいいさ。良ければのほほんさんに代わるぜ？」

『ああ。…そうだ、一夏』

「あん？」

『……死ぬなよ』

「…ああ」

電話を置き、のほほんさん呼びに行く。

ありがとよ、親友。

夏休み夜 五反田家

SIDE：弾

「ありがとうのほんさん」

『うん。お姉ちゃんの事よろしく』

ガチャン

「…ふう」

電話を置き、一息吐く。

これで、今度の日曜日は大丈夫だ。

「…あ」

一つ伝え忘れた事があった。

最近、巷で流行っている『世界各地にもう一人の織斑一夏の姿がある』と言う噂だ。

「大丈夫かな、アイツ…」

今までは唯の噂と一蹴していたけど、今日の話でどうしても無関係とは思えないのだ。

「後でメールしよ…」

とはいえ夜も遅い。



ひとまず俺は布団に入った。

夏休み ロシア違法研究所跡地

「なるほど……これは酷いね……」

もうもうと煙を上げている研究所跡地の上空で一機の黄色いISが滞空していた。

「でも、確信は得られた。彼の情報に、偽りは無い」

黄色いISのパイロットは誰もいない空で一人呟く。

「あ、お父さん？うん、今から帰るね」

黄色いIS、ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIの操縦者。

シャルロット・デュノアは、そのまま飛び去った。

『白』に『黒』か。まるでどこかのお話みたいだ。

…再会が楽しみだよ。イツピー」

その目は、愉悦の二文字を映していた。

## 06-04 夏休みの過ごし方（前編）

夏休み朝 織斑邸

SIDE：一夏

「お〜れ〜は〜い〜ちか〜♪」

夏休みのとある日曜。

学園寮が改装と補修で一日使えないので、今日一日家で誰かと遊ぼうと思ったのだが、

『すまん一夏。その日は教員としての研修会なんだ』by千冬姉

『叔父よ、すまない。その日は黒ウサギ隊の皆と浦安ネズミの国に行くんだ』byラウラ

『すまないな。久しぶりに両親と会うんだ。姉さんも来てくれるかな…』by箒

『ごめんなさい。その日からはイギリスに帰省しますの』byセシリア

『ごめんなさいね。その日は更識の家の大事な話があるの…』by会長

『あー悪い一夏。その日は用事があつてさ…』by弾

『ごめんなさいね、織斑君。このチケット二人用なの』by如月さん

『ごめんね。両親を復縁させる為に中国に行くんだ』by鈴

このザマである。

……寂しくなんかないんだからな！

「ゲーセン行く……」

久しぶりにお面野郎触ろうかな…。

—————

夏休み 研修会

SIDE：千冬

「ようやく、終わりましたね〜」

「ああ、全くだ」

隣の山田君の愚痴に賛意を示しつつ、ため息を吐く。

どうにも、こういったものは苦手だ。特に、『ブリュンヒルデから見てくださいか』と言う

質問など苦手通り越してウンザリだ。

「全く、どうしてこの研修会はこうも長いのだ？」

「今日はI S委員会の重鎮が来てますからねえ。長くなりますよ」

「迷惑なものだ」

「すまないね。君達に迷惑をかけて」

「!!?」

背中に掛けられた声に振り向く。

「ジ、ジギル委員……」

ジギル・M・フアンタジス。

齡二十と言う若輩でありながら、IS委員会の委員の一人。

有名大学を飛び級で卒業し、その天才的な手腕と技術で、現在のISの解析の九割を行った『東に並ぶかもしれない者』。

その性質上、多かれ少なかれ黒い噂があるIS委員会の委員の中でも異端な程に噂が少ない人物。

だが、私はコイツに良い感情を抱いていない。

優しい目付きも、穏やかな声も、女と見紛う容姿も、上品な歩き方も、どこか私に『コレジャナイ』と感じさせるのだ。

「……」

「…やだなあ。そんなに睨まないでよ」

「…用はなんだ？」

「察しがいいね。ブリュンヒルデ」

そう言いジギルは続ける。

「この前ロシアのとある研究所が破壊されてね、大つぴらには言えないけどそこは違法

研究所だったんだ。

まあそこは重要じゃなくなつてき。大事なのは、なにで破壊されたかなんだ」

続く言葉に、私は耳を疑つた。

「単一使用能力『零落白夜』。これで破壊が行われてたんだ」

「!?？」

—————

夏休み昼 浦安ネズミの国

SIDE：ラウラ

「その時曹長が言ったんです『親切⇨犯罪なら、思いやりの少ない時代⇨犯罪の少ない時代!』つて!」

「えーっ!どういう意味ー?」

「なんでも、泣いてる子を助けたら通報されたらしいんです!」

楽しそうに談笑する黒ウサギ隊の皆を見て思わず顔がほころぶ。

「………ん?」

やはりここに連れてきて良かった。

そう思った時、ふとある一組のカップルが目についた。

あれは……叔父の友達の五反田弾に、生徒会の布仏虚……?

「……」ニヤア

思わず顔がほころぶ。

そうか。これが前にアニメで見た『愉悦』か。

「全員に告ぐ。緊急ミッションだ」

—————

夏休み 篠ノ之神社

SIDE：箒

「驚いたぞ箒。あんなに髪を切ることを嫌がってたらしいのに」

「良くある失恋だ、父さん」

「あら……夏君に振られちゃったの？」

三人でちやぶ台を囲み、近況を話す。

ありふれながらも自分に無かった日常が心地よい。

（姉さんも……来て欲しかったな……）

あの臨海学校以来、全く姉さんとの連絡がつかないのだ。

「まあそんな感じだよ。……テレビつけようか」

気を紛らわせるためにリモコンを取る。

確か今日は、映画『HERO』がやっていたはず——

『番組の途中ですが、速報をお伝えします』

『ISメーカー、デュノア社の社長。アルベルト・デュノア氏が退任し、次女のシャルロット・デュノア氏が新たな社長に就任いたしました』

## 06-05 夏休みの過ごし方（後編）

夏休み イギリス開発研究室

SIDE：セシリア

『皆さんこんにちは。新社長のシャルロット・デュノアです。』

報道陣の方々は聞きたい事がたくさんあるでしょうが、まずは僕の方針を示します。

デュノア社は第三世代機の開発から撤退。第二世代機、『ラファール』の再開発に尽力します。

理由ですか？無駄だと判断したからです。第三世代機の開発自体が。

そもそも、IS操縦者を養うIS学園で教材として使用されているのは日本の『打鉄』とウチの『ラファール』です。

なら、使い慣れたもののバージョンアップモデルを作ろう。そう考えたのです』

「……昨今の第三世代至上主義に真つ向から喧嘩売ってますわねえ」

「そうじゃな……喧嘩を売っているのはお主も同じじゃな……」

はて？なに耄碌した事を言っているのでしょうか、このボケji……技術開発顧問は。



「とぼけるでない。お主の出した『ブルー・ティアーズ』の改修案。

サラツと第四世代の技術を使えと言っておるでわないか」

「一夏さんが、それに同封した技術を使えば可能らしいですわよ。」

「…AEOSといい、あの少年は何者なのじゃ？」

「禁則事項です♪」

タネを明かせば、『なにか良い改修案はないか？』と一夏さんに聞いたら笑顔で色んな案を出して、更に財団が悪ノリに近い形で実現する為の技術を『タワー』の情報から出したのだ。

後、第三世代だ第四世代だ言ってますけど、その両方の特徴を備えたコレは『次世代機』ですわよ。

「まあ伝える事は伝えましたし、わたくしは実家に戻りますわ」

「ふん。高慢ちきな娘が、小生意気になってきおって」

「苦情は受け付けませんわよ」

そう言い部屋を出る。

手元の改修企画原案の原本の表紙を見て、思わず口がにやけた。

どこをどう考えてもヤバイ機体なのは明らかだが、それ以上に楽しみなのだ。

「<sup>ブルー</sup>Bティアーズ・D—Nx<sup>データテキスト</sup>」

とはいえ、ただ待つてはいられない。

わたくしの新たな専用機、<sup>ブルー</sup>Bティアーズ・D—N<sup>ディーネクスト</sup>xを使用する為に必要なBT兵器稼働率は最低でも91%。

現状の72%では足りないのだ。

「意図せずして、貴女とは真逆ですわねえシャルロット・デユノア」

誰でも使える量産機のシャルロット。

自分だけが使える専用機のわたくし。

「いつか、語り合ってみたいですわねえ」

目指す所は違えど、どこか友達になれそうだ。

—————

夏休み 浦安ネズミの国

SIDE：弾

「200円になります」

「ハア…」

思わずため息しか出ない。

折角、虚さんをデートに誘えたのに、ヘタレて飲み物を買いに逃げる始末。

「決めたんだ…今日告白するって……」

そうだ。ヘタレている訳にはいかない。

そう思い、虚さんの元へ戻ると…。

「こ、困ります…」

「え〜いーじゃんよ〜」

「俺たちと遊ぼうぜ〜」

見知らぬ男共に、虚さんが囲まれていた。

マズイ。早く助けなければ！

「おい！お前r」

「チエスト！」

「あべし！」

「ひでぶー！」

「やっ？」

虚さんを助けようと叫んだその時、銀髪でサングラスとマスクと帽子と兎耳を装備した少女が男達を殴り飛ばした。

「ではな、デートを楽しめよ（裏声）」

「は、はあ…」

そう言うのと銀髪の不審者少女は男達の襟首を掴み、去っていった。

「行こっか。虚さん」

「うん…」

＜緊張が吹っ飛んだ気がする…。

＜勇気が上がった。

—————

夏休み ロシア会議室

SIDE：楯無

「それで？現楯無よ。織斑一夏は三年間何処に行っていたのかは？」

「申し訳ありません。あの子は、少々秘密主義なもので」

「ふん。まあいい」

私の言葉に鼻を鳴らし、IS委員会の委員の一人、ガルシルド・ガーダインは全員に目を向けた。

「此処にいる全員は聞き及んでいると思うが、この国の研究施設が何者かによって破壊  
 工作された。」

そして、その破壊工作に使われたのが単一使用能力『ワンオフアピリテイ零落白夜』だと解析で判明した」  
 「待ってください。織斑先生は——」

「私語を慎め、現楯無。別に我々は、織斑千冬が今回の実行犯とは言っておらん。」

彼女には確固たるアリバイが存在し、且つ『暮桜』の封印が解除された痕跡も、再度『白式』が持ち出された形跡もない」

その言葉に心中胸を撫で下ろす。

よかつた。織斑先生が犯人にされなくて。

「しかし、そこが問題だ。この破壊工作が行える機体は二機とも使用されていない。

つまり、この二機以外が行ったと言う事になるが、現状『零落白夜』は篠ノ之博士以外に作成は不可能だ。なあ現楯無」

「何が…言いたいんですか？」

駄目だ。この先はきつと、織斑君に被害が及ぶ。

「我々はこう予想しているのだ。『織斑一夏は三年間篠ノ之博士の元に居た』と」

「！」

「それならば全てに説明がつく。468番目のコアを所持している事も、第二世代機でありながら第三世代を墜とせるのも、ISに対しての高い技量も、AEOSなどという新システムの開発もな」

「……………」

「無論、今回の件に関わっているとは言わん。彼もまた、きちんとしたアリバイがあるからな。

……そこでだ。現楯無」

「……はい」

「近い内に彼と話がしたい。その旨を伝えておいてくれ」

「……はい」ギリツ……

思わず歯噛みする。

自分なんて無力なのだ。彼との『自分の身を守れ』という約束すら守れないなんて。では、次の議題に移る。議題は、アメリカの銀の福音シカゴバリオニクスベルの操縦者の処罰についてだが――

――

夏休み 空港

SIDE：鈴

「ふう……。飛行機って疲れるわね……」

ググツと背伸びをして筋肉をほぐす。

今回の復縁の話は大成功を取めた。

大成功過ぎて両親が中国に残り、自分一人だけで日本に帰ってくるぐらいに。

「どうして離婚したのよ……あのイチャつきようで……」

思春期の精神にはかなりキツイ空間が出来上がってしまい、逃げ出したという方が正

しいけども。

「ハア……。帰ろ……。ん？」

スマホの着信音を聞き、ロックを解除。

ラウラから送られてきたメールには本文が書かれておらず、題名だけだった。

『【未長く】五反田弾と布仏虚のカップル成立【爆ぜろ】』

「…………おめでとさん」

疲労とは恐ろしいもので、この程度のコメントしか私は口にできなかつた。

「今日はもう、カップ麺でいいや……」

## 06-06 夏休みの過ごし方（特別編）

8月 亡国機業トレーニングループ

SIDE：マドカ

「1245…1246…1247…」

息を乱さずにカウントしながら腕立て伏せを続ける。

「やつはろーえくむく♪」

「……1248」

「……えくむく？」

なにやら幻聴が聞こえる。

おかしい。この程度で疲れる身体ではないのだが。

「えーむー！えーむー！えーむー！！？フッフー！」

「……うるさいぞ、スプリング」

「Mつたら、聞こえてんじゃん。ひどいな」

「…ハア」

この見るからに脳内が年中春真っ盛りの女はスプリング。



クルクルパーな言動を除けば優秀な同僚だ。

「…で？何の用だ」

「んふふふふーん。良い知らせとーよくわかんないお知らせがあるんだー♪どつちからにする？」

「……良い方」

「えつとねー黒シユヴァルツェア・レーゲンい 雨の強奪が成功したって」

「ほう…」

吉報ではあるが、よく考えると既に専用機持ちの私には関係無い事だ。

「もう一つは？」

「んー？銀シルバリオ・ゴスベルの福音とその搭乗者が行方不明になったってー」

「そうか…」

まあ自国の専用機が他国の代表を殺しかねない状況が作られたのだ。

一人に責任を押しつけ暗殺などはありふれているだろう。

「ところでさー。なんで腕立てしてたの？将来の夢はボテビルダー？」

「違う。日々の日課だ」

「真面目だよねー。Tみたいに夏休みを取ればいいのに」

「あんなあ」

まったく、どうしてこいつの話題はコロコロ変わるのやら。

これで『シーズン』の中でも二番目の常識人なのだから恐ろしい。

そもそも“T”はIS学園に潜入しているから、あちらの予定に合わせているだけだ。

「でもおかしいよね。」「T”って名前に一つも“T”要素が無いのに」「T”だもん。それに」「T”なのに『アルファベッツ』じゃないし」

「……そうだな」

「そういやそうだ。だが、あのお方の事だ。私には予想も出来ない理由でつけたに違いない。」

「まだ、なにか用があるか？」

「んー？後は…：今度の文化祭襲撃だと『シーズン』からはサマーとオータムが出て、『ウエザー』からスコールが出るってことぐらいかな」

「オータムにスコールか…」

恋人なのはいいが職場でイチャつくのはやめてほしい。

おかげで大好きなココアが飲めなくなる。

「ねーねー。『アルファベッツ』からは誰が行くのー？」

「“B”に“N”だ。正直、期待はしてない」

「んふふふふふ。Mったらひっどーい♪」

夏休み 五反田家

S I D E : 蘭

「はあ……」

ベッドの中で一人ため息を吐く。

『行きます。あの世界に』

脳裏に響くは一夏好きさんの他界（文字通り）宣言。

『今日は俺の奢りだ。あっちに行くのを後悔するぐれえの飯食わしてやる』

お爺ちゃんあの言葉で私が口を出せる雰囲気では無くなったが、私個人は一夏さんが異世界に行くなんて嫌だ。

それも、殺し合いが日常の世界なんかには。

『お兄！今からでも一夏さんを説得しよう！』

だから、例え確率が低かろうと一夏さんを説得するために一夏さんの親友のお兄に協力を求めたのだが、

『……わりい。俺はあいつを送り出す』

返ってきたのは、拒否だった。

『最初は俺も説得しようと思ったさ。でもさ、この世界にいてあいつは幸せになれるのかって思ったらさ……』

『どういふ……』

『あいつの、一夏のいる環境って羨ましく見えるけど実際はかなりヤバイんだ。』

あいつは今、世界唯一の男性I S操縦者として世界中から注目されてる。他の男性I S操縦者が現れない限りずっとだ。

世の男性からは女尊男卑に対しての切り札として、世の女性からは女尊男卑を脅かす不穏分子として、研究者からは貴重なサンプルとして、政治家からは外交の交渉材料として、

どこに通うのも、どこに勤めるのも、誰と付き合うのも、誰と話すのも、いつ休むのも、何かを言うのも、全部監視される。そこにあいつの意思はない。……なら、死の危険はあれど自由な方に行った方がいいと思ってるさ』

スラスラとお兄の口から出てきたのは筋立った反論。私はそれに何も言えなかった。……』

結局、何が正しいのかわからない。

自分のこの気持ちはもしかしたらただの余計なお世話なのかと、思考がループする。

くく

メールだ。ゴロリと寝返りスマホを取る。

From 如月譲子

To 五反田蘭

題 今度の日曜日

本文 一緒にプールに行かない？ウォーターワールドのプレオープンチケットが二人分取れたの。

「如月……さん……？」

◇

夏休み 帰り道

SIDE: 蘭

「あー気持ち良かったー！」

「そうですね。今日はありがとうございます」

スレンダーな身体を攻め気味なワンピースで包み濡れたロングの茶髪をたなびかせながら背伸びする隣の彼女に相槌をうつ。

如月譲子。五反田食堂チの常連でIS学園の生徒、そして一夏さんのクラスメイト。

一夏さんの元に行くために私に勉強を教えてくれる人。

そして――

『IS学園での交友関係？うーん…新しい親友は如月さんとセシリアかな。……えっ？如月さんここの常連?!?』

あの人、親友。

「……如月さん」

「なにかしら？」

「どうして、私を誘ったんですか？」

「……心配だったからよ」

「心配？」

「ええ、貴女、7月の終わりあたりから急に元気を無くしてたじゃない。なにか、励ましになればって思ってたね」

「……如月さん」

『今日は俺の奢りだ』

『俺はあいつを送り出す』

「如月…さん…」グスッ

「!? 蘭ちゃん?!?どうしたの?!?」

「ごめんなさい。一夏さん。」

「こんな気持ち、もう限界です。」

「実は……」

「実は？」

「夏さんが、異世界に行くって」

## 06-07 夏休みの過ごし方（完結編）

夏休み 篠ノ之神社

SIDE：一夏

「最強はディケイドよ！」

「いいや、RXだ！」

（平和だなあ…）

串を片手に言い争う更識さんとラウラを眺めて、神社の縁側で肉を齧る。

今日は篠ノ之神社を借り切つて籌主催のバーベキュー大会だ。

「ほう。お前も来ていたとはな、ジェニー」

「だ〜れかと思えば、お前さんかい技術主任。ハンサムボーイに招待されたのか？」

「まあ、そういうことだな。あいつは中々に興味深い」

右を見ればジェリーフィッシュ剣道部長がクローバー技術主任と話しており、

「へえ、来年IS学園に入学する気なんだですの」

「は、はい！」

「緊張しなくていいですよ。私はセシリア・オルコット。よろしくお願ひしますわ」



左を見れば、蘭がセシリアに挨拶している。

……うん。箒主催と言ったけど大半の人は俺が呼びました。

「元氣ないわね。織斑君」

「如月さん……」

又ボーツとしていると紙皿に幾つかの野菜を乗せた如月さんが隣に座る。

「なにかあったのかしら?」

「……うーん」

なにかあったと言われればそれこそ色々あった。

シャルロット・デユノアが社長になっていたり、零落白夜が施設破壊に使われてたり、俺に似た誰かがいるという噂が聞いたり、ガーダイン委員と会談する事になっていたり、銀の福音とその操縦者が行方不明になっていたり、シュヴァルツェア・レーゲンが強奪されていたり……。

ただ、一つピックアップするとすれば……

「……蘭が口を滑らしたことかな」

「あら? そんなに私に知られなくなかったのかしら?」

何を滅相な。

「別に如月さんに聞かれるのはいいんだよ。どうせ話すつもりだったし。問題は『漏ら

「しちゃった」ってことだよ」

「……意外と細かい事を気にするのね」

意外ってなんですか。俺はそれなりに神経質だよ。

「細かい事って言うけどさ。この話は国の方には聞かれたらダメなんだよ」

「……まあ、聞かれた瞬間に男性操縦者を逃さない為に監禁エンドでしょうね」

ヤンデレのマギーに愛されて夜も眠れないエンドならそれはそれで歓迎なのだが、むさ苦しい男に取り押さえられるエンドなんて嫌だ。

俺の機体はダークレイヴンだけどダークゲイヴンじゃない。

ぶっちゃけ人生にセーブポイントもコンティニューも無いのでハッピーエンドを指したいのだが。

「その件について私からも質問いいかしら？」

「何？」

「どうして、彼方に行こうと思ってるのかしら？」

「……？」

「いや、お仕事の報酬だし……そこじゃないわ」……？」

「傭兵だとか、好きな人がいたとか、そんな理由を全部抜きにした理由よ。……貴方、他に理由があるのでしょ？」

……流石つす。如月さん。

デュノアの時のように、その洞察眼は凄いの中率だ。

「まあ、くだらない厨二病みたいな理由だよ」

「厨二病？」

「ほら、今の俺って百人中百人が“特別”と述べる環境にいるじゃないか」

「女性にしか動かせないISを起動させ、女の園でのたった一人の男。……確かに、ライトノベルの主人公みたいないな特別な環境ね。それもハーレム系の」

正直、こんな所でハーレム出来る主人公が居たら見てみたいが。

「この環境になる前から、俺の居た環境って普通とは言えるものじゃ無かったんだよ」

「……」

「ちよつと、暗い話になるけどさ。俺の親って俺が小一の時に蒸発らしいんだ」

「らしい？」

「小一よりも前の事を思い出せないんだよ。とにかく、そこからが俺の“特別”の始まりだった」

「いつまでも親の残した金で生活が出来る訳でも無いし、千冬姉は高校生ながらバイトで稼いでいたんだ。働ける年齢でもない俺はそんな千冬姉に負担をかけない為に家事全てを受け持った」

「……いい話ね」

「そうだね。確かにいい話だ。感動的だよ。でも無意味だ」

「世の中には俗に言う『スピーカー』っていう人間がいてさ、そういう人間はどこからともなく噂を嗅ぎつけて吹聴するんだ」

「吹いて回られたのね。『善意』の皮を被って」

「そうだよ。一週間もしない内に『両親のいない哀れな姉弟』が出来上がった。

まあ、商店街でオマケしてもらえたからそこはメリットかな？……あの日が来るまでは」

「あの日？」

「第一回モンド・グロツソ。……I Sが周知の『世界最強の兵器』となったと同時に俺が『ブリュンヒルデの弟』になった日だよ」

「……成る程、その日は確か『女尊男卑』が『力』を持ち始めた日ね」

「…そ。近所も商店街も、みんなそれにやられちゃってね。前の日まではオマケをくれた八百屋のおじさんが次の日には恨みの視線をくれたよ」

「うわあ……」

「それに学校での生活も変わってね。成績優秀で文武両道でなければ『千冬様の弟なのに』と陰口を叩かれるようになってさ。新しい友達は鈴を除けば一人もできなかった

よ」

「よく平気だったわね。この世を相当恨んだんじゃないかしら？」

「ぶっちゃけその辺は五反田家や、数馬、鈴の存在がでかかった。それに……恨むと言うよりも叫びたかった」

「叫びたかった？」

「『俺は好きで』特別』になつたんじゃない。俺の立場が羨ましいならなってみろ』て  
や」

「……」

「芸能人や政治家みたいにならなかつた人とは違う、俺の『特別』のなり方は『凶悪犯罪者の家族A』に似たものだよ」

「実際に凶悪犯罪者なら恨むこともできたよ。でも、千冬姉は若い身で安定した生活を得る為にIS関連への道に進んだんだ。感謝こそすれ、恨むなんてできないよ」

「それと彼方の世界がどう繋がるのかしら？」

「あの世界に行つて、ファットマンに拾われてから生活の基盤を整えている内に気づいたんだよ。俺は『特別』じゃないって」

「『特別』……じゃない？」

「『ブリュンヒルデ』の栄光はあの世界には無いし、『親なき子』なんて珍しくも無かった。

あの世界の俺はどこまでいっても『唯の身元不明者』で『傭兵』だったんだよ」

「ハリボテを見ずに俺を見るあの世界の人達に俺は嬉しくなった。……そして、同時に元の世界に帰るのが怖くなった」

「……」

「せっかく“普通”になれたのに元の世界に戻れば途端に“特別”に逆戻り。だけど、千冬姉に自分の生存を知らせておきたい。二つの感情が自分の中でひしめき合った」

「そう思いながら傭兵稼業を続けていたらいきなり元の世界にカムバック。『世界唯一の男性IS操縦者』と云う“特別”を手に入れてしまった……という訳さ」

話を終えてすっかり冷めた肉を齧る。

硬くて不味い。

「織斑先生に自分の生存を知らせ、そして彼方の世界に行く。貴方にして見れば万々歳な状況ね。……あら、ありがとう」

「まあ、まとめるなら特別扱いに嫌気がさしたから逃げだしたいっていうお痛たしい厨二病さ。……礼はこっちの台詞だよ」

自分の長々しい退屈な話を聞いてくれた如月さんのコップにお茶を注ぎ礼を述べる。

「……ねえ、織斑君」

お茶を一口啜り、如月さんが口を開く。

「I Sが無ければ、この世界はどうなったのかしら？」  
「……………さあ？」

別にその事を考えたことが無いわけではない。

唯、考えれば考えるほどI Sがこの世に貢献したか否かに疑問が生じるのだ。

学園で言われているように宇宙開発に使われている話は聞いた事が無いし、A Cのよう  
に戦争に使われている話も聞かない。そしてそもそもI Sの技術が他に転用された  
という話も聞かない。

確実に起こしているのは偏った思想を世の中にばらまいているだけ。

「今よりは……………平和かもね」

「そうね……………」

「……………」

沈黙。 凄く気まずい。

「ねえ」

暗い空気の中、如月さんが再度口を開く。

「何？」

「織斑君は自分を『特別』だと思われのが嫌だと思っているかもしれないけど、織斑

君は『普通』の高校生よ。……………私が保証するわ」

「え？」

次の瞬間。如月さんほとんどでもないことを口にした。

「だって、コスプレ物好きなんて珍しくも無いでしょう？」

「ちよつと待って、なんで如月さんが俺のベッドの下のラインナップを知っているの？」

「……オルコットさんからの情報よ。大会の件で部屋に上がった時に見たって」

「……セシリアア！」

話を聞かぬや否や、既に何も刺さっていない串を放り投げて俺はセシリアへ走った。

—————

夏休み 篠ノ之神社

SIDE：如月

『タカ、ギン！トラ、ギン！バツタ、ギン！トリプル！スキヤニングチャージ！』

「セイヤーッ！」

『EXCEED CHARGE』

「デイヤアアア！」

「なにをやっているバカどもオ！」

ドゴオッ

「ギヤアアアアアア!!」



メダジャリバーとカイザブレイガン（共に更識簪の私物）を構えて、互いに切りあおうとする織斑一夏とセシリア・オルコットに織斑千冬の二連蹴りが炸裂する。

「あーつと！叔父とセシリアに強烈なキックが炸裂！」

「これは痛い！さあ、どう立て直すのか!？」

さつきまで最強のライダーは誰かという議論に夢中になっていた筈のラウラ・ボーデヴィッツヒと更識簪がいつの間にか実況に回っており、周りの人たちもヤレヤレとはやしだてる。

「やれやれ……」

野菜を口に入れながらため息。

つい先程まで自分の異常性を忘れていた悲劇の主人公は何処へやら、今の彼には笑顔があった。

「織斑一夏」

境内の騒ぎにかき消されそうな大きき声の音がふと、口をつく。

「異常であろうと、普通であろうと君はまつすぐな人間だ」

「だからこそ、そのまつすぐさ利用されないでくれ」

「亡国機業や篠ノ之束に」

MISSION 07 Heavy Day  
07-01 慌たらしい初日

二学期初日 黒い鳥内

SIDE：財団

「おーい、久し振りだねえ。アイザツ……財団」

(絶対わざと間違えたな)

どう考えていても笑いを堪えたかのような声で彼の通信が響く。

はつきり言えば聞きたくないが、気まぐれとはいえ傭兵のコア人格をやると決めたのだから無視はできない。

「……で、何の用だい？傭兵は今、朝の準備に忙しい訳だけど」

「ああうん。ぶつちやけちやえばさく暇だったから息抜きn「用があれば行ってくれ、では」ギャハハハハ!!冗談冗談！割とマジなお知らせだ」

通信を切ろうとした瞬間に本題を出す主任。なるほど、傭兵が鳥野郎と言いたくなるわけだ。

「……で、今度こそなんだい？」

「えーつとさあ、まずあの傭兵くんはタワー内の装置でこつちとそつちを往き来したわけじゃない？」

「ああうん。一科学者としては大変興味深いね」

一つの分岐を起点とした並行世界ではなく、条理も道理も異なる異世界に人や物を転送する装置。

一体、どういう原理でどういう動力でどういう理論であるかなどの全てを解析仕切ることにかかる時間はゆうに100年単位となろう機械だ。

「その装置を調べていたらさあ。実は彼だけじゃなかったんだよ」

「……………なにがだい？」

「その世界に行つてたの黒い鳥だけじゃなくって、別世界からもう1人」

「……………」

「えっ」

――  
二学期初日 教室

SIDE：一夏

「さて一夏さん。放課後の予定は詰まっていますまよねえ？セシリアとの特訓とか、オルコットとの特訓とか、わたくしとの特訓とか」

「全部お前じゃねえか」

始業式を終えて教室に戻った途端に変なことをのたまい始める親友<sup>セシリア</sup>。

何があつたし。

「それは…勿論、貴方でなければBT兵器稼働率が上がらないからですわ」

「………本国の皆さんは？」

「AEO Sの前に沈めましたわ。……得られたのは、僅か5%しか伸びない稼働率と次期代表の座ですわ」

「充分じゃないかなそれ？」

ぶっちゃけ、セシリアに渡したB<sup>ブルー</sup>ティアーズ・D<sup>ディー</sup>—N<sup>ネクスト</sup>xのデータは彼女の卒業後を見越して渡したものののだが、どうにも自分は見誤っていたらしい。

「『卒業後』じゃダメなのですわ」

「なんでさ」

「卒業までがタイムリミットですもの」

貴方と戦える、最後の期限が。とセシリアは付け足す。どうやら夏休みの間に自分の事を目標にしたらしい。

いや、いいんだけどさ（よくない）。

「まあいいよ。放課後闘やろうか」

「あら、本当によろしいんですの?」

「ん」

（なーんか、今日は財団が静かだしなあ）

授業中にでもお構いなく通信してくる奴が、朝からずっと黙っているのだ。「おはよう」の挨拶は返したので生きているのは確定なのだが。

「……で、アリーナは借りてんの?」

「ええ、そこに抜かりはなくてよ」

—————

「さて、君のいうとおり。織斑一夏に接触する機会を作ったが—————」

『—————ええ、彼にとつて生半可どころか大抵の嘘は見破れます。その癖して自分が嘘を吐くのは上手いからタチがわるいです』

東京の夜景を眺めながら1人の男が電話で話す。

彼の名はガルシルド・ガーダイン。

世界有数の企業家であり、IS委員会の委員の1人である彼は女尊男卑の世情の中でも強大な権力を保持している。

「嘘……か、ある程度なら私も見破れるのだがね」

『ガーダインの様のような経験則ではなく直感のような形で彼は見抜くんです。卑怯ですよ、僕もヒヤツとしましたもの』

電話口の相手は徐々に崩れてゆく敬語で織斑一夏について言及する。

しかしどうやら、その声色には僅かに喜色が見え隠れしている。

「さて、もう寝るに良い時間だ。〴〵百聞は一見に如かず」とこの国ではいうが、その言葉が正解か否かは実際に会って検証させてもらおうか——

——デユノア君

『はい、おやすみなさい。ガーダイン様』

## 07102 アンタツチャブルな文化祭

「んん……くあ……ふう……」

人気の無いベンチに白髪のカツラを被った青年、一夏が腰掛け空を見上げている。

徐に一夏はグイツと腰と背筋を伸ばし、戻す。頬を撫でる風は夏の終わりを思わせる涼しさと、まだまだ夏なのだと告げる熱さを含んでいた。

夏休みも終わり早9月。

遂に訪れた文化祭に盛り上がるのはIS学園も変わらないらしい。

最も、IS学園に今日入れるのは学生と先生と職員と、そして生徒に二枚配布される招待状を受け取った一般の人。大体親か兄弟姉妹か中学までの友達なのだろうが。

ちなみに彼は弾と蘭に送……：：：～

理由？2人とも先にお呼ばれしてたからだ。後者は如月に、そして前者は虚に。

いやうん、爆ぜろ。キャンセルの連絡を貰った一夏は幸せを祈る七割、三割を文頭に思った。

『随分と余裕だね。傭兵というのは、頼まれたことには何があろうとこなすものだと  
思ってたけど』

いつも動き続ける一夏が珍しくのんびりしているのが珍しいのか財団が言葉を飛ばす。

「……傭兵流に則るならさ、依頼主から引つ込めと言われたら引つ込むしかないんだよ」ふう、と息を吐きながら一夏が答える。

そもそも何故この時間はクラスのコスプレ喫茶にウェイターとして働いている筈の一夏がいるのか。

何故やけに疲れ切っているのか。

何故人気の無い場所にいるのか

その答えはただ一つ。

「……想定範囲外だぜ。俺の評判は」

『まあ、側から見ればブリュンヒルデを同じ土俵で倒した、世界で唯一の存在だからねえ。男性操縦者という所も含めれば、妥当かな?』

そう。財団が述べた通り夏休み前の一戦で一夏は千冬を、ブリュンヒルデを倒している。

その後すぐに夏休みになった故か特に異常は無かったが、そこは文化祭『世界最強を倒した男をいい機会だから見に行こう』という者がドツとコスプレ喫茶に押し寄せたのだ。



これでは出し物どころか人混みで怪我人が出ると如月の発言により避難命令を承った一夏は一先ず逃亡、そうして今ほとぼりが冷めるのを待っているのである。

「……そういえば、ガーダインはなして俺にこんなものを渡したんだ……」  
『ガレッジ』から一枚のカードを呼び出す。

そのカードには『Dear friend ○○○—△△△△』というメッセージと共に電話番号が書いてあった。

—————  
一週間前 ザギンのなんかお高そうな料亭へ

「うーん、身嗜みに変な所ないよな……？」

『制服に変なものも何もないと思うけどね』

楯無からガーダインのと食事をするように言われた一夏は指定された料亭に向かっていった。

店名や場所に間違いがないことを確認し入店。言われた通りに名前を伝えると直ぐに奥に通された。

「先生、お見えになりました」

「通したまえ。……来てくれて感謝するよ。織斑くん」

座敷で胡座をかいている髭を蓄えた初老の男。彼の名はガルシルド・ガーダイン。

代々続くアメリカの政治家一家の次男であり、やや強引ながらもその革新的な手腕には多く賛同者がいる。そしてIS委員会の重鎮だ。

「お会いできて光栄です。ガーダイクさん」

「ガルシルドで構わんよ。ガーダイクでは兄と混同してしまうからね。

座つてくれ、今料理が来る」

では、と一夏は上座に正座で座り目の前のガルシルドを注視する。

新聞やテレビで何度か見かけたが、こうして直接対面して見るとなるほど、多くの者を惹き付けるカリスマと言うのだろうか自身と気迫、聡慧さに満ちている。

「日本語は覚えたのだが、正座はどうにも苦手だね。

悪いがこの…アーアグラというので失礼させてもらおうよ」

「ああいえ、お構いなく」

「すまないね。おお、来たようだ」

AC世界に行く前も、行っている最中にも縁がなかった高い会席料理が目の前に並ぶ。

趣味でお菓子作りをしていたとはいえヘリの中のハンバーガーや、オイルの匂い漂う街でのホットドッグ等、ジャンクな味に慣れ親しんでいた舌に合うだろうかと考えながら一夏は付け焼き刃なマナーで箸を握った。

「…一つ、よろしいでしょうか」

「なんだね？」

「何故私と食事を？」

食事中唐突に一夏が尋ねる。その問いにガルシルドはフツと笑い答える。

「質問に質問で返すようだが、君と直接話したい I S 関係者は幾らでもいると思うがね？」

「…そうですね。でも…」

スウツと息を吸い一夏は続けた。

「貴方は、少なくとも私を男性操縦者としては見てませんよね？」

「……」

無言になるガルシルド。張り詰めた空気が辺りを漂う。

今度はガルシルドが息を吸い、言葉を発した。

「織斑くん、一つ交渉しないか？」

「交渉？」

「私は君に質問したい事があってだね、君の願いを一つなんでも叶える代わりに君は嘘偽りなく答えてくれないか？」

なかなか難しい交渉だ。一夏はそう思った。

ガルシルドはIS委員会の重鎮。並大抵の事は叶える事ができるだろう。

だが、叶える事が大事になればなるほどそれによって生まれた因縁に巻き込まれる確率は高まる。

かと言ってチャチな願いではこちらが答える内容と釣り合わない可能性があるし、相手にも失礼だ。

あの世界ですつとマギーやファットマンに交渉事を任せつきりにしていた事を一夏は悔いる。

(『どうするんだい？突っぱねるといふ道もあるけど』)

(……)

確かに思い浮かばないなら、断るのが最善だろうが……いや、一つあった。どうしても、直感で無視出来ない事があった。

「ガルシルドさん。あの噂……もう一人の織斑一夏の噂」を知っていますよね？」

「うむ。世界各地で君にとてもそっくりな男の目撃証言があるな」

弾からも聞かされた噂。

もちろん唯のそっくりさんやわざと似せた風体をした誰かなだけかもしれないが、それはそれだ。

「そして、聞きましたけどどこかの研究所が零落白夜によって襲われたらしいですね」

「……」

そこについて知ってはいるが何も反応するつもりは無いと無言になるガルシルド。

一夏は特に気にせずに続けた。

「この二つ。関係があるかどうかを調べて欲しいんです」

「……なるほど、確かに自分に関わる事態が二つ並行して起きていれば関連性を疑うのも当然だな」

「はい」

織斑一夏似の男が世界各地で目撃されている。

ロシア研究所の破壊が『零落白夜』で行われていた。

二つの事態を知った一夏としてはどうにも関係ないとは思えない感覚があった。

(コレはきつと、俺に何か関わってくる)

財団が自分を選別していた時の予感。

その予感を感じていたのだ。

「ガルシルドさん……」

「うむ、その依頼を受けよう。では……」

「……」

質問を行おうとするガルシルドに、ゴクリと一夏は生唾を飲む。

傭兵として潜り抜けた死線とはまた違う緊張感が身を襲う。

2年間どこで何をしていたのと言われたらどう答えようか。

「君が作ったブルー・ティアーズのシステムA.E.O.S.についてなのだが…アレは…IS以外にも転用可能かね?例えば遠隔で操作するロボットアームなどなのだが…」

「へ?ああはい、まあやれると思います…というか相応の報酬が出るならアレのプログラム売りますけど」

身構えていた一夏からすれば拍子抜けな質問。想像していたのと比べまるで違う。

「おおそうか、それは有難い!是非とも後で商談させてくれ!」

「え?あ?はい?」

ドツとガルシルドの口から流れ出る言葉の洪水に飲まれ一夏は困惑する。おかしい、こんな事になる空気だったろうか。

「…想定範囲外という顔をしているね織斑くん」

「ええ、まあ」

テンションを元に戻したガルシルドにぼけっとしながらも答える。

「正直な所だね。君が何者なのかなど、どこで技術を覚えたのかなど私には些事に過ぎない。大事なのは君が持つものが今生きる人々にどれだけ益となるかなのだ」

「……」

圧倒される一夏を余所にガルシルドは続ける。

「もしかすれば君は東博士から直接技術を教授して貰っていたのかもしれない……だが、それはそれで結構だ。技術を秘匿する東博士の代わりに君がその技術を広められるのだからな」

「優れた一部の天才により新たな領域が切り拓かれ、そしてまた優れた秀才によつてその領域は普遍のものとなる。そうして人類という種は歩みを進めてきた。それはこれからも変わらない」

「ISも同じだ。今はまだ一部の人間にしか扱えず、数も限られたお世辞にも未だ実用的とは言えない代物だ。だが……」

ガルシルドはギュウつと拳を握りしめて語る。

「だが、それでも我々はこれを普遍とする義務がある。普遍とし、普通とし、量産し、常識とする。それが我々の義務なのだ……」

「ガルシルドさん……」

「すまない、熱くなつたな。質問への解答感謝する。これを受け取ってくれ」

そう言いガルシルドは一枚の黒いカードを取り出す。

そのカードには『Dear friend ○○○—△△△△』というメッセージと

共に電話番号が書いてあつた。

「これは…?」

「一度だけ使える私への直通ラインだ。好きなように使いたまえ」

ガルシルドの発言に一夏は目を見開く、その手の事に疎い彼とてこのカードが持つ価値の大きさをぐらいはわかる。

「どうして私にこれを…?」

「フツ…」

ガルシルドは笑うだけで何も答えなかった。

—————

「俺が何者でもいいというけど、ならどうしてこれを渡したんだろうな…」

時は戻りIS学園。ベンチに座りながら一夏は日に透かすようにカードを眺める。

男性操縦者に独自のコネクションを築きたいというなら理解出来る、今の自分はそういう立場だということは理解している。

『嘘をついてるようには…見えなかったねえ』

「ああ」

最大限の警戒を持って彼を観察していたというのに、読み切れない。

嘘はついていないのだろう。だが、あの言葉全てが本音と言えるのだろうか…?

「わっかんねえなあ…」



「ああ、もしかして…織斑さんですか？」

「…誰です？」

ふと、声がかかる。

空に向けていた視線を地上に戻し、一夏は声の主を見る。

問い返されたスーツの女性はハキハキとした声で応える。

「失礼しました。IS 装備開発企業『みつるぎ』渉外担当・巻紙礼子と申します」

## 07-03 交わる死線

「……ようやく、人が掃けましたわね……」

「全く、叔父は見世物では……いや今は見世物だったな」

一方その頃、コスプレ喫茶と化した一年一組の教室ではようやく一息つける状態となっていた。

『世界唯一の男性操縦者にしてブリュンヒルデを倒した者』が接客していると内部外部問わず多数の客が押し寄せ、引いた店内には疲労しながらも笑顔で接客をこなす生徒と、そのサービスを楽しむ客の姿があった。

「しかしまあ、一夏一夏とうるさいですねえホント。」

このイギリス代表候補生『セシリア・オルコット』を目当てにしてもよろしいのではなくって?」

「まあそういうな、叔父はアレだ。」

絶滅間近の山猫か、あるいは新種のチンパンジーみたいなものだからな。

それが檻の中で飼われていれば見にも来るだろうよ」

「……」

一時は心底恨んでいたとはいえ、叔父といっても血は繋がってないとはいえ、そして何より本当の事とはいえ、姪ラウラから珍獣呼ばわりされる友にセシリアは心中涙を禁じ得なかった。

まあセシリアに至っては以前に、タッグマッチ戦の練習の時に本人に面と向かって珍獣呼びしたわけだが。

「2人ともお疲れ様。ごめんなさいね、シフト外なのにヘルプしちやって」

衣装を脱ぎ、いつもの制服に戻った2人にメイド服を着た如月が駆け寄る。

普段面倒だとばかりに無造作な長髪はいつものボサボサっぷりが嘘のように纏められており、その変わりようにセシリアは「可愛くなるもんですわねえ」と内心呟いた。

「構いませんわよ如月さん。ノブリスオブリージュ。貴族であり、代表たるわたくしにとっては当然の責務ですもの」

「私も構わん。むしろ貴様が一番疲れているだろう、あの指揮力は見事だったぞ。実家がそういう店なのか？」

「まさか…私には2人みたいなISの強みを持つてないもの、これぐらいの頑張りが無ければ置いてかれるわ」

カンカラと笑う如月。いつもこうやって身嗜みを整え、陽気に笑うのであらば彼女も他のグループに混じれたものだろうにとセシリアは思った。

如月優美きざらぎすすみ。彼女もまた、クラスの中では浮いてしまっている方だ。

暴言を吐いたり、喧嘩沙汰を起こしたセシリアやラウラが避けられるのは当然であるし、唯一の男性たる一夏やこの学園にとってあまりにもビツクネームな姉を持つ筈も致し方ないだろう。

ただそれらに比べれば、彼女が避けられる理由は些事に過ぎない。そう——  
——入学初期にパイルバンカーの素晴らしさを一時間講義したのである

些事なのか？無論些事だ。些事なのだ。些事である！

自業自得の自分や、どうやっただって変えられない血や素質の一夏と違い、その後の対応さえ間違えて無ければ『ちよつと頭のおかしいパイルキチ』で溶け込めたらうと思うとセシリアは惜しく思わずはいられない。

まあ一夏を初めとした専用機組とはそれなりに交流があるし、クラス代表の自分をよくサポートしてくれる良い友である。

……「イギリスってパイルつけないの？」と聞く以外には。つけて役に立つのだろうか……セシリアは訝しんだ。

「強みが無いなど謙遜するな。

AICを掻い潜りパイルを当てた貴様の手腕は自信を持ってよいものだぞ？」

「いいえアレは、あの一撃は、パイルの導きがあつての物。

導きに頼ってしまうままではいけないのよ」

「パイルの導き」

「パイルの神にもっと人間性を捧げなければね…」

「パイルの神」

ほらこの通り。ラウラが宇宙猫フェイスを晒している。

一般機で専用機に肉薄するあの努力と精神は尊敬はするが、憧れはしない。

……とそんな時セシリアは自らを見据える視線に気づいた。

「…さて、そろそろ私は自由時間とさしてもらいますわね。」

ラウラさん、如月さん、気をつけて…」

「…う…ええまあ、怪我ないようにするけど…」

「……ああ」

会話を切り上げ、立ち去るセシリア。

それに対して如月はハテナマークを浮かべているが、ラウラはジロリと辺りを見渡し

「ふむ」と小さく頷いた。

「如月、織斑先生は今どこにいるかわかるか？」

—————

「……」

カツカツと、靴音を立てながらセシリアはアリーナへの道を進む。

昼間の内はISを使った催しがあったが故に大層賑わっていたが、それが終わった今では人気がなくなってしまうている。

少なくとも、しばらくは誰も通りかからないだろう。

「どうした？こんな場所に自分から行くなんて、襲ってくれとでも言いたげだな」

「……我慢の足りない子ですわね。」

そんなにこの文化祭で暴れたければアリーナに連れて行って上げようと思ったのですのよ」

後ろからかかる声にセシリアは振り返らずに答える。

「一応聞いておくぞ。なぜ気づいた？」

「……その機体、サイレント・ゼフィルスでしょう？」

サイレント・ゼフィルス。

イギリスの第3世代型ISであり、以前イギリスから何者かの手により強奪された実験機体。

BT兵器搭載ISの2号機で、シールド・ビットを試験搭載しているセシリアのブルー・ティアーズの姉妹機ともいうべき機体。

後ろの女……マドカは、ソレを持っている。

盗った下手人と無関係などあり得ない。ましてやこの場にこうしてくるなど騒ぎを起こすと言っているようなものだ。

「……これは驚いた。感知されないように工夫してる筈なんだが……やはりあの噂は本当か」

「噂？ 人気者は辛いですわね」

「ああ全くの人気者だよ、イギリスが新しい次世代の機体を作ろうとしてるとな。貴様の様子を見せて貰ったがな、その鋭敏な感覚。何かあったと見えるぞ」

「さて、どうでしょう。わたくし個人としましては、純然な努力にそんなケチつけては欲しくは無いのですが」

どこからか漏れていた自国の機密情報に、ポンコツ共めと心中詰りながらセシリアはすつとぼける。

マドカは徐々に殺気を出しながら、口角を上げる。

「まあいい。ここらで私は帰ろうと思うが……ソレを許すお前でもないだろう？ 遊んでやろう、そして思い知れ、どれほど足掻こうとお前は私の足元にも及ばない」

「安い挑発……ですが帰すつもりが無いのはその通りですわ。」

乗って差しあげますわよ、その誘いに！」

2人の女は同時に己が青を呼び出す。

「ブルー・ティアーズ！」

「サイレント・ゼフィルス！」

二機のBT兵器搭載ISが向かい合う。

銃口も、ビットも、敵意を込めた視線もその全てが相手へと向けられた。

—————

「失礼しました。IS装備開発企業『みつるぎ』涉外担当・巻紙礼子と申します」

ふわりとしたロングヘアが似合う美人、巻紙はにこにことした笑みを浮かべて自己紹介した。

「これはまたご丁寧に。織斑一夏です」

聞いたこともない企業の名に訝しみながらも、一夏はとりあえずの礼儀としてカツラを剥ぎ、座る姿勢を正してお辞儀する。

「それでまあ、本日はどのような…」

「はい、織斑さんには非我が社の装備を使っただけなかなと思ひまして」

ああ、なんだ。いつものか。

そう判断した一夏は警戒を解き、気怠げな視線を目の前の巻紙に向けた。

黒い鳥に装備提供を名乗り出る企業は後を絶たない。夏休み中はそういう人たち関連の連絡を来ないように手回しするぐらいに多いのだ。



無銘時代から多種多様な武装を使いこなす一夏が振るう武器に加えられる事によって見込める広告効果は相当高いようで、加えて表向き無銘の開発元である倉持技研が武装を開発していないため、ならば我が社がというお誘いが山のように来ていたのだ。

「せっかくお越しいただいた所悪いのですが、俺は今コイツの武装に不満は無いですよ」

「そう言わずに！我が社の追加装甲や補助スラスタは他のどの製品よりも優れた性能をしていますので：それにもし壊れても我が社の優秀な社員により万全たるバックアップを保証致します！」

そうは言われてもな。

一夏としては、正直に意見を言わせて貰えばこれなのだ。

緊急時に使えないのは困ると、IS用の武装を元ACのこの機体で使えるかどうかのテストを行った事があるが、結果としては使えはするのだがまあ察しろなものである。

動かすマニュアルは分かっているしそこまでのロストテクノロジーではないが、IS用の武装はACにとってはある意味でオーバードウェポンと同じなのだ。

ACは様々なアセンブルを組む事が出来る。

それはひとえに、それぞれのパーツの規格が統一されているからである。

だからこそ一夏のようにミッション毎にアセンブルを変えるといった、戦車から戦闘

機に乗り換えるような真似も可能としているのだ。

当然だがIS用の武装はACの規格には合っていない。無論、オーバードウェポンと違い動く理屈や構造が明確なのでそこをマニュアル調節してやれば使えるのだが…

(正直、めんどくさいんだよなあ…ソレ)

使えて損は無いのだろうが、利もない。

わざわざやるぐらいなら同じ系統のAC用武装を使った方が早いし、やりやすいし、正確にこなせるのだ。

……まあAICとか龍砲とか使えるようになるとかであれば、検討したいが。ロマンだよ、うん。

(しかしまあ諦めないこの人は)

ベンチの隣に勝手に座りカタログを広げプレゼンを行う巻紙。

ここまで強引な押し売りをされると、逆に尊敬する。

そう思いながら一夏は一応程度にカタログを眺める。

(レーザーライフル…うーん、威力ならカラサワがあるしな……補助スラスター…今のジェネでも割と動けるしな…)

一応程度と言いながら、それでも性能の比較をしている辺り変な所で律儀な男である。

(なあ、財団としてはどれか気になるものがあるか?……財団?)  
『……』

語りかけても反応の無い財団を気にかける一夏。

「急に長々と申し訳ありません。よければこれジックリと見てください!」

そんな様子を売り時と引き時と見たのか巻紙はカタログを更に2冊ほど取り出し手渡そうとする。

「…ああはい。見るだけなら……」

そしてソレを受け取ろうとする一夏。そこへ——

『やはりか、離れたまえ!その女はISを持つている!』

——財団の叫びが飛んだ。

「!?!」

「ハアアツ!」

受け取ろうとした腕を掴みねじり上げ、一夏をベンチに抑え込む巻紙。

その表情は先程までのものとはうってかわり残忍で獰猛、悪意に満ち溢れたものへと変貌した。

「ハハハ!なんだよ!最大限に警戒していけと言われたからそうしたら、ぜんっぜんチヨレーじゃねえか!!ハハハ!!」

「テメエ……グウ！」

「動けるわけねーだろ、足掻いてんじゃねえガキ！……んじゃお別れタイムだ、てめーの I S となア！」

そう言つて巻紙は四十センチ程の四本足の装置をコールする。

ニタリと笑いながら、それを一夏の右腕にある黒い鳥ダイクレイウに取り付ける。

取り付けられたそれは四本の足を器用に使い待機状態の黒い鳥に自身を固定し、起動する。

刹那、電流にも似たエネルギーが一夏の身体を流れる。

「グ……ア、ギ……！」

歯を食いしばり、痛みに耐える一夏。それを残酷な笑みで巻紙は見下ろしていた。

やがて電流は収まり、装置のロックも解除。痛みも収まり一夏は上の巻紙の顔を見る。

「なんだと……チイ、どうなってんだクソが！」

そこにいた巻紙の、あの悪人然とした笑顔も収まっていた。

代わりに出ていたのは焦り、動揺、困惑。事情はわからないが、一夏からしてみれば間違いなく好機だった。

（『オペレーターینگシステム、緊急起動！』）

「オオア！」

財団により右腕に黒い鳥を部分展開。無理矢理力付くで思い切り上の巻紙を振り払う。

2人揃ってベンチから転げ落ち、素早く体勢を立て直した一夏は狙いをつけるが早く、腕部と一緒に展開したA M / H G A — 1 2 1 で巻紙を撃つ。

ワンテンポ遅く体勢を立て直した巻紙は避けようと右に飛ぶ。瞬間、巻紙の左上腕部が弾け飛んだ。

「ギ——ガアツ——!!??」

痛みに声を上げながらも決して倒れない巻紙。ガサツと肘から下の腕が地面に落ちた。

元より鋼鉄の機動兵器たるA Cを機体によっては撃ち抜ける武装、I S化によって多少威力は落ちていようと人間に向けるには余りにもオーバーな破壊力を持っている。

「……黒い鳥！」

「アツラ……グ、ネ、エ、ツ、!!」

お互い同時にI Sを完全展開。

焼け焦げた戦地、あるいは死を啄む鴉を思わせる黒色。外見の特徴が定まらないことが特徴の機体『黒い鳥』

操縦者の一夏は、左腕で銃を構え、ダラリと右腕を下げた。

黄色と黒という毒々しさを感じさせる警戒色。背中から伸びた八つの装甲脚が特徴の機体『アラクネ』

操縦者のオータムは、既がない左腕を抑えていた右腕に、銃を展開した。

もはや話し合いに、交渉に、言葉など既に意味をなさない。

眼前の、己が瞳に映る存在に殺意を向け、構える。

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

## 07104 アラクネ

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

【システム スキャンモード】

NAME:Arachne

KE:1318

CE:1226

TE:987

R ARM UNIT:gatling gun (KE)

L ARM UNIT:

UNIQUE UNIT:armored legs (KE)

UNIQUE UNIT:laser net (TE)

(……右腕の武装はどちらも弾かれるか、幸い肩も左腕も貫通するな)

先程までのふやけた頭を一気にバトルモードに切り替え、一夏は目の前のアラクネを見据える。

『しかし、ここまで近づかれるまでISコアに気づかなかった僕も僕だけど、君も平和

ボケしすぎたんじゃないかい?』

(返す言葉もねえよ……グウツ!?)

財団の言葉に反応しながら、一夏は右腕を走る痛み顔に顔を歪める。

(財団、バイタルチェック)

『さつき抑え込まれた時と、反撃する時で無茶な動かし方をしたせいかな』  
 癖になるかもしれないから早めに医者にかかるのが、まあ賢明かな』

少なくとも今は右手武装は役立たずと。なら、早めにケリをつけないとな。

財団の分析に一夏はそう判断し、目の前のアラクネを見据える。

(クソがアアア……このクソガキがアアア!!!)

向かい合うアラクネ<sup>巻紙</sup>…否、オータムの脳内は怒りで沸き立っていた。

本来ならば抑えつけ、あの装置をつけた時点で彼女の目的はほぼ達成したようなものだ。  
 だ。

剥離剤<sup>リムーバー</sup>

先程の抑え込みの際に彼女が使った装置。

ISを強制的に解除させてコアのみの状態に剥離させてしまう対ISの恐るべき兵器だ。

それを使い黒い鳥を奪取する予定だったのだが、実際いけるとこまでいった筈なのだ



が、どういうわけか奪えなかった。

それどころかISの展開、反撃を許し左腕を奪われる事態。

以前に女権団の刺客に対し力による反撃を行った事を鑑みてISの潜伏モードを初めとした隠蔽策はいくつも講じた筈なのにそれでなおこの状況にまで持ち込まれてしまった。

今はISの操縦者保護機能により大量出血を抑えているがそれも時間の問題。

彼女が今やるべき事はここから一刻も早く脱出する事。

「ぶっ殺してやる……」

理性ではそうとわかっているが、感情の方はここまでの事をしてくれた一夏への殺意で溢れている。

プライドが高く、直情的な彼女にとっては許せない状況だった。

「おい、巻紙さんよ」

「……あ?」

怒り心頭のオータムに左手の銃を向けながら一夏が語りかける。

「一応だから言ってる……投降しろ。そして洗いざらい吐け。そうすりゃ命の保証はしてやるよ、その左腕とかな」

「……ハッ」

一夏の投降勧告にオータムは笑い吐き捨てる。

そして――

「この私をナメ腐ってんじやねえぞクソガキヤア――ツ!!!」

――憤怒の形相と共に怒りの言葉を叫んだ。

【システム 戦闘モード】

（『スキヤン結果分析完了、あの装甲脚はそれ自体が近接武器であると同時に実弾兵装。加えてレーザーネットは威力よりも捕縛性に重きを置いている。注意したまえ』）

（右手の銃は？）

（『数が当たれば痛いと思うけど、そこまで気にするほどでも無いと思うよ』）

財団の言葉を耳に入れながら左腕のオートクルーザーネットを切り裂く。

激情に駆られ八本の脚のうち二本の銃口を向け突っ込んでくるオータムに対し、一夏は後ろへブーストしながら肩のSL/KMB-118Hを発射する。

その挙動を見て、オータムは高速で接近するミサイルに狙いを合わせ発砲。撃ち落とされたミサイルは空中で閃光と共に轟音を上げ爆発。

それを囿に一夏はアラクネの左手に回る、わざわざマシンガンを持っている右手に回

る必要はないからだ。

無論それはオータムも承知。予め向けておいた装甲脚の銃口から実弾が放たれる。同時に一夏も再度持ち直した左手のバトルライフルのトリガーを引く。

キンと高い音が響き、黒い鳥の装甲に実弾が跳弾する。

ズガンと鈍い音が鳴り、アラクネの装甲を弾丸が貫通する。

「！」

「ハ、どうしたア！そっちも片腕使えねーかよオ！ヒャーハハハ！」

一度、距離を取り直そうと思った一夏に、被弾も恐れずオータムが装甲脚を振り上げ突っ込んで行く。

時間をあまりかけられないのはお互い同じ、しかしその度合いはオータムの方が上だ。

既に重傷を負わされてるオータムからすれば最早多少のダメージは関係がないらしく、捨て身にも近い戦法となっていた。

「…なら乗ってやるよ」

そう呟くと同時に後方にブーストをふかし、こちらもまた突っ込む一夏。

ニタアと狂暴な笑みを浮かべ、オータムは装甲脚を思い切り振り下ろした。

ガキーン！

「なんだと!？」

しかしその笑みはすぐに驚愕の表情へと変わる。

振り下ろされた装甲脚を、一夏は右手のAM/HGA-121のナツクルガードで殴りつけるように防いだのだ。

関節を極めた時の様子を見るに右手は動かないか、少なくとも咄嗟に動かせるものではないと思っていたオータムには予想外の行動だった。

「一緒にするなよ。オバさんに比べれば元気で頑丈な若者なんてな!」

勿論、強がりである。

捻られた際に痛みで動かなくなった右腕を、一夏はパワーアシストで無理矢理動かしたのだ。

だがそれでも虚をつければ、隙は出来る。一夏はガラ空きのアラクネの胴体にバトルライフルの銃口を密着させる。そして――

「ガアアアアアッ!!」

――連射!連射連射連射!

眩いマズルフラッシュと共に放たれる成形炸薬弾はアラクネの装甲を貫き、機体とオータムに悲鳴を上げさせる。

【左腕 残弾30%】

「グ……ガ……ア……」

撃たれた衝撃でフラフラと後退りするオータムに一夏は斉射を行うべく、バトルライフルとミサイルを再度構える。

構えた一夏の目線の先にいたオータムには、未だ燃え盛る怒りと共に悔しさがにじみ出ていた。

「今回は引いてやる……次は殺す、絶対になア……!」

その言葉と共にプシュツ!とアラクネから圧縮空気の音が響く。

光を放ち始めたそれは、数瞬後に大爆発を起こした。

「グアツ!」

【機体が深刻なダメージを受けています 回避してください】

バイザーに【STAGGER】と表示され、衝撃で一夏は身動きが取れなくなる。

光が収まり、硬直も抜けた後にオータムの姿は無く、一夏のみが残っていた。

「……今のは」

『ISのコアを取り出して、装備と装甲だけ自爆させたみたいだね』

「んな芸当でいいのかよ……」

『まあ、ACには出来ない芸当だねえ』

ま、見ての通りの奥の手だけだよ。と財団は付け加え、周囲の分析を行う。

『スキヤン完了。周辺に敵影は無いよ』

「巻紙は？」

『IS無しで君に挑むほど考え無しでは無いようだね』

「そうか…解除」

【作戦目標クリア システム 通常モードに移行します】

ISを解除し地面に降りる一夏。

「…痛……！」

左腕で右腕を抑え、痛みを堪えながら先程地面に転がった妙な装置を拾いに行く。

「しかし、コイツは一体なんなんだ？スタングアンなら巻紙があんなリアクションする訳ないし……」

『詳しくは調べて見るまでわからないけど、どうやらそのへんなのはISコアを抽出する装置みたいだね。ま、軽く抵抗させてもらったけど、さ』

「…サンキュ」

敵にすれば厄介で手強いことこの上ないが、味方となればこれほど頼れる存在もいない。そう思い一夏は礼を述べる。

『別に礼はいいさ。それより、回収し忘れてるものが有るんじゃないかい？』

「……アレ、か」

一夏の視線の先に転がっていたのは巻紙：オータムの左腕の肘から先である。

A Cを操る傭兵と違い、I Sを操る操縦者は乗れる者が限られている。そして限られた中から国や企業の後見を受けて初めて操縦者足り得るのだ。少なくともそこから拾った機体で参戦できる傭兵業界とは違う。

そして、乗りこなす為の専門的な教育をなされているなら、ほぼ確実にメデイカルチェックを受けている。I S学園にしろそうじゃないにしろだ。

ならば、この腕から採取できる情報はでかいはずだ。

『それにしても左腕を奪うとはね……まさに、君は彼女にとつてのJというわけだ』  
「なるほど、じゃあアイツのことが好きな奴が俺を殺しに来ると」

『彼女の方から殺しに来そうだけどね……というか、君は僕とJとの戦いでそういう気持ちがあったのかい？』

「……2割ほどはな」

そんな気持ち。持つだけでも烏澁がましい。そう一夏は自嘲する。

マギーの気持ちはよくわかっていたし、それを叶える手段は財団でなければなし得なかった、なにより彼女を戦場に舞い戻らせたのは己の強さだ。

そんな事は委細承知だ。だがそれでも、俺はマギーを殺したくはなかった。

ファットマンが運び、マギーが指示し、俺が戦う。そんな日常が俺は好きだった。

依頼主から騙されて多数の未確認兵器との追いかけてこから生還した際に、ファットマンが今日は生き残った記念日だなど笑ったあの日が好きだった。

レイフやハワードと共にちよっとしたパーティーを開いた際にお酒が入って楽しそうなマギーに無理矢理お酒を飲まされたあの日が好きだった。

その日常を崩したのはマギーだ。

だがその原因となったのは……まごう事なく俺、織斑一夏だ。

わかっている。マギーにとって、戦場こそ魂の場所たる彼女にとって一番幸せな結末がアレなのだ。

だからこそ俺は、本気で挑み、殺した。

だがその結末に水を差したのは財団だ。あの時、あの場所で財団は踏みにじった。

俺は怒った。マギーとの戦いの疲労など、心労など一気に吹き飛んだ。怒りに任せて財団が持ち込んだ多数の兵器やスカベンジャーを叩き潰した。

しかし、ああまで怒りを抱いた相手である財団と今こうやって談笑し、協力しあうとは人生とは不思議なものだと思う。

そんな事を考えながら一夏は左手だけで器用に携帯を取り出し、プツシュ。

宛先は勿論、生徒会長の楯無だ。彼女はこの学園の警備に精通しているし、一夏からすれば直属の上司だ。



(平和ボケ、か……)

耳元で響くコール音を聞きながら、先程の戦闘時に放たれた財団の言葉を思い出す。確かに自分は、少し緩んでいたのかもしれない。こんなんであの世界に帰ったら一発でお陀仏だ。

(そういえば。これが初の、互いにISを使った殺し合いか……)

しかし、出るのが遅い。まさか会長の身にもなにかあったのだろうか――

『ハイ、もしもし』

「あ、よかった。もしもし織斑です……あれ？その声は……虚さん？」

『ええ、今会長は手を離せないの。丁度よかった、織斑くんにも伝えるわ』

「……」

『以前貴方を襲った大量の無人ISを狙ってる奴等が出てきて、今警備と交戦しているのー！』

「…なんだって!？」

――

『ターゲットは搬入ドックに向かって逃走中!……ダメです!抵抗が激しく追跡できませんー!』

「最低限交戦できる人数を残して別ルートで周りなさい!」

生徒会室では楯無が緊急事態に対し、指示を飛ばしていた。

その様子に普段の余裕は無く、焦りのみが表れていた。

「会長」

「何！今忙しいの！」

「織斑君から連絡です。第3アリーナ近くの休憩所で所属不明のISと交戦したと……」

「ああもう次から次に……織斑君は無事？」

「はい、ISを撃退し相手の左腕を……」

「ならいいわ、怪我してるようなら医務室に行くように伝えてちょうだい！」

虚による一夏からの連絡を切り、再び指揮に専念する楯無。彼女の使命として学園の

生徒の命は絶対を守る為にも、まずは今学園内で暴れている組織……亡国機業の対処に追

ファンタムタスク

うことを優先したのだ。

（全く、最近平和ボケしてたかしら……！）

ISまでもがこの学園に潜入し、騒ぎを起こしていることが判明した以上何が起こっても不思議ではない。

楯無は事態の大きさに思わず歯噛みした。

## 07105 サイレント・ゼファイルス

「ハアアアーツ！」

「フーン！」

一夏がオータムと激戦を終えた同時刻、アリーナ前の地上10メートルでの戦いもまた佳境を迎えていた。

（強い……！）

マドカの技量は遥かに高い。未だ自分が不可能なBT兵器が高稼働時に可能な偏光制御射撃を可能にするぐらいに。

サイレント・ゼファイルスの基礎データにブルー・ティアーズのデータが使われているのを含めて、認めたくは無いが遠距離での撃ち合いとなれば自分は負ける。

セシリアはそう確信していた。

（面倒な……！）

セシリアの強さは想定以上だ。少なくともデータ以上に。

データで見た限りでは銃撃戦に持ち込まれても楽に勝てる相手だった筈だが、フレキシブル偏光制御でミサイルビットを撃ち落としたのを見た瞬間、信じられない事にレーザラ

イフルを背中中のジョイントに納め、左手をビームマグナムに、右手を金属ブレードに持ち替え接近戦を挑んできたのだ。

その咄嗟の判断にマドカは余裕の笑みを一瞬消した。

実の所、セシリアの判断は間違えていない。

サイレント・ゼフィルスと違い、ブルー・ティアーズのビットはAEO Sによりオートで動かす事が出来る。

同系統の相手で撃ち合いで負けるのなら、相手のビット操作能力を奪うために近接に走る事は有効な手の一つだ。

無論、ずっとオートという訳にもいかない。

状況によつてオペレーションや、マニュアル操作をしていかなければいけないが、それでも目の前の相手に集中しながらビットとの同時攻撃を行える。

何せ相手は格上、多少の無理無茶無しで倒せるものではない。

「踊りなさいな！」

セシリアは左腕を横薙ぎに振るい同時にビームマグナム『スターブレイズmkⅢ』のトリガーを引く、連射された光弾は扇状に広がりマドカの左右への逃げ道を防ぐ。

「フッ！」

それに対してマドカは下への回避を選択し、上空のセシリアに狙いを定めようと右手

の銃剣ライフル『スターブレイカー』を構える。

「ヤア——ッ！」

「チツ…」

そこにセシリアがライダーキックの体勢で突っ込む。

マドカは舌打ちをし、銃剣を引っ込めセシリアの背面に回るように急旋回で回避行動をとる。

ガキイイーン!!

マドカは銃剣を振りかぶりセシリアの背中に叩きつける。

それを含めて予想していたセシリアは右手の金属ブレード『デュランダル』を巧みに使い背面受けて銃剣を防ぐ。

(オペレーション ブラボー！)

一瞬間まったマドカにセシリアのビットが光弾を発射し仰け反らせる。

その隙にセシリアは左回りで振り返り同時にミサイルビットを発射、それはマドカに目掛けて飛ぶかというところで爆発した。

(爆炎を圃にする為に自ら撃ち落としたか…)

踊るような銃撃、舞うような剣技、戦場をステージか、それともお遊戯会と勘違いしてるのではないかと思わしながらマドカはセシリアを待ち構える。

「……上か」

「その通りですわよ!」

左手のビームマグナムも金属ブレードに持ち替えたセシリアは二振りの煌めきを思い切り振り下ろした。

それに対抗してマドカは左手にピンク色のナイフを展開。銃剣と交差させセシリアの斬撃を受け止める。

二機はそのまま地面に落下。砂埃が舞うが、すぐさまに地上で始まった激しい剣戟により吹き飛ばされる。

方や双剣、方や銃剣とナイフという違いはあれど同じ二刀流がぶつかり合う。

セシリアの剣閃は流麗にして華美。いかなる時も貴族たる優雅さを持ち合わせた高貴なる者の剣。

エムの剣閃は質実にして剛健。邪魔なものを力づくで潰し、殺し、黙らせる闇に生きる者の刃。

(……おかしい)

マドカは訝しむ。

なるほど、憎らしいが織斑一夏が開発したA.E.O.Sの有用性は認めよう。

隠蔽したサイレント・ゼフィルスに気付くセシリアの素質もだ。

だが、ありえない。

以前セシリアのデータが送られてきたのは8月の終わりの週だ。そこから考えるにあたってこの成長率はありえないのだ。

例えるなら、50メートル走10秒がいきなり5秒に縮むようなもの。そんな成長、あり得ていい筈がない。

(お前は一体……なにを秘めている……！)

「ハアアアッ！」

マドカはその思考をそのままナイフに乗せ、切りつける。

身をよじる形でセシリアは躲し、反動を活かして反撃に移る。

(まだ行ける！もつと行ける！更にいける!!)

セシリア自身もまた、今の自分が変だという事に気付いていた。

そうだ。撃ち合いに持ち込まれようと無かろうと自分は負ける。技量の差も、機体の差もそれを如実に表している。

今なお戦闘不能となっていないのはひとえに相手が手を抜いているからに過ぎない。

だがそれでも、私は勝つ。

この想いを無理だと、ただの世迷言には思えないのだ。

不思議なものだ。

普段であれば避けられない筈の銃撃が躲せる。

普段であれば見えない斬撃が見える。

普段であれば当たらない攻撃が当たる。

ならば――

「――普段であれば勝てない貴女にも、勝てる！」

「これでエ！」

その決意をセシリアは剣に乗せ横一文字に振るう。セシリアから振るわれた剣筋にマドカは銃剣を差し込み防ぐ。

「終わりイ！」

「グ――ウウウ!!」

そこに空いたもう一振りの剣から放たれる縦一文字の斬撃がマドカの体を、サイレント・ゼフィルスを切り裂きシールドエネルギーを一気に削る。

この戦いで初めてセシリアがマドカに与えたまともなダメージである。身体に走る衝撃に、マドカは思わず声をあげた。

「まだまだ行きますわよ！」

そう言い追撃しようと剣を構えるセシリア。

「雑魚が…遊びは終わりだ！」



しかし、マドカの呻き声はとうに消え、サイレント・ゼフィルスのバイザーは操縦者の殺意を示すように光った。

「フーン！」

「セイッ！」

銃剣を袈裟切りに振るいマドカはセシリアと鏢迫り合いを行う。

ここまででなら今まで展開された剣戟戦であった、しかしここからが違った。

マドカはそのままの体勢で銃剣のトリガーを引き発砲、放たれたBTエネルギー弾は偏光制御されセシリアの頭上から着弾する。

「キヤア!!」

その威力によるめいたセシリアの隙をマドカは見逃さない。左手のナイフを逆手持ちに切り替えセシリアの右腕から剣を叩き落とす。

次に左腕からも同様に剣をはたき落とすと右、左とハイキックを浴びせ、更にPICで体を制御し空中で一回転、引き絞られた足から放たれた回転蹴りはセシリアの顔面を捉え吹き飛ばす。

「カッ……ハッ……！」

吹き飛ばされたセシリアはアリーナの壁にぶつかり止まる。

「死ね」

無論、そこで攻撃の手を止める程マドカは甘くない。

銃剣の弾丸をエネルギー弾から実弾に切り替え、ビットとの斉射を壁にもたれかかっているセシリアに浴びせる。

「ガ……ギ……う……ア”ア”ア”ア!!」

ブルー・ティアーズの装甲が、シールドエネルギーがみるみるうちに剥ぎ取られていく。

身体に浴びせられる衝撃にセシリアは悲鳴をあげる。

「……」

銃撃が終わり、ブルー・ティアーズが吹き飛ばされた場所にもうもう煙が上がる。

ビットと共に上昇したマドカはその様を見下ろしている。その様子に今までのような隙は一切無い。

「……やはりか」

ギヤウツ

巻き上がる煙を貫き、戦意を持ってこちらに向かうレーザーをシールドビットで防ぐ。

「……なにが、やはりと?」

ギヤギヤウウウツ!

「!?」

マドカがセシリアのレーザーライフルを防ぎ、継戦を確認した正にその瞬間、地面と平行に伸びたレーザーがエムの真下でほぼ直角に曲がり着弾した。

それはまさしく、BT兵器の偏光制御<sup>フレキシブル</sup>。目の前で見せられたそれを、セシリアは土壇場でものにした。

「ケホツケホツ…どうでしょう？ 貴女が見せたお手本通りに行きましたか？」

軽く咳き込みながら、セシリアはその可憐な顔に誰しも見惚れる笑顔を表す。

今のマドカとの状況を覆す決定的な手にはならない。しかしセシリアは、マドカに矢報いることは出来た。

「フン、文字通り煙に巻けばいい物を、死にたがりなのか？」

嗜虐的な笑みと浮かべてマドカが問う。

「先程の貴女の言葉を返しますわ、『ソレを許す貴女でもないでしょう？』」  
「フツ…その通りだ」

セシリアはレーザーライフル『スターライトmkⅢ』を

マドカは銃剣ライフル『スターブレイカー』を

お互いに銃口を向けながら口を動かす。

エムはこの状況になってもなお勝ちを、生存を、そして未来を諦めないセシリアの瞳

を見た。

「…喜べ、先程の言葉は取り消してやる」

「アラ…では尻尾を巻いて逃げろと？」

「ハツ、馬鹿が。足元にも及ばないの方だ」

「……」

「足元に及んでいるのは認めよう…お前は、私の足元で潰される虫ケラだ。今からな…」

素晴らしいマドカは銃剣の弾丸を再度エネルギー弾に切り替える。

セシリアに向けられた銃口に光が集まって行く。恐らくは殺す気だろう。

「蛮勇が過ぎたな。性能も技量も劣る貴様が、挑んでいい相手じゃ無かつたんだよ…ゴミのように燃えろ」

「……別に蛮勇で挑んだつもりはありませんわよ…」

「…ほお？」

セシリアの口から放たれたつぶやきに、マドカは反応を示す。

「性能で負けていようと…技量で負けていようと…あの時あの場所で戦えたのは私一人だけ…なら、貴族として民草を守る為に立ち上がるのは義務でしょう？」

セシリアがマドカを見つけた時、あの場所には多くの戦えない人々がいた。だからこ

そ彼女は自身を囿に誘い出した。

例えそれが、命を落とすとしても。

「…没落貴族がよく言う。身も心も平民となれば生き延びられたらうにな」  
 「それが出来ないから私はセシリア・オルコットですの……それに、貴族としての責務だけではありませんわ…だって、格上だからって逃げたくないんですもの」

セシリアには自身が定めたライバルが2人いる。

1人の名前はフアンリンイン鳳鈴音。

クラス代表戦から始まった彼女との親交は深く、今や互いに親友と呼べる仲だ。

クラス代表戦、タッグマッチ準決勝戦、そしてその他の放課後での模擬戦闘と何度もその武器を交わしてきた。

胸を張って見える。彼女は最高にして一生のライバル親友だと。

もう1人の名前はおりむらいちか織斑一夏。

入学当初のやりとりで険悪となったが、無人機戦、タッグトーナメントで共闘、その後も親交がある友だ。

今にして思えばあの時の私はなんて浅ましかつたのだろう。

家を守る事だけに執着する事で、周りがなにも見えていなかった自分は当たり前のように孤立した。

膨れ上がったプライドから始まった暴虐なる振る舞いは自身の立場を容易に脅かした。

取り戻すには遅く、これからも私は孤高のクラス代表なのだろう。

だが、それでも。

一緒に居ようとしてくれる友がいた。それが彼だ。

無人機戦から始まった付き合いでは、お互いクラスから浮いていたことも相まって彼はよく私に話しかけてくれた。

あれだけ失礼な態度をとって何故私と親交を持つとうとするのかを聞いた事がある。

あの時一夏さんは「よく言うだろ。『昨日の敵は今日の友』ってな」と言っていたがなるほど、と彼の過去を聞いて思ったものだ。

この2人を、私は追い抜きたい。

私はそう思っている。

そして優先度が高いのが一夏さんだ。

彼はこの学園の卒業と同時にこの世界から居なくなってしまう。

だから彼があちらに行く前にもっと強く、彼が示した強さを彼に証明できるほど強く、もつともつと——

「私は強くなりたいだけですのよ。多少危険な真似をしても、ね」

「ハハハ、傑作だな。強くなるうと身の程知らずに挑んで死んでしまうのだからな」  
笑わせてもらった礼だ、コイツを受け取れとマドカはトリガーに指を掛ける。

それを見たセシリアはビットとライフフルで少しでも相殺しよう構えた。

「…死ぬ」

セシリアに死を運ぶ凶弾が放たれるというその瞬間——

ズガアアン!!!

風を切り、音を抜き去った徹甲弾がマドカの右手を撃ち抜いた。

「グ——アアアツ!!……今のは…狙撃……だと…!?」

サイレント・ゼフィルスの右腕部装甲を破壊し、絶対防御が発動する。更にサイレント・ゼフィルスのハイパーセンサーはエムに追加の情報を教えた。

「あああああああ!!!」

「後ろだと…!?」

「あたしの親友に…なにしてたんだああああ!!!」

叫びながら猛スピードでマドカに突撃する甲龍<sup>!!</sup><sub>ジェロン</sub>。それを操る鈴は狙撃のダメージで

身動きが取れないエムを勢いそのまま、力任せに双天牙月で薙ぎ払った。

「ガアアアアアツ!」

叩き落とされたマドカは土煙をあげながらセシリアから離れたアリーナの壁に激突、

ようやくその勢いを止めた。

「ごめん遅くなった！大丈夫…じゃ、ないよね…」

壁に寄りかかるセシリアをマドカから守るように降り立つ鈴。

相手を見るために振り返ることはしないが、それでも表情は友を傷つけられた憤りに満ちていた。

「…ラウラさんですわね？」

「そうよ。ラウラの奴、ヤケに慌てて織斑先生を探していたから何事かと思えばこんな事になってるなんて…！」

「…礼を言いますわ。ありがとうございます、鈴さん親友」

心からの感謝をセシリアは述べる。

顔を見ずとも、その言葉に鈴は笑顔で答える。

「ええ！……さあ来なさい、セシリアのパチモン！今度は私が相手よ！セシリアには指一本触れさせないんだから！」

「パチモンって……アレ、英国ウチの姉妹機なんですよ…！」

「え？あ、ごめん……さあ来なさいIS泥棒！」

「締まりませんわねえ…！」

ガラリ、音を立て瓦礫の中からマドカが現れる。撃ち抜かれた右腕はISスーツがむ



き出しとなっており、幾度となくセシリアに傷をつけた銃剣はその手から消え失せていた。

しかしその視線はセシリアにも鈴にも向けられておらず、セシリアから見て左後方のみを見ていた。

（あの方向は――）

マドカへの警戒を鈴に任せ、セシリアは視線の先を辿る。

（――あの方向は確か、狙撃弾が飛んできた方向。狙撃手を探しているのかしら……？）

再び視線をマドカに戻すと今度は誰かと通信しているようだった。

「――スコールか、ああ……チツ了解した、回収し次第帰投する」

この騒動の黒幕だろうか、スコールという言葉を聞き取ったセシリアは思考する。そんなセシリアを背中に、鈴はマドカへの警戒を緩めない。

視線を動かして2人を一瞥し、マドカはビットを自身の近くに寄せる。

「……フン」

その一声と共に6基あるビットの内3基を地面に、もう3基を鈴に向けビームが放たれる。

「セイヤツ！」

向かってくる分は鈴が龍砲で撃ち落としたが、マドカとサイレント・ゼフィルスは地面にビームが放たれた事により発生した煙に紛れて消えた。

「……終わったの？」

「……どうでしょう、ね……左後方、警戒を」

ハイパーセンサーに表示された情報から読み取った通りの二機のISが2人の前に降り立つ。

「無事かセシリア！ 鳳！」

先に降り立ったのは紅のIS 『紅椿』。

操縦者の篠ノ之箒はすぐに駆け寄り、声をかける。

「財団、スキャン頼む」

次に降り立ったのは黒のIS 『ダークレイヴン黒い鳥』

操縦者の織斑一夏は辺りを見回して索敵する。

「私は大丈夫、でもセシリアが……！」

「……かなり打ち付けたな、これは。直ぐにでも医務室に行ったほうがいい」

「……もうこの辺りに敵はいないみたいだ。でもセシリア、装甲は解いてもISは解くな。操縦者保護機能を維持したまま行くぞ」

一夏の言葉に従い、ISスーツだけになる。その瞬間、緊張の糸が切れたのか視界が

一気にブラックアウトした。

「え!?!…セシリア!セシリア!!」

響く鈴の声を聞きながら、セシリア・オルコットは意識を手放した。

## 07-06 病室内ではお静かに

「……ん」

知らない天井だ。確か日本のサブカルチャーではこう言うのだったか。

そんな事を思いながらセシリアは目を開く。左の窓から見える空は暗く、浮かぶ星達が夜だという事を告げていた。

どうやら今の自分はベッドに寝かされているらしい。

「おはよう……いや、おそようかな……」

右からかかる欠伸混じりの声に首を向ける。

「今、は……？」

「……時間は11時だ。よく寝てたよお前」

そこにいたのは一夏だった。ベッド脇の椅子に腰掛ける彼は右腕を三角巾で吊り、左腕で書類を眺めている。

そうかなるほど。ここは医務室か。

徐々に覚醒する頭が倒れる前の記憶を鮮明に再生する。セシリアは自分があの後倒れ、そして医務室まで運ばれたのだと理解した。

「ふっ……ぐっ……ん……！」

「無茶すんなよ。脳が過負荷を起こしてぶっ倒れたんだから……」

呻き声を上げながらセシリアは上半身を起こす。目線の高さが大体一夏と同じになり三角中に目を向ける。

「どうしたんですの、それ」右腕

「コレか？……んん、ああもう何処から説明すりゃいいんだ」

パサリとベッドの上に書類を放り、ポリポリと一夏は頭をかく。

「どうやら、サイレント・ゼファイルス以外にも何かあったようだ。セシリアはそう判断し、一夏の説明を待つ。」

「えつと……あーそうだ。セシリアとサイレント・ゼファイルスの交戦も含めて大きな事件が3つ起きてさ」

「うん、よしじゃあまずはこの怪我の方から説明するぜ。そう言い一夏はコホンと咳払いをする。」

「えーつとな、まあ簡単に言うとな俺もお前と同じで不審なISと交戦したんだ」

「なんですすって!?!」

軽く出た一言にセシリアは目を見開く。まさか、一夏も襲われていたとは。

「その右腕はその時に?」

「正確にはちよつと違うな。ソイツは、IS 関連企業の社員のフリをして俺に近づいてきてな。不甲斐ない話だけどき、俺ソイツに取り押さえられて…あの、IS からコアを剥離させる…」

「剥離剤……！」

「ああ、知ってたんだ。なら話は早いぜ、俺は剥離剤を黒い鳥につけられて IS コアを分捕られそうになつたんだ」

「幸いなことに財団が干渉を跳ね除けてくれたお陰で何一つ奪われなかつたがなという一夏の発言にセシリアはホツと胸を撫で下ろす。

それが友の愛機の無事によるものか、はたまた自らが超えるべきものの喪失ではない事によるものかは…彼女のために言わないでおこう。

「俺が戦った IS の名は『アラクネ』。蜘蛛の名の通り八本の脚を持った IS だ」  
 そう言いながら一夏は器用に左腕だけで携帯端末を取り出し操作。

端末に映された戦闘データには黄色と黒の毒々しい配色の IS がその自慢の脚から弾丸を放つ様があつた。

「隻腕の操縦者とは随分と珍しいですわね…それにしては、ヤケに痛そうですが」

暗に「なにをしたんだお前」という視線をぶつけるセシリアに、一夏は目を逸らしながら答える。

「IS戦になる前に生身で取っ組み合いをしてな、その時に俺は右腕をやられて相手は……な」

「……相手は？」

「言わせんな察しろ」というニュアンスが込められた一夏の言葉を笑顔で無視し、セシリアは続けるように促す。

「……黒い鳥の、ACのハンドガンで相手を撃ちました」

「バカですか貴方は」

観念して白状した一夏の言葉にセシリアは大きく呆れた。

当然だが、ACの武器は戦車を容易く壊す。それはISに変化した今も変わらない。そしてその威力が人に向けられれば——まず原型は残らないだろう。

よくまあ画面の中のこの女は肉塊と化さなかったものですね。

腕を奪われた不運な女ではなく、間一髪で命を拾った幸運な女とセシリアは認識し直した。

まあだからといって友を傷つけた事を許す気は無いが。

「ンンツ……話を戻すぞ。片腕のハンドデもあつて俺はアラクネを撃退。ただ装備と装甲だけを自爆させる曲芸で逃げられちゃった」

「それは随分な無茶を。正気の操縦者なら絶対にやりませんわ」

ISコアが再び装甲に馴染むまでに長い時間がかかる。彼女が起こした曲芸はそのISコアを暫く戦闘不能にしただろう。

「んで、剥離剤と千切れた操縦者の腕を持つて学園の方に戻ろうとしたら…サイレント・ゼフィルスを発見した」

「やはりあの狙撃は一夏さんでしたか」

合点がいったセシリアは呟く。

鈴が助けに来る直前に、ゼフィルスの右腕を撃ち抜き動きを止めた徹甲弾。

アレはどうやらこの男が放つたものだという事にセシリアは深く納得した。

「ああ…。付け足しなんだが、正確には発見したのは箒なんだ。喫茶店が落ち着いてきた事を知らせに来てくれてさ」

…。  
 そういえば一夏さんのISの索敵能力つてリコン無しでは無いに等しかったような

以前チームを組んだ際にされた説明を思い返す。

なるほど、確か箒さんの機体『紅椿』にはエネルギーを増幅する単一仕様能力『絢爛

舞踏』があつたはずだ。

それを用いてアラクネとの戦闘で消費したエネルギーを回復し、すぐさま狙撃特化の機体に黒い鳥を作り替え撃ち込んだという訳のようだ。



「それで次は…私の事件ですか」

「んーまあそれはいいぜ。ラウラや鈴の証言に、ブルー・ティアーズのムービーログで大方確認できてるしな…話すんなら、朝に聞きに来るだろう先生にしとけよ…フワア…」

欠伸をしながら自分の事件を飛ばす一夏にセシリアは、右腕を伸ばし「フン！」と不機嫌そうに鼻を鳴らしながらデコピンをお見舞いした。

「痛つてーな。いいだろ？お前に伝える事が沢山あるし、俺も長居は出来ねーしさあ」  
「……長居出来ない？」

おデコをささする一夏の言葉にセシリアはどういう事と疑問を投げかける。

「ああいや、ほら…俺のコレ右腕の傷って医務室で寝かしつけるほどのものじゃないじゃん？だからさ——」

一夏は自らの説明に合わせ左手でセシリアから見て左側にある窓を指差して笑顔でのたまった。

「——入っちゃったぜ☆」

「一夏さん、それ絶対私以外にしないでくださいよ」

サラリとなされた不法侵入宣言。加えて時刻はとつくに消灯時間なので寮からの脱走も含まれている。

ハアアとため息を大きく吐く。

不思議なものだ。少し前までは男に怯え、男を嫌い、男に憤っていた自分がまるで嘘のように一夏嫌悪した男さんと親しんでいる。

織斑一夏。

普段は穏やかで甘い所があるが、命がかかると途端に容赦がなくなる男。

戦いの中でしか生きられない中毒者ジャンキ。

多分きつと、そんな感じで言い表わせるのだろう。この男は。正直、何故ここまで付き合っているかわからない。

(ま、それでも好きなんですけどもね。……友達として)

クスリとセシリアは笑う。

「……う・続きいいか?」

ため息を吐いたかと思えば、今度は微笑する。

そんなセシリアに一夏は疑問符を浮かべ、話を再開した。

「……んで、3つ目なんだが。亡国機業フアントムタスクって知ってるよな?」

「それはまあ、名前くらいなら……確か裏社会の大手の組織でしたっけ?」

「ああ、その認識で間違ってるねえよ。そして、臨海学校での大量の無人機は覚えてるよな?」

「ええもちろん。肝心な時に気絶していたというのは屈辱以外の何物ではありませんもの」

「回収したソレ全部、ソイツらに奪われた」

「なんですつて!?!」

目を見開き、仰天するセシリア。

一夏は神妙な面持ちで語り出した。

臨海学校での銀の福音との戦い後、襲来した無人機らは一夏が司令船を破壊したこと  
で機能停止し学園職員の手によって回収された。

回収されたソレらは検査の後学園の地下深く、限られたものしか入れないエリアにて  
封印されていた。

しかし、文化祭のこの日に亡国機業の工作員により奪われた。相手は銃で武装して  
り中には撃たれた職員もいた。幸い死人は出なかつたが。

そして、追跡虚しく逃亡を許してしまった。

これらの事を纏めて伝えられたセシリアは頭を抱えた。

「全部つて…確か4567機ですわよ? ソレを全部? ……それに誰一人捕まえられてな  
いなんて…」

ギリイと歯軋りし、怒りを露わにする。

「無能にしても程があるでしょう……!」

「……」

その言葉に無言を返しながら一夏は熱り立つセシリアをベッドに抑える。

セシリアの後頭部を枕につけ、一夏はサイドボックスからミネラルウォーター『おいしいお水』を取り出し、「喉乾いたろ?」と蓋を摘んでフリフリ振る。

「ま、今回はあちらの作戦勝ちかな」

「……作戦勝ちイ?」

ガバリと起き上がったセシリアは顔を歪め乱暴にペットボトルをひったくる。

開けた蓋をポイ捨てせずにゴミ箱に入れるあたりやはり育ちが良さが見て取れる。

「……いやさ、この作戦で動いた亡国からの学園潜入者と思われる者の人数がさ……約250人だつてよ」

セシリアは口に含んだ水を思わず吹き出しそうになり、咳き込む。

「……ハ?」

「俺だつて初めに聞いた時はなにをやつてんだと思つたよ。でもこんな聞かされるとね……」

遠い目で一夏は語る。

流石の彼も、自分になんて事<sup>谷</sup>ない挨拶<sup>先</sup>をして<sup>輩</sup>くれたり、IS<sup>ク</sup>について<sup>ロー</sup>教えて<sup>パー</sup>くれたり、<sup>整</sup><sup>備</sup><sup>主</sup><sup>任</sup>

美味しいスイーツカを教フエえてく店れて員いた人達奈々が全員裏切り者となるとなにも言えなかつた。

傭兵として裏切る裏切らないには慣れていたつもりだが、それはあくまで戦場の話。日常で接していた人間が実はスパイだったなんて事は経験に無く、彼自身傷ついていた。

「……なんですよ、それ」

反則でしょう。セシリアは一言、そう呟いた。

相手の強大さに、そう言うしかなかった。

今回の戦いは、IS学園側の完敗だ。

奪われた無人機だけではない。今まで潜入していた彼女達が得たデータに、それらが一気に抜けたことによる連絡の混乱。そして一夏のように親しかった人の裏切りによる憔悴。

あまりにもダメージが大きすぎる。

対してこちらが奪えたのはアラクネの操縦者の左腕に剥離剤、そして『スコール』という名前。

釣り合っていないにも程がある。

「……なあ、セシリア」

「……どうしました?」

一夏がセシリアに語りかける。そのトーンは先程までのものではなく、少し落ち込んでいた。

「俺さ……平和ボケしてた」

「平和ボケ?」

「この世界に帰ってきて、千冬姉に無事を知らせて、またもう一回あつちの世界に行く方法を見つけて……そしてそのこと全てを話すべき人に話して。やるべき事が終わって後は学園を卒業するだけになって俺は……」

巻紙に取り抑えられた時、一夏は自分が前の動きをしないことを知った。

ACシヨップで強盗に襲われたり、街中で急に銃をブツ放すヤク中から逃げたりとそんな時に出来ていた動きが出来なくなっていたのだ。

たった半年足らずでセシリアは一夏との関係が大きく変わったと思っただけで、一夏は半年足らずでボケていた身体に戦慄し、そして判明した身近な人たちの裏切りにより恐怖していた。

「……俺は、弱くなった」

「一夏さん……」

目に見えて弱った一夏。

こんな時に掛ける言葉をセシリアは知らない。なにを隠そう彼女にはIS学園に入  
学するまでは友達と呼べる存在はいなかったからである。

だがそれでも何か出来ることは無いかとセシリアは考える。何か、そう何か。落ち込  
んだ一夏に出来ることは――

(お母様――！)

――そんな時、ふと蘇る。幼き頃の記憶。

「……一夏さん、そこを動かないでくださいね」

素晴らしいセシリアは一夏を引っ張り、抱きしめた。

「……!?!」

「……昔、落ち込んだ時にお母様にこうしてもらいましたの」

一夏を抱きしめながらセシリアは亡き母との記憶を呼び起こす。急に抱きしめられ  
た一夏はただただ困惑していた。

「……ねえ、一夏さん。確かに貴方は弱くなつたのかもしれないわ。でもそれは当然  
の事ですわ……」

「……」

「だって一夏さん。どんなにあちらの世界に焦がれても元々こちらの世界の住人では無  
いですか。この世界に、平和に馴染んでしまうのは当たり前前の事ですわ」

でも、それでもセシリアは一夏の両肩に手を置き目を合わせ向かい合う。

「貴方は、旅立つと決めたのでしょうか？千冬さんに銃を向けてでも、この世界から消える  
と誓ったのでしょうか？ファットマンという人が待っているのでしょうか!?!…：…なら、足掻  
きなさい」

「セシ、リア…」

「もし貴方が、平穩に浸かつて血の匂いを忘れてしまうなら——私が思い出させて  
あげます！」

肩に置いた手をギュウつと握りしめ、セシリアは叫ぶ。その双眸は炎を宿し始めてい  
た。

「AEOS、<sup>ブルー</sup>Bティアーズ・D—N<sup>ディーネクスト</sup>x…：貴方は友達として沢山のモノを私にくださいま  
した。今度は私の番、私は更に強くなって、貴方を脅かす存在となりますわ…：…！」  
今日のサイレント<sup>亡</sup>・ゼフィルス<sup>機</sup>との戦いは、助けられたとはいえセシリア個人として  
は完璧に負けだ。

しかし一夏は<sup>亡</sup>アラクネ<sup>機</sup>に勝った。それもしばらく戦闘不能に追い込んでの勝利だ。  
故に誓う。更に強くなる。強くなり、一夏も警戒を怠れない程の存在となる。

それはきつと、鉄と硝煙が舞う世界に行く友への最高の贈り物となるから。

「セシリア…：ありがとう。なんかゴメンな、色々とき」



「気にすることではないですわよ。貴方が傭兵であるなら、私は貴族ですもの」  
 高貴な者には相応の義務がある。友に尽くすことは当然の義務であるとセシリアは告  
 げ、一夏の肩を叩いた。

「さて、そろそろ話す事もお終いでしよう？戻らないと千冬さんに怒られますわよ」

「まあまだ大丈夫だろ。それに、あと一つ話さなきゃいけないことがあるんだからな」

『それを話すには、少々手遅れだったみたいだけどねえ』

「「え？」」

今までなにも口を挟まなかった財団から放たれた一言に、2人は病室の入口に目を向  
 ける。

「織斑……そこで何をしている……？」

アレはだれだ？羅刹か？修羅か？もちろん——

「「——お、織斑先生……!?!」」

その姿を確認するが早く一夏は左手をベッドにつき、それを支えに一回転する形でセ  
 シリアの胴体を飛び越える。

セシリアから見て入口側から窓側に移動した一夏は素早く窓の鍵を開けて叫んだ。

「そのベッドの上の書類、読んで………俺とお前で作った最高の機体なんだ、乗りこ  
 なせよ！」

『それじゃあおやすみ、ブルー・ティアーズ』

その言葉と共に一夏は窓から消える。

ガサリと聞こえた音は着地に成功したということだろう。

「全く、怪我人の癖して元気な奴め……目が醒めたかオルコット。おそようだな」

姉弟だなあ。

自分にかかる第一声にそんなことを思いながらセシリアは窓から千冬に目を移した。

千冬も視線を窓からセシリアに切り替え、視線を合わせ口を開く。

「もう日付も変わる。脳が急激な負荷に耐えきれずに倒れたんだ。ゆっくり寝ろ。……

ああそれと、お前達4人がISを無許可で展開したことに関しては不問となった。いい

な？絶対交戦した相手の事を言いふらすなよ？」

「了解しました。ご心配をおかけして申し訳ありませんわ」

とりあえず元気ですよと肩を竦めるセシリアに千冬は沈痛な表情で頭を下げた。

「すまなかった。本来なら、あそこで戦うべきは我々の筈だ。する必要のない怪我を私

はさせてしまった」

「……別に頭を下げてもらうためにしたわけじゃありませんわ。事情は聞きましたし、

先生は早く一夏<sup>ア</sup>さんを追ってください」

「……そうだな。おやすみ、オルコット」

曇った表情を晴らすことなく出て行った千冬を、セシリアは同情の視線で見送る。大  
変なんでしょうね……。

「……」

カサツ……

織斑姉弟がいなくなり、セシリアだけとなった病室で紙の擦れる音が伝わる。

「え……え……!?!」

一夏に言われた通りセシリアは書類に目を通し、そして見開いた。  
その表情は彼女の困惑と歓喜を忠実に写していた。

07-07 セシリアさんは裏表のない素敵な貴族です。はい復唱!

「クソ……クソクソクソクソクソがアアアアアッ!!!」

高層マンションのマンションの最上階。そこは今回のミッションでの亡国機業のアジト。

一流ホテルのスイートルームとすら見紛う豪華な装飾のその部屋に、オータムは獣の唸り声の如き怒りの叫びを上げながらドアを乱暴に開ける。

「うわあーオータムさんー! 治療したといっても、怪我が怪我なんですから安静にしてて下さいー!」

それを追うように部屋に飛び込んできたのは、瓶底眼鏡をかけた青髪ショートの子：サマーだ。

その右手には血だらけの包帯が、左手には救命バッグがあった。

「うるせえ! マドカはどこだ……!」

「えつと……其処つす……」

リビングルームに入るなり、血走った目をギョロつかせるオータムの迫力に慄いたそ

ばかすとベリーシヨートの茶髪が特徴の女：ボタン<sup>B</sup>はテーブルの下を指差した。

「……チツ」

面倒なヤツに、見つかった。

そんな気持ちを抑す事なくマドカはテーブルの下から這い出る。

舌打ちを受け更に激昂するオータムは、右手でぬらりとナイフを抜き、マドカに突きつける。

ナイフの切っ先を向けるオータムと向けられたマドカ。両者はお互いに睨み合う。

「……」

「……」

フウウ…フウウウ…！！

オータムの呼吸音が静寂を支配する中、リビングの隅で本を読んでいた片目を隠れるほどに長い茶髪の女：ナオミ<sup>N</sup>が沈黙を破りオータムに問おうとする。

「オータム様…あのその…マドカに一体どんな御用で…」

「……サイレント・ゼファイルスを寄越せ。寄越せエエ…！」

「ハン、自慢のアラクネがあるだろう…いや、アレは確か、貴様が自ら使えなくしたんだったな」

(どうしてそこで挑発するかな……)

事態を見守るボタンとナオミは同じ事を思いながら、どうにかナイフを取り上げられないか考える。

しかし良案は思いつかず、とりあえずオータムと所属を同じくするサマーに「なんとかしてください」とヘルプアイコンタクトコールする。

その視線を受け取ったサマーは一度深呼吸をしてズイと歩み寄る。

「……オータムさん。例えばファイルスを奪つても今の状態なら織斑一夏に負けますよ」「あゝあ!?!」

「巻紙玲子として潜入したオータムさんに、織斑一夏は完全に油断してました。でも相手は、その状況からオータムさんにアラクネを捨てさせるまでに至りました」

ゆっくり、諭すように述べながら、サマーはオータムの右手を掴みナイフを抜き取る。

「今度は、そうはいきません。我々が確認した中では、彼にとつて今日の一件がISを使った初めての殺し合い。きつと次は対策を練っているはずですよ。」

次に必ず織斑一夏を潰すというなら……今はゆっくりと休んでください」「グウの音も出ない正論に、「クソオ!」というテーブルを叩く音が返る。

ギチギチと音を鳴らす程に拳を握りしめるオータムは再び視線をマドカに戻す。

「テメエ知つてたのか……?」

「……」

「なんとか言えよ……！剥離剤リムーバーが効かない事を知ってたのか、あ、あ！！」

今回の計画では、まず本命はIS学園地下の無人機の奪取、そして次に黒い鳥ダークレイヴンの奪取だ。

肝心要の所はこれ以上無いほどに成功しているが、次点計画は完全に失敗。貴重なISを再起不能としてしまう大損害だった。

そして、この次点計画の詳細を企画し、剥離剤を用意したのは他ならぬマドカであった。

「……知らない、といっても信じる気は無いだらう？」

「……ハッ。……ツザケてんじやねえぞぶち殺す！」

惚けてるのか、それとも本気か。どちらにせよバカにしたマドカの態度に、オータムの顔色は再び忿怒の赤に染まり、その首振り切らんと右腕を伸ばす。

「やめなさい、オータム。うるさいわよ」

バスルームからの言葉に、オータムの手が止まる。

「スコール……！」

「怒ってばかりいると老けるわよ。落ち着きなさい、オータム」

バスルームから出てきた声の主は美しい容貌の女性だった。薄い金色の髪が、明かりに照らされてキラキラと光を放つ。

彼女はスコール。この作戦におけるチームリーダーのような存在だ。

スコールはバスローブのままソファアーへと腰を下ろす。

そんなスコールを、オータムは悔しそうに見つめる。

「お前は……知っていたのか? こうなるということをも」

「いいえ、まるで想像してなかったわ。そしてそれはマドカ<sup>エム</sup>も同じ。アレが本来ISに効くことは私が保証する」

「だつたらどうして……」

「わからない。でもそれだけ特別製だつたということなのかもね。ごめんなさいオータム。あなたにさせる必要のない、取り返しのつかない怪我をさせてしまつて」

「い、いや……そこはスコールのせいじゃないし……」

「いいえ、私のせい。大切な恋人を傷物にした織斑一夏にはそれ相応の対処をするわ。だから……今は休んで、その時を待ちましょう」

「う、うん……」

さつきまでの怒りが嘘のように消え、まるで初恋の相手を前にしたかのようなオータムを、スコールはソファアーから立ち上がり抱きしめる。

「エム、ISを整備に回しておいて頂戴。サイレント・ゼフィルスはまた奪つて間もない機体だから、再度調整が必要よ。……それに、ブルー・テイアーズ 黒い鳥 シェンロン専用機 三機を相手どつてダメー





機体の規定値までに届いたからそれ関係で呼び出されんだってよ。

「……それに、サイレント・ゼフィルスの件もあるしな」

「そっか……確かに、自国の機体が学園を襲ってきたなんて大事だもんね。

最後にちよつと戦っただけのあたしだって大変だったんだしセシリアならなおさら  
そうよね」

沢庵を口に放り込みながら「……ん？」と鈴は先程の会話を思い出す。

「…聞いた私が言うのもなんだけどさ」

「あ？」

味噌汁を啜る一夏に鈴はもう一回問いを投げる。

「なんで一夏が如何にも重要そうな、新機体の事知ってるのよ」

「……え、そりゃその機体のデータを作ったの俺と財団だし……」

「は？」

「え？」

疑問符。

食い違い。

両者の間に沈黙が流れる。

「なにそれ聞いてない」

「アレ？言つてなかつたっけ？」

「聞いてないわよ」

「俺が言つてなくてもセシリアが言つてると思うんだけど」

「セシリアにも聞いてないわよ！え、なにそれあんたそんなもん渡してたの!?ズルイ!!」

「バァン！」

言葉の応酬の中、衝動に任せ机を平手打ちする鈴。

当然ながら、反作用の法則を受けた彼女の掌の神経は、ジーンと刺激を脳に送る。

「ツ痛ッ…やっぱり胸？胸なの？それとも髪？金髪碧眼ポインな人だったの

マ例グノリア・カひーてうお熱あつつ!」

「ちよおい鈴!?!お茶!お茶溢れてる!!」

「いつも楽しそうね。ここいいかしら」

「どうぞどうぞ」

小声で叫ぶという無駄に器用な真似で絶え間なく会話のドツジボールを繰り広げる2人に、お盆にBLTサンドをのつけた如月が声をかける。

2人に促され椅子に座り、サンドイッチを一つ口に放る。咀嚼しながらキョロりと辺りを見回してフウと溜息を吐いた。

「文化祭後の振り替え休日だけあって、みんな遅いわねえ」

「あちち…そうね、もうちよつとみんな健康的に生活リズムを刻んで行つた方がいいわもつと酢豚をとりなさい酢豚を」

「〃ギユケオ豚ーンをお食豚べ〃」とてもいうつもりか？ほれティツシユティツシユ…ごめん如月さん。これお願い」

三角巾で吊られた自分ではティツシユを渡せないと一夏は如月にヘルプコール。

如月はヒョイと受け取り受け渡し、鈴はそれで制服のお茶を拭つていく。

「それにしても災難ね。まさか階段から落ちるだなんて…」

二つ目のサンドイッチを口に放り、ゴクリ。ペロリと唇を舐めた如月は一夏の右腕を見て、思いを口にする。

「…全くだ、神様は間違えてるぜ。自由なき籠の中の鳥から翼までも奪おうとするなんて、さ」

「あはは。なによそれ？もしかして黒い鳥ダークレイヴンだからかしら？」

「…ごめん如月さん。恥ずかしいから取り消させて」

「ダ・メ・よ。寮室待機命令で退屈なんだし、向こう一週間は使わせてもらうわ」

当然ながら、昨日の一件は表には出ていない。なんなら無人機なるものが学園に収容されていたと知る生徒等ごく僅かだろう。

今回の一件で動いた亡国機業の潜入員約250人はその行方をくらし、学園側はそ

の搜索と残った人材にまだ潜入員がいないかをくまなく調べている。

それが故に、現在 I S 学園では食事等のどうしても必要な場合を除き、寮室から出てはいけないという命令が下されている。

なにが起きたかはわからない。されどなにかは確実に起きている。

それを想像させる命令と、外に出れない閉塞感、ネット上の I S 学園女子の噂の火をつけるに十分なものだった。

(会長……これ収められるのかなあ……)

(『まあ、僕は悠々と見物させてもらうよ。まず第一の見所は、今月末の『キャノンボール・ファスト』を無事に行えるかだねえ』)

I S 高速機動レース『キャノンボール・ファスト』

本来ならば今月末に行われるはずのそれは、今や開催するか否かの状態にまでなっていた。

(ま、なんとかなるよ。俺は会長の可能性を信じる)

(『いや働きなよ副会長』)

—————

「……ふふふふ」

国際空港発着ロビー。

そこで書類を眺め口角を上げていたのは金髪碧眼ボインな…ゲフンゲフン。

男性どころか同性すら魅力する肢体。聡明にして可憐、優雅さで出来たような美しい顔立ち。黄金の髪は宝石すら褪せてしまうほどの輝きを振りまき。些細な所作からは彼女の心の美しさを感じる。

そう——— 我らがハイパーウルトラパーフェクト美少女英国代表候補生『セシリア・オルコット』である!!!

彼女の瞳にただ映るのは『BT兵器稼働率 94%』の一文のみ。

この一文で、セシリアから疲労は一切吹っ飛んだ。

事情聴取? 聞き取り? いくらでも! 今の私は機嫌がいい! 最高に “ハイ” ってやつだアアア! フフフハハハハハアアア!!!

思わずこんな事を叫びそうになるのをグツと堪える。落ち着け、まだ慌てる時間じゃない。

スウィーツハアーツ…2. 3. 5. 7. 11. 13…ようし落ち着いた。

「これでやっと、使えるのですね…!」

やはり、自分より遥かに格上、それも同じBT兵器使いと戦ったのがよかつたのだらう。

それに相手は、フレキシブル偏光射撃のお手本まで披露してくれたのだ。

上がらない方がおかしいが、流石に伸び悩んでいた稼働率をここまで跳ね上げるなど予想だにしない。

起こつた事態に不謹慎ながら、セシリアは自分の成長の喜びは抑えられない。

ブルー  
B ティアーズ・D—N X ディーネクスト

これはセシリアにとつて特別な意味を持つ。

親友、織斑一夏が、彼女の成長を見込んで財団と共に作つた機体。

それが持つ意味は友情、希望、未来、とにかく数え切れないほど。

彼女は誓つた。『更に強くなる。一夏が味方であつても警戒せざるを得ない程に』

この機体はきつとセシリアに測りきれない未知ネクストを見せてくれるだろう。

【皆様、ABC航空ロンドン行き6789便は搭乗を開始いたします】

「おっと……さて、いくとしますわね……」

書類を鞆に仕舞い、スクツと立ち上がる。その一挙一動にはやはり優美さがあり、女がどこまでいっても貴族である事を示していた。

「それにしても、キャノンボール・ファストに参戦できないのは心残りですわねえ……」

あの惨状でそもそも開催されるのだろうか、セシリアは訝しんだ。

—————

「……セシリア・オルコット」

朝日差し込む一室。マドカは眩しそうに目を細めながら呟く。

普段ならば千冬への異常な執着か、あるいは一夏への猛烈な殺意を写す目は今日ばかりは違った。

『格上だからって逃げたくないんですもの』

「……フン、いいだろう。認めてやる、貴様の力を」

「今この瞬間から貴様は私の敵」

「私が織斑一夏を潰す時の踏み台にしてやる」



## 07—08 生徒会長は胃が痛い

「……え？じゃあ『キャノンボール・ファスト』結局行うんですか？」

「ええ、結局行うわよ『キャノンボール・ファスト』」

時刻は9時を過ぎた頃。

一夏は生徒会室にて、楯無の手伝いをしながら驚きの声を上げる。

そんな一夏に、楯無はハアアアと疲れ切った声を上げながら返した。

「まあ……色々あったのよ。面子とか、秘匿とか、風評とか、ね……」

「……お疲れ様です」

げつそりと、たった1日でやつれた楯無を見て一夏は先程の可能性を信じるという無責任極まる発言を悔いた。

そもそも虚に聞く限りでは、急な事態にIS学園側から死人が出なかったのは楯無の指揮があつたが故らしい。

彼女は、学園を襲う敵の殲滅、捕獲よりも、生徒が襲われないように、職員が死なないように命を優先した指揮を執り表沙汰にならずに収めたのだ。

「しかし、まあ。行うんなら私は参加ですよねえ」

ペラリ。

一夏は印刷されたプリントを一枚取り、内容を見てボヤク。  
キャノンボール・ファスト。

一言で表すならば、ISによる高速機動バトルレース。

本来ならば国際大会として催されるそれは、IS学園では少々異なり市の特別イベントとして開かれる形となる。

学園外での実習となる為、臨海地区に作られたISアリーナを使用。

例年ならば2万人を收容可能なそれを埋め尽くす程の観客が来る祭りらしい。

「当たり前前よ。……花形たる専用機持ちがドンドンこの学園から消えていくもの」

「……今頃、飛行機の中でしようね」

機体のカスタムが如実に現れるこの大会では、当然だが専用機が圧倒的に有利である。故に一般生徒用の訓練機部門と専用機持ち用の専用機部門が設けられる。

(個人的には訓練機部門に出たいなあ)

一夏は叶わぬ願いを夢見る。言うだけタダっがいいよね。

ダイクレイヴン  
黒い鳥は基本的に機動性で他のISに劣る。高速仕様に変えて来るであろうレースでは尚更のこと。

ならば純然な腕の競い合いを出来る訓練機部門の方が一夏個人としてはそちらの方

がやる気も湧くというものだ。  
話を戻そう。

思考を切り替え、一夏は一年生に今どれだけ専用機持ちがいるかを思い出す。

第2世代 ダイクレイツン 黒い鳥：織斑一夏

第3世代 シエンロン 甲龍：鳳鈴音

第3世代 うちがねにしき 打鉄式式：更識簪

第4世代 あかつばき 紅椿：篠ノ之箒

(んで、さつき旅立ったセシリアを含めた今はヨいはないロツ奴バら組を入れれば7人と…7人中5人が同クラスってオイ)

なるほど、専用機7機がトップを目指して凌ぎ合えば、それはさぞかし話題性に富んだものとなつたらう。

というか楯無としてはそれを目玉に今年の生徒会の執行したかった。

(ホント厄介ごとが多い年ね……)

イギリスは許そう。だが、ドイツとフランス、ためーらはダメだ。

楯無の超個人的な意見を言わせて貰えばこれだ。

楯無も機体のカスタムや調整の件で急にロシアに飛ばなくてはいけない時もあった。

だから、セシリアが今日突発的に帰ることはしようがない。それが代表候補生の務め

だ。

だが、フランスは男装させた潜入員を、ドイツは条約違反の禁断<sup>V</sup>のシステムをこの学園に持ち込んだ。

前者は恩を売り、弱みを握る形で解決できたが、後者はよりによつて生徒達がいる前で暴走した。

しかも持っていたのは零落<sup>れいらくびやく</sup>白夜。アリーナのバリアをバターのように切るそれは、最悪生徒をそのバターのようにしていただろう。

会長も当主も忙しくてナンボだが、わざわざ持ち込んで来るようなところを好きにはなれないのは、また事実であつた。

そういう意味で一番大嫌いなのは亡国<sup>フアントムタスク</sup>機業なのだが。

「会長」

「んー?」

そんなことを思いながら書類を次から次へと片付ける楯無に、一夏は語りかける。

「次の、キャノンボールでの事なんですが…」

—————

プルルルル

「……もしもし、五反田です」

『俺だ。一夏だ』

時刻は12時半を少し過ぎた頃。

文化祭を行ったIS学園は振り替え休日であるが、五反田弾の学校はそんな事関係なく通常のカリキュラムが行われていた。

四時間目の授業が終わり、さあて昼飯だと弾が弁当を取り出した時に一夏から電話がかかる。

「一夏!?……よかった。何かあったかと思っただぜ」

『ソイツアこっちのセリフだな。着歴に何件も残しやがって……何かあったのか?』

「あ、いやー……よし!」

意を決し、口を開く。

「昨日の文化祭さ、俺、虚さんに入れてもらったじゃん?それでまあ……その……デートしてた……じゃん?」

『ああ、爆ぜろと思っただよ。……ん?あーなるほど、虚さんに急用が出来たことか』

「そう!それだ!虚さん、携帯でどこから連絡受けたら血相変えて『急用が出来た』って……まさか、何かあったのか?」

「……ここでの急用は、おわकारいの通り亡国機業フアイトムタスクの事である。

人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて死んでしまえと言うが、一夏は蹴られるだけ

でなく踏み潰されちまえとも思った。

『逆に聞くけど…なんで聞きたいんだ?』

「それは…その。心配だったからな…虚さんも、一夏も」

俺は無力なのかもしれないけど…と弾の言葉に、フウとスピーカーの向こうで一夏の溜息が返る。

『…予想通りだよ。そのとおり、何か起きたよ。でもそれが何かまでは言えない』

俺の立場もあるしね。と一夏は付け加え続ける。

『今回電話したのはそれも含めてな、今月末のキャノンボールファスト。お前は絶対に来るな、勿論蘭ちゃんもだ』

「ハアアア!?!」

ガターン

椅子と机でけたたましい音を立てながら思わず弾は叫びながら立ってしまふ。

教室中の視線が彼に集中し、思わず赤面して着席。

電話口の一夏からも『うるせえよ』と告げられ、「悪い」と返す。

「…なあ、それはキャノンボールで昨日のような何かが起こるってことか?」

『起こるかもしれない。だからだよ、俺はお前らを危険に合わせたくない』

真剣な一夏の言葉。それは、嘗て異世界の事を話した時と同じものを感じるものだった。

た。

その様に、弾は関わるのを諦め、一夏に全て任せることにした。

「……ハッ、わーったよ。俺は行かない。蘭も、数馬もな」

『サンキュー弾。助かったわ』

「人のデートチャンスを奪うんだ。虚さんに傷一つつけんなよ」

『ああ、その依頼。確かに承ったぜ……またな』

「んじやな」

ピツと電話を切り、弾は弁当箱に向かい合う。

そこへ数馬が近寄り声をかける。右手には『サルでもできるギターの弾き方』があり、あいも変わらずかつこよくギターを弾きたいようだ。

「一夏か？」

「ああ、キャノンボールには行くなつてよ。悪いが、聞いてやってくんねえか？」  
「別にそれはいいが——」

——お前、彼女いたんだな。

ピシリ

音を立てて弾の動きが止まる。

ギギギ

錆が入ったロボットのように入りを見回すと、いつの間に彼女<sup>リ</sup>持ち<sup>ア</sup>ち<sup>充</sup>に對しての猛獸の如き視線を持ったモテない男達が立ち上がっていた。

「……よし」

パターンと弁当箱を閉じ、駆ける。

「戦略的撤退イイイ!!!」

「「逃すなあああああ!!!」」

—————

「そうか、では後は入力して、調整するだけということか」

アメリカ、ロサンゼルス。

夜景が一望できる一室にて、男は妖しげに嗤う。

「期間は?……なるほど、優秀な君達で助かるよ」

ペラリ

男は印刷されたプリントを一枚取り、内容を見てふむ、と声を出す。

『『キャノンボール・ファスト』にも手をまわして置いてくれ、刺激は常に与えておきたい』

男の発言は一夏の予想が正解だという事を告げていた。



07109 I r e a d y f o r B a t t l e s  
h i p !

「ようやく、包帯も取れたか…」

『いやあISの操縦者保護機能って素晴らしいねえ』

文化祭から一週間後の休日。

一夏は学園の敷地の森の中でジャージに着替え、準備体操をしていた。

オータムとの戦闘での負傷が癒え、生身での勘を取り戻すべくトレーニングをきたのだ。

「おっし…行くぞ…!」

『「ガレージ」からサブバイバルナイフを取り出し、構える。』

頭部にはHF-227マギー機の頭が展開され内部バイザーには財団によってプログラムされた仮想エネミーが表示される。

「オオ!」

目の前に迫るエネミーに一夏はナイフを振るつた。

—————

「くはー!」

一時間後、汗だくの一夏は、ナイフをしまい声を上げる。

ゴロンと地面に転がり、額に腕を置く。

『データ収集完了、お疲れ様。どうだい、何か得られたかな?』

「…ん」

木漏れ日が瞳に入るのを感じ、その眩しさに目を閉じる。心臓の鼓動が響き、息が整って行くのがわかる。

生きてるって、こういうことなのかな。

「……得られたけど、正直このデータじゃ少なすぎるよ。肉感がないっていうかさ」

『それは仕方ない。僕が持っているのはあくまでACのデータ。生身の人間の動きなんて、最低限のものしかないさ』

「……ACのデータか」

そういうえば、あの世界。ACの世界では何度か無人機と戦ったし、又は無人機と共闘もしたな。

何故か、ファットマンと俺は財団製の、後に暴走した機体にだけ妙な気持ち悪さを感じていた。

不思議な事に自作、或いは共闘したアーキテクトのUNACにはなにも感じなかった

のに。

ガサリ

茂みが揺れ、中から人が現れる。

「なにしてるの、織斑」

「これは…また。珍しいお客様ですね」

そこにいたのは生徒会長：更識楯無の妹、更識簪だった。

格好は普段のそれとは違い、油に濡れた作業服である。

「敬語はいい。同学年でしょ」

簪は寝転がる一夏の隣に座り、メガネをクイッと上げる。

「…特訓だよ。そういうそっちは？」

「機体開発で詰まったところが出てきたから、気晴らしに散歩」

更識簪の機体『打鉄うちがね式しき』は本来倉持技研が開発する筈だったが、一夏の白びやく式しきの

開発、研究に追われ後回しにされていた。

姉である楯無との和解後、そのツテを頼りに代わりの開発企業を紹介してもらい八割

方完成した筈だが――

「――残り2割って、長いね」

目からハイライトを消しながら、簪はボヤいた。



「……一週間そこいらで治る傷で、相手の左腕と禁止兵器を奪うのはな」

「もつと身体は大事にしなよ。……なんて、戦つてもない私が言える事じゃないよね」

フウーと息を吐き、スクツと簪は立ち上がった。

「そろそろ息も整つたでしょ。立ちなよ」

「へ？」

情け無い声を上げながら、一夏は疑問の視線を向ける。

そんな調子を見て、説明不足だったなと簪は続ける。

「私は、日本の代表候補生にして、更識の家の子。特訓相手として、不足は無いと思うよ」

代表候補生は、ISを扱うに当たって本国であらゆる訓練を積んできており、その能

力は旧世紀の一軍隊にも匹敵する。

単純な格闘能力だけなら、一般男性以上、軍人であっても対等な条件であれば限りな

く互角に渡り合える程と言われる存在だ。

加えて、簪は対暗部用暗部『更識』の現当主の妹であり、立場上身につけなければな

らない護身術はかなりのレベルだろう。

一夏はこの誘いを断る手はないと判断して、素早く飛び起きる。

「んじゃ……お言葉に甘えさせてもらうぜ」

「言っておくけど、胸は触らないでよね」

「事故ならしようがないよな？」

「事故死する気ならね」

互いに軽口を叩きながら、間合いを取る。

（『メインシステム 戦闘モードを起動：かな？』）

財団が言葉に出さずにアナウンスの真似事をし、それと同時に2人は動いた。

「フッ！」

先手を取るのは一夏。

簪の虚を突く為に、ダツシユからいきなり側転擬きのキックを繰り出す。

「ハッ！」

「グッ！」

簪は首に迫るそれを一步引く形で躲し、引いた足から踏み込み掌底。

回転の勢いで体勢を直した一夏は、両腕でガードするがそのまま弾かれ後退する。

タタラを踏んでいる一夏に、簪は追撃をかける。

左ジャブ、右フック、右前蹴り、左後ろ回し蹴り、右足払い、左ハイキック、ダブル

スレッズ・ハンマー、右前蹴り、更に踏み込み右アツパー

流れるような怒涛のコンボが一夏を襲う。全身に流れる痛みが、チカチカと視界を明

滅させる。

だが……

「——見えた」

「ガフツ!?!」

拳打の嵐の中、一夏のボディブローが、簪の腹部を捉える。

その一撃に、簪は体をくの字に曲げてしまう。

「オラいくぞオ!」

左手で簪の襟首を掴み、一夏は右腕を振りかぶる。

放たれた拳を、簪はギリギリの所で左腕でガード。そのまま一夏の右腕を掴み抑えようとする。

しかし一夏もここでついた勢いを落としたくなく、無理矢理、力付くで簪を放り投げる。

地面を転がり、仰向けに止まる簪。素早く立ち上がろうとするが、眼に映る一夏を見てやめる。

「オオオオ!」

一夏はそれを御構い無しに猛然とダッシュ、跳躍し、倒れた簪にジャンプパンチをお見舞いしようとする。

「セイ——ッ!」

しかし、立ち上がるのではなく、寝たままの反撃を選んだ簪は、飛び込んできた一夏をオーバーヘッドキックの要領で蹴り飛ばす。

咄嗟に腕を引つ込めガードした一夏は、勢いそのまま簪の上を通り過ぎ、地面に転がりながら着地、体勢を直す。

攻守交代。

「おりやあああああああ!!」

一夏よりも早く戦闘体勢に移った簪は、一步一步力強く疾駆し、一回転しながら跳躍。まるでヒーローのような飛び蹴りライダークイックが一夏に刺さる。

「グワツ!」

簪渾身のキックの喰らい一夏は呻き声を上げて吹っ飛ぶ。

倒れた身体を起こそうとすると、トンと額に指が当たった。

「…私の勝ち」

右手の人差し指と中指を一夏の額に当て、左手でズレた眼鏡を直した簪が、馬乗りになつて動きを抑えていた。

「…降参」

一夏は諦めた表情で、降伏した。

—————



「……つつかれた……」

「……ハア……ハア……」

夏が終わり、短くなつた陽が落ちて行く。

橙から黒のグラデーションに染まる空の下で、一夏と簪は精根尽き果てたとばかりに大地にその身を委ねていた。

「……10戦中3勝か……」

「ホント……いきなり強くなるね……」

息を切らしながら簪は、戦つた感想を述べる。

最初の内は多少の反撃はあれど、簪が終始圧倒する形だったが、5戦目を過ぎた辺りでそれが変わった。

一夏が急に簪の動きに対応してくるようになってきたのだ。

「I Sのお陰かな。手や足だけじゃなくて自分の全身を動かして、相手の動きに対処する事を覚えざるを得なかつたし」

レバーとペダルのA Cでは、流星に全身運動とはいかず、そういう意味ではI Sを動かす今の方が単純な身体能力は上なのかもしれない。成長期もあるし。

「……まるで、自分の身体を動かさずに、なにかを操作して対処する事はあつたみたいだね」

「ご想像にお任せするぜ」

「そう……カッコイイロボならいつか乗せてね」

カッコイイ……カッコイイねえ……

一夏はカッコイイACを思い浮かべる。

自分の機体は、ミッション毎に姿を変える為除外。

だとすると、個人的にイケメンな機体といえば自分と組む前にファットマンとコンビを組んでいた兄弟子『カイト』のヘッドショットか、或いは思い人であるマギーの機体か。

まあなんにせよ、上司であり恩人である会長の妹さんを動く棺桶に乗せるつもりはないが。

「ま、いつかね。そろそろ戻ろうか、先生に怒られちまう」

話を切り上げ腰を上げる。

何も言うつもりは無いと判断した簪は特に気にする事なく続いて立った。

「…明日からまた開発の時間かあ」

「頑張つてねー」

はーとため息を吐きながら、簪は愚痴る。

「……火力とスピードの両立ってどうすればいいのかな」

「火力ねえ……だったらもう戦艦でも積んじやえよ」

「いやそれはダメでしょ」

「ちよつと意味がわからない。積んじやダメなのか？……それにさ、最近の仮面ライダー、スナイプだって戦艦纏うんだからISがやってもOKだろ」

それは、仮面ライダーだから……と反論しようとした簪の動きがピタリと止まる。

十割冗談でのたまっていた一夏は、その様子を不思議そうに見る。

そして1分程だった時——

「そうだ——!!!」

——闇が支配し始めた森の中で簪の音が響いた。

「そうだよ！仮面ライダーだよ！ウルトラマンだよ！エグゼイドだよ！エックスだよ！

ゴーストだよ！……鎧武だよ！」

ヒヤッホイ私は天才だー！と叫び、そのまま寮に向けて駆け出す簪。

置いてかれた一夏はポカんと間抜けな顔を晒した。

「……変な感じに、頭を殴っちゃったかな？」

『……なんでもいいけど、門限迫ってるよ』

怒られた。

## 07—10 鴉は仇を忘れない

「はい、それでは皆さーん。今日はキャノンボール・ファストに向けて、高速機動についての授業をしますよ！」

第六アリーナに一組副担任、山田真耶の声が響き渡る。

「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて——」

そんな説明を聞き流し、一夏は自分の機体の確認をする。

HEAD : HF—132

CORE : CB—402

ARMS : UTSUSEMI md1. 2

LEGS : Le2L—B—V15

(一応高速機動に組んでみたが…)

KE : 1323

CE : 216

TE : 415

死ぬなあ。しかも周りのISはこれに合わせて武装すると来た。

当然だが、黒い鳥ダイクレイヴンに追加パッケージなんてない。

『ガレージ』にあるものを組み合わせ、やりくりし、相手の弱点を突く事で一夏は勝ってきた。

無論、相手の得意なアセンならば簡単に勝つ事は出来ないだろうし、勝率は大きく下がるだろう。

だからこそそのスキャンモードで、観察眼なのだ。

(高速機動パッケージ、ね…)

ふと、ACに該当するそれはないかと記憶を辿る。

検索結果は一件。

『J、調子はどうだい?』

『良好だ』

ヴァーデイクトデイ

評決の日が起こったあの日の戦い。一夏と財団の決着の一戦。

そこで用いられた財団が復元し、Jが操作したあの黒い機体。超高速で飛来するそれを運んでいたロケットのようなパーツ。

(あれ、つけられないかな)

(『Gで死ぬ気ならいいんじゃないかな?』)

超火力攻撃を搭載したアレをつけられれば、レースで大いに優位となるかと思ったのだ

が、現実とはそうは上手くはいかないものだ。

「それじゃあ、まずは専用機持ちの2人に実演してもらいましょう！……織斑くーん、機体を展開してもらえませんか？」

「……あつすみません」

「まったく、なにを呆けている一夏」

考え事が過ぎたと一夏はISを機動、組んだアセンを呼び出す。

既に紅椿を纏った箒は腰に両手をつき呆れている。

箒の機体『紅椿』あかつぼきは第4世代の機体。

攻撃・防御・機動の全てに切替、即時対応できる即時万能対応機であり、それを

実現するのが機体を構成する展開装甲である。

この装甲を状況に合わせて開放・停止させることによりあらゆる戦況に合わせる事が出来る。

今回の場合で言えば背部と脚部のそれを開放すれば高速機動仕様だ。

「悪いな。第2世代機で第3、第4世代機とどう張り合うかに必死だよ」

そういう意味では黒い鳥も第4世代ではないかと思われがちだが、黒い鳥が切り替えられるのは通常非戦闘モード時のみ、戦闘モードとスキャンモードという戦闘中に使用する状態では使えないのだ。

故に、第2世代。

通常のそれとは違い、武装だけでなく装甲も変えられるが第2世代なのである。

「……その台詞は私のものだと思うのだがな。一度も模擬戦で勝てないとはどういうことだ、姉さんめ」

「なんでもありなら、紅椿じゃなくなつて篠ノ之箒をつけばいいからな。……今回みたいな制限だと、流石に負けるぜ」

「あのー2人ともー？そろそろ始めて貰つていいかなー？」

「はーい」

会話を切り上げ、一夏と箒はスタート位置についた。

「コースは表示されたグリッドを目印に一周して戻ってきてください。では、……3・

2・1・1・ゴー！」

その合図と共に機体のバーニアに火が灯り、生まれた推進力により一瞬で加速する。

「行くぞー夏ア！」

「来い箒イ！」

—————

パンパン

そうして訪れたキャノンボール・ファスト当日。

花火が上がり、超満員となった会場を一夏はボオつと遠所から眺めていた。

「あら織斑くん」

「会長」

そしてそこに近づくと人影一つ。

楯無は『調子はどう?』と書かれた扇子を広げて、ニコニコと笑顔を見せた。

どんなに苦労があろうと文字通りの面子はしっかり保っている彼女に一夏は「まあそれなりに」と返す。

「それで…貴方の準備は出来てるのよね?」

ヒソリ

辺りを確認した楯無は一夏に耳打ちする。

「ま、この準備が無駄になった方がいいんですけどね」

ボソリ

眩くように一夏は返事する。

「そういえば、亡国の奴ら何人炙り出せました?」

「30人…頭痛くなるわねまったく。しかもコレでもまだグレイゾーンの人があるんだから……。レース頑張つてね」

そのまま一言二言交わし、一夏は会場に足を運んだ。



その最中、暗いオーラを撒き散らす簪を見つける。

「どうしたよ?」

「フツ…」

一夏の存在に気づいた簪は自嘲するように笑い――

「――いいアイデアだったけど、流石に一週間で完成は無理だったよ…」

「バカかな?」

「バカだよ」

ハアアアと大きくため息をついて、先程までのシリアスな顔を消し、一夏は曖昧な表情で曖昧な言葉を送り別れた。

『ハハハ…流石に一週間そこらで新規に作るのは無理だろうさ。ま、僕達の準備は一週間どころか今これからのアドリブだけどね』

「さあて来るなら来いよ亡国機業。フアントムタスクやられっぱなしは性に合わないからな」

## 07-11 疾風の主は妖しく笑って

『英国代表候補、サラ・ウエルキンが追い上げるー！1人：2人：3人を追い抜いたああ!!!』

わああああああああ!!!

放送部二年生のアルテミスの実況と、盛大な歓声が響き渡る。

現在は2年生のレースが行われており、セシリアの先輩であるサラが凄まじい追い上げを見せているようだ。

「……」

とはいえ控え室の一夏の関心はそこにはなく、

「……」

「……」

「……」

どころか箒、鈴、簪の関心もそこにはない。

興味があるのは己が勝利のみと言わんばかりの沈黙が場を支配する。

「……ちよつと出るぜ」

静寂を破り、一夏が席を立つ。

「……一夏、どこへ行く気だ貴様」

「レースまでには戻る。じゃあな」

「待て、なら何故……」

箒が言い切る前に、ドアが閉まる。

その様を3人は不思議な目で見るしかなかった。

「……何故、頭部にISを展開したままなんだ？」

まさか一夏が忘れたというわけでもあるまいに。

そんな疑問を箒は解消できぬままだった。

—————

一方その頃、アリーナの通路は人によって川ができていた。

「うわつととと……人が多いな」

人が殺到する混雑の中、ラウラは揉まれに揉まれ、規定の席に戻れずにいた。

トイレに行こうとしたら、巻き込まれて、そのまま迷ってしまったが故の悲劇だ。

「……つちだよ」

そんな中、彼女の手を引く手があった。

その手は流れから離れた所に一引きでラウラを引きずり出し、そのままベンチにエス

コートしようとした。

「すまな……い……!？」

その手をの主を見て、ラウラは目を見開く。

「シャルル・デュノア……!」

その仰天した言葉に、目の前の「女」はクスリと答えた。

「誰かなその人は。僕の、名前は、シャルロット・デュノアさ」

クツクツと笑うシャルロットの手を振り払い、ラウラは再度キツと見据える。

「そうだったな。はじめまして、困っている所をありがとう」。これでいいか？」

「あはは、その通り。僕と君は今日が初対面さ」

シャルルなんて男は、君のドイツ軍籍のように消えてしまったからねえとシャルロットの発言にラウラはムツと顔をしかめる。

確かに『ラウラ・ボーデヴィツヒ』としての軍籍は抹消されたが、そんな軽く言われる筋合いはない。その時に築いた黒ウサギ隊との絆は今なお確かにある。

「……で、どうしてデュノアの若き社長が、こんな所にいるんだ？」

「デュノアの社長だからだよ。このレースの訓練機部門は、ラファールリヴァイブの舞台だからね」

なるほど、ラファールリヴァイブといえれば世界第3位のシエアを誇るデュノア社の看

板商品だ。

特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばない事と多様性役割切り替えを両立しているその機体を、レースの相棒に選ぶ生徒は少くない。

その宣伝の為に社長自ら来るといのはおかしくないだろう、だが……

「——違う。なぜ、貴様のようなVIP待遇の者が、こんな一般の場所にいるのかと聞いているんだ」

「……」

ラウラの質問に対し、口角を上げるのみで何も答えないシャルロット。

やがて視線をラウラからずらし、とある方向を見つめる。

「こちらF班。目標確認できず」

『F班了解。次に移れ』

そこでは警備部隊と思われるものたちが忙しく動く風景があった。

ラウラが自分と同じ方向を向いたことを察知したシャルロットは、ニヤついた口を開く。

「忙しそうだね」

「貴様を探しているのではないか？」

「それはないさ、僕がここにいる事はちゃんと知らせてあるから、さ」

だからなんでこんな所にいるんだ。

そんな視線をサラリと受け流し、シャルロットは指差した。

「アレ？あの人は……？」

「……あ？」

またか。

指を指した先を、ラウラはイライラ顔で見る。そこには――

「……更識、楯無？」

警備部隊の制止を無視してひた走る楯無の姿があつた。

――

「悪い悪い、待たしたな」

「遅いわよ、一体どこにいつてたのよ」

「秘密だ」

レース開始直前のピット内に一夏が飛び込んで来る。

既に紅椿、甲龍シエンロン、打鉄式は展開されており、今か今かその時を待っていた。

「ま、待たした事は悪かったが……こっから先は俺の独壇場だ！」

「ハン！優勝するのはあたしよ！」

「模擬戦での雪辱、ここで果たす！」

「織斑、容赦はしないよ。今の私は……負ける気がしない！」

「来い！ 黒い鳥！」  
ダークレイヴン

【システム スキャンモード】

## 07—12 運命のDrive!

「お待ちください会長！」

「一体どこへ！」

制止の声、部下の叫び、耳に届くは困惑の音色。

爆走

独走

激走

暴走

バイクにこそならないが、簪が見れば思わずこう呟いてしまいうだろう俊足で楯無は駆けける。

アリーナの通路から出入口へ、そこから臨海地区の市街地へ、見向きせず疾走する。

『会長、前に言いましたけど、俺のISは索敵能力が他のISに比べて非常に低いです』

そんな彼女の脳内に浮かぶは、文化祭から1日後のこと。

一夏が「キャンボールを行うなら、自分にも一枚、警備について噛ませて欲しい」と告げ、その具体的な方法を述べた。



『ええ、低いです。ですが、今回の事を踏まえるとアイツらはこういった所でISを使う事に躊躇いはありません。なら、手はあります』

『その前に前提条件としてなんですが、今回俺は警備を信用していません。会長の努力を無碍に扱うようなものですが、おそらく奴等が潜り込ませたスパイは大会当日まで残っているでしょうし、そいつらを使ってISを持ち込むでしょう』

『だから——俺はコレを、UAVを使います』

そう言つて一夏は表示した画像を見せる。

『コレはカメラユニットを上空に発射し、偵察を行なうパーツ。コレを使って俺はアリーナ内にいるISを索敵します』

『……まあ通常戦闘で役立つ事は少ないんですが、こういう時はどうにか出来るんですよコレ』

『で、なんでコレを話したかと言うと、理由は二つありまして。一つはさつきも言った通り俺は当日の警備は信用していません』

『二つは単純に見分ける為に俺に当日の警備やISの状況を教えて欲しいからです。学園のISなのか、そうじゃないのかを見分けなければいけませんから』

『なので会長にだけ、コレを話します。俺は大会の日無許可でUAVを使いますし、それで見つけたら会長にだけ連絡します。多分それが、相手操縦者を不意打ちして捕らえら

れる唯一の技だと思っています』

『連絡したら、その場所に会長本人が向かって後ろからキュツとする。俺は、会長なら出来ると思つてます』

「……ふふっ」

その言葉に「やるし、やって上げる」と返した過去の自分を賞賛する。

そして、先程届いた連絡を思い返す。

『会長、聞こえますか?』

『アリーナ内に不審なISはいませんでした』

『ですが、本当にいないのかとスナイパーキャノンで見渡した所——』

——ISが2機、そして……

「——こんな所で何をしているのかしら?今日は、風邪で欠勤の筈でしょう……エドワース先生?」

臨海地区。大通りから少し逸れた小道。そこにあるチェーンのカフェの二階のテラス席。

そこでなにやらノートパソコンを使って指示を飛ばしていた女。

彼女の名前はエドワース・フランシイ。

IS学園の数学担当教師である。カナダ出身の25歳。現在彼氏募集中。趣味は盆

裁。そして……亡国機業ファントムタスクの疑いを持たれているグレーゾーンの存在である。

「……」

「そこで、なにを、しているのかしら？」

「ねえ、亡国機業さん」と書かれた扇子をバサリと広げ、隙のない出で立ちでゆつくりと楯無は近づく。

その文字を確認したエドワースは堪忍したかのように緊張した顔かんほせを崩してノートパソコンを閉じた。

「っー」

そして、左手にパソコンを持ち右腕の筋肉を使い1秒前まで自分が座っていた椅子を投げる。

最低限の横ステップで避けた楯無の目に映ったのは、そのままテラスから飛び降りるエドワースの背中。

それを見るや否や、楯無の足は一瞬にして最高速を出力し、テラスの手摺りを飛び越える。

追いかけてこが、始まった。

—————

「行っちゃったね。まったく、トップが忙しいのは学園も会社も同じってことかな」

「……さあてな」

所は変わり、アリーナの通路では楯無の爆走を見届けたラウラとシャルロットが睨み合っていた。

既に周りに人影はなく、通路を通じて響く歓声も2人の間に横たわる空気に阻まれて  
いる。

「さつき、君は言ったよね。『なんで、VIP待遇がここにいるのか』…つて。答えてあげるよ……僕は、君に会いに来た」

ネットリと放たれた、シャルロットの言葉に、ラウラは眉はピクリと上げる。

「……これはまた、どういう見だ。貴様の言う通り、私は『織斑ラウラ』。ドイツ軍とはなにも関係のない、ただのIS学園生だ」

「いじわるだね」

クツクツと含み笑いを手の平で抑えながら、シャルロットは妖しく目を光らせる。

なるほど、コイツは魔性だ。

ラウラは、確信する。シャルロットがあのまま学園にいれば、自覚が有ろうと無からうと小悪魔と呼ばれる者になっていただろう。

「ま、君と直接話せただけで今日はよしとするよ。……僕が、君の敵では無いということの証明に、一つ教えてあげる」

「……」

「3番の電気室に行ってみなよ。そこで君は正義の味方さ」

ラウラの警戒を止めぬ視線を、なにもないように受け流しながらシャルロットは立ち去った。

「3番の…電気室……」

ラウラは反復するように呟いて、シャルロットが行った方とは逆の方に足を向けた。

「……………」

視点は戻り、臨海地区埠頭の倉庫エリア。

楯無とエドワースのチェイスは決着がついていた。

楯無の手にはエドワースのパソコンがあり、持ち主のエドワースは楯無から5メートルの所で転がっていた。

カモメの鳴き声と、波の音が辺りを支配する中、楯無は汗ひとつかかずにエドワースを見下ろす。

「エドワース・フランシイ、ついてきてもらおうわよ。亡国機業の事についてね……」

「……っ！」

歯齧みをし、悔しそうに睨むエドワース。

しかし、既に楯無の視線は彼女には向いていなかった。

ドゴオオオオン!!!

次の瞬間、楯無とエドワースがいた二箇所に爆炎と閃光が走った。

「不粋ね。捕まった者を口封じしにきたのか、それともこのパソコンの中にながいのやら…」

爆煙の中出でるは傷一つ無き楯無の言葉。

煙が晴れて出てきた姿は、それまでのものではなかった。

アーマーは面積が全体的に狭く、小さい。しかし、それをカバーするように透明の液状のフィールドが形成されており、それはまるで水のドレスのようである。

清廉にして流麗、高貴なる精神が波濤を成したその姿はロシアの第3世代機

【霧纏ミステリアス・レイディの淑女】!!

変身した楯無は、倉庫の屋根を見る。

そこにいたのは2機のIS。

橙のボディカラー、肩についた4門の砲門。アーマーを纏うISスーツは白色で遠目に見ればラファールと見紛うやもしれぬ。

それもその筈、活発そうな女ナオミが操るその名は「ラファールリヴアイブ・ソル

ジャー」!

灰のボディカラー、両手に携えるは二振りの中型剣。身体を染めるは黒のISスーツ

で、こちらは思わず打鉄と見間違えるだろう。

やはりその筈、物憂げな女ボタン“B”が操るその名は“打鉄・改”！

どこかで奪ったので有ろうラファールと打鉄を改修したその機体は楯無のボヤきになにも答えずただ鋭い視線を当てるのみ。

無駄かと判断し、楯無は隣を見る。

そこには意識を失ったエドワースが横たわっていた。

もうすぐ捕まるエドワースと、データの詰まったパソコンを処分するためにナオミはミサイルを発射。

それを察知した楯無はISを展開し、ナノマシンで形成された水のボールで自身とエドワースを守った。

先程起きた事を説明すればこんなに単純な事である。

だがしかし、この状況は楯無にとって実は予想外だった。

おそらく会場を襲撃するであろう2機が、まさかのまさかでこちらに回ってくるなどとは。

エドワース、そしてパソコン。

楯無は自分の命と共にこれら二つを、2機のISから守りきらなければならなくなつた。

しかし、彼女の目に不安や恐れによる濁りは無く、いつでも来いと言わんばかりの威圧感を放っていた。

そも、この手に何人の運命を、人生を、その全てを乗せてきたか。

更識の、ロシアの、学園の命運とは我が内にあるのだ。

この程度の障害を跳ね除けられずしてなになが当主か。

なになが代表候補生か。

なになが I S 学園生徒会長か！

「……」

そうして睨み合いが続く。

10分、20分…否、体感の時間がそれなだけで現実では30秒も経っていない。

ブオン、ブオンブオンブオン!!

静寂を破ったのは、倉庫の間から届いた爆音だった。

ブウウウウウウウン!!!!

トタンの板を突き破り、深蒼のバイクが嘶きと共に向かってくる。

それは、睨み合う両者の間にドリフトしながら静止し、華麗にヘルメットを投げ捨て

た。

「手伝いでしょうか、生徒会長?」



「……まるでヒーローのような搭乗ね。簪ちゃんが喜びそうだわ」  
「……！セシリア・オルコットだと……！」

バイクの主は当分帰ってこないはずのセシリアだった。

気品ある動作でバイクから降り、まるで世間話をするかのように語りかける。

「どうしたのかしら？ そんなにキャノンボールを見たかったの？」

「ええまあ、あちらでやる調整を諸事情でこちらで済ませる事になりましたね」

ま、ですが……。とセシリアはボタンとナオミを見る。

「こんな所にちようどいい練習相手がいるのであれば、見過ごす手はありませんわ。生徒会長、ここは私に任せて撤収を」

確かに、いくら楯無に守りきれぬ自信があろうと不慮の事態とは常に起こるもの。

セシリアが彼女達を引き受けて、その隙に離脱というのは理にかなってはいるのだが

「大丈夫なの？」

数で対等となった状況をわざわざ不利に戻すというのも楯無には選択し難った。

「大丈夫、ですわよ」

その心配は無用だと、サムズアップと共にセシリアは2人の前に立つ。

その様子に任せたと暗に認め、楯無はパソコンとエドワースを抱え飛び去った。

「さて…逃げるのを待つてくれるだなんて案外善人なんですわね」

「ハッ！あらかじめビットで攻撃できないよう牽制しといてなーに言つてんすかねえ！」

ボタンのその言葉に、セシリアは不敵に笑う。

それと同時に、事前に展開したビットがセシリアの周りに集結する。

「ま、そこまで文句を言われるのなら仕方がありませんわね。貴女達は、ビッ<sup>ク</sup>ト<sup>レ</sup>抜きで相手して差し上げましょう」

どこまでも相手をバカにした言葉にボタンとナオミの表情がピクリと歪む。

そんな視線すらスポットライトに等しいとばかりにセシリアは己が新機体を呼び出した。

「B<sup>ブルー</sup>ティアーズ・D<sup>ディー</sup>—N<sup>ネクスト</sup>X<sup>ー</sup>」

瞬間、セシリアを中心に青き星光が吹き出でる。

それは、名前こそブルー・ティアーズを継いでいるが、青と白を基調とした色以外は最早別物であった。

いつもであればセシリアの恵体を惜しげもなく晒すラインのくつきり出た胴体部は白を下地とした青の装甲に覆われている。

逆に、通常であれば空中での姿勢制御、速度調整を行う脚部の装甲は鎧のように人体

の大きさに沿ったものに。

特徴的な4枚のフィンアーマーは消え失せ、背部に直接背負うのは一対の羽根のよう  
なスラスタ。

バイザーを纏いし頭部が無ければ全身装甲とも思えただろう。

白き煌輝

青き篝火

未来を照らす星の涙。

友の想いを運命に灯すその姿は、イギリスが開発した次世代機

〔B<sup>ブルー</sup>ティアーズ

D<sup>デー</sup>—N<sup>ネクスト</sup>x〕!!

「さあ、ダンスタイムと行きましょう」

## 07-13 星のワルツを踊りましょう（前編）

「さあ、ダンスタイムと行きましょう」

「ハッ、なにがダンスだ。気取ってナメてんじゃねえつすよー」

その言葉と共に、ボタンは屋根から飛び降りながら右手の剣を振り下ろす。

それをヒラリと躲したセシリアは掌底を二連、続いてキックを浴びせる。

「ハッ！」

「おっと」

倉庫の上からアサルトライフルを展開したナオミがセシリアを狙う。

その弾丸と太刀筋の連携を舞うように避けながらセシリアは考える。

「やはり、素手は無理ですわね」

〔VOLCARRISER！〕

その眩きと同時に呼び出されたのは一挺のビームマグナム『ヴォルカライザー』。

その銃身を使い、器用にボタンの剣を受け止め抑える。

抑えたボタンを蹴り飛ばし、そうして出来た連携の隙を使い銃口をナオミに向ける。

スガァン！

否、正確にはナオミの足元——倉庫の屋根に向かって放たれた光弾は炸裂と同時に屋根を粉碎。

着弾前に飛んだナオミが着地した時には、既にボタンは体勢を立て直しておりすぐさま2人は連携を再開した。

「おりゃあー！」

ボタンが繰り出す切っ先の嵐。

ナオミが放つ弾丸の豪雨。

それら2つが織りなすハーモニーに対し、セシリアが選んだのは——

「では、打鉄そちらの方からに致しましょう」

——各個撃破であった。

【SLASH RISE】

その音声と共にヴォルカライザーが変形する。

グリップとバレルの接合部が折り曲がり、銃身だった場所がナックルガードとなる。更にヒンジだった部分からグリーンのビーム刃が発振、形成され変形完了。

『ヴォルカライザー ソードモード』に切り替えたセシリアは、左手より迫るボタンの剣を一瞬だけ防ぎ、その力を殺さずに受け流す。

受け流され、隙を作ってしまったボタンの背中を踊るように滅多斬りにするセシリ

ア。

仕上げとばかりに蹴り飛ばし、今度はナオミに目を向ける。

「こんつ……のおつー！」

今度はこちらが背中を切つてやるとばかりに叫ぶボタン。

両手に握られた双剣に、目に見える程のエネルギーが注入される。

【IGNI TUNE】

そんな行動を待っていたとばかりに、セシリアはナックルガードを2回スライドする。

電子音声と共に、光でできた刀身が込められたエネルギーを示すように眩く輝く。

「おりやああああ!!!」

【BURNING!】

示し合わせた訳でもないのに、セシリアの袈裟懸けの刃が、ボタンのX字の刃が同時に放たれる。

放たれた2つの光刃はぶつかり合い、強烈な閃光を発生させる。

「ぐわあああ！」

打ち負けたのは、ボタン。

火花を散らして打鉄・改の装甲が悲鳴をあげる。

「ボタン!？」

頼れる味方があつという間に墜とされたのを見て、ナオミは焦りの声色を隠せず、反射的に引き金を引く。

ズダダーン!

キーン!

そんな攻撃、効きもしないとばかりにセシリアはナオミとは対照的な余裕の笑みで弾丸を剣で弾く。

「……っ！なら……」

その様を見て、武装をアサルトライフルからガトリングに変更して弾幕を厚くしようとするナオミ。

【SHOOT RISE】

しかしそれを黙って見ているほど、セシリアは甘い人間ではない。

ヴォルカライザーをガンモードに戻し、更に銃身上部を1回スライドする。

【FLAME UP】

電子音声<sup>エレクトロニック</sup>が鳴り響き、単発のマグナムモードから、連発のマシンガンモードに切り替わる。

実弾と光弾。

2つの連射、連撃がぶつかり合い轟音を鳴らす。

「…………へえ……」

撃ち合いの中、ラファールリヴァイブ・ソルジャー肩部の砲門が開く。

（確か、先程はあそこからミサイルを放ってましたわね…）

助けに入る前に見た光景を思い返し、今度は銃身上部を3回スライドする。

【MAGNI UP】

またも電子音が鳴り、そして銃口に濃密なエネルギーが収束する。

そして同時にトリガーが引かれる。

4門の砲から放たれるミサイルと、1つの銃口から放たれるエネルギー弾。

本来ならば、セシリアは間違いなくダメージを受けるだろう。

しかし、今は違う。

「!?!」

ヴォルカライザーの銃口から放たれたのは拡散し、誘導する光弾群だった。

ラファールのミサイルとD-Nxの光弾群は全てぶつかり合い、そして光弾だけが爆煙を貫き、ナオミの身体に炸裂する。

「キヤああああああ!!!」

「ふふっ、ふふふっ、ふふっ……」



身体に走る衝撃に普段の物静かな彼女からは想像も出来ない悲鳴が上がる。

2人をおつという間に撃破したセシリアの口から思わず興奮の笑いが溢れた。

「何笑ってんすかよ〜！」

痛みの走る身体を奮い立たせたボタンの怒声が響く。

最後の一撃とばかりに片方の剣にエネルギーを過剰供給し、構える。

「あら、コレは失礼。では……」

それに対してセシリアは回避、防御ではなく迎撃を選ぶ。

【UPPER <sup>アッ</sup> <sup>パー</sup> <sup>チュ</sup> <sup>ニ</sup> <sup>ン</sup> <sup>グ</sup>!!】

「——幕を引くといたしましょうか！」

その掛け声と同時に、青き力の奔流がセシリアの右脚に集まっていく。

「あ、あ、あ、あ、あ!!」

ボタンの絶叫が響く中、負担に耐え切れなかったのか、剣にヒビが入る。

2人の戦士は同時に動いた。

「はっー！」

セシリアは飛び上がり、空中でキックの姿勢。……俗に言う『ライダーキック』のポ

ズをとる。

ボタンは振りかぶり、大上段から上空のセシリアを切り落とさんとする。

「はああああああ!!!」

【IGNITION!!】

「う”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!」

セシリアの『ヴォルカニックコメット』とボタンの渾身の一撃が激突。

秘められたエネルギー同士が混ざり合い、そうして起きた爆発は離れた船すら揺らすほどの衝撃を響かせる。

ドゴオオオオン！

「ぎや……!」

無論、そのパワーは近くにいたナオミに容赦なく降り注ぎ、吹き飛ばした。

銃を杖に、ナオミがなんとか意識を戦場に向けると、煙の向こうに一人の人影が見える。

（どつち……せめて……）

ボタンであつてほしい。

そんな彼女の願いは容赦なく砕かれた。

煙が晴れた向こうでは、特にダメージが見受けられないセシリアと……大ダメージが故、ISが解除され、倒れ伏したボタンがいた。

（嘘……!?!）

ボタンもナオミも、決して弱い操縦者では無い。また、ラファールリヴァイブ・ソルジャーも打鉄・改も決して弱い機体では無い。

だが、現にその2機がこうして一蹴された。相手はビット本領を發揮していないと言うのに。

これが新型。

これが次世代機。

(……………！)

圧倒的なまでの差に、ナオミは睨みつけるので精一杯だった。

「……………」

しかし、当の本人はそんな視線など感じてもないように辺りを見回している。

「…ま、来ますわよね」

「……………」

何かに呆れた様子の子のセシリア。

カッ

次の瞬間、3筋の破壊の光が降り注いだ。

—————

「フッ！」

ラウラの拳が亡国構成員の鳩尾を砕き

「セイツー！」

虚の手刀が構成員の意識を刈り取る。

埠頭での一方的な戦いが行われている同時刻。

レースが行われている真っ只中のアリーナ内の3番電気室では、亡国機業とIS学園生の戦いが終わろうとしていた。

「グウ……」

パタリと最後の1人が倒れた事を確認して、2人はホッと息を吐く。

「……なんとかなった、か」

「ありがとうね。織斑さん」

「構わん。学園の生徒として当然のことだ」

彼女たちが沈黙させていたのは、第3電気室で破壊工作を行おうとしていた一団。

文化祭の一件で発生した、大量の欠員による警備の混乱を使い、この大会へのISが暴れる為の仕込みをしようとしていたのだ。

混乱は酷く、現にここを察知し、来れたのは虚とラウラの2名のみであった。

「……ううん。やるべきだったのは私。ラウラさんは“一般の生徒”でしょっ」

「そうだな。私はただの、ドイツとはなんら関わりのない存在だ」

互いに機密満載の軽口を叩きながら、作業員の手足を縛る。

経歴こそ抹消済みだが、ラウラは元軍人。こういったことは手馴れたものだ。

「……そういえば、よくここがわかったわね。織斑さん。私も織斑くんから指示があった初めて動けたんだけど」

「……まあ、たまたまだ」

口を動かし、手も動かし、リズムよくテンポよく縄で縛っていくラウラの脳裏に先ほどの会話が浮かぶ。

『3番の電気室に行ってみなよ。そこで君は正義の味方さ』

シャルロットの言葉に従い、向かってみればこうだ。

怪しい集団と遭遇し、交戦。結果だけ見れば、大会と人命を守ったラウラは正義の味方であろう。

……シャルロットの言う通りに。

(やはりアイツは何かを隠している。亡国機業に繋がる何かを)

ラウラは、初めてシャルロットとあった時を思い出す。

あの時の奴は、いつ自分の正体がバレるかとビクビクしており、そしてあの時の私は、周りの全てを見下していた。

それが故に関わる価値もないと見過ごして、実際関わる間も無くシャルル偽物の男性操縦者・デユノア

は姿を消した。

シャルロット・デユノアが何故男装してIS学園に入学したのか、その顛末そのものを私は知らない。

千冬<sup>母上</sup>や一夏<sup>叔父</sup>に聞けば知れるだろうが、軍の立場の無い私が聞いたところでいつかのトラブルの種だろうと判断した故だ。

話を戻そう。姿を消した奴のことを私はしばらくの間忘却していた。改心前も、改心後もだ。だが、奴はたったの二ヶ月あまりでデユノア社の社長となっていた。

『そこで君は正義の味方さ』

そして、今のあの忠言。

『僕は、君に会いに来た』

なあ、貴様は何を考えている。

わああああああ!!!

湧き立つ歓声にラウラは意識を戻す。

歓声の内容を聞き取ると、どうやら一夏は最下位だったようだ。

アレで案外負けず嫌いな叔父をどう慰めようか、ラウラは考える事にした。

—————

「天井とはまた芸の無い。ユーモアが足りませんわよ、ユーモアが」

視点は再び臨海地区の埠頭の倉庫エリアに戻る。

ニヒルな笑みを浮かべ、左手に盾を構えたセシリアは、自身と味方ポタンとナオミの筈の2人を狙撃した犯人を見つめながら皮肉を謳う。

「……生憎と、2人がかりでお前を笑わせることしか出来ないそのクズ共と違ってな。私はコメデイアンじゃないんだ」

一応仲間であるポタンとナオミへの痛烈な言葉と共に、上空から1機のISが舞い降りる。

「お久しぶりですわね……二週間を久しぶりと言うのかはわかりませんが」

「……個人的には一ヶ月からが久しぶりだな」

まるで世間話をするかの様に、バイザーの奥の視線はセシリアを見据える。

声の主はサイレント・ゼフィルスの操縦者、マドカMだった。

「Mエム……！」

「ハッ…一緒に消し飛ばしてやろうと思ったのだがなあ。まさか敵に守られるとは」

——なぜ今回ミッションに関係無いお前がここにいる。

——なぜさっきの狙撃の目標に味方である私とポタンを含めた。

そんなナオミの視線をマドカは侮蔑と嘲笑で返す。

「まあいい、ここは私に任せろ。気絶したポタンアレは、気が向けば回収してやる」

「……………くっ！」

尻尾を巻いて逃げろ。

言外にそう言われたナオミは齒噛みするが、現状そうするしか無いのもまた事実。

ISの持つ超人的な力を持ってナオミは倉庫街へ消えた。

「……………意外だな。お前、こういう時に見過ごす奴だったか？」

「いえ？ただ、確実に1人は持ち帰ろうと思ひましてね」

セシリアの目的は亡国機業の構成員の捕獲だが、マドカの目的は（一応）その阻止である。

だからこそ、マドカは戦闘不能となった2人を口封じに撃ち抜かんと光線を放ち、それが故に、セシリアはその光線から2人を守ったのだ。

「…フン。なら、その手土産を消させてもらおうとしようか！」

「準備運動はとつくに済みました。始めましょうか！」

その言葉と同時に、意識を失ったボタンの周囲にセシリアの6基のビットが配置され、3基ずつに分かれて正三角形のバリアを構築する。

バリアは強靱で、これを用いてマドカから2人を守り、セシリア自身は盾で防いだ事が伺える。

ジリ…



互いの間の空気が張り詰める。

「さあて、第2幕と行きましょう！」

どんな時も優雅たる彼女は、クルリとガンスピンを行い微笑んだ。

## 07-14 星のワルツを踊りましょう（後編）

「さて、第2幕と行きましょう！」

その言葉と共にマドカに向かって駆け出すセシリア。

挑むは前回同様の接近戦。盾を前面に押し出し、銃を連射する。

「フン……」

マドカは鼻を鳴らして、弾丸を横に躲しながら右手の銃剣ライフルからビームを放つ。

それに対して、セシリアは盾を構え、衝撃に備える。しかし……

「!?……これは！」

迫る光はグニヤリと曲がり、同時にサイレント・ゼフィルスのビットから放たれたビームと共に予想外の方向からセシリアの盾に力を加え弾き飛ばす。

「くっ！」

衝撃の走る左手を誤魔化すように振りながらセシリアは「やってくれますわね」と視線で語る。

「クク……」

それにマドカは「偏光制御にはこんな使い方もあるんだよ新兵？」とにやけ笑いで言外に答えた。

〔SLASH RISE〕

〔BLAZE TUNE〕

再び銃口が自身に向くのと同時にセシリアは再度駆け出す。

今度はヴォルカライザーをソードモードに、更に一回スライドする。

ガンモードでの銃口に当たる部分からビームの刃が形成される。

青い基部を中心に、出来上がるのは双刃の翡翠『ヴォルカライザー ナギナタモード』手に携えたそれを巧みに振るい、ライフルから放たれたビームを切り落とす。

それを見たマドカはライフルをセシリア目掛けてぶん投げた。

流石にそれは想定の外だったのか、セシリアは思わずそれをキャッチしてしま  
う。

「クハッ！」

その隙にマドカは前回の時には所持してなかった金属ブレード『インターセプターⅡ』を展開し、鋭い切り込みで振るう。

慌ててライフルを捨て、セシリアはステップと体勢を変えて上段から振るわれるそれを躲す。

避けた勢いでクルリと回りナギナタを振るう。甲高い金属音が2度3度鳴り、2人の少女の華麗なる剣戟を彩る。

ガードした刃をしなやかに動かし、セシリアから少し距離を取ったマドカに、光弾が飛来する。

ボタンが処分されない様に配置されたビットが、一時その防護を解きマドカ目掛けて攻撃したのだ。

「……」

マドカはそれを腕を交差にして防ぐ。それを見てセシリアは上を見上げた。

なにもビットを持つているのはセシリアだけではない、こうして防御にビットを回さないのならおそらくは——

「来ましたわね……」

やはり。とばかりに声を上げる。

セシリアの上空にサイレント・ゼフィルスのビットが並び、その殺意の光を浴びせんとばかりに斉射する。

冷静にそれを見極めながら、右、左と舞うような足捌きで躲していくセシリア。無論、やられるだけでなく彼女もまた反撃の一手を打つ。

【VOLCCARISEー！  
ツォルカライザー】

【SLASH RISE】  
スラッシュライズ  
 【BLAZE TUNE】  
ブレイズチューン

もう一挺のヴォルカライザーを取り出して、二挺となったそれをどちらもソードモードにし、二刀流となり突っ込んでいく。

「ハアアア！」

逆袈裟に右手の刃を振るい、続けて左手の刃を横に薙ぐ。

一撃目は防ぎ、二撃目を回転で避けたマドカはそのままセシリアと鋼音の旋律を奏でる。

「フッ！」

セシリアの二刀が同時に下、上に振るわれガードを揺さぶる。

次に放つ双刃の左斬り上げはマドカの防御を砕き、更に鋭い突きを叩き込む。

「ツッ！」

【SHOOT RISE】  
シュートライズ

タタラを踏んだマドカに、両手のヴォルカライザーをマグナムモードに切り替え、勝負を決めんと打ち込んでゆく。

スダダダダン！

「グッ——嘗めるな！」

その言葉と共にマドカは右脚を振り上げる。

マドカが立っていたのは、先程セシリアが銃剣ライフル『スターブレイカー星を砕く者』が捨てた場所。  
スターブレイカーを蹴り上げ、右手でキャッチし、セシリアに駆ける。

【SLASH RISE】

それに合わせてセシリアもまた構える。

左手のヴォルカライザーをソードモードにし、逆手持ちに切り替えると同時にマドカに向かって疾駆する。

ズダアン！

キーン！

互いに右から光を放ち、左で相手の光を振り払う。

逸らされた光弾は埠頭のコンクリートに当たり粉塵を上げて粉碎する。

「セイツー！」

「ツアツ！！」

剣と剣で取っ組み合い、鏢迫り合う。

ギチギチと光刃と金属ブレードが音を鳴らし、セシリアとマドカは互いに睨み合う。

「……ホント、強いですね。イギリス国内に……いえ、世界中見渡しても貴女ほどのサイレント・ゼフィルスの使い手はいませんわ」

「フン、当然だ。ぬるま湯の中のゴミ共に私が越せるか」

「褒め言葉ぐらい素直に受け取れば、可愛いと思いますのに」

「…？まるで私の顔を知ってるかのような口ぶりだな」

「見たことなんてありませんわよ。なんとなく美少女の類だと思っただけで」

「なんだそれは？…よくわからんなお前は…フン！」

「ハッ！」

まるで喫茶店で茶を飲み交わしているかのような会話を、文字通りに切り上げる。

互いの銃口がピッタリと向き合い同時に引き金が引かれる。

カッ

セシリアから放たれた翡翠色の輝きと、マドカから放たれた柘榴色の煌きが混ざり、小爆発。

そこから発生する波動によって強制的に2人の距離が離れる。

素早く戦闘態勢に戻ったマドカは、何かに満足したかのようにフンと鼻を鳴らす。

「ボタンはくれてやる。ではな」

「…！させるとお思いで!？」

【IGNI UP】

マドカの離脱宣言に、セシリアはマグナムモードのヴォルカライザーの銃身上部を2

度スライドし、エネルギーを収束させる。

【BOMB<sup>ボン</sup>BER<sup>バー</sup>！】

放たれた特大の球状の弾丸が、マドカに迫る。

しかし彼女は慌てることなく、既に引き寄せたビットからエネルギーアンブレラを展開した。

ドゴオオオオン！

そしてエネルギーの衝突で巻き起こる火焰、轟音、爆煙。

「逃しましたか……！」

煙の向こうに人影は無く、セシリアは苦い顔で小さく地団駄した。

—————

時刻は、セシリアとマドカが戦い始めた頃に戻る。

「ハア……ハア……」

倉庫街の一角、ナオミはフラフラとISを装着したまま歩く。

敗北の悔恨を噛み締める彼女の表情は芳しくない。

（ボタン……！）

脳裏に浮かぶは幼馴染でもある同僚の生死。

自分もまたエドワースを処分しようとしたし、あの場で気絶した彼女の未来は死か捕



獲の二択とはいえそれでも気にせざるを得ないのは感情が故か。

なんとか隙をつき、ボタンを取り戻せないだろうか。

そんな事を思案したナオミに、ISのハイパーセンサーが情報を表示する。

(ISが1機、こちらに接近……!?……どっち……エム……それとも……)

意識を向け、注視する。そして――

「……え？」

――現れたのは「白」だった。

バジユウウウ!

呆気にとられたナオミの身体を「白」は手に持った輝く刀で一閃。

その一撃は、ラファールのシールドエネルギーを0に追い込んだ。

(あれ……は……)

倒れ伏したナオミは、薄れゆく意識の中で「白」を見る。

(あれは……確か……)

そう。あれは確か。織斑一夏の関連資料に載っていたIS――

「……白しろ式しき……」

――

「それではキャノンボール・ファストの無事の終了と……ついでに織斑君の誕生日を祝つ

て〜！かんぱーい!!」

「「かんぱーいー!」」

「かんぱーい……その扱いはあんまりじゃありませんか会長」

キャノンボール・ファストの夜。

今回の戦いはIS学園側の勝利であり、生徒会によるささやかな打ち上げが行われ、部外者だがラウラとセシリアも功労者としてお呼ばれした。

「いや〜裏での戦いは完勝だし、表の大会は平穩無事に終わったし、胃が痛くならないっ  
ていいわね!」

コップに注がれたサイダーを一息で飲み干した楯無が叫ぶ。

勿論、裏だろうが表だろうがISによる戦闘が発生した以上面倒な書類は確実に出てくるので虚勢だが。

それをなんとなく察したのか、楯無のハツチャケに全員が生温い目を送った。

「……んんっ!」

その視線に気づいたのか大きく咳払い。

そしていつもの余裕の雰囲気を出して、セシリアに、次にラウラに向き合う。

「ありがとうね、オルコットさん。伏兵が隠れていたし、私も確実に逃げきれたかはわからなかったもの」

「礼には及びませんわ生徒会長。貴族として、そして生徒として当然の事。なにより代表候補生同士ですもの、手を差し伸べることは義務といって差し支えないですわ」

胸に手を置き、誇らしげなセシリア。

逃したとはいえ、前回の時に負けた相手への雪辱を晴らし、目標であつた敵の捕獲も果たせたのだから彼女は気分はとても良い。

「そして、織斑さんもありがとう。貴女が助けに行ってくれたおかげで、虚も怪我なく相手を制圧できたわ」

「会長には以前手間をかけたからな。これで礼になるのならよかつた。……後、叔父とややこしいだろうしラウラでいい」

ドイツ軍関係で、という事を暗に示すように敬礼をするラウラ。

虚1人でも制圧可能だったが、彼女も加わる事で安定して亡国構成員を捕獲出来たのだ。

そして、最後に一夏の方を向き、ニッコリと微笑んだ。

「…そして、織斑君。貴方が見つけてくれなければ、この大会は酷い事になっていたでしょう……ありがとう」

「……いえ……会長は、貴女は俺の雇い主です。俺に報酬がある限り、会長のために動きま

「じゃあ、卒業までずっとついてきてね♡」

楯無のウイंक混じりの言葉。

それに対して、一夏は笑みを返す。

「ついていきますよ、貴女が俺を雇い続ける限り」

MISSION 7 COMPLETE

MISSION 08 Verdict War  
08101 KILLING DAY

キャノンボール・ファスト翌日は日曜日であり、当然休日である。

「よし！今日の朝練は終わりだ！」

「ハア…ハア…ありがとう、ございました……！」

しかし、休日だからといって鍛錬の手を休めぬ者はどこを探してもいるもので、篠ノ之箒もまたその1人だった。

IS学園の屋上で肩で息をしながら、特訓相手の千冬に頭を下げる箒に、千冬は口角を上げる。

「昨日のレース、見事だったぞ。一位、おめでとう」

「……いえ…ズルをして、第4世代機を貰ったのなら……結果は出さなきゃいけませんから……」

「……コネクションも立派な力だと思うがな」

「それをズルと言われたら、ブリュンヒルデのコネで一夏を守ろうとした私かな」と、千冬は肩をすくめる。

未だにゼエハア言い続ける箒はそれもそうだと取り下げる。

「……でも、やはり私は、この専用機ちからを手に入れるべきではありませんでした」

「……それは、何故だ。篠ノ之」

「それは、紅椿コシを貰った時の私は、その力に見合わぬ心の持ち主だったからです」  
力を手に入れた人間は、えてして傲慢に、傍若無人になりがちだ。

それを振るい、人より強いという事実への快樂を求めてしまえば、最早糾されるべき悪となる。

そうならないために柔道、空手道、剣道……力を教える武道というのは力と共に作法と礼儀を叩き込む。

“力を振るっていいのは試合中、場内で、対戦相手にのみ。”

“終わった後も、相手への礼を欠かさずに敬意を払う。”

そうして人類は野蛮な闘争を洗練された競争に、“武”を人の“道”に変えてきたのだ。

しかし箒は、それを忘れてしまっていた。

中学までの彼女の剣道は、とてもではないが正しいものとは言えず、篠ノ之東から起こった事への苛立ちをぶつける道具となってしまうていた。

そしてそれは、IS学園でもまた尾を引いた。

『欲しいんだよね？君だけのオンリーワン、オルタナティブ・ゼロ 代用無きもの、箒だけの専用機』

そう、今まで散々恨んできた姉から、一夏のそばにいたいというだけで、トラブルの種になるとわかっていて専用機を受け取ってしまったのだ。

一夏にその想いをぶつければ、彼なりに一緒にいようと、その想いを受け止めようと努力してくれた筈なのに。

『待て一夏！ そんな犯罪者など見捨てればいい！』

『……悲しいが、擁護はできねーよ』

『せめて…せめてオルコットが無事なら…』

そうして悲劇は起きた。

シルバリオゴスベル 銀の福音との一戦での命令無視で、セシリアが墜ちる元凶となってしまったのだ。

不幸中の幸いで、セシリアもその尻拭いをした一夏も無事だったが、だからといってそれを良しとしてはいけない。

『好きと言わずに他の女と一緒にいるのが許せないだなんて身勝手にも程がありますわ！』

セシリアのあの言葉をキツカケにようやく目が覚めた。

きのう 過去ではなく、あした 未来を見ていこうと誓ったのだ。

そんな箒を、千冬は嬉しそうに見る。

「そうか…それでいいのかもな。力に対しては『自分には過ぎたもの』という認識が丁度いいのかもな」

「織斑先生…」

力というものに善悪はない。

それを決めるのは、使う人間の心だ。

過ぎた過去、起こした過ちは変えられない。

だが、来たる未来、これからの事はいくらでも変えて行ける。

「成就しろよ…お前の答えを」

「……はいー」

証人保護プログラムがあったとしても、姉が篠ノ之束だとしても、箒には学園を卒業後にただの箒として生きる道があった。

それを専用機を貰うことで潰したのは箒自身だ。だからこそ、この力をどう振るうのかをこの3年間の間に考えなければならぬだろう。

そしてその教導こそが自分の仕事だと、千冬は決心するのであった。

「話は変わるが、篠ノ之。今日はどこかに行くのか？外出届があったと聞いたが…」

「はい。今日は実家に…篠ノ之神社に帰ってみようと思ってます」

「そうか…一夏と一緒ではないのか」



千冬の言葉に、すっかり息も整った筈は疑問符を浮かべる。

「…一夏はどこに？」

「セシリアと共に出掛けて行ってな。てつきりみんなと遊びに行ったのだと…」

（相変わらず仲良いなあの人……）

失恋前の筈が嫉妬したように、一夏とセシリアはタッグマッチ以降常に組んでいる。

AEOS開発の為もあるのだが、なんだかんだで気が合うらしく、よく一緒にいるのだ。

授業と授業の間の休み時間ではわからない所を一夏が聞きに行ったり、お昼休みには食堂で未だに箸に慣れぬセシリアを教えたり、放課後にはアリーナを借りて練習したり、もう一人の親友『如月奨美』も入れて勉強会してたり、というか確か臨海学校のバスではナチュラルに隣に座ってたり……

（…仲良過ぎじゃないか……？）

マグノリア・カーチスの事を知らなければ間違ひなくそういう仲だと認識していただろう。というか知る由も無いクラスメートの中にはそう思っている人もいる。

アレで互いの認識は親友なのだから驚きだ。

「ま、仲がいいのはいい事…だよな？」

—————

シヨッピングモール『レゾナンス』

イーストモールのファミリーレストランで、朝に箒と千冬の話の種となっていた2人はやや遅めの昼食をとっていた。

「え、お前昨日で初めてBフルーティアーズ・Dディーネクスト—N xを動かしたの!？」

パスタをクルクルとフォークに巻きつけながら、一夏は驚嘆の声を上げる。

「ええ。最適化処理は済ませましたし、マニュアルは頭に叩き込んでましたが…本格的に動かしたのは昨日の一戦が初めてですわ」

ドリアをスプーンで掬いながら、セシリアは昨日の無謀さに自嘲的に笑う。

「正直、戦ってる時は生きた心地がしなかつたですわ」と言うセシリアに、一夏は顔をヒクつかせる。

(コイツ…初めて動かした機体で殺し合いを制するってどんだけだよ…)

(『これは流石に、僕にとつても想定外の範囲外だね。彼女があの世界にいたら、間違いない候補者に入れてたと思うよ』)

一夏と財団は、セシリアの読み切れない才能に驚きを隠せない。

そもそもBティアーズ・D—N xは一夏が卒業した後に操縦者も含めて完成する予定の機体だったのだ。

それをたつたの半年足らずで実現させたイギリスの開発班も、規定の範囲に届いたセ

シリアも、予想を遥かに超えていた。

そも科学の進歩には、基本的に犠牲はつきものだ。

故にこの世界：IS世界の技術力は、基本的にAC世界のそれを下回っている。

なぜならそれは、この世界が一応平穏で、人道と道徳に則っているからだ。

しかし、人間というものはどちらの世界でも変わらないように、革新へのヒントを与

えれば大きく伸びてしまうようだ。

(『こちらの技術も：舐めたものじゃないねえ』)

そんな事を考えて、財団は黒い鳥ダークレイヴンの中で眉を上げた。

「しかし昨日が初めてねえ：そんな事なら今日はシヨツピングじゃなくって、慣らし運

転に付き合った方が良かったか？例の機能の件もあるし」

「つれませんわね一夏さんは。買い物は乙女の嗜みですわよ」

「ハッ、悪いな。俺はとんとその手に疎くてね」

「そんなだから、マグノリアさんの心を射止められないのではなくて？」

「……痛い所言うなよ」

そんな会話をしながら、2人は会計を済ませ店を出る。

次はどこへ行くこうかと歩く2人の前に人影が現れる。

「……偶然だな」

人影から思わず溢れた素の言葉。その声の主の風貌に、一夏とセシリアは目を見開いて仰天する。

現れたのは、15、6歳程の黒髪の少女。

切れ長の茶の瞳は面倒な事になったと語り、対比的にニヤリと上げた口角は面白くなつたと伝えている。

その顔は2人にとって、特に一夏にとってよく見知った顔。

己がAC世界に行く前の記憶の中の姿。

「千冬……姉……!?!」

目の前のその顔は、昔の織斑千冬に酷似していた。

「クク……私は、織斑マドカだ」

浮かべた冷笑は、決して千冬本人がするものではなく、氷の如き殺意は一夏の肌を刺した。

目の前の少女は、その視線をセシリアに向け口を開く。

「昨日は世話になつたな、セシリア・オルコット」

「やはりその声……サイレント・ゼフィルスの操縦者でしたか。……その顔については予想外でしたが……」

(……財団。サイレント・ゼフィルスの操縦者って事は亡国機業だ)

（『勿論だとも、既にISはいつでも展開できるようにしてある』）

素早く混乱から立ち戻った一夏は、セシリアとマドカの会話を聞き身構える。

こうして冷静になれば、思い当たる節はある。

『『カルティベイター』。クローニングによる才能の再現を主とする手法さ。過去に名をなしたパイロットのクローンを生み出し、育成の過程において教育と言う名の洗脳を行うことで、管理できる才能を育成を目指したようだね』

思い出すは、臨海学校での財団の説明。

ラウラのような試験管ベイビーは存在するし、千冬はブリュンヒルデとしてVTSのモデルになった時もあった。

そして、相手の所属は亡国機業。フアントムタスク 第二次世界大戦中に生まれ、50年以上前から「裏

の世界」で暗躍する秘密結社だ。

カルティベイターと全く同じとまではいかなくとも、似た例はあったのだろうと納得した。

「随分と警戒しているな」

「逆に聞きますが、ここで警戒しないバカを相手取りたくは無いですか？」

「喧嘩するならIS学園に行こうぜ。広いアリーナで思い切り暴れられるぜ？」

ISを構えて、臨戦態勢に入る一夏とセシリア。それに相對するマドカは、ヤレヤレ

と溜息を吐く。

「血の気が多いのは結構だが、今日は戦いに来た訳じゃない」

「……じゃあなんだよ」

「買物だ、か・い・も・の。それを終えて帰るところだよ」

そう言う彼女の右手には、コーラが2本とポテチが1袋入ったビニール袋があった。

「……ま、ここであつたのも何かの縁だ。いい事を教えてやる……ここから家までついてこられてもたまらないからな」

「……いい事？」

「アウトモールに向かえ」

「……」

その言葉に、一夏はセシリアの方に視線を送り、セシリアはそれに頷いた。

アイコンタクトで了承を得た一夏は、クルリと振り向きアウトモールに向かつて駆け出す。

残された セシリアとマドカ BT兵器操縦者は向かい合う。

「お前はいかないのか？」

「あら？一夏さんは私の親友ですわ。何があろうと、生きて戻ってきますわよ」

「……そこで男性操縦者を持ち出さないあたり、本物というやつなのだろうな」

セシリアは優雅な微笑みを、マドカは獐猛な含み笑いを浮かべて言を交わす。しかし、その間に張り詰める殺気は周りから一般客を遠ざけるには十分だった。

—————  
 アウトモールに向けてダッシュする一夏の顔は、焦りと困惑によつて蒼白となつていた。

(なんで…なんでこんな時に、アウトモールの方から“あの感覚”がするんだ……！)  
 『どうにも俺は、人形共が苦手だね』

ファットマン同様、財団製のUNACに感じた嫌な感覚。

自分や他のアーキテクトが作ったUNACには感じなかったそれが今、アウトモールにいる。

(財団…なにか感知してないの?)

(『ISコアの反応は無いね。というか黒い鳥の索敵能力なんてたかが知れてるんだから期待しないでよ』)

(っ！)

なにも確認出来てない現状で、ISを展開してリコンやUAVを使う訳には行けない。  
 い。

走ることしか出来ない現実に齒噛みしつつ、止まることなく足を動かしていく。

「ついたー……アレは!？」

そしてアウトモールに着いた一夏の目に飛び込んできたのは驚きの風景だった。

『アレは……間違いだね。以前君が交戦した無人機……ゴレムだ』

そう。それはクラス対抗戦と臨海学校で戦った無人機ゴレムだった。

以前感じなかったあの嫌な感覚を纏わせ身動き一つせずに鎮座している。

「なんで……アレが?……ハッ!」

何かに思い当たったように一夏は周囲を見渡す。

「はい、あーん♡」

「おーい。あの在庫を出しといてくれよ」

「ねえ、アレってISよね……?」

「今日はそういうイベントあったっけな……?」

アウトモールには老若男女家族に恋人、店員や職員が沢山おり、中には滅多にお目にかかれないISに興味津津な様子の者もいる。

再び視線をゴレムに戻すと、そのカメラアイに光が灯るのが確認出来た。

(まずい……!)

「みんな、逃げろオオオ——!!」

一夏が叫ぶその瞬間。破壊の暴風が巻き起こった。



ドゴオオオオン!

「今のは…!?!」

視点は再びセシリアとマドカに戻る。

遠所…アウトモールから響く轟音に、セシリアは思わず視線を向ける。

「ククク…本当に行かなくていいのか?」

「行く訳には行かないでしょう…! 貴女から目を逸らせば何をするかはわかりませんも

の…!」

「フン…」

放った挑発に、強い言葉を返したセシリアから視線を外し天井を見上げる。

一体何をと思案しようとしたセシリアにマドカは告げる。

「正解だよ。お前」

「!」

瞬間、なにかを感じたセシリアは右に向かって思いっきり跳ぶ。

一時遅れて先程まで彼女が立っていた場所に紫の光が天井を突き破り、着弾する。

「アレは…無人機?!」

「お前の相手はアレだ。じゃあな」

そういつて立ち去るマドカを追うことは諦め、セシリアは頭上のゴーレムを見据えI  
Sを構えた。

「ぐっ…」

一夏の目の前に広がっている景色を形容するに相応しい言葉はなんだろうか。

地獄

奈落

泥梨

煉獄

いや、やはりそれは…彼が見慣れた『戦場』だろう。

千切れた腕から血を流し、フラつく足で逃げる男がいた。

二度と動くことのない恋人に、涙と共に声をかける女がいた。

母を求め泣き叫び、逃げ惑う大衆に蹴飛ばされる幼子がいた。

孫を庇い傷を負い、今その命を終えようとしている老人がいた。

手と手を取り合い、互いに声をかけて逃げる家族がいた。

我が先だと押し合い、いらぬ傷と禍根を残す他人がいた。

「……」

この嘗ての世界で飽きるほど見たパノラマを、血と死の世界を作り出した元凶を無言で見据える。

そして何も……この景色はレゾナンスだけで起こっている訳では無い。

例えば、篠ノ之神社近くの住宅街——

「コイツは以前の無人機!? 何故ここに!?!」

例えば、鈴の中華料理店跡——

「なんでよ……!なんでアンタが……アタシの昔の家の前にいんのよ!」

例えば、秋葉原の歩行者天国——

「一体……何が起こってるっていうの!?!」

5人の操縦者は同じタイミングで、己が愛機の名を叫ぶ。

「ブル  
B ティアーズ・D―NX!」  
ディーネクスト

「あかつぼき  
紅椿!」

「シェンロン  
甲龍!」

「うちがねにしき  
打鉄式!」

「ダークレイヴン  
黒い鳥!」

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

## 08102 DIE OR KILL

「システム スキャンモード」

「オラこいよー!」

ゴーレムに声を飛ばしながら、一夏は崩れたアウトモールドで壁蹴りし、勢いをつけて上昇。

地上の人々に被害が出ないように、ターゲットを上空の自分にズラす。

NAME: Golem II

KE: 500

CE: 500

TE: 500

R ARM UNIT:

L ARM UNIT:

W ARM UNIT: Golem II (TE)

「やっぱ前と、変わってないな……」

『しぶといけれど、それこそなんでも貫通する装甲。素早い動きと特大レーザーが主軸

…そうだね。君やブルー・ティアーズ、甲龍シエンロンが協力して倒したのと一緒だね」

「……確か、あの海の奴にも紛れてたよ…なッ！」

ギユーン！

会話中でも御構い無しに殺人光線を放つゴーレム。

止まった相手だろうと容赦なく撃つのは、クラス代表戦と違うところである。

『その通りだよ。尤も、君は意に介さずに司令船を潰した訳だけど…』

「……」

『どうしたんだい？ゴーレムを見てから様子がおかしいよ？』

「…向こうの世界で、お前のUNACに感じていた嫌な感覚。前回までには無かったそ

れが、今のアイツにある」

【エネルギー 残り30%】

ハイブーストでレーザーを避けながら会話しつつ、お互いがお互いの方法でゴーレムのロジックパターンの解析をして行く。

『ふむ…僕のUNACに感じていた感覚に、反応のないISコア。気になるところは目白押しだね』

「コアの反応がない？なら…」

『前回の司令船にあたるものが無いかどうかは、君が蒔いたりコンでスキャン済みさ。』

まあ無いから、大人しくアレを潰したまえ。……だとすると、やはりこの波動は』  
 『一夏さん……！やはり貴方もそちらで交戦してましたか！』

財団と会話しているとセシリアから通信が入る。

彼女もまた、上空に陣取り地上の人の避難時間を稼いでいた。

「……お前の所にもゴーレムゴレイムが来たのか……。数は同位だ、タイマンで仕留めるぞー！」

『それはいいんですが……これらはおそらく……』

「わかってる！」

おそらく、文化祭の時に奪われた機体なのだろうという事は直接戦った一夏が一番よくわかってる。

〔亡国機業……お前ら一体何が目的なんだ……！〕

学園から強奪したのも、この襲撃を仄めかしたのも亡国機業ファントムタスク。

たったの二週間で奪った機体の改造、修復、制御を終えた現実と技術力は認めるが、この行動に一体何の意味があるのかが一夏には理解不能だった。

『……』

〔FLAME UP〕

そんな一夏を確認して、セシリアも自分が担当するゴーレムを見据えた。

そうだ、なにが目的だろうと今は目の前の敵を倒すしかない。

## 【システム 戦闘モード】

地上の人の避難が済んだ事を確認した、2人は両手の銃を構えて応戦を開始する。

肩のMONNONOFU mdl・2データで補助をして、ゴーレムをロックオンした一夏は、素早く動く相手の進路を塞ぐようにAM/GGA-206ガンをばら撒き、誘導する先にAUB- A04ルを放つ。

だがライフルは本命では無く、あくまで最後の一撃を避けられないために起動パターンの解析を行う為だ。

『アイツ、まだ動くの!?!』

以前のクラス対抗戦ではゴーレムの意識外の一夏が狙い撃つ事で動きを止めたが、タイムマンの現状でそれは望めない。

ならば、しぶといアイツにやることは1つ。避けられない状況に追い込み、ハンガーに積んだパイルによる一撃必殺。

ライフル、ガトリングに対しての回避、防御行動。

ハイブースト、急落下に対しての攻撃行動。

(右…左……砲撃に…急接近…)

(『ロジック解析率93%…95…98……』)

データを揃えて動きを見極めていく。そして…



「……いまだ！」

『……いまだね』

——一夏と財団の声が重なった。

ゴーレムの真上に上がった一夏は右手を Au<sup>ヒート</sup> | R | F<sup>バイ</sup> | 19<sup>ル</sup> に、左手を AM<sup>シールド</sup> | G | O | R | O | M<sup>ル</sup> | m | d | 1<sup>ド</sup> | 1 に変更し、真下に向かってハイブースト。

ギューーン！

ガアン！

放たれたビームを展開したシールドで防ぎ、砲撃に夢中なゴーレムにシールドチャージ。

そのまま上から押し潰すように一夏はゴーレムごと地面めがけて加速する。

「……終わりだ」

ドゴオオオオン！

無人のアウトモールに落下すると同時に密着させたパイルのトリガーを引く。

2連装の成形炸薬弾がゴーレムの装甲に当たり起爆、鋼鉄の鎧を吹き飛ばし内部の奥まで破壊力が伝わる。

チユドオオオン！

そして次の瞬間——ゴーレムは盛大に爆発した。

「ENEMY DESTROYED」

「……よし！」

爆煙の中で一夏は小さくガッツポーズ。

そして、一夏とゴーレムの決着とほぼ同時に、他の戦いも終わりを迎えようとしていた。

まずは、同じくレゾナンスで戦っていたセシリア——

「以前よりパワーアップしたこの機体で、あなたに苦戦するわけにはいきませんのよ！」

【MAGNI TUNE】

ビットでゴーレムの動きを制限し、ソードモードのヴォルカライザーのナックルガードを3回スライド。

その瞬間、光で出来た刀身が熱せられた飴の様に曲がり、振るわれたそれは鞭の様にゴーレムを捕らえる。

微動だに出来ないゴーレム目掛けて、ブレードモードとなったビット6基がまるで黒ひげ危機一発の様に刺さって行き……ゴーレムは爆発した。

次に、神社近くの箒——

「あの時は一夏を置いて逃げる事しか出来なかったが、今は違う！  
 『絢爛舞踏』、起動けんらんぶたう」

【絢爛舞踏、始動】

背部と脚部の展開装甲を展開し、  
 『絢爛舞踏』によつて増幅された膨大なエネルギーを注ぎ込む。

それにより紅椿は『速く動いて撃つ』事に特化したゴーレムの速度を、遥かに増したスピードに至る。

交差地点を予測した筈は、背部の展開装甲を閉じ、腕部の装甲を展開。二振りの刀『日月』『空裂』にエネルギーを充填し、一閃。ゴーレムを爆散させる。

そして、旧凰家跡近くの鈴——

「セシリアも一夏もいないけど！あたしの思い出を壊されてたまるかアー！」

『龍砲』を巧みに用いてレーザー砲撃を相殺せずに、逸らす事で鈴はゴーレムに接近する。

懐に飛び込んだ彼女が放つ『双天牙月』の乱舞は、ただ滅茶苦茶に振り回しているのではなく、肩に肘に膝に首に脚の付け根……装甲の薄い関節を的確に狙っていた。

道路にゴーレムを叩き落とし、右、左、そしてX字に切り抜ける。直後、鈴の背後か

ら爆炎が上がった。

最後は、秋葉のホコ天の簪——

「みんなを傷つけることは……私が許さない……！……！……！ロックオン完了！『打鉄爆烈シュー  
ト』!!」

簪は打鉄式式の最大武装『山嵐』を展開する。ビーム砲撃のリロード時間を利用し、  
ロックオンを済ませ技名と共に発射。

6機×8門から放たれる48の独立誘導ミサイルは、単純にゴーレムを狙うのではな  
く、ビームを吐く銃口を標的として飛んで行く。

内部に直結した武器腕を破壊したダメージは、腕から胴体にまで伝播し、ゴーレムの  
身体を粉々のガラクタに変えた。

そして、視点は破壊されたアウトモールに戻る。

「一夏さん！お怪我は!?!」

ゴーレムと共に地上に落ちた一夏の元に、セシリアが降りてくる。

「セシリア、俺は大丈夫だ。それよりお前は?」

「この通り、傷1つありませんわ……では後は……」

セシリアの目線の先には、ベンチに座りコーラとポテチでくつろぐマドカの姿があった。

そんなマドカに、2人は構える。

「クク……お見事お見事。いいものを見させて貰ったぞ」

2機のI Sが自身に武器を向けているにもかかわらず、マドカは拍手と上辺の賞賛を送る。

「見世物でも芸人でもないんだぞ俺らは。……見物料、支払ってもらうぜ」

「無辜の人々を傷つけた罪。贖いなさい」

一夏とセシリアの怒りの言葉に、マドカは空になったコーラのボトルを放り投げながら答える。

「焦るな……今日はお前らと戦いに来た訳じゃないと言ったはずだ。それにどうせ幾らでも戦う機会は来る。……そして、その時に——」

奇跡的に無事だったゴミ箱にペットボトルが入ると同時に、マドカは先程までのにやけ笑いを消した。

「——私が私たる為に……お前の命を貰う」

一夏を見据え、殺意と共に告げる宣言。

「……はっ、ははは。なんだよ、お前随分と千冬姉にご執心だな。……その、生まれが原

「困か？」

その言葉を、今度は一夏が笑い飛ばした。

それに真顔のマドカは、ピクリと眉を上げた。

「……お前が私の何を知っていると言うんだ。織斑一夏」

「カマかけたただけなんだがな。ま、お前が織斑千冬の贋作の類だとわかったのは収穫だな」

「言ってくれるじゃないか……！」

憎悪を深め、苛立ちを増して行くマドカ。一夏の観察眼が、意外な形で活きたパターンである。

睨み合う両者に、セシリアが叫ぶ。

「一夏さん、後方からISS機！私達が知らない反応ですわ！」

「……次から次へと、千客万来だなオイ」

10秒後、1つの黒い影が舞い降りる。

「迎えに来たわよ、エム」

くぐもった声と共に現れたのは、今では珍しい全身装甲フルスキーンのISS。

赤と黒を基調としたカラーリングに特徴的な三つ目のカメラアイ。

頭部から伸びた2つのアンテナはエジプトのアヌビス神の様な印象を与え、両肩には

速度を上げる為かウイングが付いている。

よく見るとスラスターが各部にあり高速度、高機動であることが伺える。腰のホルスターは、メイン武装であろう。パイルバンカーがあった。

通常のISならば、脚部の機械は人間のそれよりもかなり大きい。その脚はスマートであり、シルエットで言えばセシリアのそれに近い。

【システム スキャンモード】

NAME: Gruxeon

KE: 1253

CE: 1100

TE: 700

R ARM UNIT: pile (KE)

L ARM UNIT: pile (KE)

HUNGER UNIT: add magazine

HUNGER UNIT: golem

(グルゼオン…? いや…それよりも、なんだこのアイツに感じる既視感は?)

突如現れた謎のIS……グルゼオンはゆっくりとマドカに近づいて行く。

「……『T』か……何故来た。お前は呼んでない筈だ」

「織斑一夏がいる場所に行ってるもの。要らぬ争いを起こすと思ったけど、やっぱりね。さ、帰りましょう」

「……チツ」

舌打ちをして一夏達にマドカは背を向ける。

「……逃げますか!」

【システム 戦闘モード】

なにサラツと逃げようとしてんだと言わんばかりに一夏はライフルを放つ。

しかし、マドカに向かう徹甲弾の前に、『T』と呼ばれた女は素早く立ちはだかり

……

パシパシイ!

——弾丸を、キヤツチした。

「……は?」

『……え?』

「嘘……?」

一夏、財団、セシリア。



呆気にとられる3人に、「T」は弾を地面に捨て、深々と頭を下げた。

「無人機……ゴーレムについては私達のミツシヨンだから謝らないわ。でも、エムがやらかした無礼については彼女に代わってごめんなさい……じゃあね、また会うこともあるでしょう」

そう言うのと、既にサイレント・ゼフィルスを展開したマドカと共に「T」は去ろうとする。

弾丸をキャッチされた事に驚きはしても、立ち止まらずに2人は追おうとするが、グ  
ルゼオンの拡張領域バースロットから呼び出された影に阻まれる。

「ゴーレム!?!」

呼び出されたのは、ゴーレム。

先程までのとは少し違い、どっしり構える高装甲型だ。

「……さつきスキャンで見えたゴーレムつてこの事かよ!セシリア、ここは俺に任せて——  
——なア!?!」

新出現のゴーレムを自分が引き受けて、セシリアを行かせようとした一夏から驚愕の  
声がかかる。

ゴーレムのカメラアイが光ったかと思えば、人型の黒い機械が10体程その周囲から  
現れたのだ。

【システム スキャンモード】

NAME:GolemII

KE:1200

CE:1200

TE:1000

R ARM UNIT:

L ARM UNIT:

W ARM UNIT:GolemII(KE)

NAME:Sketon

KE:1000

CE:1000

TE:1000

R ARM UNIT:

L ARM UNIT:

W ARM UNIT:Sketon(KE)

『スキヤンした、どうやら避難所に向かう気のようなだね』

「んっ……のおーっ！」

財団の言葉を受けて一夏とセシリアは、最優先対象をゴーレムとスケルトンに変更、殲滅を開始。

ガトリング、ライフル、ビームマグナム、ピットの掃射が辺りの無人機達を塵に変えた時にはもう、亡国機業ファントムタスクの姿は無く――

「畜生……！」

――悔恨の叫びが、虚しく空に吸い込まれた。

――

夜

長いようで短いような、そんな1日の終わりに学園にモノレールで帰る2人の間の空気が重い。

「……」

「……」

当然ながら、楽しく談笑する気にはならないため互いに無言。

車窓を流れる暗い景色を、一夏はぼんやりと見る。

『戦闘中は忙しかったけど、こうして落ち着いてみれば解析できるものだね。あの無人機にはI S コアは無かったけど、代わりとなる動力源……』擬似I S コア』とも呼べる反応が確認できたよ』

その後、セシリアと救助活動に勤しんでいた一夏に財団が告げた言葉は、耳が痛くなるものだった。

・ 二週間ちよつとで、強奪した機体を動かす擬似I S コア取り付け

・ I S の拡張領域パススロットに無人機を入れる

・ 更に、無人機に無人機を搭載する技術

それらを持ってして成された今回の無差別テロとも呼ぶべき事件。

死傷者の数は膨大で、近くの医者・病院はどこもかしこもてんこ舞いになっていた。

そんな中でも、否、そんな時だからこそ元氣なマスコミもあり。

巻き込まれて、戦闘して、救助した2人に詰め寄る報道関係者を振り切るのは楽ではなかった。

フアントム…タスク  
(亡国…機業)

セシリアの新機体祝いに何か買おうと思っていた気分は台無しで、いつかの思い出の場所はグチャグチャで、一夏は拳をギュウつと握りしめる。

(このツケは……高くつくぞ……！)

織斑一夏は基本的にはお人好しな性格である。

それこそ、無秩序なAC世界でも強姦魔や盗賊に襲われた人を見ると助けに行こうと思おうぐらいには、だ。

戦いの中でしか生きられない性分だが、この平穏な世界は平穏なままでいいと思うぐらいには、平和も嫌いではないのだ。

『次に来た奴は殺す』

しかし、自身に害をなす時は別だ。

それは自分の命や財産に危機が及ぶ時だけでなく、千冬やセシリアといった身の回りの他者に対しても同じだ。

もちろん、その感情を抑えて行動できるからこそ彼は傭兵として名を馳せた訳だし、例えばセシリアが望んで戦争に参加して死ぬのであれば彼はただ見送るだけだろう。

ここまで来たら亡国機業は完全な敵だ。  
ファンタムタスク

今までは情報を集めるために生かそうとしたが、こつからその手の容赦は減少させるだろう。無論捕獲任務の際は別だが。

「……」

ピ、ポ、パ

ファンタムタスク  
亡国機業をぶっ潰すという決心をしながら、一夏は携帯をブツシュ。

プルルルル

『もしもし…』

「……もしもし、俺だ。一夏だ」

『織斑くん!? ニュース見たけど大丈夫!?』

「無事だよ、如月さん。……もうニュースになってんだな」

『ISによるテロよ! 当たり前じゃない…セシリアさんは?』

「無事だよ。ま、専用機持ちがそう簡単に死ぬ訳でもないし、ノープロブレムってね」

『…強がり』

「……」

電話の相手は、如月。

心配そうな彼女の声に、一夏は前置きもそこそこに本題に入る。

「……さあて、ね。まあうん。そんな楽しくもない俺の1日の話は、これでお終い! ……そういうや如月さんは今日はどんな1日だったんだ?」

『楽しくないって…うん、そうよね。私の1日はね、パーティーだったわ』

急な話題転換に如月は戸惑うが、確かに目の前で起きたテロの事などあまり話したくはないだろうと察したのか、声のトーンを切り替えて明るく答える。

「パーティー?」

『あら、言つてなかった？ 私のお父さんは “如月生体研究所” の所長……所謂ご令嬢なのよ私は』

「…ああ、そういうえば。なるほど、そういう付き合いでパーティなのか。誰か有名人来た？」

『そうね……うん、I S委員会のガードイン委員が来てたわ』

「……へえ」

思い出す為の少しの間の後に出された名前に、一夏は眉を寄せた。

その後、一言二言交わし一夏は電話を切る。

携帯をポケットにしまう彼の顔には形容できない妙な表情が浮かんでいた。

「……あんな事件の後とはいえ、レディの前で他の女と話すのはどうかと思いますわよ」

「…悪いな。ちよつと、戦いに関係ない人の声を聞きたくつてさ」

「……そういう事に、しておきますわよ」

モノレールを降り、出口に向かう。

校舎は、もうすぐだ。

# 08-03 身体は闘争を求める／欲する平和に心を寄せて

レゾナンスでの無差別テロ騒動の翌日。

一夏は起きて身支度を整えると、朝食もとらずに生徒会室へと向かう。

コンコンコン

「一夏です」

「入りなさい」

中から届く楯無の声に従いドアを開ける。

室内では千冬、箒、セシリア、鈴、簪がこのために出された大テーブルに着席しており、楯無だけは虚を近くに立たせながらいつもの会長席に腰掛けていた。

普段ならば4人で広々と使っていた生徒会室は、その人数を8人と倍にした事でやや手狭さを感じさせている。

虚は空いている鈴の隣の席を引き、一夏を座るように促す。

それは、今の一夏を副会長ではなく他と同じ専用機持ちとして扱う事を言外に示していた。



「さて、まずは皆さんおはよう。朝食もまだでしょうし、今本音が持つてくるから、それを食べながらでいいので聞いてちょうだい」

楯無の挨拶と同時に、先程一夏が入った扉からサービスワゴンを押した本音が入ってくる。

本音は料理を載せたそれを止め、虚と共に普段ののほほんっぷりを感じさせないテキパキとした手つきで料理を並べていく。

「今日は月曜日よ。昨日の件はどうであろうと、貴方達に授業はある事を忘れないでね」  
全員が食器を手に持ち食事を開始する。

重苦しい雰囲気は、負の調味料となり朝食の彩りを色褪せさせた。

『織斑くん、オルコツトさん。……お帰りなさい』

昨晚、そう言つて彼らを迎えたのも楯無だった。

彼女は2人にまず夕食を取らせ、起こつた事を聞くと『情報が今は錯綜してるから、明日の朝6時に生徒会室で集合よ』と伝え去つた。

ちなみに、“T”と呼ばれた謎の操縦者については知らせたが、マドカの顔については一夏とセシリアは知らせていない。

そして今は、説明用のプリントを見ながらどう説明するかを組み立てている。

状況を考えると確実に徹夜、もしくはそれに近い筈なのにこうして情報を纏めて伝え

る手筈を整える準備の良さから、彼女の手腕の高さをうかがわせる。

「説明を始めるわ。ここにいる私以外の専用機持ち―織斑一夏、篠ノ之箒、更識簪、セシリア・オルコット、凰鈴音の5人は昨日の3時頃に亡国機業操る無人機フアントムタスクによつて襲撃を受けた」

そして彼女は昨日のテロ騒動の詳細説明を開始した。

1. 襲撃を受けたのは5人だけではない。

標的となった専用機持ちは一夏達5人だけでなく、世界中他の国にいる専用機持ち3人もまた、被害を受けていた。

無論、専用機持ちだけあり全員無人機をその場で討伐出来る実力があつたのは不幸中の幸いと言えるだろう。

2. 襲撃を受けた専用機持ちに共通したのは『一般人がいる場所』にいた事。

一夏とセシリアのレゾナンス、簪の秋葉ホコ天のように沢山の人が訪れる場所や、箒や鈴のような住宅街といった人が住んでいる場所に無人機は現れた。

しかし、楯無のようにIS学園や軍事基地といった警備がしつかりとした一般の人が立ち入れない場所には現れなかった。

3. 基本的に、専用機持ち1人に対して1機の無人機が襲撃した。

これに関しては文字通りであり、箒に鈴に簪もこの例に当たる。

しかし例外が一件存在しており、一夏とセシリアが遭遇した『無人機を呼び出す無人機』はここでもしか確認できていない。

加えて亡国の者と思われるＩＳが確認できたのも、レゾナンスでの一件しかない。

「……と、いうわけよ。何か質問があるかしら？」

「…では一つ。よろしいでしょうか？」

説明を終えた楯無は、全員に疑問がないかを問う。

それにセシリアは手を挙げて、気になる場所を口にする。

「この襲撃事件について、以前私達が捕獲した構成員からなにか聞き出せましたか？」

セシリアの問いは2週間前の『キャノンボール・ファスト』で楯無やセシリアが捕らえたエドワースやボタン、なぜか埠頭の倉庫街で倒れていたナオミからテロ計画の情報を調べられたのかというものである。

捕らえられた彼女達は、観念したのか従順で模範的な捕虜生活を送っていた。

「むしろあつちが驚いてたわ。『研究用じゃなかったのか』って……正直同感ね。頭がアレか、もしくは念入りな準備がなければ奪ったばかりの代物を使おうとは思わないもの」

「なるほど、わかりましたわ」

聞くことは終わったとばかりにセシリアは食事に戻る。

「質問はもうないようだな。では、私から伝えることがある。まずは——」

そして、今までずっと黙っていた千冬が口を開いた。

—————

ホームルーム開始30分前の一年一組の教室。

既に大半の生徒が準備を済ませて談笑や自習に励んでいた。

「おはよう」

「おはよう」

「おはようございませすわ」

ざわっ……

扉を開けて専用機「夏セシリア 幕」持ちちが入ってくると途端に彼女達はざわつく。

なにせなんらISと関わりの無い人ですら騒いでいる事件だ。ISを使う為

にいる彼女達からすればその当事者が現れたのであれば騒々しくもなるだろう。

「ねえ……聞きに行きなさいよ……」

「ええ〜アンタが行きなさいよ……」

ヒソヒソ話を尻目に、3人は自分の席に着こうとする。

そんな冷めた表情の彼らに一人の少女……『神崎コヨミ』が近寄っていく。

「あ、あの……一夏さん、セシリアさん、箒さん……」

「……どしたの神崎さん？」

「えつと。昨日は、ありがとう！」

礼の言葉と共に神崎は深く頭を下げる。

突如、礼を述べられた三人は目をパチクリさせて顔を見合わせる。

「失礼ですが、神崎さん。昨日私達と会いましたっけ？」

「ううん……実はね、昨日の事件が起きた場所に私の彼氏や家族……大事な人がいたの」

聞くとレゾナンスに父と母が、神社に彼氏がいたらしく、不幸にもテロに巻き込まれたようだ。

「でもね、お父さんは一夏さんが不審なISの注意を引いてくれたから逃げられたし、お母さんは逃げてる時にした怪我をセシリアが手当してくれたいし、彼に至っては紅のIS……多分箒さんが直接ビームから庇ってくれたって言ってたの」

「庇った……？もしかして、五分刈りのあの人が？」

「うん、きつとそう！その人が私の彼氏！」

箒だけではなく、一夏とセシリアも心当たりがあるようで納得した素振りを見せた。

そして神崎は再び深々と頭を下げる。

「本当にありがとう……グスツ、みんながいなかったら、エグツ私は大切な人を無くしちゃつてた……」

その未来を想像したのか、感謝の言葉が嗚咽混じりになっていく神崎。

顔を涙と鼻水で濡らす彼女を、セシリアは優しく抱きしめあやすように背中を叩く。

「……そういつてもらえるのであれば、貴族として、貴女のクラス代表として、これほど嬉しいものはありませんわ」

「俺も同じだな。貴族でもクラス代表でも無いけど、生徒会の一員として学園の生徒を守れたなら誇らしいぜ」

「……別に私に何か役職があるわけではないが……だが、そうやって喜んでもらえたなら頑張った甲斐はあつたさ」

セシリアの言葉に一夏と箒は続き、それを受けて神崎は更に「うわーん！」と泣いた。

……ちなみに余談だが、この件以降『孤高のクラス代表』としてクラスメートから避けられていたセシリアは、徐々に受け入れられ始めた。

そして何故か——神崎のセシリアを見る目が艶めかしいそれになった。

「私は男でも女でもホイホイいける女なんですよ？」 b y 神崎

「なーんか妙に寒気が……」 b y セシリア

—————

「色々ありました、ああ言ってもらえるなら報われるつてものですわねえ…」

「そうだな。だがこれから、窮屈になるな」

「む、窮屈になるとはどういう事だ？」

ちよつと経つて、泣き止んだ神崎が席に向かった後。

セシリアと箒の会話を聞いたラウラの疑問に、一夏は先程の千冬の話を目打ちする。

『まずは、お前達が学園外で無許可でISを展開した事については、事態が事態なので不問とする』

千冬その言葉に専用機持ち達は『当然だな』と言わんばかりの面持ちであった。

寧ろこういう事態に使わずに、なにが世界のパワーバランスを揺るがす兵器か。

『そしてもう一つ……お前達専用機持ちは、特例を除き今後一切の学園から出る事を禁ずる』

続く言葉へのリアクションは様々で、知つてたという顔のセシリア、一瞬驚いたが直ぐに察した一夏と簪、どういう事だと目を見開く箒と鈴と別れていた。

『先程、榎無が言つたように無人機は一般人が多数いる場所にいる専用機持ちを狙つて来た。……つまり、今後貴様らがそういう所に出歩くと事件が起きるかもしれないという懸念が上から出てな…』

説明された事情に、文句を言おうとした箒と鈴は渋々頷く。

自分が動く事で無辜の人々が傷つくのは、良しとできなかった。

「……という訳だ」

説明を終えると同時に、教科書やノートの準備も済ませる。

理由を聞いたラウラはフムと一瞬何かを考えた。

「なるほど、では叔父よ。今後なにか学園の外で欲しいものがあつたら私に言ってくれ、買つてこよう」

「お、サンキュ」

「気にするな。しかし、専用機がある故に狙われるとはツイてないな」

「今のお前は持つてないもんな、と。そろそろ授業だ戻つとけ」

例え一昨日が熱気溢れるレースだとしても。

例え昨日が地獄変たるISテロだとしても。

このIS学園ではいつものように1時間目が始まり、昼休みを経て、放課後になる。

—————

「さて、お待ちかねの放課後ですわね。どうしましよ一夏さん。セシリアと特訓します？ オルコットと特訓します？ それとも…わ・た・く・し？」

「……昨日一昨日と、亡国と殺りあつてそのガッツはなんなんだお前」

「やはり特訓ね。いつ行くのかしら？ あたしも同行するわ」



「ふうりんりん風鈴院」

今日の授業が終わり、参考書をカバンにしまおう一夏。そしてそれに絡むセシリアと、なぜか別のクラスなのにいつの間にかいる鈴。

「……今日は生徒会の仕事があつてな」

「……そうでしたか、まあアリーナとつてなかったのでどうせ出来ませんでした」

「新機体貰つてハツチャケ過ぎだろ」

基本的に、殺し合いやそれに準じた戦闘というのは非常に精神を削る。

一夏もまた、直接戦つたのは昨日だけとはいえ2日連続の索敵含む戦闘でかなり負担が来ていた。

もちろんそれで音を上げる程彼等はヤワでも無いが、休める時に休んでおくのがいい筈……というか一夏は実際にそれを視線で訴えているがセシリアは笑顔で一蹴。

そんな一夏の台詞に、ピクツと鈴が反応する。

「……新機体」

「……？鈴、今なにか言つた？」

「ううん、なんでもない」

誰にも聞かれることなく、鈴の独り言は空に消えた

# 08-04 你来?所学校是?了什么?

放課後の廊下を、鈴は目的地も定めぬまま歩く。

『以前私達が捕獲した構成員から——』

『新機体貰って——』

脳裏に浮かぶ、今日の記憶に下唇を噛む。

(羨ましいなあ……)

心を占めるこの感情の名は『嫉妬』

新型の専用機と開花した才能で先に行くセシリアライバルへの羨望が、胸にチクリとした痛みを残す。

昨日の戦いで、己が操縦者として成長した事は実感している。

だが、セシリアは……もつと成長している。

『そりゃその機体のデータを作ったの俺と財団だし』

彼女がこの感情を抱き始めたのはいつからかと言われれば、2週間前のこの一夏の台詞だろう。

一夏がセシリアの為に詠えた、あちらの世界のテクノロジーを込めた機体フルー『B』ティ

アーズ・D—N X』の事を聞き妬ましく思ってしまった。

『悪いけど、君用の機体は用意できないよ。ブルー・テイアーズのパイロットにはBT適性という面白いものがあつたけど、君にその手のは無いからね。まあ、地道に強くなつた方が身のためじゃないかな?』

あの時は話の展開で流れてしまったが、その後専用機を改めて求めて見たものの返ってきたのはこの答えであつた。

別に鈴の才能が低いという訳ではない。

中学2年生の時に中国へ帰国しその後、わずか1年弱で国の候補生まで登りつめた才能の持ち主だ。

だがしかし、それは何か一つに突出したのではなく、レーダーチャートで表した際に綺麗な図形を描くタイプの素質である。

財団曰く『そもそもISとACの両特性を持つ黒い鳥ダイクレイヴンがおかしいだけで、ACの武装技術をISのそれに転用する為には使用者に対して色々条件を求める』らしく、セシリアは持ち前のBT適性をより強化する事でその条件をクリアした。

(あたしがダメな子って訳じゃない……)

頭ではそんな事はわかつている。

だが、その機体は……財団だけではなく嘗ての想い人夏も作つたものだ。

そしてその彼は、卒業してしまえば永久にこの世界を去ってしまう。

その後に残るものはないか?……今のところは、自分の失恋しかないか。

そもそもセシリアはずっと一夏の側に居て、仲が良くって、機体も貰って……

『友達の貴女が一夏さんのことが好きなのに、それを裏切る訳無いでしょう?』

(浅ましいなあ……)

そうだ。なにを考えてるんだあたしは。セシリアは大事な友達でライバルだ。

別に臨海学校で高速パッケージが無かったから出れなかった事も、セシリア一人で亡

国機業を倒して居た事も気にして——

「——るわよ。ハア……「ジーツとしてても」……ん?」

ため息をついた鈴は、周りを見渡す。

(なにか聞こえたような)

「ドーにもならねえ!」

微かだが、今度こそ確かに鈴の耳はその声を捉える。

聞こえた方向に向かってそろりそろりと忍び足で近づき覗いてみる。

「ユーゴー! アイゴー! ヒアウイーゴー!」

「フュージョンライズ!」

「決めるぜ、覚悟! ハアハッ! ジイイド!」

「ウルトラマン！ウルトラマンベリアル！ウルトラマンジード！プリミティブ！」

そこではなにやら赤い機械……鈴は名を知らないが『ジードライザー』を手に俗に言う『なりきり遊び』をする簪がいた。

「フツ……ハアアア……」

そして、身体の前で手を交差、そして振り上げジード必殺の光線『レッキングバースト』のなりきりを放とうとした簪は——不思議そうな目で自身を見る鈴に気づいた。

「……」

「……」

目と目があい、時間が止まる。

簪の顔はその水色の髪とは対照的に羞恥で赤く染まり……窓に向かって駆け出した。それになにかを察した鈴も続く。

「ちよつと！ここ5階よ!？」

「放して！今の私はデユワつと飛べるから！」

「なに言ってるのよ！純地球人！」

「貴女もでしょ純地球人！」

「そもそも宇宙人なんてあたし達が会った中にいないでしょ！」

「……篠ノ之束」

「……そうね」

「……落ち着いた?」

「……うん」

10分後、場所をカフェテリアに移した鈴は、目の前の簪を見やる。

『大丈夫。主武装が無いだけ』

(そういえば……)

鈴は、簪の機体が以前開発途中だった事を思い出す。

キャンノンボール・ファストや昨日のテロ事件で戦えていた以上ある程度はなんとかなっているのだろうが、今はどうなっているのだろうか。

「……そういえば、あんたの専用機ってどうなってるのよ。臨海学校の時は武装ないとか言ってたけど……」

「……」

そんな機密情報とか言われそうなのにと直球に聞く、鈴の良くも悪くも真つ直ぐな所に簪は少し黙る。

「あ、ごめん。中々話せないわよねそういうのは」

「……別にいいよ。…完成とは言えるし、そうじゃないとも言えるよ」

「なあにそれ？」

謎かけか何かかと鈴は腕を組み、考え込む。

そんな鈴が予想外だったのか、すぐさま訂正をする。

「当初の予定の『打鉄式式』は完成したけど、その先の場所はまだまだだって事」

「……新型機、か」

「イギリスが新型機を開発したっていうのに、こっちの開発部が燃え出したよ。……私も、対抗心はあるけど」

「モテモテね。あたしのライバルは」

白けた表情でハツと言いつ鈴。

しかし、目の前のそんな彼女に気づかず、簪の顔は新たな開発に燃える開発者のそれになっていた。

「二昨日導入したばっかって聞いたけど、早く見てみたいなあ……。どんな機体なんだろう？ブルー・ティアーズの進化系ならピット100機ぐらいあるのかな……」

「……セシリアが死ぬわよそれ」

放つ内容に、流石に纏った暗いオーラを消してツツコミに回る鈴。

こういう所で常識人だからこそ苦勞が絶えないタイプだということは自覚はしてるらしいのだが、中々人間変わる事は出来ない。

「……でも、あの人見てると……正直、死ぬ手前ぐらいなら平気で踏み込みそうというか……」

「……」

その言葉に対して親友ライバルを擁護する事は出来なかった。

—————

「ハア……」

ため息の多い1日だな。幸せがどれだけ逃げただろう。

そんな事を思いながら寮への道を歩く鈴は、手に持ったメモを見る。

『更識簪 ○○○—△△△△』と書かれたそれは先程簪に別れ際に渡されたものだ。

『電話番号…交換しない……?ほら、同じ代表候補とクラス代表だし』

『別にいいわよ。断る理由も無いし』

『ありがとう……よし、これで始めて本音以外の同級生のアドレス貰えた』

「……」

貰った時の事を回想し、ポケットにしまう。

「…ま、あんな可愛い笑顔を見ただけで収穫はあったかな」

そんな事を言う鈴の顔は、少し寂しそうではあったが笑っていた。

機体の事も、セシリアの事も今は置いておこう。



そう思い、彼女は寮に向かって駆け出した。

「……………うーん」

ザクザクバリバリムシヤムシヤ

寮の一室。

金髪碧眼の少女『ティナ・ハミルトン』は辺りに大量の空のお菓子の箱を作りながら悩んでいた。

悩みの内容は最近元気のない同居人『凰鈴音』をどう元気つけようかというもの。

(昨日の事件…すっごくい死傷者が出たらしいいなあ……)

ただでさえ、空元気が味だった彼女の元に起こったISによるテロ事件。

鈴自身が解決したそれに対して、『専用機持ちをテロリストが標的にしたのではないか』と朝のニュースは報道し、ティナは拳を震わせた。

確かに鈴達の事を狙ってテロリスト達は襲ったのかもしれない。

だけど、それで鈴達を悪し様にいうのは何か違うのではないだろうか。

そんな怒りが胸を占め、彼女がなにか気にしてはいないだろうかと思いい声をかけようと思っていたが、結局かける事なく1日が終わりそうになっている。

そうだ。鈴は自分のルームメイトなのだからここで会わざるを得ない訳だし、教室で

話せなくつてもここで話せる訳だし、というか人死にを見た人への対応なんて知らない  
 ンだけどあれこれ一体どうすればいいんだ刑事ドラマでも見た事ガチャねえよ

「……ティナ。太るわよ」

「うオツヒよイ?!いいいいいいの間に帰ってたの鈴?」

いつ間にか部屋に戻っていた鈴にティナはワタワタと狼狽える。

そんな調子のティナに鈴はポリポリと頭を搔く。

「……さつきよ。あーもう菓子カスがほっぺについてるわよ、ほら動かないで」

「あ、いや……自分でできるわよ……」

ポケットティッシュを取り出してティナは急いで自分の顔を拭う。流石に同級生に  
 顔を拭いてもらうのは恥ずかしいにも程がある。

「……しつかし、今日は驚きの連続ならぬ、驚かれの連続ね」

「……?」

「なんでもない。こっちの話よ」

鈴の眩きに、ティナは疑問符を浮かべながら先程まで逡巡していた事を思い出す。

「……え、えつと……よし!鈴!」

「……?なによ改まって」

スウハアとゆつくり大きく深く呼吸し、決心。

パチンと頬を叩いて口を開く。

「えつとね。あたし、鈴が最近元気ないと思うの」

「……あーなんか気遣わせちゃった？」

「うん。あたしは代表候補とか専用機持ちとかじゃないけど、もしよければ……力になりたい」

「……」

その言葉に、鈴は驚いてきよとんとする。

「……だめ……かな……？」

「ううん。ありがとう……じゃあちよつとごめん」

そう言って鈴は、ベッドの上に女の子座りで座るティナの胸に顔を埋めた。

そんな鈴の行動に今度はティナが目をパチクリさせるが、直ぐにポンポンと鈴の背を優しく叩く。

「……結構限界だったんだね」

「うん」

「……前に言ってた失恋？」

「うん」

「……友達？」

「うん」

「…他のもある?」

「うん」

「大変だったね」

「うゝ」

ティナの慰める様な問いに、鈴は吐露するように答えていく。

昨日の事件が、元々それなりに負担が溜まっていた精神を一気に追い詰めていたのか  
普段の強気さが嘘のように消えていた。

(あたし………なんのためにこの学校に来たんだっけ…)

## 08105 作る、形成するという意味

(ねえ財団。——つて可能かな?)

(『ふむ、理論上可能だとは思うよ。具体的には——』)

テロ事件から2週間後の放課後。

今なお朝のニュースのトップを飾っており、その渦中の人物である一夏は生徒会室で業務を行いながら並行して財団と心の中で会話する。

(『——と、こんな感じだね。……でも実際にはやらないでほしいね。僕とコアに負担がかかる』)

(そこをなんとか)

(『やだね。やると決めた以上は君のオペレーターはこなすけど、暇つぶしレベルだという事を忘れないでくれ』)

心で雑談、体は業務。

小器用な曲芸をしているのも、一応戦闘時での連携用訓練の一つなので問題はない。

(はいはい……そういえば、I S コアで思ったけど、結局擬似I S コアとモノホンの違いってなんなんだ?)

『そうだね。まず共通するのはISを動かすエネルギー源となる事、拡張領域バズスロットが存在する事、コアの無い無人機を遠隔操作できるという事』

あの時、無人機から無人機が出て来たのも拡張領域にしまっていたんだろかねと補足し、財団は続ける。

『で、質問の答えなんだけど二つあってね。一つ目は絶対防御が無いということ、もう一つは《コア人格が無い》ということさ』

(……ラファールとか打鉄に乗った事はあるけどさ。正直、ここまでペチャクチャ喋るコア人格ってお前ぐらいじゃない?)

『ハハハハ……確かに、僕程饒舌なコア人格も無いだろうね。ま、本来なら君のISも寡黙だったんだよ。僕がその人格を消去して乗っ取っただけで』

(……そうかい。あ、名前間違えた)

既に亡き者となった元のコア人格を一応程度を死を惜しみながら、一夏は書類に訂正印を押す。

大きく深く伸びをし、ふと周りを見てみると楯無と虚が黙々と書類を片付けてるのが見える。

(……コア人格が無い、ね)

『それがどうかしたのかい?』

(なあ財団。アウトモールで無人機にお前のUNACと同じものを感じたって言ったよな?)

有人機程の人間味は感じず、かといって純機械程の無機質さも感じない、人と機械の中途半端な所にあるような：例えとしては『不気味の谷』のような感覚。

その感覚は財団製のUNACにだけ感じ、一夏が自分で作ったりあるいは他のアーキテクトが作ったものには感じなかったものだ。

そして、嫌な感覚を感じたUNACだけが暴走し、感じなかったものは暴走せずに従来の想定通りの挙動を行った。

財団製のUNACが暴走したのは、マギーの情報曰く財団が仕込んだ時限式のウイルスという事だったようで、あの嫌な感覚はそのウイルスを捉えたものだったのだとその時の一夏は納得したが、まさかあの無人機達にそのウイルスが入っている訳でもあるまい。

(なあ、あのUNACに何が入ってたんだ：財団?)

(『……』)

故に、問う。

ウイルスが答えでは無いのなら、何が答えなのかを。

(『…僕もそれについては気になってね。無人機のデータを分析した結果と僕のUN

ACを照らし合わせての仮説だが…構わないかい？」

(「いいぜ、お前の頭脳は信頼できる」)

(『その前に、まず臨海学校で僕がした『ファンタズマ・ビーイング』の説明を思い出してくれ』)

(『ファンタズマ・ビーイング』って……)

『2つのプロジェクトを踏まえ、両者の手法を組み合わせて立案された手法さ。』

クローニングによって生み出されたものうち、理想に近い試験体の意識・思考を完全に電子化するという計画だよ。

電子化により、外部からの観察と修正を容易にすると共に、安定した複製の生産の実現を理論の完成に置いた、いわば自我を完全にプログラムへと置き換えることを目指した計画さ。

ただ、その実現は困難を極めたみたいでねえ。かろうじて実現にこぎつけて、汚染の原因となった戦争の末期には、実戦への投入が行われたと言われているけど、ほぼロボット同然な状態にまで個性を消滅させてしまうと著しい戦闘性能の低下がみられるなどの問題も生じていたよ』

(「これか?」)

(『うん、それだよ。というかもう勘付かない?……人と機械の中途半端な所にある感覚



「なんだよね？」

そのヒントに、一夏は全てが繋がった感覚を得る。

作業を再開した手が、驚きによって止まる。

『ほぼロボット同然な状態にまで個性を消滅させてしまうと著しい戦闘性能の低下がみられるなどの問題も生じていたよ』

（まさか……！お前のUNACの中のフォーミュラ・ブレインって……！）

（『正解。『ファンタズマ・ビーイング』の失敗した個性なき被験体……それが僕のUNACの正体さ』）

（……それじゃあ、なんだ？あの無人機……UNACならぬUNISユニックスとも呼ぶべき奴らにも元人間の機械が積んであるのか？）

（そのまんま、という訳じゃ無いと思うよ。あるとするなら、そう……）

——戦闘用に教育培養したクローンの脳を載せている、とか。

「……おいおい」

世紀末極まってるなア……。

一夏のそんな感想を込めた眩きと思わず溢れる。

ペンと紙の音しかない部屋に漏れ出たそれに楯無は不思議そうな顔をする。

「どうしたの、織斑くん」

「あ、いや……ごめんなさい。ちょっと外の空気を吸って来ます」

一夏は楯無の言葉に気恥ずかしそうに頭を掻きながら、いそいそとドアノブに手をかける。

バン！

そして次の瞬間弾けるように開いたドアに吹っ飛ばされた。

「ぶべらっ!？」

「織斑、いる?……し、死んでる……!」

—————

「織斑、ほんとごめんね。鼻血止まった?」

「止まったなあ……」

一夏はそう言つて、鼻からティッシュを抜いてゴミ箱に放る。

一夏が簪のドアオープンに顔面強打して十分後、2人は整備室にジュースを片手に向かつていた。

勿論、謝罪の意を込めた奢りである。

「しかし、なんでまた機体開発に俺を呼んだの?……正直役立たんよ?」

「そんな事ない。織斑が持つ技術はきつと役立つ」

「でも俺が提供出来るのは以前言つた通り……」

「……『見合った素質無しには使用できない』……わかってるよ、そんな事。でもね、それで諦める気は無いんだよ……」

消極的な一夏の言葉を、先取りする形で簪は語気を強める。

ダウングレードすれば使えるかもしれないのに。

局所的な技術応用ならば可能かもしれないのに。

使えずとも着想を得られるかもしれないのに。

それをせずに彼女は諦めたくはないのだ。

「机上の空論を理論上可能にして、それを更に現状に映し出すのが開発者だよ……素質がないなら補うものを作ればいい」

「……ザ・開発者な事を言うな。そんな燃えるものかね」

「当然だよ……私は元々、姉さんを超えるためにこの学園にやってきた……当初の目的は姉さんとの和解で無くなったけどその過程で生まれた私の中の開発者魂は無くなりはない……!」

普段の簪から考えられないほど饒舌に己を語って行く。

簪はグイッとマックスコーヒーを飲みきり、振りかぶって一投。弧を描き缶はゴミ箱に吸い込まれる。

「B<sup>フル</sup>ティアーズ・D<sup>ディー</sup> | N<sup>ネクスト</sup>X、あれは凄かった。……でも、凄いと云ってただけでいたくな

い」

ギユウウツ

『協力して欲しい』……じゃない。『協力してもらおう』よ……織斑』

「……ハイハイ。できる限りはやらせてもらおうよ」

音を立てて握られた拳と共に告げる簪の決意に、一夏はヤレヤレとジエスチャーすると同時に満更でもない顔で頷く。

そもそも、断らずについてきてる時点で暗に協力すると言ってるようなものだが。

—————

「……で、どんな風に打鉄コイッ式を改造するんだ？」

そうして、整備室についた2人は打鉄うちがねにしき式を前に話し合いを始める。

「織斑。以前私の魂から溢れた言葉の共通点……覚えてる？」

「エグゼイド、エックス、ゴースト、そして鎧武……『素体に被せるアーマーで性能を変える』点か？」

「そう、その通り。私が目指す機体はね……言うなれば『擬似第4世代』と呼べる機体なんだ」

装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指したのが第4世代。

ならば、後付イコライザ武装で戦闘用途の多様化を主眼にした第2世代と、操縦者のイメージ・イ

ンターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした第3世代の技術を合わせて使う事で『戦闘中に換装して、全てに対応する』擬似第4世代を作ろうではないか。

簪はそう言っているのだ。

「…で、そのモデルに外付装甲でフォームチェンジやタイプチェンジを持つ特撮ヒーローを使うって事か」

「そう、だから私が作るべきなのは4つ」

- ・ある程度のリソースを余らせた器用貧乏でも状況を見れる基本形態となる素体
- ・そしてそのリソースを用いて特定の機能に特化させる追加装甲
- ・基本形態や派生形態で使用する武装
- ・カッコいい必殺技

「……最後いる？」

一夏の訝しげな声に、簪はバァン！と机を強く叩く。

「いるよ………というか、オルコットに『ヴォルカニツクコメット』なんてつけた織斑がそれ言える？」

「アレは……その、深夜テンションでつい……うん、必殺技は必要だな。ロマンだもんな」  
財団としてかした悪ノリの結果を思い出して、一夏は閉口する。

彼もまた、カッコよくて強いものが好きな男の子である。

「わかってればいいんだよ。……さあ織斑、『ひとつ走り、付き合えよ！』」

「……ハア。なら、こう返してやるよ。『OK、FIRE All ENGINE！』」

—————

「出来た——！！！」

そうして、更に6日後。

授業、特訓、部活、部活、生徒会。その中の暇を見つけては、アイデアと技術の折衷を詰めていた2人はパソコンを前に叫ぶ。

「落ち着け2人とも。うるさい」

「すみませーん」

整備科の2年生、マーキュリーの注意に謝りつつ2人は出来たデータを念入りにセーブする。

「よし…バックアップ完了。それにしてもアレだな、うん」

「そうだね。鎧武とかゴーストとかエックスとかエグゼイドとか言ってたけど…」

データをしながら2人は、声を揃える。

「仮面ライダービルドだコレ……」

## 08-06 ラウラさんは断れない

「重たいなあ……」

品川駅高輪口近く。少女のボヤク声が溢れて消える。

少女の名は、『織斑ラウラ』。『ラウラ・ボーデヴィツヒ』ではない。

そして、そんな彼女が何故大量の荷物と共に途方に暮れてるのかというところ。2日前に遡る。

「織斑！開発タイムだ、行くぞ！」

「飯ぐらいゆつくり食わせろよ畜生！」

それは、一夏と簪の機体開発が行われていた時期。

食堂では簪によってドナドナされる一夏の姿があった。

「……」

ラウラは美少女に首根っこを掴まれて連れてかれる、人によってはご褒美な処遇な叔父を見ながら黙々と箸を進めていた。

「隣……隣……？」

そう言うが早いかな、ラウラと同じ一組のクラスメイト『谷本癒子』は煮付け定食を載せたお盆を置く。

「……構わん」

「ありがとー。……それにしても、織斑くんだったら浮気者だねー。アレじゃオルコツトさんに愛想つかされちやうよ」

「叔……織斑一夏とセシリアは付き合っただけじゃないぞ」

ラウラは思わず「叔父」と言いそうになったのを堪え、「一切れ！チキン南蛮を後一切れ！それで俺は戦える」と抵抗する一夏とそれを冷めた目で見るセシリアの仲への誤解を訂正する。

「ええ〜それはないよお〜。だってよく2人でいるじゃん。……それに」

「……それに？」

「最初は男性操縦者なんて認められなかったお嬢様と、それをハイハイと受け流しながらもほっとけない少年のロマンスって……燃えない？」

「……」

目をキラキラと輝かせる谷本に、ラウラは不思議そうな、或いは可哀想なものを見るような目を送った。

（あの2人、そんなドラマチックな友情の築き方してたか？）



「……ちそうさま。ま、どう思うのも勝手だが本人達に言うなよ?……可哀想な人を見る目で見られるからな」

そう言つて、お盆と食器を回収ボックスに入れようとするラウラは……途中で哀れにも連れ出された叔父の残飯を見つけてそれも捨てた。

「たはー疲れたぜー」

そして放課後。

生徒会も開発も終わり疲れ果てた一夏が寮に戻る。

「……叔父か」

「お、ラウラ……そうだ、お前明後日用事ある?」

「いや、無いが……」

「そりやよかつた、ほらお前……前に言つてたろ、『外で欲しいものがあつたら私に言つてくれ』つて」

「ああ、そういえば言つたな……で、何を買えばいいんだ?」

ラウラの了承に、一夏はいそいそとメモ帳を取り出して走り書きする。

一夏はビリつとページを破き、財布から数枚の紙幣を出してラウラに渡した。

「秋葉原のこの店でメモのパーツを買つて来て欲しいんだよ。コレだけあれば交通費含

めて足りると思うからよろしく」

「了解……「ちよつと待つて」……ん？」

一夏から必要なものを受け取ったラウラは、一夏の背後から聞こえる小声に怪訝そうな顔を見せる。

「お前は……更識簪？」

声の主は簪。ラウラとは初対面故にかなり緊張している。

『最強はダイケイドよ！』

『いいや、RXだ！』

訂正。夏休みテンションで馬鹿みたいな事で言い争っていた。

「織斑さん……明後日東京に出かけるんだよね……う？」

「ああ……それがどうかしたか？」

その言葉に、簪はバッグから一枚のチケットを引っ張り差し出す。

「お願い……！本音といっしょにこのショーに行つてきて！」

「……え？」

ぽかんとした顔をラウラは晒す。

「あのね……このチケット、一か月前に取ったものなの」

「一か月前……そうか、確かISテロの前か」

2週間前のテロ事件を受けて一夏や簪と言った、専用機組は認められた事態以外での外出を禁じられた。

それで一か月前に取ったチケットが使えなくなってしまうた為、代わりにラウラに行つて欲しいと簪は言っているのだ。

「それでね…行つてくれるならシヨアの動画撮影と、サインを貰つて来て欲しいの…！もちろん、手間賃や交通費諸々は全部私が負担するから…！」

「いや…大丈夫なのか、撮影つて？」

「そこは大丈夫。個人使用の範囲だから…！」

簪の目当てのヒーローショーで行われる内容が配信されたり円盤化される事は無いよう、そこをなんとかする為に動画撮影を頼んでいるのだ。

ちなみに、SNSに流さなければ決められた範囲での撮影はオツケーだったりする。守らないマナーの悪い特撮ファンもいるのだが。

「…なあ」

「ダメ」

本音に頼め？ダメだ、のほほん過ぎて忘れる。

そんな本音への熱い負の信頼が、簪にあった。

「…わかった。行こう」

「ありがとう……このお礼は必ずするね……」

まあ、シヨーを見た後に秋葉で買えばいいか。

そう思つてラウラはチケットを受け取る。

スタツ

するとそこへ、階段の2階から誰かが飛び降りてくる。

「話は聞かせてもらいましたわ!」

ヒーロー着地で現れたのはハイパーウルトラパーフェクト美少女英国代表候補生――

――セシリアであつた。

「……何の用だ、部屋に帰れ」

「つれないですわねえ。私も貴女に頼み事をしたいだけですのに」

「貴様もか!? なんなんだ、貴様も私に頼むのか!? 友達いないのか!?」

「……貴女と如月さんしか頼める人がいないんですのよ……断られましたし」

親しいクラスメートが特にいない、そんな哀しき<sup>(笑)</sup>クラス代表の懇願の視線は抗えるも

のではなかつた。

「はあ……仕方ない。やってやる」

そうしてやれやれとラウラが承つていと更に2人……鈴と箒がやつてくる。

「そういう事なら私もラウラに頼みたい事があるんだが……」

「頼んでいい、ラウラ？」

「ええい！まとめてやってやる！」

「重たいなあ……」

そして、冒頭に戻る。

一夏、セシリア、簪、鈴、箒……5人の頼まれごとを順繰りにこなしたラウラは、手に持った荷物の量と重さに辟易する。

(どうしたものか……)

ラウラの持つ筋力は高い。元軍人、元代表候補として鍛えられたその力は今なお健在だ。

しかし彼女の体格は小柄で、その荷物を全て抱えて帰るには物理的に手が足りないのだ。

「やあ。お困りのようだね……ラウラ」

「貴様は……」

そんなラウラに、スーツを着た金髪の女が近寄る。

彼女の名は……

「……シャルロット・デュノア……」

驚いた顔のラウラに、シャルロットはクツクツと笑う。

誰もが見惚れる美貌から出でるその微笑みは、ラウラにとっては視線を厳しくさせるものでしかなかった。

「警戒心MAX……って感じだね。僕なにかしたかなあ？」

「……いや。以前出会った、性別偽称者に貴様がよく似ててつい、な」

「奇遇だねえ、僕も以前、君によく似た可愛らしいドイツ軍人に出会ってね。……実を言うとなと僕が君にお近づきになりたいのはその娘の顔が忘れられないと言うのもあるんだよ」

「……そうか、是非そのドイツ軍人と会って見たいものだな」

他愛のない、それでいてお互いの過去を刺すような会話が繰り返り広げられる。

ラウラの口は固いへの字に、シャルロットの口は三日月を模す。

「……で、どうしてデュノアの若き社長が、こんな所にいるんだ？」

「懐かしいね、その言葉。2週間前だっけ？」

「そうだ、2週間前だ。……その時に起きたテロ事件で、貴様のような専用機持ちはあまり出歩かない方がいいと思うのだがな」

問答の間でもラウラの身体に負担をかけ続ける荷物の主達のように、シャルロット・デュノアもまた専用機持ちちとしてフランスで襲われた。

本来ならば、彼女も余程のことがない限りあまり動けない筈だが…。

「…ま、そこは社長として動かなきゃいけないからね。厚遇させて貰ってるよ」

「これでいいかい？」と言いたげな眼差しで、シャルロットは返す。

そう言われてしまえば、ラウラに切れる言葉てふだはない。

「……さて、こんなピリピリした会話はここまでにして…君達！」

言葉に詰まったラウラをチラリと見て、シャルロットはパンパンと手を鳴らす。

合図と共に数人の黒服が現れ、シャルロットを守るように囲む。

「彼女の荷物をIS学園に運んであげて。傷一つなく、丁寧だね」

「……どういうつもりだ」

柔和な笑みと共に突如差し伸べられた助けの手に、鋭い視線を投げる。

「袖振り合うのも他生の縁さ、言ったでしょ『僕は君の敵じゃない』って」

「……」

「そんな怖い顔しないでよ。……そうだ、じゃあ僕の仕事を手伝ってくれない？」

「なに……？」

更に続く、意図不明な言葉にラウラは懐疑の表情を強める。

「敵かどうかを君自身の目で確かめるって事だよ。働いた分の給料は払うし、ちよつとしたバイト程度に思ってたさ」

「……」

『キャンノンボール・ファスト』の一件でシャルロット・デュノアは亡国機業に通じる何かを持つているとラウラは確信していた。

だからこそ、この依頼を軽率に受ける事は出来ない。

もしも畏で、千冬や一夏への人質にされたりなどすれば目も当てられない。

(どうする……?)

正直、人質になったとして一夏叔父は場合によつては見捨てるだろうし、ラウラとしてもそれでいい。

だけど、千冬義母はラウラを見捨てないだろう。そんな人なら、ラウラを引き取ったりしない。

「……話を、聞かせてもらおうか」

「やったあ♪じゃあ、荷物よろしくね!」

熟孝した末のラウラの返事に、シャルロット年頃の女子の様な(実際年頃だが)可愛い笑顔でるとし、荷物をお付きの人に持たせる。

「話は歩きながらしよっか」

「……言つとくが、内容によつては断るぞ」



## 08107 仲良くなりたいたいだけ

「…で、私はなにをすればいいんだ」

「焦らないですよ……ほら、到着」

シャルロットに連れられ、ラウラが着いた場所にあつたのは白いビルだった。

入口のエントランスホールにはボードがあり、「3F 302号室『女性検定2級面接会場』」や「2F 208号室『きし寿司インターンシップ会場』」等と書かれている。

「僕達のはアレだよ」

そう言つて、シャルロットが指差す先には英語やドイツ語、中国語にそして日本語で

「4F 403号室『IS学園 先行授業体験会』」と書かれていた。

「授業……体験……?」

自分とは縁の無い言葉に、ラウラは疑問符を浮かべる。

「IS学園に行きたいって子は、世界中にいるからね。特に今年はイッピー……織斑一夏を目当てに来たいって志望動機もある」

IS学園——『IS操縦者育成特殊国立高等学校』の入試の倍率は高い。

ISを実際に動かして学べる唯一の教育機関であり、あのブリュンヒルデ『織斑千冬』

を始めとした高名なIS操縦者が講師として在籍していることが要因だ。

今年は更に、世界唯一の男性操縦者『織斑一夏』が通っているのが合格倍率の上昇に拍車をかけている。

そして、その狭き門を潜るために日夜努力する女子は世界中に存在する。

そういった者達の中から珠玉の逸材を発掘する為に、こういった学園と企業の提携主催のイベントは結構な数で開かれる。

「なるほど、そういえば一夏も生徒会で体験生を迎える準備で忙しいとボヤいていたな……。もしや、貴様の仕事とは……」

「ビング。今日の僕はここの子達の講師だよ。IS会社の社長は、IS学園で1日2日教鞭を取ることもあるからね」

「……今年、デユノア社の講義などあったとは聞いてないがな」

「今年はねー…御家騒動があったからな。ま、来年は僕も教壇に立たせてもらおうよ」  
そう言うって建物に進むシャルロットに、ラウラは待ったをかける。

「…おい。結局私に何をしろと言うんだ」

「……？」

「いやなんだその不思議そうな顔は！」

「あつはは…やっぱ可愛いねラウラは」

「帰る」

シャルロットの巫山戯た態度にラウラはクルリと足を駅に向け、スタスタと踏み出す。

「待つて待つて……君には、ラウラにはIS学園に通う先輩としてちよこつとアドバイザーになつてほしいだけなんだよ！」

「……アドバイザー？」

慌ててなされるシャルロットの説明に、ラウラは眉を訝しげに上げる。

「……勉強法については……私は役立たんぞ。受験戦争とやらには無縁の入学だからな」

「ああ、そこはいいよ。ぶつちやけこの時期に勉強法を確立できてない様な子に入学できる学校じゃないし」

じゃあなんだよ。

そんなぶつきらぼうなラウラの視線に、シャルロットは大袈裟なジェスチャーと共に説明を続ける。

「この彼女達は入学する為に頑張っているけどね……入学した後の事については知らないんだ」

「……つまりなんだ？ 私は、入学した後の心構えでも説けばいいのか？」

「ピンポーン！大正解！」

「それじゃ、出番の時に呼ぶからよろしくね」

パタン

音を立てて、控え室の扉が閉まる。

元々フリーの質問タイムのところに、追加の相談役としてラウラも入る事になり、その時まで待機となった。

「……ふむ」

(さて、罨の類はあるかどうか……)

部屋を見渡すと、机に他の職員のものであろうか紙コップにお茶、軽いおやつなどがあるが、ラウラにとっては敵陣やも知れぬ場ゆえに手をつけることはしない。

他にはIS学園の事について特集した雑誌が置いてある。ラウラはその内の一冊を手に取り表紙を見やる。

『突如現れた、世界で一人の男性操縦者の謎に迫る』

そう書かれたアオリのページをめくって閉じる。どうやら気に入らなかつたようだ。(まあ、こんな所にはないだろ)

次に部屋の隅のロッカーを開ける。中には何も無い。閉めた。  
隣のロッカーを開ける。中には何も無い。閉めた。

最後のロッカーを開ける。中には腐ったおにぎりがあった。閉めた。

「どうやら、盗聴器なども無いようだな……」

ラウラがここまで警戒するのは、彼女の立場に訳がある。

読者諸君は存じておるだろうが、彼女の元の名は『ラウラ・ボーデヴィツヒ』

歴としたドイツ軍少佐にて、国家代表候補生だ。

そんな彼女は違法たるVTシステムを積んだドイツの尻尾切りに逢い、その地位も経歴をなくした。

その後は、織斑千冬の養子として迎え入れられ現在『織斑ラウラ』として生活している。

ドイツの禁忌の生き証人にして、今や全世界の時の人たる織斑姉弟の家族としての彼女の価値は高い。無論、生半な相手に捕まる程でも無いが。

だからこそ、逆にその価値を狙ってくる輩から、何か引き出せないかと思つてシャルロットの依頼を受けたのだが……

(……まさか、本当にただ雇つただけ……私と仲良くなりたいたけどでも言うつもりか?)  
ここまで何もないと、畏と思うことすら馬鹿馬鹿しくなってくる。警戒を緩めるわけではないが。

コンコン

「ラウラさん。準備はよろしいでしょうか?」

そんな事を考えていると、扉の向こうから黒服が呼びかける。

「…ああ。行かせてもらおう」

ラウラは返事をして、ドアを開けた。

—————

そうして、質問タイムが始まった。

「あ、あの…井上ティファニーと言います！今日はよろしくお願いします！」

「I S 学園一年一組のラウラだ、よろしく」

『織斑』も『ボーデヴィツヒ』も今は名乗れる名字ではないので、名前だけ告げて I S 学園入学を目指す少女達に向き合う。

「一年一組…もしかしてあの織斑一夏がいるクラスなんですか!?!」

「……まあ、そうだな」

それにしても、一夏目当ての子が多い事多い事。お前ら学校に何しに行く気だ。

「入ってからの勉強って…やっぱ難しいですね。何かこれはやつとけつて事はありますか?」

「そうだな。……I S を動かす学校な以上、少しの体調不良がかなり響く。日々の健康と体力増進には努めておけ」

質問タイムは驚くほどスムーズに、滞りなく行われており、ラウラはテキパキと少女

達を捌いていた。

「いやあラウラのお陰で助かったよ。僕、一度もIS学園に通った事ないからなあ」

「……」

そうして、質問タイムも後半。

深く聞かなければ気が済まない人しか残っていないところで、シャルロットが絡んで行く。

「……はあ。ホントなんのために私を勧誘したんだ？」

「んもー何度も言ったじゃん。僕は、君と仲良くなりたいたいだけなんだよ」

そう言つてシャルロットはうりうりとラウラの頭を撫で回す。

ラウラそれを跳ね除け、大きくため息。

「もういいだろ、帰る……アレは」

「あつ、待つてよ。まだバイト代払つてないし……どうしたの？」

出口に向かうラウラを慌てて呼び止めるシャルロットは、窓の外を注視する彼女の様子に何事かと訝しむ。

ラウラはシャルロットの問いに答える事なく、ジイっと一点を、外のビルの屋上を見つめる。

「……ISS」

「なんだって……?」

シャルロットは急いでラウラの見る場所に視点を移して、自身のISを頭部のみ部分展開する。

ハイパーセンサーに映ったのは、黒と赤のボディカラーにアヌビス神の様な特徴的な頭部のアンテナを持つIS。

「グルゼオン……!」

「……グルゼオンだと」

シャルロットの眩きにラウラは驚愕する。

なにせ、そのISは以前のテロ事件の際に新たなISを召喚した曰く付きの代物だ。

「社長!」

冷や汗をかくラウラとシャルロットに、黒服の1人が駆け寄る。

「……どうしたの」

「警邏の者からの報告で、フアントムタスク亡国機業と思われる集団がここいらで活動しているとありま

したのでなにか起こってないかと……」

「……」

シャルロットが部下から受ける報告の内容に、ラウラは聞きながら考え込む。

(グルゼオン……亡国構成員……やはり、シャルロット・デユノアは亡国とは敵対はしてるか



…)

ぶつちやけラウラはシャルロットが亡国の一員だとは、まるで思っていない。

前回の『キャノンボール・ファスト』の時も胡散臭いだけで、亡国ではなくこちらの利になる助言をしていたからだ。

だからといって、こちらの味方とは限らない。亡国の敵など、それこそ世界中にいる。そんな確信を得つつ、ラウラは更に盗み聞きを続ける。

「報告ありがとう。今の所、僕はこうやってピンピンしてるよ。……ところで、その亡国構成員は？」

「はっ。発見したのみで捕らえることは出来ませんでした。ですが、奴ら『村橋』という人物を探しているようです」

「そう……うーん、とりあえず未来のIS学園生に何か無いように警備を強化しといてね」  
手早く指示を出したシャルロットは、ラウラに向き直り財布から1万円円を出す。

「これバイト代、色々ゴタゴタしてゴメン。今から僕忙しくなるからここでじゃあね！」  
「ああ……貴様を好ましいと思ってる訳ではないが、ISに携わる個人として応援させてもらおうぞ」

それを受け取ったラウラは、慌ただしく部下と移動するシャルロットを見送りビルを出た。

(ふむ…)

ビルの入り口から少し移動して、ラウラは先ほどの内容を精査する。

聞こえた内容はこの辺りで亡国機業が『村橋』という者を探しているというもの。

(時間は…まだあるな)

腕時計で時間を確認して、歩き出す。

彼女なりに『村橋』という者を調査しようと決めて、一步踏み出した。

—————

同時刻。

ビルの屋上で佇むグルゼオンの元に、2人の男女が現れた。

「よお。2週間ぶりだなグルゼオン、”T”って呼んだ方がいいか？」

「こんにちは。テロリストさん……あら間違えた亡国機業さんだつたわね」  
フアントムタスク

「……織斑一夏に、更識楯無？」

現れた2人に、グルゼオン……”T”はくぐもつたいつもの声で疑問符を上げた。

## 08108 ゴールデン・ドーン

(さて…『村橋』むらはしを探すと言つてもどこから手をつけたものか…)

品川駅高輪口に戻ったラウラは考え込む。

今日、ここに来た理由は一夏達に頼まれたという訳で、彼女にここいら一帯の土地勘は無い。

道行く人に尋ねるにしても『村橋』という名前だけでは全く絞り込めないだろう。

(亡国構成員を探してみるか…)

そもそも『村橋』を探そうと思いつた理由は、謎多き亡国機業フアントムタスクの真相に迫るためだ。

現在ここら周辺で亡国構成員が活動してる事は確かなので、『村橋』ではなく直接亡国に向かうのも手かもしれない。

そう思い、ラウラはそこら辺を地理探索と兼ねて歩くことにした。

—————

「う…うウ…」

そうしてラウラが探索を始めて5分。

耳にした呻き声に辺りを見回すと、足から血を流したホームレスが倒れていた。

周囲の人々は厄介ごとには関わりたく無いとばかりに、スルーして去って行く。

ラウラもまた、それに倣って無視しようとしたが――

「……」

――彼女の足は、微動だにしなかった。

『……最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一カ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな』

胸中に浮かぶは、絶望から救われた今は亡き『ラウラ・ボーデヴィツヒ』としての記憶。

全てから見捨てられていた中に投げられた蜘蛛の糸の思い出は、倒れているホームレスから目を背けることを非難する。

「……チツ」

漸く動いたラウラの目的地は、亡国ではなく先程通り過ぎたドラッグストアであった。

――

「ほら、後は安静していれば治る筈だ」

「アイテテテ……ありがとうナ、お嬢チャン」

レジ袋に包帯や傷薬などを詰めてホームレスの元へ戻ったラウラは、元軍人の知識を

活かして治療を施した。

「傷を癒すにも栄養は必須だ。ほら、これも」

「……女神様ダ」

ラウラが袋からスパウトパウチのヨーグルトを取り出して渡すと、ホームレスは目を潤ませてそれを受け取る。

「……そんな大層な者じゃ無い」

「嫌々、これで女神様じゃなけりや天使様しかあるめえヨ。ついに世界から見捨てられたと思つたが、神様ってのはいるもんだネエ」

『見捨てられた』

その言葉に、ラウラは赤らめた顔を戻す。

「……まあなんだ。私も嘗て世界の全てから見捨てられた感覚に陥つてな。その時にある人に救われたから、貴様みたいな奴がほっとけないだけだ」

「そうカア……天使様には天使長がおつたんだナア……」

ホームレスの例えに、白いケープと白い羽の千冬を想像してしまい、ラウラは「ンツフ」と笑う。

それを慌てて咳き込みで誤魔化し、そういえばと質問をする。

「どうして、そんな怪我したんだ？」

「あー天使様、聞いておくれヨ。この街に急に現れた怪しい集団が、俺を突き飛ばしやがってサ……それであの切れたパイプでザックリしちまったんだ」

そういつて、ホームレスが指差す先には彼ののものであろう血が付着した、折れて尖った雨水排水パイプがあった。

しかしながら、ラウラの関心はそこにはない。ホームレスが発した言葉から気になるワードを反復する。

「……怪しい集団?」

「ああ……黒いジャケットの集団でサ。『村橋』むらはしだか『和則』かずのりだか誰探してんのか知らんが、人にぶつかつたらちつたあ気にかけるってんだ」

「……村橋……だと……!」

『村橋』

ラウラが追おうとしていた情報が、思わぬところから出てきた。

「ん、天使様は知ってるのかイ? アイツらが言っていた『村橋和則』ってのはサ」

「……いや。私も、ソイツの居場所を追っているんだ」

「なんデエ。天使様に追いかけるなんてフテエ野郎ダ」

カーツと吐き捨てるホームレスに、ラウラは更に問う。

「……貴様はなにか、『村橋和則』について知らないのか？」

「知らねえナア……いや、もしかしたら『長』なら何か知ってるかもナ」

「……長？」

突如出てきた、新しい人物にラウラは首を傾げる。

「ああ、長おさつていうのはここいらのホームレスのリーダー的な存在でサ。ホームレス歴30年のベテランで、沢山さわのものを知ってるんだ」

「なるほど、確かにそんな人なら知ってるさだな。……で、その人はどこに行けば会えるんだ？」

「うーん……長おさはホームレスじゃない奴に警戒してつからナア。でも、天使様には恩返ししてえシ……」

腕を組み、ウンウンと悩んでいたホームレスはパンと無事な両の手で己が頬を叩き、ラウラに向き直る。

「よし、天使様！」

「なんだ」

「手間を増やしちまうが、駅前からホームレスを2人ほど呼んできてくれねえカ？ 『雑誌集めのテツ』が怪我してる』と言えば来てくれる筈だ」

「え？」

どういふ事をラウラが問うと、ホームレス…テツは長の元おきにラウラを案内するのは足を負傷した自分よりも他のホームレスを案内させる為だと返す。

ラウラが自ら交渉するよりも、名と顔の知れたテツが直接頼んだ方が早いのだそう  
だ。

「わかった。少し待っている」

それを承諾したラウラは、テツを置いて駅に向かった。

—————

「連れてきたぞ」

それから少し経って、ラウラは2人のホームレスを連れてテツの元に戻ってきた。

「おおテツ、平気か？」

「無事サア。なにせ天使様が助けてくれたんだからナ」

「…天使様？」

助けに来たホームレスは、怪訝な顔でラウラを見やる。

「…私はラウラ。天使の様な高尚な者じゃない」

ラウラは気恥ずかしそうに名乗りながら、テツに目配せして促す。

「来てくれたとこ悪いいんだが、オレは1人助けてくれりゃあ歩けるんだ。…マツ、お



前天使様を長のところへ案内してくれねえか？」

「長おきはどこ？ なしてこの銀の嬢ちゃんを連れてくんだ？」

「ああ、天使様は人を探してるらしくてナ。その為に長の力を借りたいんだヨ……ほら、ここの包帯にこのヨーグルト。天使様が恵んでくれた恩に報いてえんだ」

その言葉を聞いたマツと呼ばれたホームレスは一回頷くと、ラウラの方を向く。

「銀の嬢ちゃん、ついてきな。案内したる」

「ああ、頼むぞ」

もう一人のホームレスがテツを支えて移動すると同時に、マツとラウラも移動を開始した。

—————

「……織斑一夏に、更識楯無？」

視点はグルゼオンと、彼女と対峙する一夏と楯無がいるビルの屋上に戻る。

「覚えていてくれて嬉しいぜ。……社員研修の監督か？」

街中で友達と会ったような調子で話しながら、一夏は手すりに手をかけ街下を見下ろす。

「……奇特な文句ね。なにを見てそう言うのかしら？」

「いやほら……普段のエリートさんらとは思えない粗製つぶりだからさ」

彼の視線の先には慌ただしく動き回る亡国構成員と思われる集団があった。

彼らは知る由もないが、テツを突き飛ばした奴もシャルロットの部下に気づかれた奴もその集団にいたりする。

「ハア……功を焦るばかりに仕事が杜撰になつてるのよね。嫌になるわ」

「ま、あの『村橋和則』を捜しているのなら、それを見つける為に張り切るわよねえ。……更識家にしろ、亡国にしろ彼は間違いなく今日中に見つかるでしょうね」

ヤレヤレと頭<sup>ウチ</sup>に手をつき、呆れるグルゼオン。そんな彼女に敵ながら楯無は同情を見せる。

「……村橋が更識家で見つかったら、亡国に渡してくれないかしら？」

「質問に質問で返すけど……そのお願い、逆の立場で私が言ったらどう答えるの?」

「嫌よ」

「でしよう?」

亡国機業に更識家。これらの組織がその行方を捜す『村橋和則』とはかなりの人物のようだ。

「それで、何しに来たのかしら。まさか世間話という訳ではないでしょう?」

グルゼオンは茶番はもういいとばかりに、和かな雰囲気をかき消す。

それに対して一夏もまた張り詰めた空気を出して、ゆつくりと楯無と並んでグルゼオ

ンと対峙する。

「ハツ……決まってるんだろ、お前を捕まえに来たんだぜ。……その為に、俺が学園から出る許可が降りたんだからな」

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

HEAD : HF | 227

CORE : CA | 215

ARMS : AB | 107D

LEGS : Le2M | D | F24 (リンネ)

R ARM UNIT : SHIOBUNE mdl. 1

L ARM UNIT : AM / SHA | 302

SHOULDER UNIT : YAMASUGE mdl. 2

R HUNGER UNIT : KAGIROI mdl. 1

そうやって一夏は姿を黒い鳥ダークレイザンに、ほぼ同時に楯無も霧纏ミステリアス・レイディの淑女に変える。

全身を兵器にした2人を見て、グルゼオンは右腰のホルスターからハンドパイルバン

カーを抜く。



「スコール…貴女……！」

敵がない方向に差し向けられた手が持つ意味は、この場の全員が即座に看取する。それは人質。品川にいる無辜の人々への謂れなき死へのカウントダウン。

ゴールデン・ドーンから放たれる破壊を街中に撃つという脅迫。

「ねえ、T」。あなたがミツシヨンの埒外での、不要な犠牲や確執は望まないのは知っているけれどもね」

——私は、別にどうでもいいの

人の命をなんとも思っていない発言と共に、スコールは視線を相対する一夏と楯無に向ける。

向けられた2人のうち、一夏に対しては貼り付けられた笑みとは裏腹の濃厚な敵意を晒す。

「織斑一夏、ISを解除して渡しなさい。：言うことを聞けば、甦る時に手心を加えてあげる」

その言葉に一夏は眉を曇らせる。

依頼人楯無の願いは絶対ではあるが、それで命を投げるつもりはない。

「断ると言えば？」

「そうね、あそこの仲の良さそうな姉弟でも狙い撃ちしようかしら」

スコールはわざわざ姉弟という、一夏に合わせたターゲットイングをする。

しかし、当の本人はその言葉にクククと笑った。

「……その前に、テメエが狙い撃ちされるみたいだがな」

ドゴオオオオオ！

次の瞬間、スコールがいた場所は爆炎と化した。

「……っ！アレは……」

ゴールデン・ドーンの熱性バリア『プロミネンス・コート』の中から、スコールのハイパーセンサーが捉えたのは1機のIS『ラファール・リヴァイブ・カスタムII』

それが指し示す人物とは1人しかあり得ない。

「シャルロット・デユノア……」

ビルを見下ろす形で空に浮かぶオレンジの鎧を纏ったシャルロットは、スコールの驚きと怒りの混じった声に口角を三日月にあげる。

「僕を見ていいのかい？」

シャルロットの言葉にスコールが反応する間も無く、楯無の蛇腹剣『ラストイー・ネイル』が襲いかかる。

それを3本目の腕となる尻尾で防いでスコールが振り返ると、蛇腹剣ではなく大型ランス『蒼流旋』を手に突撃する楯無の姿があった。

ブオン！

ジュアツ！

スコールは両肩から炎の鞭『プロミネンス』を繰り出し、楯無のランスとぶつける。

ゴールデン・ドーンの高熱と霧纏ミステリアス・レイディの淑女の流水がぶつかり合い白い蒸気が発生させる。

亡国機業ファントムタスク、あなたたちの計画を教えてくださいわよ」

「あら、言うわけないじゃない」

「無理矢理にでも聞き出してみせるわ」

「それができるかしら？ 更識楯無さん」

「やると言ったわ、『土砂降り』！」

楯無とスコールの戦いが始まると同時に、グルゼオンは横に跳ぶ。

一瞬遅れてSHIOBUNE mdl. 1からの閃光が通り過ぎた。

「行きなさい！」

体勢を素早く直し拡張領域バズスロットからゴールムを召喚し、シャルロットへ向かわせる。

召喚されたゴールムは更に自身の拡張領域バズスロットからスケルトンを呼び出してシャルロッ

トへの攻撃を開始した。

「3対2とはいかないみたいだね」

それに対してシャルロットもアサルトライフル『ヴェント』と連装ショットガン『レイン・オブ・サタデー』を構えた。

「行くわよ…織斑一夏!」

グルゼオンのバーニアが火を噴き、急加速で一夏へと駆け寄る。

「来いよ…グルゼオン!」

一夏の右手から放たれたレーザーはスライディングの形で躲けて、下から突き上げるようにパイルの引き金を引く。

一夏は放たれる質量と速さの暴力を背を反らして避け、レーザーライフルを突きつける。

バジユウ!

しかし、銃口から飛び出た一筋の光は屋上の床を焼き抉るに終わる。

一夏がAM<sup>シ</sup>/SHA<sup>ル</sup>302<sup>ド</sup>を持つ左手に飛び込む形で逃れたグルゼオン。それを見ずに察知した一夏は右足を軸に時計回りで回り込み、グルゼオンを捉える。

「読めるのよ、そのぐらい!」

ガキーン!

だが近接はグルゼオンが上手——ハンドパイルの銃身でレーザーライフルを叩き、一夏の手から上に弾き飛ばす。



ガアン！

それに動じる事なく一夏はシールドで殴りつける。その勢いで5メートル程吹っ飛んだグルゼオンは、ジャンプして上から一夏へ襲いかかる。

【パージします】

一夏は殴り抜けた左手で、グルゼオン目掛けてバックハンドでシールドを投げる。

「……なんですって!？」

空中でシールドを蹴り飛ばしたグルゼオンの目に、シールドが目隠しとなっていた光景が飛び込む。

ついさつき弾き飛ばした筈のレーザーライフルをいつの間にキャッチしていたのか、右手でグルゼオンを狙う一夏がいた。

バジユウ！

今度こそ光線はグルゼオンに当たり、無防備を晒していた彼女は火花をあげて大きく吹っ飛んだ。

グルゼオンが立ち上がった時には一夏は投げ飛ばしたシールドも回収し、右手にレーザーライフルと左手にシールドの開戦当初の武装に戻っていた。

楯無、一夏、シャルロット

スコール、グルゼオン、ゴーレム

3対3のISの殺し合いが、東京の一画で始まった。

## 08109 グルゼオン

「今日こそは逃がさないわよ、スコール！」

「出来るかしら、更識楯無……」

品川のビル屋上にて勃発した、楯無と一夏 IS学園&シャルロット デュノア社 VS スコール 亡国グルゼオン 機業ゴーレムは実の所  
亡国に利がある。

1対1

3対3

数の上では対等だが、その内情は大きく違うのだ。

そもこういつた多人数での乱戦は、それぞれの陣営での連携の精度が大きく勝利に関わる。

亡国サイドは機械としてデータを入力されたゴーレムは当然として、スコールはグルゼオンとも緻密な連携を取ることが出来る。

一方、楯無は一夏とは連携可能だがシャルロットとは不可能だ。

なにせ学園にいたシャルロットは、シャルル・デュノアという偽の男性操縦者は2日

程しか学校にいなかったのだ。

彼女はI S学園で一度もI Sを展開する事なく去ったのだから、当然ながら楯無や一夏はそれを見る機会など無い。

まあ、たったの2日でシャルロットを学園から消したのも楯無と一夏なのだが。

「あーもう。散らばらないで、僕の手間が増えるから」

だからこそ、シャルロットはゴーレムと8体のスケルトンが他の2人の援護に回れないようにその豊富な武装を活かす。

分断して、ただの1対1にすれば対等に渡り合えるからだ。

バジユウ！バジユウ！

「嫌らしい撃ち方してくれるじゃない！」

「パイル女に近づいて欲しくは無いんでね！」

一夏とグルゼオンの戦いは隣のビルの屋上に移っていた。

スコールと楯無の巻き添えになりかけたのもそうだが、一夏が引き撃ちでグルゼオン

を誘導したのが主な要因だ。

(やつぱコイツ…強い！)

しかし、誘導し、レーザーライフルで主導権を握る一夏の顔に余裕はない。

(『……間違いなく、10秒後には君の射撃パターンを読まれるね。何か準備はあるのかい？』)

(…来ると同時にブーストチャージを合わせるとか?)

(『そのギャンブルは1人でやってくれないかい!? 僕も巻き込まれるんだが!』)  
(嫌なら、ちよいとあつちを頼むぜ。ギャンブルしないよう頑張るからさ)

レーザーライフルの牽制を行いながら、一夏と財団は相手の動きを予想する。当然だが、グルゼオンの様な近接武装オンリーの機体はその扱いが難しい。その手の機体の使い手は二択、雑魚かもしくは変態だ。

そしてグルゼオンは——後者であった。

兎にも角にも、近接オンリーというのは近づかなければ話にならない。全身に搭載された精密かつ俊敏な動作を可能にするバーニアを噴かして、回避しつつ徐々に一夏との距離を詰める。

「……」

パターン捕捉まで後7秒。しかしそれを待つ事なくグルゼオンは行動を開始する。ハンドパイルを持っていない左手で掴んだのはゴーレムが呼び出したスケルトンの1体。それを前面に押し出して、突撃。

グルゼオンの突撃中に一夏のレーザーは1発、2発とスケルトンを撃ち抜き爆散させるが、それが囷となって詰め寄せられた距離はパイルで狙うには十分なものだった。

「やってくれるな……！」

突きつけられたハンドパイルに一夏は咄嗟にシールドで構える。

ズガン！

トリガーが引かれた次の瞬間、火薬の破裂で加速した杭が、一夏のシールドを貫き抜かんと放たれる。

「ぐう……のお！」

その衝撃に一夏は大きく身体をよろめかせながらも、右手のレーザーライフルをグルゼオンに放つ。

「きゃ……！」

2度目の被弾。開戦の時のように光線で弾き飛ばされるグルゼオン。

転がる身体を手で止めて、互いに素早く体勢を戻し仕切り直しとなる。

「さっきの私の一撃、うまく受け流してくれるじゃない。自信は無くしそうよ」

「お褒めに預かり光栄だぜ。でも自信を無くしそうなのはこっちなんだよなあ……なんだよあの細かく速いブースト。反則じゃねえか」

（『パイルの力を斜めにズラして受けたのはいいけど、ダメージ結構あるから次もう一回やったらシールド壊れるよ』）

（わかってる………そっちの仕事をしろ！ あの動き……）

（『はいはい……』）

グルゼオンと対応しながら、一夏の内心は冷や汗ものだった。

元々楯無と2対1、あってもゴーレムとの2対2を想定していた彼にとってこの乱戦

は予測の範囲外が過ぎるのだ。

このままペースを握られていけば、敗北の可能性は濃厚だろう。

(ま、ギリギリで予想外なんていつもの事だな……やるだけやるしかねえって奴だ！

それに、やっぱり……)

勿論、AC世界ではそんな事は嫌なことに日常茶飯事だった。

懐かしの修羅場に、一夏は知らぬうちに仮面の下で口角を上げて——

「やっぱ、そういうことか……」

——小声と共に戻した。

「ハアアア！」

「ク……ウウウ！」

一方の開幕のビルでのスコールと楯無の戦闘は、楯無にかなり辛い状態が続いていた。

音より速く、水よりあやふやで、されどその威力は確かに現実にあつて。



そんな炎の鞭をしなやかに振るい、ランスで防御する楯無から白煙を上げさせる。

「そういえば、あなたの機体つてモスクワの深い霧だったかしら？」  
グストロイ・トウマン・モスクワエ

「それは前の名前よ。今は霧纏ミステリアス・レイデーの淑女と言うの……それがどうか？」

「いえ、なにも」

「……ああそう！」

それは挑発。

改修前の機体名を呼ぶ事で、まるでその改造が無意味で無価値と告げる焚付け。

楯無はランスに内蔵した4連装ガトリングを構え、彼女の怒りの如く一斉に火を噴かす。

ドドドドツ——！

正確に己を捉えた斉射に、スコールは余裕ある顔で肩から伸びる炎鞭『プロミネンス』を高速回転させ、防御シールドを形成して防ぐ。

「諦めましょう？あなたの機体では私のISを倒せない。わかっているでしょう？」

「……狙いは織斑くんね？」

「正解よ。あの子の身を渡すというなら見逃してあげてもいいけど？」

スコールの恋人、オータムの左腕は文化祭の一件で一夏に奪われた。

それが故に、スコールとしては組織の目的も含めて最優先対象を一夏にしているの

だ。

「勝てないから、諦める。人はそれを賢者の選択と言うのかもしれない。……けれどね」  
スコールが固まった隙に再度蛇腹剣を呼び出した楯無はそれを振るう。

弾幕が収まったのを確認したスコールも、シールドに用いた鞭を振るう。

「私は更識楯無。IS学園生徒会長。私が生徒を、皆を守ってみせる！」

決意と共に繰り出される蛇腹剣を、スコールは鞭で絡めて動きを封じ、掌の上に火球を作りそれを嗜虐の表情で楯無に向ける。

水の鎧にまとわりつく熱の繩に、蒸気と苦悶の声を上げながら、楯無は振りほどかんともがく。

「そう……じゃあ死になさい」

そう言つて、勝ち誇つたスコールが火球を放とうとして——

「会長、仲間外れは良くないなあ。俺も入れてくれないと」

——隣のビルで戦っていた筈の一夏の声が、横から割り込んで響いた。

「そこは『私達が』と言うところなんですか……「アア！」」

一夏はハイブーストの勢いそのままKAGIRI md1.1を縦に一閃。ス

コールの炎の鞭を両断する。

【パージします】

次に左手のシールドを前方に放り、それを足場に壁蹴りフイストドライブでスコールに向かって急旋回。

蹴られたシールドは威力に耐えかねてバラバラに壊れて粒子と化すが、気にせずレーザーブレードをレーザーライフルに切り替える。

【エネルギー 残り30%】

「バアン」

一夏の戯けを示すように、カメラアイが紅く光る。

そして両肩のYエAネMルAギSアSンUブGリEフ mリdフlア・2で増幅された力を持つてして——呆けたスコールの手中の火球を撃ち抜いた。

ギユイイイン……チユドオオオン!

炎と光が混じり合い、スコールを派手に巻き込み大爆発。

「グ——ウウウ!!」

(やりの、大成功!)

(『いやあ……までの中するとは思わなかったよ』)

スコールの上げた悲鳴に、一夏と財団は心中にてハイタッチする。

先程から一夏が狙っていたのは、タイマンに夢中になっていたスコールとグルゼオンの虚を突く事であった。

しかし、戦いながらよそ見できるほどグルゼオンは弱くはない。しかし一夏には、財団がいる。

一夏自身がグルゼオンに集中するのと並行して、リコンを用いて他の戦いの様子を見てもらっていたのだ。

そうして、後少して楯無を仕留められると舌舐めずりをしていたスコールの横つ面を叩いたという訳だ。

「織斑君ありがとう！このチャンスをもものにするわ！」

「私から目を離す機会を伺うなんて……やってくれるわね」

そしてこの攻防で出来た隙を見逃すほど、楯無もグルゼオンも甘くはない。

互いの得物で互いの獲物を仕留めんと動く。

「蒼流旋！」  
そうりゆうせん

楯無は蛇腹剣を投げ、大型ランスを再度展開。  
コール

水の刃を纏いしそれを携え、瞬時加速で突撃する。  
イグニッションブースト

「がっ……は……！」

超加速と共に放たれた槍の一撃は、ゴールデン・ドーンに白煙と叫声を上げさせる。その勢いを受けて、スコールは屋上の貯水タンクに轟音を立てて叩きつけられる。

「ナメてくれるじゃない!」

グルゼオンは全身のバーニアを一斉噴射。

一瞬にして影さえ残さぬ最高速の世界に移動し、今度こそ守る盾がない一夏をパイルで撃ち抜く。

【稼動限界まであと僅かです 回避を優先してください】

「ぐ……あ……っ……!」

火薬の加速と自身の重量を持ってして、パイルバンカーは一気に黒い鳥を危険領域に連れて行く。

その威力で一夏は吹っ飛び、屋上の柵を壊して落ちそうになるのを踏み止まる。

「織斑くん!」

渾身の一撃で相手を叩き飛ばした楯無は、攻撃を受けてふらつく一夏の元へ駆け寄る。

「織斑くん、大丈夫?……ごめんなさい、私が不甲斐ないばかりに」

「一撃だけなら平気と踏んでの不意打ちなんですから気にしないで下さいよ」

一夏を背に守るように立った楯無は、背後の一夏を気遣うと同時にスコールを見据える。

穴の空いた貯水タンクから水を浴び、白い蒸気を発生させるスコールの様子は伺えな  
いが、中からの殺気は正に阿修羅とも呼ぶべきものであった。

「生きてるかしたら、スコール」

「…ええ」

カツカツと歩み寄るグルゼオンの呼びかけに短く応え、スコールは煙の中からユラリ  
と出でる。

バイザーで顔の大半が隠されているが、露出した口元には彼女の怒りを示すへの字の  
唇があった。

「こつちが殺したい気持ち抑えてロシア代表の相手してるのに…目を離さないでくれる  
？」

「…ハアア」

スコールの憤怒にグルゼオンはため息をつき、ホルスターにハンドパイルバンカーを  
戻す。

「帰るわよスコール。今日の任務は交戦じゃないわ」

「……それなら初めから来ないでくれない？僕も暇じゃないんだから」

グルゼオンの撤退の言葉に、ゴーレムとスケルトンを倒したシャルロットがうんざりとボヤク。

フアントムタスク

初めから亡国機業を狙っていたIS学園組とは違い、巻き込まれた立場ゆえの発言だ。

「ここで逃がすかよ。テメエら2人、後1発もあれば倒せんだ……ここで決めてやる」  
「後1発なのはお互い様でしょ……その社長さんは除くけど」

サッカーのハーフタイムのように一時的に戦いの熱が冷めるのを感じながら、一夏はレーザーライフルのトリガーを引く。

「……」

光撃はスコールの右手から作られた火焰の壁に阻まれ届かず、続いて放たれた特大の火炎弾は楯無がマントのように広げた水のベールに阻まれ真っ白な煙を上げる。

「逃した……か……」

炎を防いだ楯無のハイパーセンサーには逃走する2機の姿が映っており、戦いの終わりとミッシヨンの失敗を悟った。

【システム 通常モードに移行します】

周りに敵がないことを確認して、3人は変身を解除する。

「……会長。すみません、俺があのパイル女をサッサと仕留めていけば——」

近接オンリーの変態とはいえ、遠距離攻撃を持たない敵を倒せなかった自分が悪い。

そんな一夏の謝罪を楯無は無言で制す。

彼女もまた、弄ばれていた事に責任を感じていた。

一夏に助けられるまで、碌なダメージを与える事が出来なかった。

助けに入った一夏は、反撃を喰らうこともしつかり視野に入れていた。

会長失格だ。そんな自責の念を噛みしめる。

そんな楯無の様子を見て、一夏は謝るのをやめる。

ここで続けたらただの追い討ちだ。

「反省会は終わりかな？じゃあ僕にも事情を説明を……ああいやその前に」

「なんだよ」

「“久しぶり”と“初めまして”。僕はどっちで君達に話せばいいのかな？」



「……好きにしとけよ」

シャルロットはビル風に髪を靡かせて、ふうんと鼻を鳴らす。

ラウラが嘗て小悪魔と称した相貌は、男ならば虜になつてしまいそうな美しさを持っている。

……永遠織斑一夏の童貞には通じないが。

「じゃあ初めまして。ご存知かも知れないけど、僕はデュノア社社長の『シャルロット・デュノア』だよ」

「……初めまして。私はIS学園で生徒会長をやらせてもらっている『更識楯無』と申します。デュノア社長、先程はどうもありがとうございます」

「同じく、副会長の『織斑一夏』です。ありがとうございます」

「いいよ、お礼なんて。亡国機業は僕にとっても敵だからね…それで、なんでここに亡国機業が居たんだい？」

互いに白々しい挨拶を交わして、楯無はシャルロットに事情を説明する。

先日、亡国機業フロントムタスクが『村橋和則』を搜索するために一大作戦に打って出るといふ情報を入手。

更識家と日本警察は、亡国機業フロントムタスクが所持しているISでの活動を危険視してこちらもま

たISを投入する事を決定。

そこで選ばれたのは更識家当主の楯無と、彼女の強い推薦もあつての一夏であつた。

そして、このビルの上にグルゼオンがいるという情報を掴んだ2人は2人がかりでボコる為に来て――

「――後は、デュノア社長も知る通りです」

「なるほどねえ。僕の方には今日は注意しろと連絡があつたけどそういうことだったのか」

うんうんと納得したシャルロットに、楯無と一夏は深く頭を下げる。

「申し訳ございません。本来私達だけで対処しなければならぬ所を、デュノア社長まで巻き込んでしまいました」

平身低頭の楯無に、シャルロットは特に気にした様子もなく、ポケットに手を入れる。

「別に気にしないでよ。さつきも言った通り、亡国機業は僕フアントムタスクの敵だ。それはIS企業としてフアントムタスクの不利益だけじゃない……」

突如風が止む。

まるで、シャルロットの声を遮りたくないように。

「……僕個人が、虫けらみたいに人を殺す亡国機業フアントムタスクが許せない」

その声は楯無と一夏の耳に届いた後……用済みとばかりに空へ消えた。

「じゃあね。速くアイツらが捕まる事を願つてるよ」

そう言つて、シャルロットはりムジンに乗り込み出発。

それをジツと見送る一夏は、眉間にくつきりと皺を寄せていた。

『僕個人が、虫けらみたいに人を殺す亡国機業フアントムタスクが許せない』

「はっ」

黒い車体が建物の陰に消えると脳裏に浮かぶシャルロットの言葉に、短く嘲りを吐き捨てる。

「シャルルだろうと、シャルロットだろうと、結局は嘘つきなんだなお前」

一夏の言葉は隣の楯無にも届かず、ただの雑音として掻き消えた。

—————

品川駅近くの大きな公園の一角にホームレスが纏まって暮らす一角がある。

マツに案内されたラウラの元へ一人の老人がやってきた。

「お主がラウラ殿じゃな？事情は聞いておる、テツを助けてくれた事は感謝しよう。あ

奴は大事な仲間じゃ」

老人のなりはみすぼらしく、いかにもホームレスといった出で立ちだ。

「…貴様が、長か？」

「左様。この街で35年間、家無き者の長をさせてもらっている」

しかし、ピシッと伸びた背筋や覇気のある目から感じる雰囲気は決して見くびれるものではない。

「さて。儂に何か聞きたいことがあると聞いたのじゃが…」

長の双眸がラウラを見据える。

一度、二度と深呼吸して、ラウラは口を開いた。

『村橋和則』という人物について、聞きたい」

## 08110 村橋を探せ

「『村橋和則』という人物について、聞きたい」

ラウラのその言葉に、長<sup>おさ</sup>はふむと考え込む。

10秒後。何か思い当たったのか、顔を上げる。

「僕は『村橋和則』という者を知らんが…そいつを知っている奴を知っている」

「知っている…『村橋』の知り合いということか？」

「嗚呼。おい、ゴローを連れてこい」

「ウス」

長の命を受けて、角刈りのホームレスが公園の奥に消える。

少しすると、1人のヒョロツとした男を連れて戻ってきた。

ゴローと呼ばれた細身の男は、外見から見ると40代から50代辺りで、そろそろ寒くなるからかジャンパーを羽織っている。

酒を飲んでいたので顔は赤く、やや足元はフラついていた。

「長<sup>おさ</sup>、俺に客つてどういふことですか？」

「お前、『村橋和則』って奴の事を前に話してたよな？…このラウラ殿がそいつの事を聞

きたがっついていな」

そう言われるとゴローはラウラを見やり、首を傾げる。

自分の知る『村橋和則』と、目の前の銀髪眼帯の美少女がどうしても結びつかないのだ。

「……アンタがどんな事情で村橋を探しているのかは知らんが……俺も詳しくは知らんぞ」

「構わない。教えてくれ」

「わかった」

ゴローは話す順番を少し整理して、空に絵を描くように話す。

「……まず俺は3年前まで市川で働いていたんだが……村橋とはその時の行きつけのバーでの知り合いでね」

「バー？」

「ああ……市川の駅近くの『アカネ』ってバーでな。

そこでしか会わなかったが、気の合う飲み仲間だったよ」

『アカネ』……か」

サラサラとメモを取るラウラは、ふと聞いてない事を思い出す。

『村橋』の身体的特徴を覚えてくれないか——」

「今から『アカネ』の方に行つて聞いてくる」と続けようとした時、公園の入り口から男の悲鳴が響いた。

「なんだ!?!」

「長!」

男達の叫声が鳴る方向から、先程ラウラを案内したホームレス：マツか駆け込んでくる。

「ホームレス狩りです! 奴らまた来ました!」

「……ホームレス狩り?」

「ホームレス狩りつてのははその名の通り、ホームレスを狙つて暴行を加える行為、またはその行為を行う者を指す言葉だ。

10年前の白騎士事件以来、普及した女尊男卑思想によって、女性によるホームレス狩りは急速に増加しているんだ。

……そして、この公園も最近標的になっている。アイツら俺達が出せないのをい  
い事に——」

「なるほど、大体わかった」

ゴローの酔つてるとは思えないほど素早く端的な説明。

それを遮つてラウラが歩き出す先は、ホームレス狩りによる被害者による助けを求め

る声。

「お、おい……！そつちは危ねえ、銀の嬢ちゃん逃げろ！」

マツの避難誘導に振り返ることもなく、サムズアップを背中越しに見せる。

それはまるで、ヒーローのように。

「情報料だ、少し暴れてやる」

「さーて、街のお掃除タイムよー！！」

「ゴミはゴミらしく……捨てなきやねえ！」

『『弱肉強食』よ……！家も金も、ISを動かす事も出来ない愚かなクズは潰すしかないわよねえ！』

バットやゴルフクラブを持った7人の女が、次々にホームレスを殴りつけていく。



ホームレスに対して行われる暴行を、なんと例えて呼ぶが相応しいか。

暴虐、悪逆、不徳

否、彼女達の幼稚さと愚かさを考慮して……『弱いものイジメ』と呼称すべきだろう。

「……」

そんな稚拙で矮小な彼女達へ、逃げ惑うホームレスの河の中から、一人の足音が近寄る。

研がれた刃の如き輝きを放つ銀の髪。

身体を走る血よりも赤く、紅い右目。

偽りの金の左目を閉じる黒い眼帯。

非現実の世界からやって来たような、目の覚めるほどの美少女<sup>ラッラ</sup>は、只ならぬ雰囲気<sup>ラッラ</sup>を醸し出しながらゆつくりとホームレス狩りの前に近寄る。

「……なによ」

「一応言っておく……そこまでだ。もう止めにしろ」

「はっ……なに？正義の味方気取り？」

そう言つて、ホームレス狩りの内1人が、ラウラの襟首を掴む。

一見すれば哀れにもホームレスの巻き添えに少女はなるであろうと感じさせる。

だが彼女は、彼女達は知らない。

——目の前の少女は、見た目だけでなく強さも別世界だという事に。

「そういうの、ぶっちゃけダサいんですけ——」

言い切れずに、ラウラの襟首を掴んだ女が腹部に手をやり倒れる。

お腹を押さえて苦しそうに呼吸する彼女は、一瞬のうちにラウラが拳を叩き込んだ事を表していた。

「……え？」

「さっき、貴様らは言ったな……『弱肉強食』、と」

呆気にとられるホームレス狩りを見て、ラウラは拳を鳴らす。

「その言葉に従つてやる……来い。強者が弱者を喰らつてやろう。さあ——」

——負ける覚悟は出来たか

その言葉を合図に始まったのは数による『蹂躪』ではなく、個による『無双』であった。

「ぐあつ!？」

ラウラが拳を振るう。ホームレス狩りが1人倒れる。

「ぎゃひつ!？」

ラウラが蹴りを放つ。ホームレス狩りがまた1人倒れる。

「こんのおー……ばわつ!？」

ラウラが半歩横にずれる。ホームレス狩りの攻撃が空振り、出来た隙に膝を叩き込まれる。

もはや彼女らに抗う術はなく

7人全てのホームレス狩りがその意識を手放すのには、時間にして1分もかからなかった。

—————

「……と、言うわけだ。強かったよ、織斑一夏は」

『「T」、今日は災難だったな。まさか織斑一夏に狙われていたとは』

品川の路地裏で、16歳程の少女が何者かと携帯で通話する。

黒の長髪は手入れを怠っているのか乱れに乱れて整った顔を台無しにしており、酷くめんどくさそうな仏頂面でスピーカーに声を入れる。

「ああ……でも、『アナタ』ならそんな未来をわかっていただろうか？」

『さて……どうだろうか。私の力もあの日以降使い勝手が悪いのは知ってるだろうか？』

電話口で惚ける声に、電話が故に見えない冷淡な表情を向ける。

“T”と呼ばれた事からもわかる通り、彼女がグルゼオンの操縦者である。

つまりは亡国機業フランドムタスクの一員な訳で、だとすると一刻も早く『村橋和則』を見つけなければいけない筈なのだが、彼女に焦るそぶりは微塵もない。

「……はあ」

報告をし終え電話を切ると、大きく深くため息。

その後溢れたせつかくの休日がという愚痴を聞くに、探す気は無いようだ。

「ん……んんっ！ 村橋、村橋、村橋、ねえ……」

……この世界のルールをなんとなく察知する辺り、利口ではあるんだろうな。

織斑一夏も、原作のとは大きく違うしな……枝葉も枝葉なだけはある……

大きく伸びをして、意味不明な言葉をブツブツ言いながら路地から出る。

帰るかどうかはともかくとして、駅に向かおうと“T”は歩き出した。

(………そういえば)

『やっぱ、そういうことか…』

戦闘中に、目の前の一夏が呟いた一言。

それはまるでグルゼオンの中を、“T”を、自分を見ていたようで…

(これは…バレたか?)

たらりと、冷や汗が流れた。

—————

ガタンゴトンガタンゴトン

ガタガタゴットンズタンズタン

「……」

その後、ホームレス狩りを警察に引き渡したラウラは、電車に乗って市川に向かっていた。

手元のメモにはゴローから聞いた『村橋和則』の情報があり、それを眺めて時間を潰す。

(右目の下にホクロがあり、一重まぶたで垂れ目。髪は黒で身長は170センチ程……)

村橋和則。

曰く、年齢は40代から50代。

曰く、バーでよくブランデーを嗜む。

曰く、しかめっ面で誤解しがちだが、冗談とギャグとギャンブル好きでかなりとつきやすい性格。

(……)

村橋という男は『アカネ』にはほぼ毎日のように通い、そこでの飲み仲間とワイワイ楽しく談笑していたらしい。

バーのマスターが誕生日を迎えると、「じゃあ、マスターに金を落とさねえとな」と高い酒を飲んでいたようで、中々な酒豪で気さくな人物らしい。

(……そんな人が、どうして亡国機業フアントムタスクに追われてるんだか)

嘘はないのだろう。唯、それが全部では無いだけで。

ゴローが市川にいたのは4年前から3年前の1年間だけで、ゴローが『アカネ』を見つけた時には既に村橋は常連だったらしい。

(開いてればいいんだが……)

これ以上村橋の事を更に知るにはバーの人に聞くしかなく、ラウラは『アカネ』とそ  
のマスターが健在な事を祈った。

—————

【この度アカネは、○月△日を持ちまして閉店することとなりました  
20年の間ご愛顧いただきありがとうございました】

「うっそだろ……」

ラウラの叫びとも眩きともつかぬ感嘆が、彼女の心情を的確に述べる。なんとということか、『アカネ』は1年前に閉店してしまっていたのだ。これでもう手詰まりだ。

今のラウラはただの学生、幸運を重ねる以外に探す術は無い。

「諦めるしか……無いのか……」

ラウラはがつくりと項垂れる。嗚呼、折角、みんなの力になれると思ったのに――

「……私の店になにか用かな？」

「え？」

横から掛かる声に振り向くと、そこには1人の老人がいた。

豊かな白髭を蓄え、丸眼鏡と下がった目尻は人に警戒心を与えない、まさに好々爺と呼ぶべきだろう。

「あなたは……？ いや、〃私の店〃ってまさか!？」

先程『幸運を重ねる以外に探す術は無い』と、述べた事は覚えているだろうか。

「ああ、1年前までその『アカネ』でマスターをしていた……黒山だ」

幸運は、重なった。

「なるほど、村橋さんについて調べていると」

「はい。村橋さんはここを歩きつけにしていたと聞いたので、なにか教えてくれませんか？」

『アカネ』のマスター、黒山の散歩中に幸運ながら出会う事が出来たラウラは、事情を話して村橋の情報を尋ねる。

「ふむ。とはいえ、私も村橋さんについては君が持っている情報と大差無くてね。」

付け加えるなら確か…5年前にこちらに越して来て、2年前に品川の方に越していったという事ぐらいかな……」

「……品川」

それは、今回の始まりの地。指す意味は振り出しに戻る。

幸運ではあったが、上手くはいかなかった。

これでまたやり直しかと、内心落胆しながらラウラは黒山に頭を下げ、去ろうとする。



そんな時、何かに思い当たった黒山がラウラを呼び止めた。

「ああそうだ。役に立つかは知らないが…村橋さん、よく気になることを言ってたんだ」  
「…気になること？」

「『未来のことなんて知らなくていい。知らない方が幸せだ』……酔った村橋さんはいつもこう呻いていたよ。」

いつもは楽しく笑顔なのに、その時に限っては酷く悲しそうなんだ」

その言葉をメモに書いて、ラウラは再び品川に向かった。

—————

「やして…」

『村橋和則』の居場所についてはこれで振り出しだが、元より偶然テツを助けた事から始まる幸運だったのだ。

気を取り直して品川にいるであろう村橋を、もしくは亡国機業ファントムタスクを探すかとラウラは意気込む。

(その前に…)

まずは情報を整理しよう。

ラウラが掴んだ情報は過去のものであるので、それを時系列順に並べてみる。

← 5年前：村橋、市川に越してくる。『アカネ』にはこの時から常連になっていた。

← 4年前：ゴローが市川に越してくる。この時に村橋と知り合いになる。

← 3年前：ゴローが職を失い市川を去る。

← 2年前：「仕事の都合」と言い残して村橋が品川に越す。

こうして整理すると、掴めた情報はほんの一部だということが嫌でもわかる。

残りの情報は村橋の身体的特徴と——

『未来のことなんて知らなくていい。知らない方が幸せだ』

——泥酔した村橋がいつもいつていた、うわごとのようななか。

これはきつと大事なものだ、ラウラは確信していた。

「……見つけた」

「あ？」

そんなラウラの思案を、敵意に満ちた声が遮る。

振り返るとそこにいたのはホームレス狩りの一人であった。

「……随分と早い釈放だな」

女尊男卑ここに極まれり。

彼女は、そしておそらくその仲間達は女性である事を使って警察から事情聴取だけで済ませたのだろう。

最早ため息も舌打ちもする気になれない。

そう呆れる様を隠す事ないラウラに、ホームレス狩りの女は怒りを露わにしていく。

拳を握りしめて、今にも殴りかからんとする彼女に、ラウラは肩をすぼめて一応の忠告をする。

「喧嘩を買うのは構わんが……負ける覚悟は出来たか？」

二度目の戦いは、映す価値もなかった。

「おーい」

「……む？」

そうしてラウラが足での搜索を再開していると、1人のホームレスが駆け寄ってくる。

その顔にはラウラも思い当たるところがあり、それはホームレス狩りに襲われていた1人だったのだ。

「貴様は、さっきの……」

「ああ。ホームレス狩りから助けてくれてありがとう……じゃなくなつて」  
ゼエ、ハアと息を整えてホームレスは告げる。

——村橋と思われる男を、仲間のホームレスが見つけた、と

ホームレスネットワークって凄い。ラウラはそう思った。

## 08-11 THE THIRD DEGREE

「ふむ……」

ホームレスからの情報を元に、ラウラがやってきたのは雀荘『四神』。

雑居ビルの二階にあるその看板と、メモの名前を何度も見比べて間違いが無いと念入りに確認する。

「よし……」

「……ラウラさん？」

いざ行かんと鉄骨階段を踏みしめた時、背後から声が掛かる。

振り返った先には如月がおり、キョトンとした顔でラウラを見つめている。

「どうした、今日はお出かけか？」

「どうしたはこつちの言葉よ。」

ラウラさん、そこ雀荘よ？ どうしてそんな所に……？」

「……」

ラウラは言葉に詰まった。

当然だが雀荘は女子高校生が行くものではない。

ギャンブル・娯楽としての麻雀を知らないラウラでもそこは理解しており、突かれて痛い場所である。

「あ……もしかして、外国とは勝手が違うのかしら？」

ラウラさん、日本ではこういう所は成人してから入るものというので……」

「……」

故に、返答は出来ず。

ラウラは回答拒否の姿勢を示すように背中を向けて、階段に更に一段足をかけた。

「あ、ちよつと……」

逃げるように続けて一段、駆けてもう一段。

（右目の下にホクロがあり、一重まぶたで垂れ目。髪は黒で身長は170センチ程……いた！）

アルミ扉に貼られたコピー用紙で印刷された『四神』の文字を確認して開扉。

中に入り見渡すと外見情報と、一致する男は1人。

店の奥で他の2人と雀卓を囲み、煙草を燻らせている。

「ラウラさん……一体何を……？」

追いかけて入った如月と、受付の制止を無視して、その卓に早足で近寄る。

「貴様が……村橋和則か？」

「……お嬢ちゃん、人に名を訪ねる時はまずは自分からだと教わらなかつたのか？」

「IS学園1年。ラウラだ」

牌と牌が当たる音が止み、声をかけられた男はラウラに視線を走らせる。

酒と煙草でしやがれた声に、機を先すように答えた。

男はラウラの所屬を聞くと怪訝な顔で眉を寄せる。

「それで、貴様が村橋なのか？」

「……ああ。俺が村橋和則だ」

よし……！

ラウラは心の中でガッツポーズ。

この分だと亡国機業フアントムタスクよりも先だ。

「それで……なんの用だ」

亡国機業フアントムタスクが貴様を追っている」

目の前の村橋が亡国機業の關係者なのか、或いは敵対者かまではわかつていない。

だからこそラウラは、建前や前置きではなく直接本題を切り出す。

その言葉に、如月や卓を囲んでいた男達は「ふぁんとむたすく？」と首を傾げている

が、村橋だけはそんな様子もなく煙草の煙をゆっくり吐き出した。

「……そうか。ま、そろそろ年貢の納め時とは思ってたがな……」



「貴様は、亡国機業フアントムタスクとどんな関係なんだ？」

「…お前。俺がなんなのかを知らずに探してきたのか。」

殺しに来ねえから、てつきり政府の回し者かと思つたんだが」

観念の表情を浮かべ、村橋はため息と共にラウラに呆れる。

そうは言われても、ラウラは亡国機業フアントムタスクが追つているから村橋の行方を追つた訳で、それを知るためにここにいるのだ。

知るを知ると為し、知らざるを知らずと為す、是れ知る也。

今はもうドイツ軍の力を保持してないラウラなりの努力なので、そこはスルーして欲しい。

とはいえ村橋にそんな事情は関係無いのもまた事実。

そこを弁えられないラウラでは無いので、素直に頷いた。

「…：…：知らねえなら知らねえで、そのまま帰れ。」

組織について名前以外の事知ってんなら…：その危険性は想像できんだろ」

「なら、なぜ私を政府の者だと思つたのかを聞きたい」

「同じ事だろ…：いいから帰れ、雀荘こじはお子様が来る所じゃねえんだ。」

亡国機業ファントムタスクなんて言葉も忘れちまえ。学生なら数式の1つでも覚えた方がよっぽどタメになる」

「何か1つでいい！教えてくれ！」

「なんでそこまで聞きたがる……！」

「……………私の叔父と、友達が、亡国機業ファントムタスクに襲われたからだ……………」

「……………復讐か？」

村橋は強い拒絶の意を示して、ラウラの襟首をつかんで睨む。

しかし、しつこく食い下がっていくラウラの言葉に……………村橋は、目の怒気をおさめた。

「違う……………復讐じゃない。だけど、似てるかもしれない。役に立ちたいんだ……………」

アイツらが血相を変えて探す貴様から何か聞ければ……………亡国機業ファントムタスクを潰す切り札になるかもしれないんだ！」

ティナ・ハミルトンが憤ったようにラウラもまた、あの事件で嘔み締めるものがあつた。

「今のお前は持っていないもんな」

嘗ての一夏はラウラを指してそう言った。

「君のドイツ軍籍のように消えてしまったからねえ」  
 シャロロットはラウラを題してそう述べた。

「そうだ。いくらホームレス狩り程度を鎧袖一触に出来ようと……今のラウラは非力だ。」

—— I S に対抗できるのは I S だけ ——  
 怪物ではない唯の人間ラウラに、そのルールは覆せない。

専用機持ちではない唯の常人ラウラに、その舞台は登れない。

余人では無いだろう。凡夫でも無いだろう。ましてや俗輩からは程遠い。

それは既に記録から消えた過去ドイツ代表候補生が証明している。

……だからこそ、ラウラは悔しい。

己の中に未だ息づく専用機持ちとしての意地が、軍人として矜持が、それらがもたらした技術と経験が、人を守り悪を倒せと叫ぶのだ。

勿論、それを成す資格は無いとわかっている。

国を背負う軍人の立場ながら、非のない相手へに暴行しようとした。

国を代表する候補生の立場ながら、他の生徒や操縦者を見下し続けた。

詳細知らぬことながら、禁断のシステムに自らの意思で手を伸ばした。

ISという、超常の鎧を纏う者として失格すら生温い罪状を踏まえれば、今の待遇は無罪すら超えた温情だろう。

そこについて不平不満を言うわけではない。

ただ、自分の無力が恨めしくて仕方ないのだ。

「……覚悟は、出来てんだな？ 俺が話すことを聞けばお前も追われることになる。

奴らの行動次第によっちゃあ、二度と陽の目の当たる場所を歩くことは出来なくなる。

お前が話せつつつてんのは、こんな事だ。……その叔父やダチ泣かしても聞きてえつていうんだな？」

「……ああ。戦う覚悟は出来ている」

「あの……訳知り顔同士なのはいいのだけど、そもそもそのファントムってなんなのかし

ら？

言葉の端々から読み取れる雰囲気からすると相当危ない代物かなにかのようだけれど……」

「世界中で暗躍する悪の組織だ。如月、貴様はここで帰れ、巻き込む気はない。

……帰るんだ。貴様は巻き込まれていい者じゃあない」

「え……え……!？」

「帰つとけ。わかんねえ話で命を投げ出すんじゃないよ。生きてりやいいんだ」

「え……あ、うん……。……聞くわ、乗りかかった船よ。」

それに私の立場なら何か手伝えるかもしれないし」

周囲を置いてきぼりにしている2人の周囲から同卓の男達が消えてゆく。

その場に残っているのは、村橋とラウラと、知らないながら覚悟を決めた如月だけになった。

「俺は、村橋和則。……そう今は名乗ってるが偽名だ。本名については言わん。どうせ後1日そこらで死ぬ男だ。」

んで、ファントムタスク亡国機業との関係だが……俺は5年前までその最高幹部の1人だった」

「最高幹部?」

「……如月。ファントムタスク亡国機業の組織は大きく2つあってな。」

運営方針を決める幹部会と、スペシャリスト揃いの実働部隊……そして、この村橋は「ああ、その幹部会を構成する幹部の、まあ偉い方の役職だったよ……ま、逃げて捨てたけどな」

「何故、亡国機業フアントムタスクから逃げようと思った……？」

「……そこは、組織の構成員の情報や命令系統、支部や本部の場所を聞くべきじゃねえのか？ まあ、今アイツらがどこを本部にしているのか知らんがな」

たしかに村橋から対亡国の情報として聞くべきなのはそういつた事だろう。だが、ラウラが一番聞きたいのはそこではない。

『『未来のことなんて知らなくていい。知らない方が幸せだ』……マスターから聞いたぞ。泥酔した貴様が言っていた、この言葉をな』

酒とは、人を変えるものではない。

酒とは、人の本性を暴くものである。

亡国機業フアントムタスクの事こそマスターや他の客に言わなかったが、それでも酒気に浸った脳髓から出たギリギリの場所の言葉。

それこそ謎多き亡国機業の真相に迫るものだという確信がラウラにあった。

「教える、村橋。貴様はなんのためにその立場を捨てたんだ……？」

「……どうして、俺が組織から逃げたと断定する？ もしかしたら追い出されたのかも

しれないだろ」

「それは、貴様が、……こうやって身分を偽っているからだ。

そして、質問に質問で返すな。凶星だとしてもな」

末端組織の構成員ならば、何もかもを捨てて逃げるのもありだ。

持っている情報がそれほど重要ではないのなら、追跡の手もそれほど大層なものではないだろう。

だが村橋は元最高幹部だ。

持った情報は組織そのものを揺るがす可能性が高く、そういったものが組織を抜ける際にやることは一つ。

敵対組織に己を売り込む。

個人で組織を相手取るとは出来ない。それこそ、例イレギュラー外じやない限り。

だからこそ、そういったもの達は早急に身の安全を確保する為に後ろ盾を欲する。

だが村橋は、数多の亡国機業ファントムタスクの敵対組織に逃げ込まなかった。

「貴様という人間が持つ価値は高い。組織の中で高い地位を保てる素養があるのなら、IS委員会を始めとした組織への交渉も考えに及んだはずだ。

……及んだ上で、考えた上で、貴様は『村橋和則』として生きる道を選んだ。何故だ？ その先に安寧の生など無いというのに」

世界中で暗躍し、IS学園と更識家を手玉に取った亡国機業フアントムタスクの手の届く範囲は広い。そこから最重要搜索対象として5年間逃げ切った……否、バーにも通う程の隠蔽を成し得たことは讃えられるべき偉業であろう。

だが、たつたの5年だ。子供も小学校に入れない。

監視下になろうと、自由が無かろうと、生きる為なら『村橋和則』ではなく『亡国機業フアントムタスク最高幹部』として生きるべきだった。

少し考えればわかる、死しか待ち受けていない村橋の5年間を、ラウラは何故と問う。

「……」

村橋はラウラを見る。

座った体勢で、立ったラウラを見上げる。

ラウラの後ろから光る白熱電球を見て、眩しいものから目を逸らすように眼を瞑る。

「……怖かったからだ」

「……」

か細く告げる村橋、ラウラはただ無言でそれを見下ろす。

「……IS学園に入ってるなら知ってるだろ……10年前の『白騎士事件』を」



## 白騎士事件。

日本を攻撃可能な各国のミサイル2341発。それらが一齐にハッキングされ、制御不能に陥った事件。

突如現れた白銀のISを纏った一人の女性によって無力化され、その後も各国が送り出した戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視衛星8基を、一人の人命も奪うことなく破壊することによって、ISは「究極の機動兵器」として一夜にして世界中の人々が知るどころになった事案。

「ISを倒せるのはISだけである」という束の言葉と、その事実を、敗北者たる世界は無抵抗に受け入れた日の名称。

ISに携わるどころか、今や世界の常識と化した教科書の中の物語。

「それが、どうかしたのか」

「20年前から、亡国機業フアントムタスクの行動方針は徐々に、そして急速に変わった。

……女、女だ。女の兵士の教育と増兵に力を入れ始めた。用途の分からねえ機械の鎧を作り始めた。

そして、出来上がった女性エージェントと鋼鉄の部品に噛み合う歯車 ISが、突如として未来予知のように現れた」

「な……!?!」

「信じられねえだろ？　だがな、俺にとつて信じられねえのはここからだ。……ISと  
いうものが世の中に異常なスピードで入り込み始めた！」

「IS 学園は今年で創立8年！IS が世に出てたつたの2年であの設備と組織が出来  
た！」

「アラスカ条約！女尊男卑の思想の流布！女権団の確立！IS 委員会！モンド・グロツ  
ソ！どれもこれも5年以内には形になっていた！」

「……」

「ラウラは絶句する。」

「村橋が言っているのはこの世界の常識に他ならない。」

「だが、言われてみれば異常じみているそれに、今の今まで気づきもしなかった。」

「だから怖くなった！……世界そのものが恐怖の対象となった！　だから、だから……」

「村橋は煙草を灰皿に押し付ける。」

「……全てから眼を背けたくなつた。裏からも表からも消えて、ただ逃げたくなつたん  
だ」

「篠ノ之束が、強制的にISを馴染ませたのなら納得した。」

「フアントムタスク亡国機業が、溶け込むように手を回したのなら腑に落ちた。」

「その他の組織が、利益利権が為に動いた結果なら甘受した。」

だがそのどれでもなく——世界の方からISを取り込んだ。

それを間近で見て、それを見越した組織に怯えて、それをなんの疑いも持たない世界に恐れをなし、それを見ない為に背を向けて逃げ出した。

それをラウラは責めも、慰めも、領きもしない。

……出来ない。動けない。

越界の瞳による己を追い詰めた地獄の原因が。

千冬と一夏という今の家族と結びつけた要因が。

これからも変わらぬであろう常識がガラガラと崩れていくのを感じる。

1分2分と経って、ようやくラウラは口を開く。

『未来のことなんて知らなくていい。知らない方が幸せだ』……なにもかもが詭えたようにセッティングされていたという事、か……』

ゆっくり反芻して、飲み込む。

異常の中で常人たるならば、それすなわち狂人なり。

村橋という男は、世界の異常に気づいたが故に世界から逃げ出した、一種の賢者だった事がラウラの中で確立した。

「……雀荘に通うようになったのも、未知が欲しかったからだ。

負ける度に俺は未来がわからないと安心した。

まだ、世界の全てが決まっていなと思うことができた。……なあ、ラウラ

——お前、これを聞いてもまだ戦うと言えるのか？」

「……それは」

バアアン!!

「!？」

ラウラが拳をギユウと握った時。

雀荘の扉が、弾けて飛んだ。

「な、なんだアンタら……ヴッ」

入ってきた紺のコンバットジャケットの男は、受付の胸にサバイバルナイフを一刺し。

呻き声を上げて倒れる受付を見て、雀荘は悲鳴で満ちる。

他の卓を囲んでいた雀士達が我先に逃げ出していく。

次々に逃げていく他の客達とすれ違って、同じコンバットジャケットがゾロゾロと入

る。

手に握られていたのは同じサバイバルナイフ、そしてその右手の人差し指の指輪は、ジまるでアクセサリーのように集団に統一感を持たせていた。

「ついに来たか……テメエらは逃げろ。アイツらの目的は俺だ」  
状況を踏まえればこの徒者供は亡国機業フアントムタスクの刺客であろう。

ならばここでラウラがすべき事は一つ。

逃げて、生き延びる事だ。

そこでしれつと姿を消した如月のように。

だけでも……

「貴様ら、亡国機業フアントムタスクだな」

……ラウラは自ら、その道を潰した。

「その通りだ。誰だお前は」

「通りすがりだ。悪いが、村橋は殺させない」

「……なら、お前から死んでもらうぞ」

ラウラを敵と判断し、亡国機業フアントムタスクの刺客達がナイフを構える。

村橋の制止を無視して前に立ち、ラウラもまた、服の中に隠し持っていたナイフを抜く。

「止めろ！逃げる！……そいつらは精鋭だ、1人じゃ敵わねえ！」

刃渡り20センチを超え、ブラックメタルの色彩が静かに威圧感を放つラウラの獲物は、軍人時代に彼女が実戦で用いたもの。

そして……『ラウラ・ボーデヴィツヒ』という存在が、全ての記録から抹消された際に、唯一手元に残せた実物の証明。

村橋の命を狙って追って来た消せない過去に、己の消えた過去を向ける。

「村橋、お前は言ったな。『戦うと言えるのかと』……ああ、言つてやる。

私は、ラウラは、ファントムタスク亡国機業と戦う！ 逃げはしない！」

過去の名前が消えたという意味では村橋とラウラはよく似ていて。

自ら消した村橋と、他者から消されたラウラは全く違う。

『織斑』であろうと、『ボーデヴィツヒ』であろうと。

『ラウラ』は戦う為に生まれ、戦うと決めた戦士だ。

鉄火の場所を与えられたのなら、突き進み踏み躪るのが戦士の粹で――

——いさおしを失う事なく意志の往く先を決めるのならば、唯前にしか無いのだ。

「さあ……負ける覚悟は出来たか!!」

## 08-12 負ける覚悟は出来たか

「さあ……負ける覚悟は出来たか!!」

そうやって駆け出すラウラの勝率は、高く低い。

謎かけのようになってしまったので言い直そう。

長期戦として見るならラウラの勝率は高く。

短期戦として見るならラウラの勝率は低い。

理由は簡単、先程逃げ出した者達が通報して、警察が着くまで5分。

これがこの戦いのリミットだからだ。

その間2人とも生き延びればラウラの勝ちで、その間に2人とも殺せれば亡国機業の勝ちだ。  
ファンタムタスク



「ハアアツ!!」

「ガ……フ……!?!」

とはいえ守っているばかりではジリ貧というもの。

ラウラは目の前の構成員の横をすり抜け、その後ろに控えて油断していたもう一人の胸に飛び膝蹴り。

「ガア……!」

服につく血を無視して、振り向きざまに1刺し。

先程すり抜けられた男は、胸を切られた男と仲良く倒れる。

「何!?!」

その瞬殺と呼ぶにふさわしいラウラの体捌きは倒れ往く構成員からは断末魔を、それを見た構成員からは驚嘆の声を上げさせる。

セシリアが貴族で代表候補生であり、楯無が暗部で代表候補生ならば、ラウラの過去『ラウラ・ボーデヴィツヒ』は軍人で代表候補生だ。

そんなラウラの強さはかなりのものだ。生身という条件ならば、楯無すら上回り千冬の喉笛に噛み付けるだろう。

そして、ナイフというものは汎用性が高い。

切つて刺して捌いて剥いで……何にでも使える万能武装だ。

リーチの差を踏まえても、大体の軍事組織が武器として採用する程のポテンシャルを秘めているのだ。

その技量と、そのナイフと、持ち前の体躯の小ささを活かして、亡国機業を翻弄していく。  
右へ左へ、左へ右へ、縦横無尽に跳ね飛び回っていく。

今の彼女は、言うなれば首狩りうさぎ。ヴォーバル・パニー

時には保護対象である村橋を囷にして攻撃を加え、雀卓をひっくり返して視界を塞いで切り裂き、そうして不意打ちや奇襲の手札を1枚2枚と切っていく。

無論相手は亡国機業フアントムタスクの精鋭。唯のボンクラではない。

一度見せた手は次には通じず、振るわれる鋼鉄の刃は避けるのではなく掠る事で凌ぐことしか出来ない。

殺さないのではない、殺せない。

目の前の紺の集団はプロフェツショナルの集まりだ。

生と死の境界が曖昧になるのを全身で感じながら、ラウラはナイフを振るう。

「おい……なんでそこまでして俺を守ろうとする……！」

「うるさい！ 貴様は自分の身を守っている！」

現場からの叩き上げだったのかどうかはわからないが、村橋の身体能力は案外高く、ラウラや構成員の動きを見て自分からキチンと逃げていた。

その上で、〃自分を置いてさっさと逃げろ〃と叫ぶ。ラウラはそれに〃黙れ〃と返す。

村橋には理解できなかった。

何故目の前の少女はこうまでして、己を庇うのかを一片たりとも解せなかった。

そのナイフの切っ先を、自分の脱出のみに振るえば逃げ切れるのにそれをしないのが分からなかった。

納得し難い苛立ちを込めて、構成員に綺麗なカウンターパンチを見舞う。

「逆に聞く……貴様は生きたくないのか！ イエスカノーで答えろ！」

グルグルと巡る村橋の思考を、手に持つ刃のようなラウラの叫びが断ち切る。

「……イエスに決まってるんだろ！ 死にたい訳ねえだろ！ でもあのまま亡国機業ファントムタスクにいたら俺は死体のまま生きていた！」

対立組織に身柄を明け渡してもそうだっただろうな。最期ぐらいは好きに生きて死にたかった！

あんな狂った惨状を目に焼き付けたまま死にたくなかったんだよ！ 捕まって殺されようと『人間』として生きたかったんだよ！」

村橋は咆哮する。

そうだ。『村橋和則』という名前は偽りのもの。いずれは覚める、永き眠りの前の泡沫の夢だ。

だがそれが、嘗て悪の組織の幹部だった彼にとつては、どんな宝より勝る本物だった。そんな魂からの怒号に、ラウラは口角を上げる。

「よく言った！……実を言うとな、私はただ単に貴様を見捨てられなかっただけなんだ！

私自身が！見捨てられて！そして助けられた存在だから！……自己満足他ならぬ私の心が動機だ！」

ラウラという少女は人生において2度見捨てられた。

1度目は、ヴォータン・オージェ越界の瞳の適合失敗による部隊内の落ちこぼれと化したこと。

2度目は、禁断のVTシステムに手を出したと濡れ衣を着せられて過去ごと抹消されたこと。

そしてそのどちらからも救われて、だから彼女は人を見捨てられられない。

街行く人々から見捨てられた、テツがそうだったように。

見捨てられたものは、戦わなければいけない。

戦わずに死んだら、ただ可哀想なだけで終わってしまふ。

同情で幸せは出来上がらず、慰めで救済に至らず、戦って勝って始めて救われる。

2度も見捨てられた彼女は、だからこそ目の前の障害に言うのだ。

勝つのは私で、負けるのはお前だと――

――『負ける覚悟は出来たか』と。

「貴様は言ったな……『未来のことなんて知らなくていい。知らない方が幸せだ』と！

それは違う！ 確定した未来を恐れる必要はない……ただ、立ち向かう覚悟を決めるだけだ！」

想いを乗せたキックが構成員の腹を捉え、吹き飛ばす。

着地したラウラは、まるで獣のように人の言葉を吠える。

「私も貴様に言われるまでまるでわかっていなかった！この世界はどこかがおかしい！

未来が決められているのかもしれない！

悪い夢でも見てたようだ！だけどこれは現実だ！……なら抗うしかないだろ！拳で

も剣でも振るうしか無いだろ！」

ナイフの鋭さが先程よりも増す。

キツクの威力が以前よりも増す。

まるで、ラウラの感情が、溢れるエネルギーとなつて体を動かしているように。

「だから生きろー！ 生きて足掻け！ 怖いなら相手を潰せ！ 喰われるぐらいなら喰らい尽くせ！」

ハツキリ言うなら、村橋は悪人だ。

フアントムタスク

亡国機業の幹部として沢山の人を傷つけてきた。

だがそれでも、生きたいと叫ぶ権利はある。

どれだけ他者に否定され、命を奪われようと、奪われるその瞬間まで吠える事は許されている。

正義の為に、大多数の人の為に、1人を殺すのは倫理的に正しくなる事はある。

それは誰かがやらなければならぬし、誰かがやってくれるから世界は回っている。

村橋は悪党で、ここで死ぬのが相応しい末路と言う人はいるだろう。

だからこそ、ラウラは言う。

生きろ。そして罪を償え。

こと生存に善悪はないのだから。

元軍人ではあるが、ラウラは合理ではなく感情で動くタイプの間人だ。

それは今までやらかした事や、原作での愛情表現が証明している。

故に彼女は悪党である村橋にも手を差し伸べる。

過去にやっていたことなど極論どうでもよく、ただ単に助けたいだけなのだから。

「元」軍人であり、「元」代表候補生であり、そしてそのどちらも消し去られた立場は、彼女から秩序の枷を奪っていた。

「逃げるだけの人生はもう終わりだ！ これから始まるのは……『村橋和則』という一人の人間の戦いだあああ!!!」

それは狂気じょうきから見捨てられた村橋へのエール。



その叫びによつてかどうかは神のみぞ知る事だが…

「ラウラさん！」

…戦闘開始から2分。助けの船は来た。

逃げた筈の如月はその左手に消火器を抱えて戻ってきた。

そのホースを構成員の1人に向けて噴射、そのまま駆け寄つて消火器本体で思いつきり頭をぶん殴つた。

流石凄腕。パイラーと内心讃え、ラウラは動揺走る構成員の内の1人の足を切り、機動力を削ぐ。

「如月、警察は！」

「…それよりもつと頼りになる人を、連れてきたわよ」

耳を澄ませば、錆びた鉄骨階段を走り蹴る音が聞こえる。

足音の主は部屋に入るなり叫んだ。

「俺の姪に……何手を出してんだア!! 変身!!」

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

黒鉄の兵器に姿を変えたラウラの叔父いちかは、その剛腕を振るい構成員を次々に薙ぎ払う。

ラウラと村橋が四苦八苦して立ち回っていた相手を、一夏はまるでボーリングのピンのように倒していく。

今までの2分がまるでのんびりだったように、ものの10秒で全ての構成員が片付いた。

「どうだ? 逃げなければ案外なんかなくなったぞ村橋……私の勝ちだな」

「……そうだな。俺が甘ったれてただけみてえだなラウラ」

精根尽きて倒れたラウラを、村橋は引つ張り上げた。

5分間の間の命をかけた鬼ごっこは、ISの乱入というラウラの特エキストララウイ殊勝利に終わった。

「グ……う……」

「……んで、コイツらは一体なんなんだ？」

一夏は床に転がる構成員を一瞥し、仮面の中で不思議そうな顔をする。

ラウラは如月に「説明してなかったのか？」と目を向けそうになるが、事態は一刻を争っていたことを考えてやめた。

「亡国機業だ」  
ファントムタスク

「そうか、……怪我は」

「沢山あるが、平気だ」

「……そうか」

2度目の「そうか」の時の表情はヘッドパーツに阻まれ見る事は出来ないが、しかしどこか悲しそうに見えた。

「……で、そのそいつは誰だ？」

一夏の視線が村橋に向く。向いて、次に周りを見た。

村橋は一度目を伏せ、そして目の前の黒い鳥の、カメラアイを見る。

目は口ほどに物を言うファントムタスクと聞くが、機械の瞳は驚くほどに寡黙だった。

「……俺は5年前まで、亡国機業で最高幹部をやっていた。今は、村橋和則と名乗っている」

「……俺は、まあ、知ってると思いますけど織斑一夏、そのこのラウラの叔父です。

貴方の待遇についてですが……ま、そこをどうこうするのは俺じゃないですね……」

【システム 通常モードに移行します】

一夏は変身解除と同時に、左足を軸に半回転、勢いをつけて右足を振り上げる。

すると解除と同時に動いた、一夏の背後の構成員の顔面に爪先が突き刺さった。

「……ガ!？」

油断も隙もないことに攻撃の機会を伺っていたのだろうが、いくら格上でも攻撃のタイミングがわかるなら一夏だって仕留められる。

一夏の観察眼はどれだけ読みにくい相手でも、真偽を見極める事は出来るのだ。狸寝入り等、読み取れて当然の事。

床にうつ伏せに転がる構成員を踏みつけ、一夏はどつちが悪党かわからない絵面を作る。

「さて、ついてきてもらうぜ。色々テメエらには吐いてもらわなきゃいけないからな

…

「グ……今だ！」

その合図を受けて更に飛び起きたもう一人は村橋めがけてナイフを投げ

「はい、そこまでよ」

ゴッソ☆

……られなかった。

動こうとしていたのを察知した如月が、先手を取って空になった消火器をぶん投げたのだ。

それが見事にヒットして、ダウンする。

以外に手に馴染んだのか消火器を回収した如月は、妙にキラキラした目でそれを見つめた。

「消火器……結構可愛いわね」

「……」

ラウラとしては助けを呼んでくれたのは有難いが、ここまで修羅場でマイペースに生きられると不安になる。

一夏に聞く限りでは初っ端からパイルバンカーの素晴らしさを演説していたらしいが、変人だからといって変なことに巻き込んでいいわけでも無い。

(……というか、この血と呻き声の中でなんでいつも通りで居られるんだ……？ 妙に慣れているような……)

「如月さんサンキュ……変身」

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

一夏の方はそんな如月の奇行を気にすることなく再度変身。

銃を突きつけ、動こうとする構成員達を牽制する。

余談だが、何故変身し直したのかといういと、突入時のアセンには銃系統の武器を持つていなかったと言う訳があったりする。

妙なところでうっかりが絶えない主人公である。こんなだからオータムに殺されかけるのだ。

「動くなよ、動けば撃つぜ。……あん？」

「ふ、ふ、ふ……」

一夏の足元から笑い声が響く。

「なんだ、どうしたよ」

「俺たちから情報を得ようとしても無駄だ……ハハハッ！」

狂ったように笑う亡国機業構成員。  
フアントムタスク

次の瞬間、彼の右手の指輪から強力な稲妻が迸った。

「なに…!?!」

「ガ——アアアア!!」

　I Sを纏った一夏は無事だったが、高圧電流を浴びる構成員は痙攣して死んでゆく。一夏の足元の構成員だけでなく、その他の構成員も1人また1人と、火花を散らしてその命を自ら絶っていた。

　淡々と騒がしく死んでいきながら、その顔には理解しがたい笑みが貼り付けてあった。

「これが…精鋭部隊の鉄の掟だ。」

　組織のために生きて、組織のために死んでゆく…」

「村橋…。」

　……!?!　ちよつと待て、何か変な音が聞こえるぞ!」

「みんな、あれ!」

　如月が指差す方向には、なにやら音を立てて気体を吹き上げるガス缶。

　一夏の内部モニターに映し出された情報は、それが吸ってはいけなものだと示していた。

「毒ガスだ、逃げるぞ!」

　恐らくは自決する前の最期の残りっ屁か。





## 08-13 お義母さん

「……………やられたー！」

なにがあつたのかをすぐに読み取つた一夏は、撃たれた村橋を抱え、揺らさないように飛ぶ。

隣がホテルなのを見て、近くのを破つて侵入、丁寧にベッドに寝かせる。

村橋は胸を撃ち抜かれており、もうすぐ死ぬと財団は告げたが、一夏は諦めない。

(確か、AC世界だと……！)

銃で撃たれたのなら、まず止血しなければならぬ。

銃弾を受けた時の一番の死因は失血死だからだ。

それは狙撃の今回でも変わらない。

そして胸部に傷穴が開いていたら、空気が入らないようにするのも重要だ。

さもなければ、緊張性気胸や肺の虚脱などになり、呼吸能力が半減してしまうからだ。

変身を解いて思考と同時に体を動かす。

ダイクレイヴン

黒い鳥の『ガレンジ』から救急箱とラップとスマホを展開し、救急箱から取り出した紙テープで胸にかけたラップを固定する。

通気性の無いラップで空気が出入りするのを防いだ後、手で傷口を抑え止血を試みる。

「叔父！村橋！」

財団が一夏のスマホをハックして、119番に通報していると、扉が壊さんばかりの勢いで蹴破られる。

「ラウラさん…速いわよ…！」

ラウラ、そして如月が駆け込み、ガラスの割れる音といきなり押し入った2人を追ってホテルの従業員が続く。

「こ、これは一体…なにをしてるんだ!？」

「うるせえ人が死にそうなんだ黙ってる！　ここの客に医者はいねえのか!」

止血をラウラと如月に任せて一夏は従業員に医者の有無を問い、従業員を確認に行かせる。

手にベツタリついた血を服で拭って、財団が通報を終えたスマホをタップする。コール音は一度で途切れ、番号の主である楯無の声がスピーカーから聞こえた。

『…織斑くん?』

「もしもし、会長！　村橋を発見しました。今撃たれて応急処置してます…!　場所は

〇〇ホテル、今すぐ応援を要請します!」

『なんですって!?!　わかった、今すぐ人を送るわ!』

「お願いします…!」

一夏は通話を切り、必死に止血するラウラの方を見る。

すると失われていた村橋の意識が戻り、その目が開こうとしていた。

「村橋!」

「俺、は……撃たれて……」

「喋るな。血が……」

臆げな意識で自らの状況を悟った村橋は、ラウラの制止も無視して口を開く。

「ラウラ……お前は……言ったな……逃げるな、と。生きて、足掻けと……！」

悪いが、俺はもう……永くねえ。俺の体だ……嫌でもわかる。だけど……だけどな……

最期に……お前が聞かなかつたことを……お節介で教えてやる……！　これが、俺なりの……足掻きだ……」

喋るたびに口から血が溢れる村橋に、ラウラは「黙れ」と返す。

しかし黙らない。灯滅せんとして光を増すとばかりに口を動かし続ける。

「フアントムタスク亡国機業は、一定周期で本部の位置やシステムを変える……」

だから俺が知っている情報は基本役立たずだ……！　だけど、アイツらの喉笛に噛み付けるだろうものは知っている……！」

血反吐と共に残りの命を吐き出しながら、魂と共に言葉を一つ一つ発していく。

「ポイント、〃0—98—369—52〃……ここに行け……ラウラ。後は、任せたぞ……俺の分まで……ありがとう……！」

村橋がそれを言い終わると同時に救急隊員が部屋に入ってくる。

プロの手つきで村橋の止血を交代して、ストレッチャーで運んでいった。  
ラウラは、ただそれを眺めていた。

—————

夜、やるべきことを終えた3人は学園に帰ってきた。

サイレンを鳴らして車が行く。

村橋を乗せて、その命を救うために行く。

そんな今日を思い出して、一夏はラウラ、如月と共に寮への道をトボトボ歩く。

生きててほしいな。一夏は願った。  
死んでるだろうな。一夏は思った。

いつだって一夏の前では、命とは消えるものだった。

自分に人の命を救う才能が無いというのはわかっているが、こうまで身の回りで死が頻発していくと感じるものがある。

今でこそ死体や血、殺人に対して平常でいられるが、A C世界に行つたばかりの頃は死体に戸惑つたものだし、初めて人殺しをした時にはトラウマ一歩手前まで追い込まれていたものだ。

命の尊さなど最初からよくわかっているが、知つていても身体は闘争を求めるところから彼は傭兵をやっているのだ。

だからこそ一夏は、普通の少女となったラウラに危険な道は歩んで欲しく無い。  
鉄火場に踏み入り、火傷をする羽目になって欲しくは無いのだ。

(傲慢だな…俺がそれを望むのかよ)

千冬の制止を振り切つて、戦いの中で生きようとする一夏が言つていいことではない

のは、本人が1番よくわかっていた。

それでもきつと、身近な人の幸せを願う自由はある。

そんな祈りを受けるラウラもまた、頼み事から始まった長い1日を思い返す。

楯無からは丁寧<sup>ニ</sup>に謝罪と感謝された。

一般生徒を危険に巻き込んだ事の謝罪と、<sup>フ</sup>亡国機業の貴重な情報を得た事の感謝だ。

『ポイント、 〃0—98—369—52〃』

ラウラが先に村橋を見つければ。

ラウラが村橋の心を開かなければ。

あのポイントの情報を得ることは出来ず、<sup>フ</sup>亡国機業に村橋は殺されて終わりであったろう。

そういう意味では、今日のMVPはラウラと言えるだろう。

しかしラウラの心はどこか曇っていて、どこか晴れていた。

間違いなく、ラウラは村橋は助けることは出来なかったが、救うことは出来た。

ただ逃避していた村橋の魂に火を入れて、前向きに戦おうと奮い立たせることができた。

だけでもラウラは楽天家ではない。村橋の生存確率はよく理解している。理解しているからこそ、守れなかったことが悔しい。

結局、彼の罪を償わせることも、戦わせることも叶わなかった。

「……村橋さんはきつと生きてるわよ。うん、きつと」

落ち込むラウラを見かねてか、如月は明るいトーンで希望的観測を述べる。

そうだ、奇跡中の奇跡が起きて村橋が生きる事が出来れば、ラウラの望みは果たされる。

一般人の立場のラウラと如月では、無事かどうかを知ることにはかなわない。

だが、それを知れる一夏が、生死を匂わずぐらいはしてくるかもしれない。

そんな期待を如月は視線に込めて、一夏に向ける。

「千冬姉……」



当然のようにスルーした一夏の目線の先には、寮長である千冬が立っていた。暗闇の中、後ろの寮からの明かりで顔は見えずらいが、どうやらいつもの厳しい教師の顔をしているようだ。

「織斑、ここでは『織斑先生』だ…。

話は聞いている。早く部屋に戻って明日に備えろ。

食事が必要だと思ってサンドイッチを部屋に用意してある。それを食べておけ」

「あ…はい。おやすみなさい、織斑先生」

「……待て織斑…ああ、ラウラの方だけ残れ」

千冬はラウラのみを呼び止め、一夏と如月が寮に帰って行ったのを見届ける。

ラウラが一体何用かと問おうとすると、千冬は息が止まるほどギュツと抱きしめた。

「織斑先生…!?!」

「どうしてお前まで危険に突っ込んでいくんだ…馬鹿者…!」

今にも消え入りそうな細かい声。

感情を押し殺しきれない静かな叫び。

普段の廉潔かつ堅気な教師としてのなりは失せ、そこにいたのは不器用で未熟な母親の姿。

涙を眼に浮かべてラウラを優しく強く抱きしめる。

離れたら消えてしまうと云わんばかりに固く、壊してしまわないように柔く。

「お前は…私の家族なんだぞ…！」

危ないと思ったら、逃げろ。逃げてくれ…

またもう一度、もう一度家族を失うことはしたくない……！」

3年前のモンド・グロツソ決勝戦直前に、一夏はAC世界へと飛ばされた。

当時の千冬にそんな事を知る由もなく、まるで神隠しに遭ったように消えた一夏は彼女の心に穴を開けた。

その穴は一夏が帰ってきた今でも完全に塞がったとは言えず、気を張り詰めていなければ酒に溺れていた頃のように酒瓶に手を出しそうになっている。

そんな彼女にとって、ラウラは新しい家族としてとても大切な存在で。

ある種一夏以上に平穩無事な生活を送って欲しいと願っているのだ。

「自分を…あまり軽く見るな」

ラウラには、戦う力はない。

花形の舞台上に上がる資格もない。

だけでも、そんな彼女が家族としているから千冬は、そして一夏は頑張ろうと思えるのだ。

武器を振るうことだけが戦いではない、信じて帰る場所としているのもまた——戦いなのだ。

その想いを受けてラウラもまた千冬を抱き返す。

「ごめんなさい…義母<sup>かあ</sup>さん…」

抱き合う親子を、寮の窓から一人の男が見つめる。

「……千冬姉を頼んだぜ。ラウラ」

その視線はどこまでも優しく、あの場に入れない自分への自嘲が含まれていた。

「……」

そしてもう一人。

織斑親子を見る人影があつた。

黒く長く、無造作にバラけた髪を厄介そうに除けて、窓からそれを眺める彼女は、深窓の令嬢というにはやや足りないが似たものは持っていた。

彼女はその光景に微笑みを浮かべ——

「……待つていろ篠ノ之束。

僕は僕のためにお前を穿ち殺す。

そして——世界も救つてみせる」

——固く唇を結んだ。

## 08-14 失恋話は突然に

「い、い、いは…？」

俺…『木原巧人』が目覚めるとそこには何もなかった。

見渡す限りの真っ白な空間は奥行きがわからず、足元にはあるはずの己の影がなかった。

「——木原巧人」

後ろから、声がかかる。

振り向くとそこには白いケープを纏った老人がいた。

「あ…」

何もわからないのにわかる。

格が違う。次元が違う。住んでいる領域が違う。

逆らうことは許されない別格の存在だと。

「あな…たは…？」

「儂は…お前にわかるように言うなら『神』だ」

神

目の前の超越者は神と名乗った。

その言葉を一笑に伏す事は、そのオーラとも呼ぶべきものが許さなかった。

「儂の手下が…誤ってまだ寿命のあるお前の魂をここに送ってしまつてな」

「寿命…？ あつ！」

「そうだ。確か俺は、トラックに轢かれそうになつた子を庇つて——

「…そうだ。だが、お前は本来そこで九死に一生を得る筈だつた。」

「そこをうちの馬鹿どもが、何を勘違いしたかここまで運んできたのだ」

「じゃあ…あなたは俺を蘇らせるために…？」

「残念だが、それは無理だ」

俺の期待を込めた質問に、神は首を横に振る。

理由を聞くと単純で、死者の蘇生は犯せぬ禁忌らしい。

頭で理解はできるが、心は納得がいかない。

確かに命を投げ捨てる真似はしたが、ぞんざいに扱われる謂れはないからだ。

そんな俺に、神は語りかける。

「安心しろ。代わりになるかはわからんが——お前を新しい命として生まれ直す事

はしてやろう」

「……え？」

こうして木原巧人の第2の、転生者としての人生が始まった――

「何読んでるんですの？」

「ラノベ。如月さんが貸してくれた」

品川の戦いの翌日。I S学園図書館。

数多の書物を蔵した静かな部屋で、机に教科書とノートを広げる一夏。

しかし教科書にもノートに目線に向けてない一夏に、セシリアは後ろから話しかける。

「勉強中にサボって読むだなんて、一夏さんは悪い人ですわねえ」

「ははは。自習の休憩中なんだからいいだろ？」

それに俺が悪人なんて今更じゃねえか」

「べっつに……読書それが悪いだなんて言ってませんわよお。」

ただ、定期テストで貴方が泣きを見るだけって言ってるだけですわ」

「ご心配どうも、でも大丈夫。これでも予習復習はしっかりやる方ですね。

成績上位にはなれないけど、支障がない程度にはやれるんですよ」

「あら情けない。心持ちだけでもトップを狙いなさいな」

向かいに座る如月が「イチャつくのもそこまでにしておきなさい」と言うと、笑って  
いた2人は「いちやついてない」と声を揃えて返した。

如月はやれやれとリアクションして、自分の勉強に戻る。

完全な余談だが、如月は成績がかなり良かったりする。

具体的に述べるとどの教科でも最低学年5位になるぐらいには。

それを明らかになった時にはクラスの誰しもが『えつ、あのパイルアディクションが  
…?』と思ったものだ。

「ま、それはそれとして…気づいているのでしょうか?」

「……鈴の事か」

如月の茶々を編集点として切り替えたセシリアは一夏の隣に座る。

彼女が一夏に振った話題の内容は『鈴の様子がおかしい事』であった。



その訳はわかっている。新しい専用機についてだ。

以前財団の口から『鈴には新型機は作れない』と告げられた時から徐々に、そしてわかりづらく彼女の雰囲気は暗いものを纏ったものになっていた。

別に財団は鈴の才能が低いと言っている訳ではない。

そもそもAC世界の技術レベルが、このIS世界にとって特殊極まるのだ。

秩序維持が成り立っているIS世界の科学力は、AC世界のそれに大きく劣る。

非道な事を言わせて貰えば、人道や道徳というものは科学の発展の妨げの他ならない。

故に、戦争中に技術は平時の何倍もの早さで向上するのだ。

人を殺し、人を生かし、極限状態から生き延びる為に。

それは、異世界同士であるAC世界とIS世界でも変わりはない。

昔話を超え、神話と化した時代に起こった、選ばれた人間による超兵器同士による戦争。

そして巻き起こった汚染。

その汚染の中で生き残った人々……代表、レジスタンス、ミグラント、企業による最初の黒い鳥が生まれた昔話の中の争い。

そこから出来上がったヴェニデ、シリウス、EGFによる三大勢力。

そして財団が揺り起した未確認兵器による一夏が黒い鳥として名を馳せた最期を決める、評決の日。

この血を血で洗う戦争の中で、AC世界の技術レベルは飛躍的に進歩してきた。

その代表例と言えるのが技術レベルとして本来ならば存在しない筈の、オーバードウェポン“全てを焼き尽くす暴力”『規格外兵装』である。

故に、ISでAC世界の技術を用いるには操縦者に条件や素質を求めるのだ。

そのハードルを持ち前のBT適正を増強して跳び越えたのがセシリアで。

発想と工夫で超えるハードルの高さを技術的に下ろしたのが簪だ。

満遍なくステータスが高い鈴にハードルを越える一点特化の素養は無く。

ありあまる才能で代表候補生に上り詰めた鈴にハードルを下げる業は無い。

「……こんな事なら、もうちよつと人間関係に器用に生きておくべきだったな」

それがわかっているから、一夏とセシリアは手を出せない。

「ええ、そうですわね。

……いくら鈴さんの助けになりたくても——悩みの種たる私達が行けば逆効果  
ですもの」

ラウラに頼んで様子を伺っているが、具体的な方法が思いつかない。

「次期英国代表も、男性操縦者も、力では解決出来ないことには弱いわね」

如月の一言が、正しく2人の現状だった。

—————

「世界の違い、かあ……」

勉強を適当なところで切り上げた一夏は、廊下を歩きながらふと思う。

己がああモンド・グロツソでAC世界に行くことなく、この世界ですつと過ごしてい  
たらどうなっていたか。

おそらくは忙しい千冬に変わって家をやりくりして。

鈴や弾と共に中学校に通い、転校する鈴を見送って。

家を支えるために藍越学園辺りにでも行っていたのかもしれない。

〔『どうしてかは知らないけど、僕はその未来でもI S学園に通ってたと思うよ』〕

〔奇遇だな財団。俺もだ〕

まあI S学園に通っていたにせよ、今までの様なことにはなっていないだろう。

無銘ノイネームは無いだろうから専用機はおそらく白式。

セシリアにラウラに楯無に簪…そしてシャルロットとの関係も大きく変わったものだろう。

簪と鈴の好意は…多分きつと気づくだろう…気づいて欲しい…。

「……なあ。どう思う簪?」

「なんだ藪から棒に」

「もしA C世界に行かずにこの学園に来てたら、俺はお前の好意に気づいてたかな?」

丁度通りがかった箒を呼び止める。  
ふむ、と一拍おいて箒は口を開く。

「どうだろうな。まあ気づかないんじゃないか？」

「ああうん、そう……」

「……そもそも一夏。お前はどこで私の好意に気づいたんだ？」

ふむ、と今度は一夏が腕を組んで考え込む。

考えて考えて……気恥ずかしそうに頬を掻いた。

「マギーに惚れてさ、俺は……まあ好かれようと思ったんだよ。

んでその方法を考えて、アピールをどうしようかと思っていたらさ……

……『ああ、あれは箒の、鈴の、俺へのアピールだったんだな』って」

「大層な皮肉だな。世界を越えて恋を知ればお前は私の想いに気づく。

だけでも、越えないお前は気づくかはわからない」

「……言い訳じみてるのはわかって言うけどさ。

正直キチンと告白しない方も悪いんじゃないかな……」

「そうだな、ある種の運命だったんだろうよ。」

……ISが開発されなければ、もっと違ったのかも知れないがな」

「IS、ね。なあ箒、もう一つ質問するぜ。」

—— ISの普及への異様さ、どう思う？」

一夏が問うたのは先日的一件でラウラから聞いた村橋の件。

ISが世界に馴染む速度が異常なまでに早いという指摘。

それに対して違和感や危機感を抱く者の少なさ。

「そうだな。確かに異様だが……そういうものじゃないのか？」

一夏はラウラと同じく引つかかるものを覚えたようだが、箒はその意見にやや猜疑的であった。

「確かにISが世に定着するまでの速度は異質他ならないだろう。」

だが、それは前例が無かっただけではないのか？」

そうだ。

そも人類史においてISというものは存在すらしていなかったのだ。

人は歴史を繰り返すと言うが、新たなロジックを刻む事だつてあるのだ。

ISが世界にあつたという間に浸透するのが当然だとしても、何もおかしくは無いのである。

「昔と比べたら圧倒的に早いかもしれない。

だけでも、地球の裏側にいる人とも一瞬で通信できる時代で、最新鋭の兵器を凌駕せしめてみたのがISなんだ。

急速に広まり定着する事になんの矛盾がある」

ショルダーフォンが携帯となり、携帯がスマホとなり、今や二十代から三十代の殆どが持つと同じで、文明は発達して広がるものだ。

人類が未だ踏み込めずにいる未知なる『新天地』に乗り込むサンタマリア号としてのISは、いずれ人類になくなくてはならないものになるだろう。

………兵器利用しかされない現状については、あえて2人はノーコメントだが。

「それより一夏。貴様には世界のことよりも憂うべきものがあると思うが？」

「……なんだよ」

「鈴の事だ」

切り出した会話に切り返された本日2度目の「鈴が落ち込んでいたぞ」という切れ味鋭い言刃。ことば

会話の様子にこうも切る切らないという表現があるとまるで会話が斬り合いのようだ。

セシリアのそれが光のように実体なく己を照らし裂いているのなら、箒のそれは職人の髓を凝らした一刀のように一夏の心に突き刺さる。

「人付き合いに疎い私とてわかるんだ、一夏なら尚更のこと知っているだろう」

「原因は俺だ。……どうしろってんだ」

己の無力さに悔やむような、投げやりのような、それを隠すことなくぶつきらばうな態度をとる。

そんな調子の一夏に箒は大きく溜息を吐く。



「女心がわかるぐらいには賢くなった癖に……いや、賢くなったからか。

昔のお前はこつちの気も知らずに優しい言葉や態度を発していた。

その度に私の胸は高鳴ったよ。……きつとそれは、鈴もそうだ」

バカは無敵とどこかで言われたが、ならば賢者は弱点だらけなのだろうか。

実際そうなのだろう。会話と斬り合いとするなら、バカは間合いも読み合いもなく突っ込んでくるし、賢者はじっくりと測るのだから。

しかし本物の斬り合いのように言葉で斬り合って死ぬ事はない。

つまり損得勘定抜きにした感情のバトルにおいてはバカは無敵も同然なのだ。

この場合のバカとはAC世界に行かずに済んだ一夏を指しており、彼は正しく無敵であった。

「……」

そして、賢者弱虫とは今こうやって黙りこくっている、AC世界で名を馳せた一夏だ。

黒い鳥に弱点があるとすれば『ACに乗れば最強というだけ』と言ったところだ。

交渉、設備に開発、勉強……そして恋愛においては彼は最強や無敵という訳にはいかないのだ。

むしろそこまで最強だったらマギーに告白して、玉砕してるだろう。

彼が知る由も無いが、結ばれるルートは無いということを余談として断言する。

「一夏、少しバカになれ。

鈴を助けたいなら、お前が選ぶべきは直接的干渉の排除と裏から手を回して賢く立ち回ることじゃない。

あのどうしようもなく鈍感で朴念仁で、それでいて胸をキュンキュンさせたあの頃の輝きを取り戻してそれでなんとかしろ」

「褒めるか、貶すか、命令するのか、どれなんだよ」

—————

一方その頃、その鈴本人はと言うと——

「火星で発見されたパンドラボックスによつて巻き起こったスカイウォールの惨劇から

十年」

「……ぎし」

「我が国は「東都」「西都」「北都」の三つに分断され、混沌を極めていた」

「……んざし」

「このーままー。歩き続けーてくー」

「簪！」

「ヒヤツホイ、ヒヤホホイ!？」

……なんだ鈴か、驚かせないでよ」

「いや目が逝った状態でブツブツとパソコンと向き合ってたら心配になるわよ」

画面の中に常人には理解不能な文字列を並べる簪は、目の下にクマを浮かべていた。

「そうだね……少し休むよ」

「……」

そしてその文字列を鈴は無意識のうちにジッと見つめる。

「…気になるの、パソそコン？」

「え!? あ、いや、その……」

「取り繕わなくてもいいよ。」

代表候補生だもの……他所様の開発データなんて見たくて堪らないよね」

「あはは……ご、ごめんね！ ちよつと貴女の機体が気になってさ……」

「…全く取り繕えてないよ。織斑からのデータに興味津々……そんな顔してる」

凶星。鈴は顔を硬ばらせる。

鈴の纏う雰囲気が最近更に暗くなった訳が、簪と一夏の専用機共同開発だ。

元々言いふらしている訳でも無いが、はしやく簪の声のデカさになんとなくだが知れ渡る所になっている。

そう、鈴が気になっていたのは簪の機体ではない。

一夏と共に開発しているという事である。

「根暗コミュ障の自覚はあるけどね。」

そんな乙女心をわからないほど、女を捨てた覚えは無いよ」

「……そんなにわかりやすかった？」

「ギンガが水属性だったり、友情バーストやバンバンタンクが発売されなかったりするよりはずっと理解出来るよ。」

「……………早くキバアーツ出せよ」

「……………ハア」

重症だな。簪は直感した。

通常ならキレツキレなツツコミが飛んでくる所に帰って来たのはため息。

あのどこまでも常識人な鈴がその役目を放棄してしまっているのだ。

「……………私は何も事情を知らないんだけどさ、鈴は織斑のことが好きなの？」

好きだとして、告白前なの？ 済なの？ 済なら——」

「多い多い！ 一気に聞きすぎよ」

コミュ障特有の早口で一気にまくし立てる簪は鈴は慌てて制止する。

ツツコマないのなら、ツツコマざるを得ないレベルにボケ倒してやろうと言う目論見は成功したが、代わりになにかを失っている気もする。

具体的にはお嬢様らしい貞淑さとか。

そして鈴は、語り始める。

一夏との馴れ初め、突然の失踪、IS学園に追ってきたこと、その他諸々。

AC世界を知らない簪に合わせてそれとなく誤魔化して——誤魔化しきれなかった。

とはいえ暗部の家に生まれついた簪は、ボカされた部分にはあまり触れずに先へ促した。

「つまり要約すると鈴は告白したけど玉砕して」

「うん」

「織斑とは卒業後には離れ離れになっちゃって」

「うん」

「だから織斑との思い出を形の残るISとして持てるオルコットや、私が羨ましいと」

「…うん」

「面倒くさいね。恋って」

「……………うん」

コーヒーを一口啜り、簪は一息つく。

恋の病は、風邪と似ている。

誰だつてかかりうるし、簡単に治る時もあるれば、重症化したり変なものまで併発する。そして、特効薬はない。

箒シルガリオ・ゴスベルは銀の福音の件でのセシリアの喝にて見事に吹っ切った。

蘭は振り切れた訳ではないが、弾や如月のおかげで拗らせる事はない。

そして鈴は、見事にその症状を悪化させた。

それは恋心だけではない。

対亡国機業ファントムタスクの戦いに、セシリアや一夏と共に参戦できなかつた事。

才能が無いならばと、簪のように創意工夫で足掻く事すら出来ていない事。

頭ではそうでは無いとわかつていても、己を省察する度にどうしても思ってしまう。

「あたし…居る意味あるのかなあ…」

元々、彼女は一夏に会うために無理を言つてこの学園に来たのだ。

しかし会つた上で突きつけられたのは、一夏との永遠の別れと、決して解けぬ死という鍵で閉じられた彼の初恋。

「…鈴」

そんな鈴の事情を、簪は知らない。知る由も無い。しかし、彼女の心境を察する事が出来るぐらいには聡明であった。

「もう織斑に直接それ言うか、殴り合いなよ」

だが気遣いを見せる優しさは持ち合わせてなかった。

ヒーロー番組から思いやりを学んでも活かさないストロングスタイルで鈴に言葉を全力投球する。

「ハアアア!？」

当然ながら、鈴は困惑の声を上げる。

「鳳はさ、私と違って織斑に優しすぎるんだよ。」



いきなり殴りかかるとかは論外だけど、想いを載せて殴り合えばいいんだよ」  
「……まるで、見てきたかのようにいうのね」

「見てきてはいないけど、体感はしているね。」

私は姉さんの真意をまるで理解してなかった事が、姉さんは私の気持ちを無視してしまっていた事をわかりあえた。

私は愚蒙で、姉さんは傲慢で、足りなかったのは会話だったというオチだよ」

中々にバイオレンスな更識姉妹の仲直りの経緯に鈴は絶句する。

どこの青春ドラママダと言いたくなっていたが、実は一夏のアイデアとは一片たりとも思っていない。

「オタクとして断言させてもらうけど……こと恋愛物ラブストーリーにおいて正義に価値はないし、優しきは状況を悪化させるし、善意は裏目にでるものだよ。」

恨んだ怒った喜んだ惚れた腫れた……感情に明確な答えなんて無いんだから、後悔がないように言い切るしかないと思うな」

「……」

鈴は黙る。黙りこくってしまふ。

沈黙の中で簪はアイマスクを被り、毛布を羽織った。

「ま、無知故に酷い事言っちゃうかもしれないけどさ。

……それでもよければ、私は鳳のメル友として味方でい続けるよ。

……グウ」

さつき言った言葉を実践するように、心の底から言いたいことを言い切って簪は夢の世界へと旅立つ。

疲労もあつてかすぐに熟睡し、「ISの上にIS纏えないかな……」と二重の意味での寝言をほざいた。

「あかし、は……」

どろり

コールタールのような感情が、鈴の心に湧いた。

## 08-15 地下基地襲撃ミッション

『またね、ー。今度は研究員の人に迷惑かけちゃダメよ』

——行かないでくれ。

『逃げて……。私、もうダメみたいだから……』

——死なないでくれ。

『緊急ニュースです！ 現在日本に向かって各国からミサイルが……』

『ですから、この補償金と引き換えに白騎士事件の顛末を口外しないと……』

——どうして、君がそんな目に合わなければならぬんだ。

——どうして、君の死を悼むことすら許されないんだ。



現在楯無はパイロットと話すために操縦室に行っており、一夏とセシリアは窓から風景を眺めることぐらいいしかやることがなかった。

そもそもこうやっている理由は、その品川のミッションで村橋から得られた『ポイント〇〇—98—369—52』の情報である。

それは、〇〇国のとある座標を示しており、簡易調査にて本来ない筈の建造物があることが確認された。

IS学園は亡国機業フアントムタスクと関連する緊急性が高い事案と判断し、独自に調査する事を決定。

そこで召集されたのが一度亡国機業フアントムタスクと交戦経験のあるヘリ内の3人。

……と、言うわけではなくIS学園として向かうのは一夏と楯無だけの所に、このブリティッシュお嬢様が無理矢理ねじ込んできたのだ。

イギリス政府も半ば投げやりに了承しており、セシリアは命令には忠実なのに厄介事は持つてくるめんどくさい次期代表となっていた。

「……財団さん」

そんなセシリアはポッキーを齧りながら、ふと何かを思い出したように語りかける。

『珍しいね、ブルー・ティアーズ。』

君が僕に話しかけるなんて』

「ええ、まあ。こうやって纏まった時間を取れることもそうありませんでしたし。」

ですので、今ちよつと聞いておきたい事がありますの」

『なんだい？』

「異なる世界同士での渡り歩きとか、別世界の自分が居るのかとか、そう言った具体的なところをばと。」

ほら、別世界と言う割には基本的な物理法則は同じみたいですし」

セシリアが問うたのは、『異世界について』

かつての説明で一夏がIS世界とAC世界を行き来した事は知っているが、その具体的な原理や理論の方を知りたいと言っているのだ。

別に自分を強くするためなどに聞いた訳ではなく、純然たる好奇心である。

死地に飛び込むことに迷いが無かったりするが、これでも彼女は16歳の高校一年生。

この頃流行りの女の子としては、未知の要素に対してワクワクしてしまうのである。

『じゃあ、先ずは並行世界や異世界について説明するよ』

そう言つて、財団はモンキーポッドのホログラムを投影する。

日立の樹や「この木なんの木」と言えばわかりやすいだろうか。

『この木において幹や枝にあたるもの一つ一つが「世界」だと思つて欲しい』

「この木そのものではなく？」

『そう。そしてこの一つの枝から見て、同じ幹から出た枝や幹そのものを指して、並行世界』と呼ぶのだ。

異世界とは違つて、＼イフ＼の形を映し出す…同じ木から生えても、枝の形は異なるようにね』

「んじや、異世界つてのは他の木つて事か？」

『察しがいいね。傭兵』

一夏の相槌を受けて、財団は更にもう一本投影すると、二本をそれぞれ赤と青に染めた。



『赤の木の幹や枝から見て、青の木が“異世界”というわけさ。

……で、世界間移動についてなんだけど。世界を木に例えたのはこれを説明するためさ』

矢印のカーソルが表示されて、赤い木の枝も枝な末端の場所を指差す。

『世界間移動が可能かどうかは幹寄りの太い世界か、枝よりの細い世界かで分かれる。

枝が風に吹かれて揺れても幹は揺れないように、外部からの影響を受けやすいかどうかになるのさ。

僕達が今生きている世界は枝も枝な世界。風が吹けば大きく揺れるからここまで容易く移動できるんだよ。

ちなみに近い場所で育つ木が同じ土壌で育つように、影響を与え合えるほどの近さを持つ I S 世界と A C 世界は同じ物理法則を持つのさ』

影響の受けやすいあまり分岐しない細い世界ほど、他所からの人や物が流れ着きやすく。

源流となる分岐が多い太い世界ほど、影響は受けづらく、流れ着きにくい。

一夏達を知る由も無いメタ的な言い方をしてしまえば、幹となる所謂『原作』には当然転生者や世界移動者等は存在せず。

こういった二次創作といった枝葉にはそれが溢れているというわけだ。

「……つー事はアレか。俺が過ごしたAC世界も、枝中の枝な世界だったってことか」

「別の枝の世界の私は、どんな風になっているのでしょうかね。」

「……もしかしたら、お母様やお父様と過ごしているのかもしれないわね」

「別に世界はISとACのそれだけって訳でもないだろうしな。」

「それらが一切ない世界だってあるだろうし、そこからの迷い人だってきつといるだろう」

「……そうだね。」

「というか君以外にも1人、この世界に異世界からの来訪者がいるんだけど」

「え？」

「え？」

「織斑くん。オルコットさん。そろそろ到着よ、準備して」

「あつ、はい」

財団の突然のカミングアウトに固まった2人は、その詳細を聞く時間もなく着陸態勢に入った。

一方その頃、I S学園。

「眩しい風のなかで♪描くよ君の笑顔♪」

「如月、なんだその歌。聞いた事ないぞ」

「さあ？ 私もどこで知ったか覚えてないわよ。」

「そういえば、織斑くん今日は休みなのかしら」

「叔父は今日、生徒会の仕事で公欠だぞ。」

「……何故かセシリアもそうだが」

「ラウラさんも巻き込まれたアレから2日だというのに、忙しいわね。」

「……んんっ、ふわあ……」

「……眠そうだな」

「ええ、夢見が悪くてね」

「I S学園生徒会長兼ロシア代表、更識楯無。以下2名ただいま到着」  
「ご苦労さまであります。更識ロシア代表」

飛行機から降りた3人を出迎えたのは1人の日本人であった。

歳は一夏達より年上の28歳程で、黒い髪をゴムで束ねた筋肉質な長身美人だ。

「自衛隊一等空士兼日本代表候補、黒金風子くろがねふうこであります。

「これより、更識ロシア代表の指揮下に入ります」

「黒金？」

「はい。黒い黄金と書いて黒金です。…なにか変でしょうか？」

「あ、いえ、どこかで聞いたかと思っただけです。

無所属、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「イギリス次期代表、セシリア・オルコットです。英国の恥にならぬ活躍をさせてもらいますわ」

「よろしくお願いします。織斑無所属、オルコットイギリス次期代表。

一回り以上歳は離れていますが、風子と呼び捨てにしてください。

世界唯一の男性操縦者と前人未到の次世代機保有者に比べれば、一介の代表候補の私  
は格下ですのうで」

そうやってポリポリと頬を搔く彼女が呼ばれた理由は、一夏達の所属にある。

一夏はどこの国にも所属しておらず、セシリアと楯無はそれぞれイギリスとロシアの  
代表。

レゾナンスや品川といった日本の内部で亡国機業ファントムタスクに好き勝手やられた日本政府とし  
ては、日本に所属している者を面子として出さざるを得ず、そこで白羽の矢が立ったの  
が風子という訳だ。

……憲法9条とか大丈夫なのか?と思つた賢明な読者諸君は安心して欲しい。

ここにいる誰もがそう思っているし、絶対めんどくさい事なのでツツコもうとしない  
だけだ。

「風子一等空士、これが今回貴女の機体となる打鉄よ。

武器は近接ブレードにライフル、ミサイル…細かい仕様は移動中に確認してちょうだ

「はい」  
「はっ」

同じ日本の代表候補ならば簪がいるが、彼女は専用機持ちでその機体は再開発中と来た。

繰り返し述べるが、品川の、あの雀荘とビル屋上での戦いからたったの2日後なのだ。とんでもないほど突貫の電撃作戦なので、直ぐさま動ける人材を回されたという訳だ。

その急ごしらえ振りは風子の機体が、IS学園の打鉄を超ピッチで実戦用に仕立てたものというところから察して欲しい。

IS送り込めばどうにかなると思っフアントムタスクているのだろうか。一夏は訝しんだ。

ぶっちやけ風子は『日本政府も亡国機業フアントムタスクに対して手を打っている』という事の実績作りで送り込まれたようなものだ。

そりゃあ、悲観的にもなるというものである。

ちなみに、本来ならば今日は久しぶりの休みだったらしい。

彼氏とのデートが跡形もなく吹き飛んだようだ……南無。

「さて、それじゃあミッションの最終確認をするわよ」

風子が操るジープに乗って荒野を走りながら、最後のブリーフィングが始まる。

「私達のミッションはここから南西に行つたところにある亡国機業フアントムタスクの地下基地の襲撃と制圧よ。」

「このポイントが亡国機業フアントムタスクのものという裏付けは先程飛行機の中にいる時に取れたからそこは心配なくていいわ」

「表立って正面から襲いかかって暴れるのは俺とセシリア……あーいやコードネームだったな。俺と、セシリアテイヤのチーム。」

その隙に入り込んで内部から工作を行うのが風子スチさんと会長レイディのチーム」

「付け加えますと、既に侵入して情報を集めているこちら側の工作員の救助も行う必要があります。」

そこは、戦闘をティアと織斑レイイザン無所属に戦闘を任せる我々の腕の見せ所ですね」

今回のミッションでは互いにコードネームで呼び合うのだが、そんな経験のない一夏は少し戸惑ってしまう。

ちなみにコードネームは一夏が『レイヴン』、セシリアが『ティア』、楯無が『レイディ』、風子が『スチル』とそれぞれの機体名から取られたものになっている。

「IS4機を投入するなんとも贅沢な作戦……ここでの勝敗が、今後の対亡国へのモチベーションに繋がるのは間違いありませんわね」

「本来は3機なのだけどね」

「本来は3機だったんだがな」

「本来は3機と聞いていたのですが……」

「戦いは数ですわ、皆さま」

そんな調子で移動しながら必要事項のチェックをしていく中……



「……！ 来る！」

誰かが叫んで、4人一齐にジープから飛び降りて、一拍遅れて飛来するビームでジープが爆発する。

走行中の車から生身で降りれば大怪我は必至——故に全員、超常の力を持つ鋼の鎧を一瞬で纏う。

「変身！」

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

HEAD: H12 Swallowtail

CORE: C03 Malicious

ARMS: Arm|E28

LEGS: L03 Frequency

R ARM UNIT: AU25 Kalong

L ARM UNIT: AM/SHA|109

SHOULDER UNIT: MURATORI  
mdl. 2

R HUNGER UNIT:AM/RFA-130  
 L HUNGER UNIT:KAGIROI mdl. 1

一夏の専用機体、ダークレイヴン黒い鳥。

セシリアの専用機体、ブルーB・テイアーズ・DINX。ディーネクスト

楯無の専用機体、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女。

風子の借用機体、うちがね打鉄。

それぞれのISを起動した4人は上空に佇む下手人を見据える。

「ありやりやりやく失敗だねこれは」

クルクルと槍回しを行いながら、奇襲の失敗を残念がる桜色の髪の少女。

その身を包む機体は白を基調に赤のラインが入った一見すると騎士のようなISだった。

機体の外見こそ西洋ファンタジーのナイトを彷彿とさせるが、その右手の大型ランスの穂先についたレーザーライフルがいやでも近代兵器だと思いき知らせる。

【システム スキャンモード】

NAME:Don quijote

KE:1125

CE:810

TE:452

RRM UNIT:laser rifle (TE) / lance (KE)

LARM UNIT:shield (KE)

「亡国機業か」  
フアントムタスク

「ビインゴ！ 君達が求めてやまない亡国機業フアントムタスクの一員だよお。」

いやー移動中の所にお見舞いして、天国行きのツアー観光させてあげたかったんだけどなあ」

残念！ と身をクネクネクねらせる女の挙動に特に動じることもなく、一夏は他の3人に声をかける。

「コイツは俺に任せて、みんな先へ。」

ティア、お前とその機体なら強襲ミッションはこなせるはずだ」

その言葉に3人は返事をする事なく了承して、亡国機業地下基地の方へと向かう。

「ジープ：終電無くなっちゃったね」

「おう銃弾出してるから（あの世に）泊まってこいよ」

「そこはウチに泊れよというところじゃなくななくななくなかない？」

「いやお前単純にタイプじゃないし」

3人が彼方に消え、一対一となった2人は高度を合わせて向かい合う。

顔を発情期の牝のような赤らめたものにしたかと思えば、途端に平静としたものに変わったりと千変万化な表情に一夏は内心やや困惑する。

「じゃあ自己紹介タイム行こうぜ！ 答えは聞いてない！」

私はスプリング、この機体はドン・キホーテ。よろしくね」

「……レイヴン、機体は黒い鳥だ。」

茶番はここまでだ。行くぜ！」

「いやん♡ 激しい♡ これから私は女騎士のテンプレであるくっ殺になるのだね」

「生憎テメエはタイプじゃねえんだ、安心して果てる……脳みそピンク女！」

【システム 戦闘モード】

支離滅裂な言動に苛立ちを隠す事なくトリガーを引き、戦いは始まった。

「敵I Sを撃破せよ」

## 08-16 ドン・キホーテ

「あの…本当にレイヴンを置いて来てよかったのでしょうか？」

一夏とスプリングの開戦のゴングが鳴っているだろう頃、ファントムタスク亡国機業地下基地に飛んで向かう風子は口を開く。

「……あら、スチルさん。

そんなに私の親友の実力が信用できないと？」

「い、いえ、そんな事は露程も……。」

ただ、4人で袋叩きにして先に進むという選択肢もあつたと思つただけです」

「袋叩きで消耗する時間で、肝心要の地下基地から逃がしてしまつては元も子もない。

……レイヴンはそう判断して、指揮官の私は非と言わなかつた。それだけよ」

「ですが、先ほどの襲撃は……」

「わかつてるわ。」

全員一気に仕留められれば御の字。そうじゃなくても、最低1人の足は止める。

そういう魂胆だつて言いたいのでしよう?」

「は、」

「……わかつていても、今は一刻も早く進むしかありませんわ。

ISを回して来るということは、そこにあるのは亡国機業ファントムタスクにとって痛手となるもの  
 でしょうから」

「わかりました。……! 前方に敵影多数確認!」

「アレは……スケルトン!」

隊形を組んで飛行する3人の前に大量のスケルトンが立ちはだかる。

親機となるゴーレムの姿が見えない所から、地下基地そのものが擬似コアの役割を果たしていると推測でき、それは目的地付近ということを示していた。

「ティアー!」

【VOLCARISER!】  
ヴォルカライザー

楯無の声にヴォルカライザーを展開コイルする事で応えるセシリア。

セシリアがこのスケルトン達の目を引きつけ、その隙に内部工作の為に楯無と風子は

侵入。

ある程度片付いたら、セシリアも基地に入り当初の役割通り暴れる。

そんな意図が伝わったと判断した楯無は、セシリアを囷に風子と共に地下基地へと侵入する。

【MAG<sup>マ</sup>NI<sup>ニ</sup>UP<sup>ッ</sup>！】

そんな2人を追いかけてしようとしたスケルトンから、セシリアの光弾に撃ち抜かれる。

数多のカメラアイがターゲットをセシリアに絞り、無機質な殺意を向ける。

正しく一対多の、先程までやるかどうかと言われた袋叩きそのもの。

特撮好きの簪曰く。

グルゼオンやスコールは幹部怪人で。

ゴーレムは一般怪人で。

そしてスケルトンは雑魚の戦闘員だ。



それが指す意味などただ一つ。

十で来ようと。百で来ようと。

一騎当千には敵わないという事実のみ。

「さあ、ダンスタイムと行きましょう」

—————

「そおうれ！」

スプリングが槍を突き出せば、その穂先から一筋の光が伸びる。

それを一夏は掠るギリギリで躲して、右手のAU<sup>ヒート</sup>25<sup>マト</sup> Kailon<sup>マシン</sup>g<sup>ガン</sup>の引き金を引く。

『スキャン結果解析終了。』

あの取り付けられたレーザーライフル、リチャージまで長いから一度避ければ暫く心配はないよ』

「オーケー！」

相も変わらず優秀有能で、なおかつ喧しいコア人格から受けた情報を元に立ち回りの方向を固める。

一夏もスプリングも長々と戦っていられる訳ではない。

突入したメンバーを助ける為に、追う為に、お互いに早々に決着をつけて地下基地へと向かわなくてはならないのだ。

「それが黒い鳥かあ。」

一致するのは機体の配色だけ。展開する度に武装と形状を変える単一仕様能力ワンオフ・アビリティ『機体換装』アセンブルを備えた機体。

それでも、スプリングちゃんは技術部側のヒューマンだね。君の機体には興味津々なのだー！」

もつとも、スプリングにそんな気はまるで見られないが。

そんな奇行を繰り返す彼女は、ヒートマシンガンを盾で防いで刺突を繰り返してゆく。

(グルゼオン程速くて重い訳でもなく、ゴールデン・ドーン程特殊な性能を持っている訳でもない)

(『ビーム砲にランスによる刺突。そして片手に備えた盾。』)

言動こそエキセントリックだけど、結構、スタンダードに強いタイプだよ彼女』  
(ちぐはぐなこった。どうせなら、機体名通りに風車を狙つとけてんだ)

心中にて愚痴りつつ、己の首に向かうランスを右に左に、時には  
AM<sup>シ</sup>/SHA<sup>ル</sup>109<sup>ド</sup>を使って捌いて行く。

思えばこの半年で近接武器への対処が随分と上手くなったな。一夏はふとそう思った。

苦手としていたのではないが、戦いというのは基本的には“距離”だ。

拳よりも刀の方が強いように。

刀よりも槍の方が強いように。

槍よりも銃の方が強いように。

遠い場所から攻撃できる方が優位なのは当然で、そんな利点を捨ててまで近接に拘る変態は一夏の知るAC乗りの中では数える程しかいなかった。

いや、もちろん数え切れないほど近接武器の使用者はいたのだろう。

ただ、変態の領域に至る前に死んでいっただけで。

一夏自身も近接武器の覚えはあるが、メインに据えようとは思えない。

それほどまでに距離というのは重要なのだ。

しかしIS世界では少し事情が異なる。

基本的にISの戦場とは“試合”だ。

一対一のタイマンで、決められたフィールド内での勝負。

故に、近接武装の選択も視野に入るのだ。

特に一夏は、この世界最強の近接武器の使い手である千冬に勝つ為に特訓を積んだ。

大部分は対千冬専用のものだったが、そこで身につけたものは、今でなお息づいてい

(まあ最近は亡国の奴らとしか戦ってない気がするん……だがなあ!)

振り回されるスプリングの得物にクロスカウンターの形でブーストチャージを仕掛ける。

「イテーイ! こいつは痛いね。凄く痛い。

機体の変遷に合わせて変わる君の戦い方は、事前に予想を立てておくのは不可能だつてよおしくわかるのかわ!」

「ピーチクパーチクうるせえな……!」

それを左のラウンドシールドで上手く受けたスプリングは、窮地を動力源に口を動かす速度を上げる。

「悪いね☆ でもそうやってやる気を出してくれるなら丁度いい。

シャルウィーダンス。君の本気を見せてみる!」

「上等だ!」

一夏はスプリング目掛けて、ハイブーストで突撃する。

「シャアオツ!!」

無論格好の的だとばかりに、スプリングのランスからビームが放たれる。

「見せてやるよ、特訓の成果を！」

それに対してシールドを持った左手を振りかぶり————一瞬で  
 K A G I R O I m d l . 1 に切り替えて、光芒を切り裂いた。

ラビット・スイッチ  
 高速切替という技術がある。

バススロット  
 大容量拡張領域を使って、通常1〜2秒かかる量子構成をほとんど一瞬で、それも照準を合わせるのと同じに行う高等技能だ。

デユノア社長 シャルロット・デユノア。

フアントムタスク  
亡国機業 マドカ

彼女らが使うこの習得難度の高いテクニックを正式な意味では一夏は会得していないが、使うことは出来る。

それは、黒い鳥の特殊性に由来する。  
ダークレイウン

この機体が戦闘で使用できる武装は大きく分けて5種類。

右腕武装、左腕武装、肩部武装、そして左右それぞれのハンガーに積まれた武装。

オーバードウエポンやブーストチャージ時の膝部盾もあるが、基本はこの5種類である。

そう、つまり一夏が拡張領域パススロットから呼び出す装備などハンガーに積まれたものしかありえないのだ。

最適化するプログラミングをしてやれば、消費エネルギーこそ多くなるが一瞬で展開コールする「似非高速切替」なるものが可能となるのだ。

「うっそお?」

驚愕の色に染まるスプリングの顔に、今度こそブーストチャージをめり込ませる。

「ガイイン！」

「ぶべらっ！」

一夏の猛攻は終わらない。

ヒートマシンガンの銃身で、スプリングの胴体をカチ上げてそのまま連射。

「ぐえー！」

呻き声すら戯けたものなスプリング。

「……おらよー！」

道化のように愉快な訳でもなく、どこまでも不快にふざける彼女に、一夏はその怒りを乗せてレーザーブレードを上段から振り下ろした。



スドオン！

轟音を立てて、スプリングは地面に叩きつけられる。

一夏は銃口を向けて、注意深くその様子を見る。

「フ、フフフ……ククク……へへへ」

もうもうと舞う砂煙の中から響く笑い声。

突風で晴れた地上に座り込むスプリングは、先程までの頭のおかしな雰囲気が消えていた。

仮初の狂気の代わりに纏うは、正気を蝕む真の邪気。思わず鳥肌を立てた一夏は、そのえも知れぬ様子に問いかける。

「……なにがおかしいってんだ。テメエ」

「おかしい？ ああ、そう捉えてしまったのなら悪いな。謝ろう。」

……なあに、あのお方の慧眼に恐れ入ったと同時にもつたいない事をしてるなど思っ

たまでさ。

資料映像で判断するのはいいが、やっぱりこういうのは自分の目と耳で見るに限る。『百聞は一見にしかず』と昔の人はよく言ったものだ」

支離滅裂に移り変わる口調が統一されて、至極飄々真面目な様子を漂わせるスプリングはなにやらウンウンと頷く。

「あのお方？ 誰だそれは？」

「あのお方については、今はまだお前が知る必要はない。

だが……お前がオレに勝ったのは事実だ。なにか景品をくれてやらないとな。

……えーと、そうだ。先ずは一つ、引き止めも妨害もしないから、地下基地には好きに行けばいい」

「……」

ジャコツ

「オイオイ。白旗揚げた相手に銃を向けるなよ。別にさつきまでみたいに戯けてるとい

う訳じゃないんだぞ。

オレが開発者とはもう言ったか？　そういう奴らは全員自分の作品を見せびらかしたくてしょうがないんだ。

あの篠ノ之束も、織斑一夏<sup>前</sup>も、そしてオレ自身も、そこはまるで変わらない」

「……だからなんだ。

確かにAEOSもD—NXも、<sup>ディーネクスト</sup>それでセシリアが活躍してくれるなら俺にとつては最

高だよ」

「そうだろうそうだろう。

是非ともお前さんには、地下基地にあるオレの作品を味わってほしい。

それだけの話だ」

「作品、ね。　いいぜ、存分に拝見してやるよ」

そうやって地下基地に向かおうとする一夏を、スプリングは慌てて引き止める。

「オイオイせっかちだな。　なに、あのお方については話さないが、それ以外でのちよつとしたヒントならあげようと言ってるんだ」

引き止められた一夏は、バイザーの中でため息して、スプリングの言葉に耳を貸す。

「……I Sが元々宇宙開発の為に創り出されたというのは知っているな？」

「……ああ。 制作者である束さんの意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、「兵器」へと転用されたがな」

『白騎士事件』なんて起きればそれは当然だろうけどな。

各国も、そして亡国機業も兵器を前提とした運用をする為に年中頭を捻っている。

だが、亡国機業は宇宙での運用を始めから切り捨てた訳じゃない」

スプリングは右手のランスを天に向かって思い切り突き上げる。

「空……宇宙を見上げてみる。

その高さに至ることが出来れば、お前達が亡国を打ち倒す可能性はグツと上がる」

「それは一体、どういうことだ」

「ここから先はネタバレだ。 これから起きる事と、お前の中の考えを照らし合わせて

答えを出せばいい。

……楽しい宴をありがとう。 チャオ！」

イタリア語で「こんにちは」「さようなら」を意味する挨拶と共に、スプリングは何処かへと飛び去っていった。

「……」

『気になって上を見るのもいいけど、ここは地下基地に急ぐべきじゃないかい？』

「ああ……」

【システム スキャンモード】

財団の言葉を受けて、一夏はブーストをかけて地下基地へと向かった。

—————

「あ痛ててて…最近運動不足だったか…？」

変身を解いたスプリングはお腹をさすりながら満足げに歩く。

ポケットから取り出したパッドは、地下基地内部の様子を映していた。

「レギオルーパーは半分程やられたか…。やっぱり次世代機はなかなかイケるな…」

次作の発明品がセシリア達にやられていることに驚きもせず、むしろ良いデータが取れたとばかりに喜ぶスプリング。

「さて……一夏はどこまで行くかな…？」

レギオルーパーは驚きはしても倒すだろうが…調整中とはいえ “ゴリアテ” は手強いぞ〜♪」

まるで素敵なショーを待ち望んでいるように、スキップしながら彼女は荒野を駆けた。

「しかし、マドカには悪い事をしたなあ……」

—————

『目的地付近です。お疲れ様でした』

「なにカーナビの真似してんだ」

地下基地上部に到着した一夏は、ふざける財団をたしなめて、地面に降り立つ。

「……どこが入り口なのかは一目瞭然だな」

一夏の目線の先には、瓦礫と化したスケルトンと、地面に空いた大穴があった。

『ブルー・ティアーズも派手に乗り込むものだね』

「財団、会ちよ……レイディ達と連絡取れる？」

『ふむ……今は無理だね。電波が届く場所まで行かないと通じない』

財団が注意を促すが早いか、穴の中からそろそろとスケルトンが湧き出る。

『……しかし、ここまでの動きを実現させるなんてね。搭載した脳がよほどいいと見える。』

さて、準備はいいかい？　ここから先は連戦だよ』

ここで立ち止まるわけにはいかない。

そう決意を固めて銃を向ける。

「ああ、行くぜ！」

【システム 戦闘モード】

「地下基地を制圧せよ」



## 08-17 レギオルーパー

『結構潰したね。残りは構わずに行った方がいい』

「ああ」

スケルトンの大軍を歯牙にかける事なく一夏は地下基地内部に侵入する。

未だ潜んでいたスケルトンや、攻撃トラップを壊しながら地下1階、2階、3階。

戦いの余波で床に空いた穴を使って4階、5階と、合流を目指して順調に降りて行く。

『…レイヴン？ 着いたのね。あのISは…』

地下6階に降り立った時、今まで通じなかつた楯無との連絡がつき、一夏はスプリングを退け地下基地に侵攻したと報告する。

「それにしても広いですね…ここは地下何階まであるんですか？」

『先程掴んだ情報曰く、地下30階まであるわよ』

「……それは広い」

『レイヴンは今どこにいるの?』

「地下6階、近くにA606と書かれた部屋があります」

『…! 丁度よかったわ、ルート情報を送信するからその通りに進んでちょうだい」

ピピッ

ヘッドパーツの内部バイザーにマーカーがセットされ、行くべき道が表示される。

『ティアは別のBブロックを調査してるから、Aブロックはレイヴンに任せるわ。オーバー』

それを最後に通信は切れた。

『ふむ…どうやら地下15階から研究エリアで、更に25階から極秘研究を行う箇所みたいだね』

「地下5階の直通エレベーターで20階まで降りて、極秘研究エリアを調査…つてこと

かな」

『だろぅね。そこまでをスルーしていいということとは、アチラもそう判断できるだけの情報を掴めたんだろぅさ』

「やっぱり一流だよな……会……レイディは」

『A C<sup>あっ</sup>世界にいたら、さぞかしよき指導者になっていただろぅね。

さ、確認も終わったし……早く進むとしよう』

「……なんか、このミッションについてはやる気だよなお前」

妙にウキウキとしたテンションの財団に、一夏はハテナマークを浮かべる。

『まあね。僕も科学者さ。他所様の技術には興味が湧く。

ここはそんな技術が詰まった宝箱なのさ。

そういう君だって、あるかないかと言えばあるんだろぅ？』

「当然あるぜ……と、言いたいんだが」

『……だが？』

「地下から、あの嫌な気配がする。

スケルトン達を動かしているのはまた別の、ゴーレムに積まれた疑似コアとは何か

違う、そう……

………凄く、大きい気配が」

敵を蹴散らしながら地下6階から5階に上がり、地下20階までの直通エレベーターに向かう。

当然ながら停止していた為、ドアとゴンドラを破壊して一気に降りる。  
そうして地下20階に着いた一夏は顔ををしかめた。

「更に気配が強くなってる……」

『………僕としては摩訶不思議としか言いようがないんだよね。』

その人と機械の融合に対しての感知能力』

俺だってよくわからない。

そんな叫びをグツと堪え、慎重に歩き出す。

地下6階までとは違い、セシリア達はここに踏み込んではおらず、ここから先の障害

は一夏一人で請け負うことになるからだ。

『……お出ました。気を引き締めていきなよ』

「そつちも、解析トチんなよ」

その言葉と共に銃を抜き、スケルトンの群れを先頭から駆逐する。

【右腕 残弾30%】

撃ち抜き、切り裂き、蹴り潰し、その数をゼロにする。

「いたぞー！」

22階に差し掛かった時、廊下の先から声が響く。

そこには5人の“男”の兵士が、一夏の行く手を阻まんと立っていた。

(勇気があることで…)

当然ながら、一夏という例外を除いてISに対して男性が抗う術は無い。故に手早く殺して進もうと思った一夏の思考はなんらおかしくはない。

——男達が、手元に銃型のアイテムを構えるまでは。

「レギオライズ！」

その言葉と共に光に包まれた男達は、姿を変える。

胸部・腹部・両肩・両腰・両腕・両脚・背部の装甲。

バックパックに装備された翼状のユニット。

身体にピッタリとフィットした漆黒のスーツ。

そう、それはまるで——

「I S……!?!」

-----

「ねえ見た？ あのニュース！」

「見た見た。 一昨日品川の▲●ビルの屋上で起こった謎の怪光と爆発だよね」

「違うよ。 同じ日に雀荘にテロリストが乗り込んで、1人撃ち殺したって方だよ」

「……」

市立高校のとある1教室。

五反田弾はクラスの女子の話を耳に入れて、少し苦い顔をした。

「弾、一昨日は大変なことが起きたみたいだな。」

「確か、I Sが使われたんじゃないかって噂も出てるし」

「数馬……。 ああ、多分それは、噂じゃないぜ。」

「一夏から『この日は品川には絶対寄るな』と連絡されたしな」

「だよなー。……アイツ、なにに巻き込まれてんだろうな」

「ロクでもないのは、確かだろうな」

ハアーと大きく息を吐いて、弾は背を伸ばす。

「元氣ないな。蘭ちゃんか？」

「……そうだよ。アイツも一夏から連絡を受けたからな。」

想い人である一夏が近寄るなど言った品川で危険な事件が起きた。

危険な事件が起こるとわかるぐらい、一夏が危険な場所にいると実感して、落ち込んでんだよ」

兄妹揃ってそっくりだな。

数馬は弾の優しさにそう思う。

「……早く、一夏以外の男性操縦者でも見つからないものかな。」

見つければアイツの負担も軽くなるかもしれないのに」



数馬のそんな願望はある種の形で叶い。

しかしそれは進行形で一夏に牙を剥いていた。

「構え…撃てーい！」

「チツ！」

本来ありえない筈の、男性のISSと思わしきものに驚きながらも、一夏は斉射される弾丸を曲がり角に隠れる形で防ぐ。

【システム スキャンモード】

隠れる際に忘れずにリコンを射出しておき、変身した男達の解析を開始する。

NAME: Legi rooper

KE:200

CE:200

TE:200

ARM UNIT: plasma gun (TE)  
L HUNGER UNIT: blade (KE)

(……レギオルーパー?)

(『スキャン結果分析完了。』

……へえ、これは凄い』)

ヒューー!と口笛を吹く財団。

やはり今日はテンションが高い。

(なんだよ)

(『いやいやいや。君も気づいてるんだろう?』

あの銃には擬似コアが、それも培養された人の脳の内IS展開に必要な分だけ抽出して搭載されている。

その所為か、無人機の遠隔操作機能とP I Cはオミットされてしまっているが、万人が着込めるパワードスーツとしては破格の性能だね』

(……)めん。デカイ方の気配に気を取られてて気づかなかった)

(『ば か だ ね そんなだからアラクネに殺されかけのさ。』

……まあ、肝心の戦闘力は雑魚なんだ。とつとと片付けなよ』

言われて当然の煽りを一身に受けて、一夏はレギオルーパー達を倒す方法を考える。

スプリング戦からの連戦で、右手のヒートマシンガンとライフルの残弾は少なく、手早く仕留めなければならぬ。

(財団、コイツら以外の敵はいるか?)

(『確認できる限りだと、いないね』)

(ならいい……よし)

今は敵がレギオルーパーだけだが、チンタラやっているのは他の奴らも来るだろう。

そう判断して、ヒートマシンガンの一部を分解して内部を露出させる。

仕掛けは重々とはかりにシールドを前面に押し出して、角からレギオルーパー達の前

に姿を表す。

放たれる光弾をシールドで防ぎながら、相手の位置を見極める。

【パージします】

そして右手のヒートマシンガンを放り投げ――

ズ…ドオオオオン!!!

――ラビッド・スイッチもどき似非高速切替で呼び出したライフルで露出部を撃ち抜き、大爆発を起こさせた。

5人中4人は爆発を受けて変身解除。

絶対防御なんて便利なものはない為そのまま死亡した。

そして残った1人は…

ガイイン！

ブーストチャージを喰らい、悲鳴をあげる事なくその命を終えた。

「……ホントに雑魚だったな。まさかコレで死ぬとは」

『絶対防衛は地味に便利だと思いい知るね。』

あ、ブーストチャージした奴の変身アイテムが無事だから回収お願い』

「はいはい……」

【システム 通常モードに移行します】

何故、敵陣たるここで一夏がISを解除したのかというと、黒い鳥の仕様ダークレイヴンが故である。

黒い鳥の単一仕様能力『機体換装』は戦闘中には使えないという珍しいものだ。

バカみたいな容量を誇る『ガレージ』から部品や武装を取っ替え引っ替えして、機体を作り上げるといふ単一仕様能力だが、別に仕舞えるのは武器だけではなくスマホや小説、果ては非常食まで入れておける。

しかし再度述べるが戦闘中には『ガレージ』から引き出したり取り出したりすることは出来ず、何か仕舞う際にはこうやって変身を解除する必要があるのだ。  
 なので手早く量子化を済ませてレギオルーパーの変身アイテム：『レギオトリガー』を『ガレージ』に放り込む。

「変身」

「メインシステム 戦闘モードを起動します」

積み込みが完了すると再び同じアセンに変身する。

粉々に弾けたヒートマシンガンも右手に戻り、ボロボロになっていた左手のシールドも綺麗なものであった。

別に何も、ダイクレイツン黒い鳥の特性はマイナスにばかり働く訳ではない。

『ガレージ』で組み立てて出すという事は、壊れたパーツは直ぐに同じのに交換できるという事。

言うなれば変身する度にコアだけが一緒に別の機体に乗っているようなものだ。

コアに蓄えられているシールドエネルギーまではそうとイかないが、武器の残弾や盾の耐久度を回復可能という利点を、ダイクレイツン黒い鳥は持っていた。

『…各部問題無し。いつでもいけるよ』

「ああ……それにしても」

——是非ともお前さんには、地下基地にあるオレの作品を味わってほしい。

「……心の底から認めるよ。コレは、いい兵器だな」

『AC世界でISは需要無いだろうけど、このレギオールパーは需要高いだろうね』

一夏は相対したレギオールパーの性能に戦慄する。

たしかにその性能はACやISのそれに大きく劣る。

しかしACのようにヘリやトラックで持ち運ばなければいけない訳でも、ISのように操縦者の性別も数も制限される訳では無いというのはかなり大きいのだ。

歩兵がコレを携行していけば、途端に超人の兵士となれるという現実は、これから重くのしかかる事が想定された。

だが、なによりも心配なのは——

「俺は当然として、セシリアや会長も…後多分風子さんもそこは割り切れる。

……箒に簪お嬢様、そして鈴はこいつらを倒せるかな」

命無き無人機ではない、絶対防御で守られてもいない、そんな敵に親しい彼女達が武器を向ける事が出来るかどうかであった。

—————

『敵機確認。いや多いねホント』

それはさて置いて、探索を続行する。

極秘エリアには入らせないとばかりにスケルトンの量も増えるが、その尽くが潰される。

弾切れを恐れてか、やや蹴りとレーザーブレード偏重となつてはいたが、それでも雑魚は一夏の敵ではなかった。



「こつから下に行けるみたいだな」

警邏の機械をガラクタに変えて、ようやくたどり着いた地下25階の入り口。

簡単には壊せない分厚い鉄の扉で閉ざされており、横についたコンソールが限られた者しか入れないという事を語っていた。

『3秒くれるかい? ……はい、ちよちよいのちよいと』

財団は言うが早いか、ドアロックシステムにハッキングを仕掛けてこじ開ける。

伊達や酔狂で三大勢力全てを敵に回した男では無いとよくわかる。

ドアが開くと同時に一夏は鎧の下の肌が、更に強まったあの嫌な感覚を感じる。

「さて…一体何が出るのやら」

ゴクリと唾を飲み込み、一步踏み出した。

「極秘エリアを調査せよ」

## 08-18 黒い雨

カッーン…カッーン…

静寂の中、鋼鉄の脚部装甲が金属製の床と音を立てる。

先程までの戦闘のメロディが嘘のように静かな極秘エリアは、されど一瞬たりとも気を抜く事は許さないナニカを漂わせていた。

『あれ？ おかしいな』

一夏が気を張って周囲を見渡していると、財団が珍しく素つ頓狂な声をあげた。

「どうした、トラブルか財団」

『ミステリアス・レイディから送られた地図とフロア構造が一致しないんだ。』

……ははあ。これは彼女、一杯食わされたな？』

「まあ、極秘エリアの詳細な情報が、通常エリアにある訳無いよね」

楯無のフォローを入れつつ、マップが無いことをどうしようかと話し合う2人。結果として『気になった部屋から見て回ろう』というパワープレイ極まる内容に落ち着いた。

「気になる部屋、いつせーのせで言おうぜ」

『いいよ。じゃあ……』

『「いつせーのーせー！」』

一夏はヒートマシンガンの銃口を向ける事で

財団はバイザー内のマップにマーカーをセットする事で

通路最奥の『クリアランスA以上のみ』と書かれた部屋を、2人同時に指し示した。

「……一応理由聞いていいか？ クリアランス以外で」

『あの部屋から一つ。ISコアの反応がある。』

『そういう君は？』

「……あの部屋から、無人機達に感じたあの嫌な感覚が沢山する」

『あの部屋から擬似コアの反応はしないけどね。』

……その感覚。さっき言ってたデカい奴かい？』

「いや……そいつじゃない」

視線をずらして床を、その下を、一夏はジッと見つめる。

「デカい奴はもつと奥、ずーつと下の方にいる」

—————

「よう。待ちくたびれたぜ一夏」

どんなセキュリティも財団の手にかかれば10秒以内で消えて無くなる。

そんな文明的に野蛮な開錠を行い、部屋に入った一夏を出迎えたのは1人の女だった。

「……スプリング」

「お前さんなら必ずここまで到達するだろうと思ってたが、タイムは予想以上に良い。

まさかレギオルーパー4体を一網打尽にするとはな。

しかも、傷ついた盾も爆散したその銃も再変身したら無傷で手元にあるというオマケ付きだ」

紺のセーターと黒いスカートの上に白衣を纏い、ISのバイザーではなく茶縁眼鏡をかけたスプリングがそこにいた。

机の1つに腰掛けて、足をブラブラと揺らしている。

「どうだ？ オレの作品はなかなかだったろ？」

「……皮肉抜きで最高だよ。」

あのレギオルーパーってヤツが世に出回れば……ISは希代の兵器では無く、一つのカテゴリりに落ちる」

戦車や戦闘機といった既存の兵器に対して、ISが「一騎当万」とするならレギオルーパーは「一騎当十」と言える。

スケルトンよりは高いが、ゴーレムより低い戦闘力は、個として見るならISにとって脅威ではない。

しかし、レギオルーパーにはISには無い『量産性』がある。

操縦者を選ぶ事なく、その数が限られる事もない、そして数の利をとればISを討ち取れるかもしれない。

そんなレギオルーパーが今後の軍事に対して与える影響は多大なものと思出来た。

「そうか、お褒めに預かり誠に光栄だ。

……監視カメラで見てたんだが、お前さん、一直線にコッチに来たな。

なにか訳でもあるのか？」

「2つある」

「ほう？」

「1つは、この部屋からお前のIS……ドン・キホーテの反応があったから。

そしてもう1つは……変な感覚が、この部屋から大量に感じたからだ」

“変な感覚が”

“大量に”

一夏の言葉に目をパチクリさせたスプリングは徐々に肩を震わせる。抑えきれないとばかりに笑いが口から溢れ、目元には涙が浮かんでいた。

「なにがおかしい」

「いや悪い！ 別にバカにはしてないさ。フツ……ハハハハハ！」

むしろ逆で感心しているんだよ。流石だ、感覚でわかるのか！」

ひとしきり笑ったスプリングは、尻の下の机についたキーボードを操作する。

「もしかしてその感覚は、正確に言うならこの部屋の『壁』からしていないか？

なら正解だ……！！ ご褒美に見せてやるよ！」

エンターキーを押すと壁のプレートが一枚一枚と下がっていく。

中から出てきたのは直径1メートル、高さ2メートル程のガラスの筒。

何本もあるそれは壁があつた場所にズラリと並んでいた。

中には太ももから先と二の腕から先が無い女性が液体に浮かんでおり、その頭部から露出した脳味噌は幾多ものコードに繋がれていた。

脳が露出しているので髪は一切無いが、その顔立ちは一夏には覚えがあった。

「千冬姉…!？」

死体のように瞳孔が開き、屍のように生氣は無く、されどもその面持ちは紛れもなく一夏の姉『織斑千冬』であった。

「ISを使うにあたり、1番最適な遺伝子を持つているのは誰だと思う？」

……織斑千冬だ。ブリュンヒルデのDNAはISを扱うためにあるといっても過言じゃあない。

もしかしたら逆で、開発者の篠ノ之束の方から千冬のそれに合わせたのかもしれないがな」

「……千冬姉の遺伝子から作ったクローンから腕と脚を剪定して培養。

コードを使って戦闘用に教育して、出来たものをゴーレムに搭載。

……これらは全て、教育中の脳味噌って事か」

「ビンゴ。察しがいい奴は好きだぜオレは」

「俺はお前が大嫌いだよ。」



……怖気が走るぜ、まさか俺まであるとは言わねえよな？」

「言わねえよ。同じ父と母から生まれても、お前と千冬は決定的に違う」

今すぐにでも銃を乱射して、スプリングも千冬姉もどきもぶっ壊してやりたい。

そんな衝動を抑える一夏の脳裏に、ある言葉がよぎった。

(……「カルティベイター」、そして「ファンタズマ・ビーイング」)

AC世界の人類が生んだ、世界を破滅に導く罪。

細部は違うが概要は似たそれを思い出し、世界や技術レベルが変わろうと人類は同じ罪を犯すのだと確信した。

「M……織斑マドカもそれって事か」

「いい直感だ。だが、少し不正解だ。」

Mが生み出された経緯は『こちらの意に従う織斑千冬の製造』でな、兵器運用も兼ねてはいるが織斑千冬の遺伝子のデータ収集も目的の内だ」

「……その割には、随分と好き勝手な行動しているみたいだな」

『織斑一夏よりも絶対的に優れた自分の方が織斑千冬の家族に相応しいし、それが正しい』

嘗てアイツが語っていたオリジナルの織斑千冬への執着だが、正直兵器としては厄介この上ないな」

「ザマアみさせだ」

「その殺意が主に向くのはお前だがな」

ジャコツ

銃口を向けて返事を返し、戦闘態勢に移る一夏。

最早この部屋には用はない。

手早くもう一度スプリングを片付けて調査を続行するだけだ。

ISを展開する暇を与えずに銃弾を放つ。

バチイ！

しかし、部屋の中央に貼られた電磁バリアに阻まれ地面に落ちる。

「相変わらずせっつかちだな。オレはお前と戦う気はないぞ。

その証拠に、ホラよ」

スプリングは飄々とした態度を崩す事なく、白衣のポケットからUSBメモリを取り出して、一夏に投げる。

それをキャッチした一夏は、ジロリとバイザーの中からスプリングを睨め付ける。

「コレは……？」

「この研究データ全部……というには容量が足りないから、このクローン達の製造、培養、教育法の簡単なさわりのオレが纏めたものだ」

「……悪趣味だな。

千冬姉の人権が心配になるぜ」

「わかってないようだな。

お前は双子を同じ人間だと言うのか？ 人知れず生まれた双子が、人体実験されてい

る。

たったそれだけの話だけで、お前やましてや織斑千冬が口を出すことでもないんだ  
「よ」

清々しいまでの暴論に、一夏はハンガーからレーザーブレードを取り出す。

電磁バリアを切り裂いて、スプリングを殺す算段を頭の中で整えていく。

決別こそしたが一夏は元々シスコンで、姉に危害を加える奴に持つ慈悲は無かった。

「おおこわいこわい。」

じゃあ、オレは先に30階に向かつてるぜ。チャオ！」

その殺意を受けてスプリングは部屋から出て行く。

「……チツ」

調査と殺害。

どちらを優先すべきかは、一夏はよくわかっていた。

「最奥部に到達…警備システムも沈黙させましたわ！」

一方その頃、Bブロックの制圧に当たっていたセシリアは、最奥部の巨大なモニタールームで良い汗かいたとばかりに誇らしげに胸を張る。

「凄い…アレだけの数を物ともせず…」

近くには感心した様子の風子がおり、彼女達の近くにはスケルトンの残骸が転がっていた。

「あら、スチルも凄まじかったですわよ。

あの一刀にて万物を斬る剣技。舞台もかくやな大立ち回り。

日本には相手の首をもいで投げたという女武将がいたらしいですが、それに勝る侍  
“振りでしたわ”

「それは褒め過ぎでありますよ……」

ティアのあの優美な二刀流は、私の窮地を救ってくれたじゃないですか。

……正直、情けないです。年長として、引つ張っていくべきなのに……この体たらく等

……」

「別に恥じる必要はありませんわよ。

私のBフルーティアーズ・Dディーネクスト—Nxは、私専用で、私が使うことだけを考えて作られたもの。

スチルの打鉄は学園の教材用のものを、実戦用に突貫改修したもの。

この雲泥の差がある機体で、置いていかれる事なく任務を遂行出来ているのは、貴女の実力が高い事実に他なりませんわ」

「……ありがとうございます。そう言ってもらえるのなら、嬉しいであります。

それにしても、こんなものが開発されていたとは」

風子は手の中のレギオトリガーを食い入る様に見つめる。

「携行可能な簡易IS。

男でも纏える性別を選ばない仕様。

ISに劣りこそすれ、既存の兵器を超えた性能。

………悔しいですが、流石と言う他ありませんわ

「これが亡国機業……」  
フアントムタスク

世界の裏で暗躍する闇の組織……」

「今までは襲撃を撃退する形でしか関わりませんでした……こうやって攻め込んで見ると、見えなかつた闇ブラッックが見えてきますわね」

己に課せられた任務は終わり。

周囲に敵や防衛システムは無く。

なのでセシリアと風子の2人は指揮官である楯無をコア・ネットワーク通信で呼び出ししながら長々と雑談に興じる。

『こちらレイディ。 スチル、ティア、要件はなにかしら？』

それにしてもこの基地内、電波が通じにくいにも程がある。

そう2人が思い始めてきた頃、ようやく電波が繋がった。

「こちらスチル。 Bブロックの制圧とデータ収集完了しました」

『了解。 ルート情報を送るので、それに従ってスチルは私と合流。

ティアはAブロックに向かったレイヴンの援護に向かってちょうだい』

「了解……いえ、少しお待ちになってくださいまし」

通話を切ろうとした時、セシリアから制止の言葉が入る。

セシリアが見つめる方向に風子も注意を向ければ、打鉄のハイパーセンサーはISSコアの反応を映した。

そのシグナルは味方である黒い鳥ダークレイヴンでも霧纏ミステリアスの淑女レイディでもない。

「……敵機と思われるISSの反応を確認」

『了解。 脱出と存命を第一に行動せよ。 オーバー』

通信は終わり、2人は反応の方をジッと見つめる。

プシュッと気圧差によって空気が入り込む音と同時にドアが開き、1人の女がヒールを鳴らして2人の前に立つ。

「よお、初めましてだな」



「貴女は確か……」

その女の顔に、セシリアは心当たりがあつた。  
文化祭襲撃事件の夜。

病室のベッドの上で、一夏から見せられたあの映像。

その中で、蜘蛛の I S 『アラクネ』を動かしていた、一夏に隻腕にされたあの女――

「ファントムタスク亡国機業の……オータム！」

「ヒヒヒ……なんだよ。私を知ってんのかよセシリア・オルコット……」

いや……知っててもおかしくねえよな。あのクソ野郎の肉便器なんだからよオ……」

そこに立っていたのは黒のフォーマルスーツ、手袋、ハイヒールに身を包んだオータムであつた。

下品な物言いと共に両腕を組んで、クククと嗤う。

「一夏さんと私は親友で、そんな爛れた仲では……!？」

……左手が、左腕がある？ 一夏さんが吹き飛ばした筈なのに!」

あまりの無礼な発言にセシリアは顔を歪めて、そしてオータムの腕に気づいて驚愕の色に染める。

そう、文化祭の時、一夏がISの銃を使って潰した左腕が存在しているのだ。

セシリアが知る限り、千切れてから1ヶ月ちよつとしか経っていないこの短期間で、あそこまで精密に動く義手を取り付けるなどありえない事だった。

その事実にはセシリアが驚くと、オータムはその口角を邪悪に上げる。

「これが私の新しい左腕だ。 どうだ、結構イカしてんだろ」

「……ええ、本当に技術だけは認めざるを得ません……わねエー!」

【VOL<sup>ヴォ</sup>LCAR<sup>ルカ</sup>ISER<sup>ライザー</sup>!】

拳銃の早撃ち。正しくそのスタイルで銃を召喚して狙い撃つ。

無人機に男性操縦者、代表候補生として学んだ『あり得ない事』はこの半年で容赦無

く崩された彼女は、『あり得ない事』に驚きはしても『そういうものか』と受け止めるぐらいには出来上がっていた。

だからこそ、こうやって不意打ちの光弾を見舞わんと放つ。

(さて…どうでる…?)

とはいえ、それはオータムが防ぐ事前提で放っている。

ISで防ぐのならどう防ぐのかを見て。

生身で避けるのならそのまま追撃を。

当たって死ぬなら、まあそれでよし。

「ふん…」

そんな思考で注意深く様子を見守れば、オータムは左腕の義手を突き出し――

「ハアッ！」

その掌から光弾を放ち、セシリアのそれを誘爆させた。

「……どこの宇宙海賊ですよ。貴女は……」

「義手はレギオルーパーと同じ技術が使われててな。疑似コアが搭載されている。」

「プラズマ砲とガトリングを内蔵してあるし、なんならこれ自体をミサイルとして飛ばす事も出来る代物だ」

タラリと冷や汗を流すセシリアと風子を満足そうに見つめて、オータムは更にポケットから黒のレッグバンドを取り出す。

「オイオイ、こんな程度でビビってちゃ困るぜ！

コイツが何かわかるか！ わかるよなあ！」

「それは……ドイツの……!？」

オータムが掲げるそれは、セシリアにとつてオータムの顔と同じく見覚えのあるものであり、時期としてはオータムよりずっと前に知ったものだった。

「起動しろ……黒シユヴァルツエア・レーゲン い 雨!!」

現れたのは漆黒。

左肩に装備された大型実弾砲に、両腕の甲から伸びるプラズマ手刀。

その名はシユヴァルツエア・レーゲン。

全ての記録から抹消された少女——ラウラ・ボーデヴィツヒの愛機であった。

「スチル。私が前衛を努めます、貴女はやれると思っただけやっつけてください!」

「了解! スチル、これより交戦を開始します!」

「無駄話は済んだかあ? おら……とつとつとこいよお!」

オータムが叫び、ゴーレムが3体召喚され、セシリアと風子は武器を構える。

「さあ……ダンスタイムと行きましょう!」

## 08-19 黒金の刃

閃光、火花、スパーク。

機材が粉塵となり、壁は剥がれて粉微塵にされ、床は砕かれ中を露出する。

セシリア、風子、そしてオータム。

<sup>ブルー</sup>B ティアーズ・DデーネクストーN X、打鉄、そしてシユヴァルツエア・レーゲン。

そこにゴーレムと、ゴーレムによって呼び出コールされたスケルトンが加わって、モニタールームは煌びやかな地獄変と化していた。

「オラオラどうしたア！ 次世代機つてのもそんな程度なのかよ、ヒャーハハハハハ!!!」  
ドイツの第三世代機『シユヴァルツエア・レーゲン』の最大の特徴は、

アクティブ・イナード・キャンセラ

A I C と呼ばれる兵装だ。

物体の慣性を停止させる事で防御と拘束を同時に行うそれは、実体なき光学兵器は防げず、一度に停止させられるのは1つの対象のみという2つの弱点を持っている。

【FLAME UP!】

「撃ち抜け!」

前者の光学兵器はセシリアが持ち合わせており、主にオータムの相手をするのは当然彼女であった。

そして後者の弱点は、一見すると2人いるのだから簡単に突けそうに思えるが、そうは問屋が卸さない。

「おらゴーレム! チンタラしてんじゃねえよカス!」

汚い言葉を吐き続けるオータムの指示は中々の確で、4機のゴーレムと20機のスケルトンの連係は見事に2人を分断し続ける。

加えて、幾らモニタールームが体育館程広くても、屋内は屋内。

捕まれば即集中砲火の鬼ごっこを強制されるセシリアと風子の顔色はあまり良くなかった。

(あの時…ラウラさんとの戦いでは完全に人読みで勝つてましたしねえ)

かつて一夏とセシリアはシュヴァルツエア・レーゲンを倒した事がある。

しかしそれは、“シュヴァルツエア・レーゲン”ではなく“ラウラ・ボーデヴィツヒ”の弱点を突く形での勝利だ。

目の前のオータムにはなんの役にも立たない。

そう判断したセシリアはならばどうすると考える。

(風子さんは…まあ流石に無人機に苦戦はしてませんわね。

……そもそも、私達がとるべき行動はなんでしょう?)

指揮官である楯無の指示である『脱出と存命を第一に行動せよ』に則るのなら、この場合のセシリア達の勝利プランは2つ。



1つは、オータムも無人機もぶっ倒してしまう『殺られる前に殺れ』プラン。  
もう1つは、隙を見て逃げ出し楯無と合流する『いのちはだいじに』プラン。

【MAGNI UP!】

チクタクと悩んで、セシリアが選んだのは『殺られる前に殺れ』プランであった。

ここは敵側のホームグラウンドで、屋内ではAICが更に厄介になる事を考えれば、今の内に倒してしまおうというのは間違いでなかった。

「ハアアア!」

豪気と共に放たれる翡翠色の光弾群。

それらにぐにやりと曲りくねり、オータムを包囲しながら襲いかかる。

(よし、当たる……!)

【SLASH RISE】

着弾を確信して、セシリアはヴォルカライザーをソードモードに変形させる。

「ヒヒツ……ぎあんねえんでしたア！」

ここで一つ、話をしよう。

光を曲げる偏光制御フレキシブルの使い手は世界にセシリアとマドカの2人しかいないのだ。

それが指す意味は唯一つ。

マドカと同じ亡国機業所ファンタムタスク属であるオータムは、対偏光制御フレキシブルの手段を持っていてもおかしくないという事だ。

オータムはその整った顔に凶暴な笑みを浮かべ、ISを纏った義手の左腕を横に薙ぎ払った。

轟ッ！

瞬間、不可視の衝撃波が吹き荒れる。

それは光弾を全てかき消し、消してなお余るエネルギーでセシリアを襲う。

「くう……！　今、のは……」

「クツフー！　なにがなんだかわからねえって顔だなオイ。いいぜ、機嫌もいいから教えてやるよ。」

私の左腕に搭載された擬似コアが、シユヴァルツェア・レーゲン黒い雨のコアとリンクして、衝撃波を生み出しているんだよ」

「A I Cの特種遠隔制御……!?　インチキもいい加減になさいな……」

「インチキ……?　オイオイ、そりゃこつちのセリフだ。」

インチキの塊みてえな次世代機乗っついてほざいてんじやねえよ。

使いこなせないなら私によこせや……。使つてやるからよオ！」

レーゲンの大口径カノンを横つ跳びで避けたセシリアに、オータムは絶え間なく不可視の衝撃波を放っていく。

衝撃波でメインモニターが切断され、椅子は床ごと陥没し、スケルトンが巻き添えでぺちやんこに潰される。

「くっ！」

ブルー  
B ティアーズ・D—N Xと黒い 雨を総合的に比較すれば、戦闘力が高いのはB  
ティアーズ・D—N Xの方だろう。  
ブルー  
ブルー

だが、それでも苦戦してるのはB ティアーズ・D—N Xに乗るセシリア。

地形、連係、仲間の数：様々な要因が絡まった状況をどう打ち砕くべきかを、苦い顔で考えていた。

『ティア、私に考えがあります』

「スチル？」

そんな中、風子からコア・ネットワーク通信が入る。

先程スケルトンが巻き添えになった事により余裕も出来たようだ。

「……わかりましたわ。今の私に状況の打開策は思いつきませんし、乗りましょう。

それで、私はなにを？」

『敵機を私の方に誘導してください。』

仕留める方法はあるので、誘導したら雑魚の相手を頼むであります」

「攻撃対象を入れ替えるという訳ですか。ですが、大丈夫なのですか？」

貴女の武器はライフルにミサイルにブレード…相手にとつては格好の的ですわよ」

AICの弱点として『光学兵器は防げない』とあつたが、裏を返せばそれ以外は防げるという事だ。

そして風子が持つ武器のいずれもがそれ以外に該当する為、セシリアの心配は当然のものだった。

そんなセシリアに風子は力強く返す。

「大丈夫であります。斬る瞬間さえくだされば…斬ってみせます！」

ならばよし。

最早何も疑うものは無いと、無言で肯定したセシリアは、ヴォルカライザーのナックルガードを2回スライドする。

【IGNITION TUNE!】

刀身にエネルギーが迸り、解放の時を今か今かと大気を焼く音で問い続ける。

「そう簡単にやれると思ってるのか？ あ？」

無論オータムが黙ってそれを見ている筈も無い。

左手をセシリアに向けて、不可視の衝撃波を放つ。

【BURNING!】

そしてセシリアは、己に向かう衝撃波に向かって相殺する為に——否、オータム頭上の天井目掛けて光刃を飛ばした。

「なんだと!？」

当然迎撃するものと予想していたオータムは驚愕する。

遮るものなく天井に着弾した光刃は、天井を構成する金属類を瓦礫にして落下させ

る。

落下地点は勿論オータム。

ISとて、ここで生き埋めになればどうなるかはわからない。

「チィー！」

オータムが選んだのは回避。

A I Cで防かずに、真横にブーストをかけて降り注ぐ鉄屑を避ける。

彼女がこの選択肢を選んだのもキチンと理由がある。

停止可能な対象が1つなA I Cで防げば、近接戦や非光学兵器の攻撃を許す事になるからだ。

(今のは囧…クソ金髪は私の衝撃波をモロに受けている…)

……もう1人か！)

そして、この天井落下攻撃が本命でないのはオータムも承知。

そんな彼女の予想通りに、風子は刀状の近接ブレードを携え突撃する。

「バアカ…。捕まえてボロボロのゴミ雑巾にしてやるよ！」

醜悪な笑みと共に右手を向ける。それはA I Cを使う合図。

慣性を封じ、動きを止め、命の鼓動を終わらせる“力”が10メートル程先の風子に向かつて伸びる。

「……此ノ一刀 刹那ニテ無ニ至リ」

それに動じることも、躲すこともなく、風子はブレードを水平に構え――

「二閃 狭間ヲ裂キテ空ニ還ル！」

――オータムも、ゴーレムも、スケルトンもない。

そんな“空”を、横一文字に切り裂いた。



「空振り……？」

ズ……

「……え？」

……ガガガガガガガガツツツツ  
!!!

「え、ええーっ!？」

振り抜いた一瞬後、セシリアの眼前で『あり得ない事』が起こった。

剣閃の先にあつたもの全てが両断されてゆくのだ。

巨大モニターは断たれ、ゴーレムは真つ二つになり、スケルトンの首が切り落とされる。

「ガ……ア……？」

そしてセシリア同様何が起こつたのかがわからないまま、オータムは苦悶の呻き声をあげる。

流石IISといったところで、スツパリ裂かれたという訳ではないが、それでも彼女の身体に走る未知の衝撃はあまりにもでかい。

その威力は吹き飛んだオータムがモニターにめり込んだ所から伺える。

「今、のは……？」

風子が、ブレードで、切り裂いた。

そんな事はわかつているが、そんな事に行き着く理屈がまるでわからない。

なにせ風子が使っているのは、セシリアが幾度もなく授業で見てきた学園の打鉄とその近接ブレード。

鈴の専用機『甲龍』<sup>シエンロン</sup>の様に空間に干渉するような真似が出来るISではないのだ。

「今のは私の流派『黒金一刀流』が奥義『絶刀』……。

空間ごと眼前の全てを切り裂く、剣の道の極みであります」

「ええ……」

風子の解説を聞いてセシリアは閉口する。

確かにISにも剣にもそういったカラクリが無いのなら、当然実現せしめたのは操縦者の技術に他ならないが、いくらなんでもこれは信じがたい。

むしろ男性操縦者や無人機の方が、まだ実在を受け入れやすいものである。

戦いというのは強い奴が勝ちやすいだけで、必ず勝てるという訳ではない。

次世代機が苦戦した所を、第2世代がどうにかするということのもなんらおかしなことではない。

それはわかっているても、何か釈然としないものがあつた。

『はい。黒い黄金と書いて黒金です。…なにか変でしょうか?』

『あ、いえ、どこかで聞いたと思っただけです。』

無所属、織斑一夏です。よろしくお願いします』

セシリアはとつくに忘却したが、読者諸兄はミッション開始前のこのやり取りを覚えて  
いるだろうか。

どこで一夏が聞いたのかという点、実は幼少期まで遡る。

嘗て一夏は箒の父『篠ノ之柳韻』りゅういんが開いていた剣道場に通っていたのだが、その時に  
柳韻が一言、こよう漏らしたのである。

『剣の道に何年も身を置いてきたが、  
『黒金』の次代にはまるで敵わないな』

当時の一夏にその真意はわからなかったが、この風景を見る事があれば間違いなく思  
い出して納得するであろう。

そう、『黒金風子』とは日本古来より伝わる『黒金一刀流』の末裔にして、最強の伝承  
者である。

ピシッ…

「…!? スチル、ブレードが…!」

露程もそんな事情を知らないセシリアは、ヒビ割れてボロボロになった打鉄の刀に気づく。

「この奥義…使うと刀が壊れるんですよ。借り物で使う技ではありません。

…ティアアさん、次は貴女の番であります」

「……ええ、雑魚はこのセシ…ンンッ!」

「このティアアにお任せあれ!」

【SHOOT RISE】

申し訳なさそうな風子のブレードがパキンと音を立ててバラバラになるのが先か、それともセシリアが電子音を鳴らしてヴォルカライザーをガンモードに切り替えるのが先か。

ともかく出来た隙につけこまない理由はなく、今度はセシリアが残った無人機達を潰さんと動き始める。

【IGNIUP!】

オータムが指揮する無人機群は、今まで戦ったのとは違い指示がある事前提のプログラミングが為されている。

故にその自動操縦は最低限のロジックパターンに限定されており、オータムが沈黙している今なら唯の木偶と呼べる。

【BOMBERR!】

セシリアは右手でトリガーを引いて、頭上に直径2メートル程の光球を撃つ。

「バァン」

ふよふよと滞空する翡翠色のそれに、左手の指鉄砲を向ければ、光球は花火の様に破

裂し、流星雨の様に降り注ぐ。

流れ星の1つ1つは外れる事なく無人機達を貫き、鋼の身体を動かぬ残骸へと変える。

「グ……ウウウ……！」

全ての無人機が沈黙した頃、混濁したオータムの意識が戻り始める。

正常な判断能力が戻りきるのを待ってやる義理は、セシリアにはない。

【UPPER TUNING!】

「はあああ……！」

駆動音を奏でると同時に、セシリアは腰を落として構えをとる。

右脚に淡いエメラルドカラーのエネルギーが収束し、その勢いを増してゆく。

「はッ！」

背中のスラスターを用いて飛び上がり、空中でモニターに埋まったオータムに狙いを定める。

【IGNITION!!!】

「はああああああ!!!」

セシリアの必殺キック『ヴォルカニックコメット』が無防備なオータム目掛けて突撃する。

「ナメ……てんじゃ……ねえぞ！クソガキがあ——!!!」

激昂して、直前で意識を完全に取り戻したオータムのとった行動は、AICでセシリ



アを止めに行くという、その怒りとは裏腹に理性的なものだった。

「行って！」

無論セシリアもそこは織り込み済み——ビットを一基飛ばして、自分の代わりにA ICに割り込ませる。

「クソがア！」

ならば、とオータムは左手を向けて最大出力で衝撃波を発する。

「はあああ……!!!」

「おおおお……!!!」

莫大なエネルギーが籠ったセシリアのキックと、力を一点に集中したオータムの衝撃波が拮抗する。

しかしその鏢迫り合いは長くはもたない。

蹴り勝てる。セシリアは確信した。

撃ち負ける。オータムは歯噛みした。

「……………なら……………テメエの様にこうするまでだ！」

衝撃波をキツクが突き抜けるその瞬間、オータムは拡張領域パススロットからゴーレムを召喚する。

ゴーレムはセシリアの代わりにA I Cに捕まったビットと同じく、オータムの代わりにキツクを喰らい——

チュドオオオン!!!

主人の代わりに、その命を散らした。

バツ！

爆炎から2つの影が飛び出す。

「やられた……！」

無人機を囷にされた事に悔しげなセシリアは、華麗に着地する。

「クソが……！」

直撃は避けても至近距離に迫った事は変わりなく、オータムはゴロゴロと床を転がる。

しかしてこれにて勝負あり。

オータムが起き上がる前に、2挺の銃と6基のビットの銃口が取り囲んだ。

――

「地下30階へはるばるようこそ、織斑一夏。

着いてきな、この研究所の最高機密にしてオレのお気に入り作品を見せてやるよ」  
そして、視点は再び一夏に移り変わる。

## 08120 ゴリアテ

広いフロアに幾つもの部屋があったこれまでの階層と違い、地下30階は階段から先は唯一直線に廊下が伸びているのみであった。

「地下30階へ、遠路はるばるようこそ。 歓迎するぞ、織斑一夏」

「……スプリング」

それはつまり、このフロアに逃げる場所も隠れる場所もない事を指しており、スプリングとの再会もかなり早いものだった。

「どうだ？ レギオルーパーや擬似コア以外に目ぼしいものは見つかったか？」

床に胡座をかいて、一夏を見上げて、セキュリティシステムを用いて知っている筈の事を敢えて問うスプリング。

「いや。 25階以降のフロアの一室一室を見ていったが、これといったものはなかったな。俺のクローンでもいるかと思っただが」

先程までは煮えたぎる怒りがあつた一夏だが、フロア探索中に冷静さを取り戻し、情報を集める為の会話に興じる。

「そうか。 まあ無理もない、この研究所は培養脳の取り扱いが主な場所だからな。

擬似コアの効率的な量産化やレギオルーパーの様な簡易ISの開発、義手義足の開発もしてゐるんだぞ」

「…義手義足の、開発？」

ピクリ。

漆黒の鎧の下での反応はスプリングは見逃さなかった。

「ISスーツとパワーアシスト機能の応用でな、残念ながら人の温もりや柔らかさは再現出来てないが、精密性と動作性に置いては本物の腕に勝るとも劣らない。」

知つての通りオレ達亡国機業は裏の組織。フアントムタスク 危険な任務で腕を失くす奴なんてゴロゴロいる。お前が撃つた、オータムの様にな。

しかし、義手義足に興味を持つとは――

――腕か脚を失つた、大事な人がいるのか?」

桜色の髪の間から覗く碧眼が、ジイと一夏を見据える。

その瞳に正直に答えるかどうかを1秒考えて、正直を選んだ。

「……そうだな、いたよ。」

今はもういない、左腕を失くした、それで苦しんだ人が」

「ほーう……。確かに腕も脚も無きや不便だからな。」

オータムの奴はつける前はうるさくて敵わなかったよ」

「だけでもういない、死んだんだよ。」

「……スプリング。今度はこっちが質問する番だ」

「オーケイ! なんでも3つ答えよう!」

「じゃあーつめ。マド力を産むために、千冬姉から遺伝子を採取した時期を聞かせろ」

「……ほう」

——そこを突いてきたか。

スプリングは内心だけでなく、その美しい顔も合わせてほくそ笑む。

「レゾナンスでの無人機テロの際、マドカが捨てたコーラのボトルから唾液を採取した。それとさっきの部屋の培養脳の遺伝子を分析・比較した結果、成長促進剤の類は用いられていないという事がわかった」

「……それで？」

「マドカの年齢はどう見積もっても俺と同程度の15から18歳ほど。

産まれたのが千冬姉がブリュンヒルデとなった7年前や、白騎士事件の10年前だと矛盾する。」

つまりお前ら、ISの「あ」の字も無い頃から千冬姉に目をつけていたって事だ。女性エージェントの育成や、IS用部品の製造の様な」

「……ふー」



パチ　パチ　パチ

静寂の通路に、まばらな拍手が響く。

スプリングの両手から放たれる、ぬるい拍手だ。

「よくそこまでたどり着いた。これは素直に賞賛しよう。

しかし、なるほど。村橋の奴はまさかそれを漏らしていたのか…。

加えて比較分析という事は、黒い鳥ダイクレイワンはそんな事が可能、と…」

「何ブツブツ言ってるんだ。質問に答えろ」

「おお、悪い悪い。考え過ぎて忘れちまうところだったぜ。

ま、着いてきな、この研究所の最高機密にしてオレのお気に入りを見せてやる。

質問の答えは…話しながらだ」

よっこらせと、スプリングは大股で立ち上がった。

「しかしマドカの奴…まさかペットボトルから遺伝子を回収されるとはな。いつも自信満々で傲慢な癖に、こうやって付け入られてるじゃないか」

そう言つて先導するスプリングの後ろを、一夏は追いつかない程度にブーストを吹かしてついでに行く。

「それで、質問の答えだが…マドカの年齢はお前と同じ16歳。

言つてしまえば、お前とマドカは二卵性双生児と同じという訳だ」

「やっぱり。ISが生まれる前から、生まれる事前提で動いていたんだな。

2つめの質問だ。どこからそんな指示が出たんだ？ 元最高幹部の村橋が訝しんでいたなら、相当上からの指示だろ？

もしかして、荒野で言つてた「あのお方」か？」

「知らないねえ…いや、冗談抜きで知らないんだ。

この事実だつてオレが興味をもって調べたものだからな。

むしろ当時1歳の赤ん坊なオレが知るわけないだろ？」

「……え？ お前17歳なの？」

「そうだぞ。 なんなら『スプリングお姉ちゃん』と呼んでもいいんだからな」

「誰が呼ぶかよ。 俺の姉は、織斑千冬ただ1人だ。」

……3つめ。 調べたんなら、その指示に対して不審がる奴がいるんじゃないのか？」

「生憎、オレが調べられたのは事実関係のみでな。 当時の証言はこれっぽっちも持っていない」

「……最後に、もう一つ聞かせろ」

「聞きたがり屋だねえ。 だが、わかんないところはキッチンと聞けるのは優秀な生徒の特徴だ。 悪くない。」

いいぞ。 スプリング先生が後一つだけ答えてやろう」

「——どうしてここまで俺に話す」

カツ…

スプリングのヒールの音が止む。

続いて一夏のブースターも火を止める。

「俺の戦闘データが欲しいだけなら、監視カメラの映像でよかつた筈だ。

直接戦いたいと言うなら、荒野の一戦で済んだ筈だ。

なのに何故かお前は、その後も俺の前に現れては会話して、その度に情報を寄越してくる。

なんでだ？ 偽の情報ではないと、本当の事だと、そうわかるからこそわからない」

一夏の問いに、スプリングは何を考えているのかわからない笑みを浮かべる。

質問されてから10秒程経って、ようやく三日月に固定された口を開いた。

「正直に言うとな、荒野で戦うまではオレはお前に情報を渡す気は無かつた。

お前さんの言う通り、襲撃して戦って、後は監視データを持つてスタコラサツサと行く予定だった」

「なら、なんで…」

「実際戦ってみれば、織斑一夏という存在は中々にイける操縦者だったからな。

一言で纏めるなら……オレはお前に一目惚れしたんだ。

女の子の恋ってヤツは、いつだって非合理的で法則性というものはないんだよ」

「……嘘をつくな。どの口で俺に恋してると言ってるんだ」

一夏の観察眼に、嘘として引つかかった場所が指摘される

「バレたか。まあ戦ってみて考えを変えたのは本当だ。

だがそれには、れっきとした動機が2つある」

「2つ?」

「1つは、無人機テロに品川での狙撃、お前もわかってるだろう……亡国機業ファントムタスクは近々大きく

動くとな。

これは、組織の存亡すらかけた一大プロジェクトだな。当然、世界を変えたIS保

持者は警戒しなければいけない」

「つまり、無人機テロは俺達の実力を図る一面もあつたと?」

「そうだ。オレは、このプロジェクトが成功するかどうかは70%セブンティンペーサーティ／30%だと思っ

ている。

……いや、思っていた。どう変わったかを話す気は無いが、お前に情報を渡した方がオレの得になると判断できるぐらいにな」

「……もう一つは？」

「これまでのお前の行動をオレの主観で分析すれば、基本的に鏡の様に動くと思っただけらな。

誰かの依頼を受けない、フラットな織斑一夏は好意には好意を返すし、殺意には殺意を返す。

「こうやって先に情報という借りを作っておけば、お前に頼み事をしやすいからな」  
「フン……わかったような口を。」

「言っとくけど、俺とお前は敵だ。そううまくいくとは思わないよ」

「ちなみに鏡の様と言った根拠を述べてやろうか？」

「単純だ。始めは仲がよろしくなかったセシリアやラウラが敵意をぶつけるのを止めれば、お前もそれに倣った。」

「どうだ？」

「……」

「さあ、着いたぞ」

そう言つて、先程から2人が佇んでいたのは、長く長く伸びる通路の途中。

「…着いたつて…どこに？」

一夏は頭にはてなマークを浮かべる。

周囲に扉は無い、通路の先も見えないし、来た道ももう見えない。

困惑する一夏を他所に、スプリングは手元の携帯端末をテンポよく操作する。

「はい、ポチツとな」

ガコン

音を立てて、目の前の床が開く。

出来た穴の中には明かりが灯っており、壊れた訳では無いと言う事を示している。

「ここから先は、ISだ……ドン・キホーテ！」

狂人の甲冑を纏ったスプリングはピヨンと飛び込み、一夏も慌ててそれを追った。

—————

飛び降りた先にあったのは、縦にも横にも広い空間であった。

床から天井までは50メートル。

横幅や奥行の長さも50メートル。

50×50×50の立方体の空間が、そこには広がっていた。

そして、その真ん中には——巨大な人間が入った透明の装置が鎮座していた。

装置内は液体で充填され、巨人の腹部から下は床の下に埋まっており、幾重ものケールやコードが全身に繋がっている。



「千冬姉……」

そしてその巨人の顔は、あのクローン達と同じく一夏の姉そのもの。

【システム スキャンモード】

（『身長51メートル。 体重1562.5トン。』

もちろんこの大きさとなると自重で崩壊するから、体内の金属関節や制御装置によってその身を保たせているね。

体内の47箇所に擬似コア搭載。 文字通りの心臓部にISコア搭載。

ISコアが全ての擬似コアの親機となり、全ての擬似コアがISコアの伝導機となり、その全身に巨大な装甲『アンチダビデ』を展開するみたいだ」

どこまでもブレずに解析を行う財団の言葉を聞きつつ、どこぞの英霊ゲームの騎士王の様にフリー素材と化した姉の姿に、一夏の心が乾いていく。

「どうだ？ 一目見ての感想は」

「なんかもう……ここまで改造されると怒る気も失せる」

さつきまでのハードシリアスな空気が、一気にシュールギャグのそれになっていくのを感じて一夏はため息を吐く。

ここまでバカバカしい光景にされると、怒りを抱く事もバカみたいに思えてくる。

「そうかい。」

まあいい、コイツの名前は『ゴリアテ』。見ての通り、織斑千冬のクローンの一つだ」

「……一応聞く。なんでこんなもん作った」

「蟻が象に勝てないのはなぜだと思う？ ……大きさだ。」

巨大な生き物はそれだけでアドバンテージを得る。

言わば、ウルトラマンを作り出して操る事を目指したからだ」

「なんでそんな頭良いのか悪いのかわからない計画立ててんだよバカ野郎」

大きさ≡強さ という発想は間違ったものではない。

ゴジラに生身の人間が成す術は無いように、大きいものはそれだけで強い。

故に、発想は間違つてはいない……のだが、正解かというと首を横に振らざるを得ない。

むしろ縦になんぞ振つてたまるか。そもそもI Sが既存のものを超えているのはそのサイズに対しての保持火力と堅牢なる絶対防御のお陰だ。

後者はともかく、前者を捨ててどうする。戦艦でいいだろう。

とはいえ、そんなカオスで煮詰めた様な頭の悪い兵器は、今日の前にキチンと存在する。

現実を現実として受け止めて、財団のスキャン結果を読む。

「……インチキ技術もいい加減にしろよ」

「黒い鳥の能力で解析したか。最も、B ティアーズ・D | N xディーネクストを生んだお前が言えた

事じゃないがな。

それに、ゴリアテは口内の大規模荷電粒子砲と、両の手甲の高温炸薬機の2つしか武装を搭載していない。

未完成なんだよコイツは……永遠に、未完成だ」

「なあ、面倒だからそれだけは避けてくれないか？」

——永遠に未完成——

スプリングのその言葉に、これから何が起こるのかを悟った一夏は、無駄だとわかっていても一応拒否の姿勢をとる。

「オレは誰の指図も受けない。」

どうせこの研究所は終わりだし、そうなった以上コイツも長くて明日までの命だ。

………最期ぐらいは派手に咲かせようじゃないか」

「夏は拒否宣言は、当然のように無視されて——

「????????????????  
「!!!!」

——猛烈な巨人の咆哮が、部屋一面に響き渡った。

破砕音を立ててケースが飛び散り、中の液体が床に波を立てて流れてゆく。

未完成なのは事実なようで、纏う鎧は身体の一部のみ。

床の下に下半身がある故に歩こうという様子は無いが、その双眸は一夏とスプリングを獲物としてしか見ていない。

財団との初邂逅、『へんなの』との戦いを思い出して頭を抱える。

「やっばこうなんのかよ畜生！」

「さあどうする織斑一夏！ オレと共にゴリアテを倒すか！ それとも仲良くペツチャンコになるか！」

「ツザケンな！ 誤射したら肉壁にするからな！」

【システム 戦闘モード】

「はははは！それでいい！」

もう一つニュースを教えてやる。……この研究所は後30分で自爆するぞ」

ノレない気持ちを何とか奮い立たせた一夏の耳に、スプリングの信じたくない事実が入る。

「はあ?! 心中するつもりかよ！」

ファントムタスク  
亡国機業研究所の真の最奥部。

「まあ、可愛い作品に殺されて死ぬなら悪くはないな」

自分の姉そっくりな巨人との戦いを、一夏は全く信頼できない狂人スプリングと共に始めた。

「……いくぞ財団。 さっさとやらないとお陀仏だ」

『ここから安全圏に脱出するまでに最短で15分、余裕を持って20分。』

残り10分も無いけど…大丈夫だよ、きつと。

君ならできるさ』

「どうしてこういう時にデレるんだよ」

『僕もボケとくべきだと思っただよ』

「ゴリアテを撃破せよ」

# 08-21 ジャイアントキリング

ピシッ

「……？」

放課後のI S学園学生寮。

自室でくつろぐ鈴は、部屋に響く音に声を上げた。

「なによ一体……え？」

音の出処は教科書用では無く、服や下着といった生活用品用の鞆の中。何事かと漁ってみれば、夏休みに持ち帰った写真立てがひび割れていた。

その中の写真には鈴自身と弾と蘭……そして一夏が写っている。

それは中学時代、蘭が何かの賞を貰った時に親しい仲間内で撮ったもの――



「一夏……」

なにもしていないのにひび割れた写真と、『生徒会の用』と詳細を教えずに休んだ一夏が無関係とは思えない。

たまらなく不安な気持ちを抑えて、写真を抱きしめた。

Bannon!

「不穏な空気に颯爽登場!

貴女のヒーロー<sup>友達</sup>、更識簪!

そんな時、扉が爆ぜ開いた。

-----

ビー! ビー! ビー!

「これは一体…!?!」

Bブロック最奥部のモニタールーム。

銃とビットでオータムにチェックメイトを告げたセシリアは、部屋中から響くサイレンに目を丸くする。

「このサイレンは…自爆装置が作動してるだど!?!」

「はあ!?!」

オータムの言葉に、更に驚くセシリア。

そんな彼女の様子を見てオータムは衝撃波でビットとセシリアを怯ませる。

「ぐっ!」

「じゃあなあバズレ供…ここにくたばつとけ!」

逃げるオータムを追おうとするが、楯無からの通信が入る。

事態が事態故に、優先順位を1秒で考えて「ああもう!」と通信を取った。

『2人とも無事!? 敵機はどうなっているの?』

「倒したけど逃げられましたわ……」。

それよりこのサイレンは一体何なのですか?」

自爆装置がどうたらと、あちらは言っていましたか……」

『……そのまんまよ。 そのまんまの意味で、自爆するの。』

30分後……いえ、後28分後にはこの研究所は跡形も無く消し飛ぶわ』

「どうせ踏み込まれるなら、相手の操縦者ごとぶっ飛ばしてしまおうということですかね?」

ISコアは、生半な事では壊れませんし後で回収すればいいとかそういう発想で……」

「考えている暇はありませんわよスチルさん。一刻も早く脱出しなければ……」。

レイヴンはもちろんこの事を知っているのですよね?」

『それが……連絡がつかないの』

「え……？」

『さつき通信系統を押さえて、両ブロックの地下30階までの安定した通信を確保したのだけど、レイヴンとは全く繋がらないの！』

焦りと不安が綱交ぜになったその声に、セシリアの脳裏に最悪の光景が浮かぶ。

今から全速力で離脱すれば自分達は助かるだろうが、一夏は高確率で死ぬだろう。

判明しているフロア全てに連絡が通じるようになっても、通話に出ずにいるという事はそういう事なのだ。

「脱出、しましょう」

『ティア……』

「敵地へ乗り込む以上、彼にもその覚悟はあったでしょう。」

「今必要なのは、今やるべき事は逃げる事。……生きる事ですわ」



殺意で構築された災害とは目の前のこれだ。

怪獣映画で勇猛果敢に挑み散らされるパイロットに敬意を送りたい。

今、自分が置かれている立場に一夏はそう思う。

【機体が深刻なダメージを受けています 回避してください】

ゴリアテの武装は口内の荷電粒子砲と、灼熱の手甲の2つ。

その2つを無闇矢鱈に振り回して攻撃する巨人から逃げる一夏は、一刻一刻とタイムリミットが迫るのを感じていた。

財団から告げられた制限時間の最低ラインまでは残り4分。  
後19分でこの研究所は消えて無くなる。

(財団、コイツになにか弱点は無いのかよ！)

(『そんな事言われてもね……僕もあの世界でいくつもの巨大兵器は見てきたけど、あんな巨人に類する物なんてなにも無いよ……』)

ここまでバイオな敵なんて君も見た事は無いだろう？

……バイオ？ あーいや、もしかしたらこれが弱点かも』)

(……え？ それが？)

巨大兵器。

文字の通りに巨大な兵器。



一夏が相手してきた兵器の中で、巨大なものはいくつもあった。

財団との初邂逅。

回転攻撃の前では味方U N A Cは圏以下の価値しかなかった『T o | 6 0 5 A<sup>へん</sup>の』

財団との最終決戦。

謎の緑の粒子を纏い人知を超えた性能で迫ってきたA Cに良く似た機体『N | W G I  
X / v<sup>』</sup>』

主任との初邂逅。

主任という名も知らぬ時期に戦った能天使の名を持つ機体『E X U S I A』

だが、記憶の中の兵器達の中で目の前の巨人を超えるものは1つしかない。

堅牢なる装甲。

重圧なる砲撃。

無限にも等しい物量。

CALPIN WETLAND……こちらでは南アメリカに当たる場所で戦った、最  
 長 部 で 全 長 1. 8 k m に も 及 ぶ 超 巨 大 兵 器  
 『SPIRIT CLASS MOVING FORTRESS』のみだ。

そしてそのいずれもより、目の前のゴリアテはある意味で手強かった。

(ああ、クソ！ 狭い！)

理由は簡単、戦闘領域が余りにも手狭なのだ。

50×50×50の立方体の空間。

縦横に動く分には2500m<sup>2</sup>のその大半はゴリアテの上半身で埋められており、I  
 S特有の機動力が全く活かせない。

なにせ今までの巨大兵器戦では障害物や足場こそありはすれ、基本的には開けた場所

で戦っていたのだ。

四方が壁故に逃げ場も隠れ場もなく、その腕を横に振れば上下に、縦に振れば左右に避けるしか無い。

当然躲せば、そこ目掛けて高出力の荷電粒子砲が飛んで来る。

(臨海学校以来に……自分の死を感じるぜ……)

現にもう2発受けた。次は無い。

次も無ければ、時間も無い。

だけでも、一か八かの作戦はあった。

「……スプリング！」

コア・ネットワーク通信の開放回線オプンチャネルを開いて、一夏と同じく冷や汗と共にゴリアテから逃げるスプリングに呼びかける。

『よお。なんだよ、今忙しいんだがな?』

「一度しか言わねえからよく聞け」

一夏の目の前で怪獣の如き唸り声を上げるゴリアテには大きな弱点があり、一夏もまたそれを見抜いていた。

ズバリ、思考が幼稚なのだ。

ハードがあっても、ソフトが入っておらず、複雑な挙動ができていない。

故に行動の先を読むことや、新しい動きに全く対処できないのだ。

問題なのは、部屋の狭さがその弱点を覆い隠している事だがこれは解決しようもない。

「今から俺が送るタイミングで、指定したポイントにランスのビームを放て」

『……ほう。随分と簡単な作業だな』

「ばーか。この手の相手にまともに勝負してられっか。  
とんち効かせた方の勝ちだ。……行くぜ！」

手短に説明を済ませて、一夏はゴリアテ目掛けてブーストする。

その際、右手にレーザーブレード、左手にシールドを装備するという仕込みを忘れず

????????????????  
|  
!!!!

当然、荷電粒子砲の光が一夏を骨の髄まで滅ぼさんと収束する。

「……これでどうだア！」

破滅の粒子が放たれると同時に、スプリングはランスを突き出し、一夏はレーザーブレードを振るう。

「おぉおぉおぉおー！」

ランスのレーザー、レーザーブレード、シールド。

それらの力をフルに活かして、一夏は荷電粒子砲をギリギリで受け流していく。

(避けちゃダメだ。避ければ腕が飛んでくる…！)

視界を焼き、身体を掠め、直撃程じゃないにしろ装甲を削り続ける。

そんな殺意に対する恐れを、笑って消し飛ばす。

(なんか…懐かしくて、ちよつと楽…し、い、……なア！)

【パージします】

荷電粒子砲が収まると同時に、ラピッドスイッチもどき似非高速切替で呼び出したヒートマシンガンを放り投げる。

「いつけえエエエエエ!!!」

そして同じく展開した右手のライフルで、荷電粒子砲の射出口に入ったヒートマシンガン<sup>ガン</sup>を撃ち抜いた。

「????????????????」  
「!!!??」

レギオールパーの時と同様の即席爆弾に、ゴリアテは口から黒煙を上げて仰け反る。

そして一夏は――

「ほう、なるほど。一寸法師か」

その煙の中、ゴリアテの体内に口から突っ込んだ。

「とつとと潰れる……千冬姉の偽物があああ!!!」

一寸法師。

正しくスプリングが例えた強肉弱食ジャイアントキリングの申し子のように、レーザーブレードとライフ

ルを振るう。

さしものゴリアテも、体内に絶対防御は無く、臓腑の隅から隅までが血を流す噴水装置と化す。

「????????  
 ……  
 ????????

ズウンと重い音を立てて、ゴリアテは後ろ向きに倒れる。

ゴリアテの息の根が止まって少しすれば、死の黒色を血の赤色に変えた一夏がゴリアテの胸元を貫いて飛び出てきた。

「ブラーボー！ よくぞゴリアテを倒したア！」

狂喜と共に拍手を送る一瞬の相棒スクリンゲの言葉を聞き流して、一夏は残り時間を確認する。

「間に合わなかったか……」



爆破まで残り12分。

脱出途中に爆発に巻き込まれる事は確定となった。

—————

「写真立てが割れた……？」

「うん。それでさ、今日は休みのアイツになにかあったんじゃないかなって思ってたさ

……」

「……あー。」

アニメだとよくあるよね、これから死ぬ人の茶碗が割れたりするの」

ビクリ。

簪の「死」というワードに身体を震わせる鈴。

そんな鈴を一瞥して、簪はバッグから一つの指輪を取り出す。

「それは…？」

「ホープウィザードリング。ほら、手を出して」

出された手にホープリングを嵌める。

子供用のサイズのそれは、小柄な鈴にはやや窮屈だった。

「もう一度言うね。それは『ホープウィザードリング』…指輪の魔法使い、仮面ライ  
ダーウィザードの希望だよ」

「…希望」

「前は眠くて酷く乱暴に言っちゃったからね、今言い直すよ。

鈴は悲観的になりすぎだよ。人と人との関係は常に変わるもの。

現に告白そのものはキチンとしたのだから、恋そのものには決着が付いているわけじゃない」

「それは…」

「気持ちつてのはさ、言葉にしてハッキリ伝えないと案外察しにくいものだよ。

……一年ほどしか変わらない姉妹だつて、勘違いと思ひ違いでずーつとすれ違つていた訳だしね」

指輪を嵌めた手を優しく握る。

「もし、織斑に思いをぶつける事が怖いなら…

私が絶対に支えてみせる。最後の最後まで、味方として希望になる」

ふんすと鼻を鳴らして、鈴を見据える簪。

友の支えになりたいと願うその瞳には、爛々と輝く生気があつた。

「簪……」

「さ、カフェで明日からどう織斑と関わるかの作戦会議しよ！

大丈夫。同じ理由で休んでいるお姉ちゃんの写真は無事だから！

ただの偶然だって…織斑は、そう簡単に死ぬ人じゃないでしょ？」

そう言つて鈴の手を引いて、簪は部屋のドアを開ける。

「……ありがとう」

手を引かれる鈴の顔には、この最近あまり出すことのなかった笑みが浮かんでいた。

しかし彼女達は知らない。

織斑一夏と共に送る『明日』など無いという事を。

## 08-22 時限のベルが鳴る

「間に合わなかったか……」

【システム 通常モードに移行します】

どこか諦めたような口振りで、一夏は変身を解除し地べたに座る。

解除した事によって現れたズボンのポケットからミンティアを出して口に放る。

「おーおーおー。」

どうした、そんな投げやりに」

「投げやりにもなるだろ……自爆に巻き込まれて死ぬ事が決定したんだぞ。」

それとも、お前はここから10分以内に安全圏に脱出出来るのか？」

「いや……無理だな」

あっけらかんと言いつつその姿に、フンと鼻を鳴らして一夏は立ち上がる。

どうにもこのスプリングは己の命を勘定に入れない。  
目的さえ出来れば、死んでもいい。ある種で一夏と同類の人間だった。

コードネーム：スプリング

本名：存在しない

そんな彼女が求めているのはただ一つ。  
心に鮮烈に焼きつく“風景”だ。

人が楽しんでいるのを見たい。

人が哀しんでいるのを見たい。

人が怒っているのを見たい。

人が喜んでいるのを見たい。

人が生きているのを見たい。

人が死んでいるのを見たい。

そんな自分が見たい風景のためなら、命だつて投げ出せる様な人間だ。

今回だつて一夏に警戒されながらもここまで連れて来た理由は『ゴリアテが必死に討伐される姿が見たい』という一点に尽きる。

それが叶うのならば、自爆に巻き込まれて死んでもいい。

やりたい事は残っているが、刹那的に見たいものに命を張る悪癖だ。

(同族嫌悪つてこういう事なのかね…)

それを観察眼で見抜いた一夏は自嘲する。

幽霊の正体見たり枯れ尾花。



初めのうちは何を考えているかわからなかったスプリングの事がわかるにつれて、一夏の中で『AC世界にも同様の変態がいたな』という懐かしさと『まあその1人が俺だけど』という嫌悪感が湧いてくる。

まあそれはそれとして。

一夏は沈黙したゴリアテを見上げる。

「改めて見るとデカイな……」。

いつから育てたんだ？ 成長促進剤使っても時間かかるだろ」

その巨体から滴る血を踏んで『うえ』と振り払う一夏を見ながら、スプリングは変身を解除せずに答える。

「16年前だ。まあお前やマドカと同年だな。

実は培養脳を含めたクローンに関するプロジェクト責任者はオレのオヤジでな。

オレがこうやってここの権利を握っていたり、過去について調べられたのはそういう

訳だ」

「へーえ」

一夏とマドカを二卵性の双子と例えられた事を踏まえれば、この女巨人もまた己の姉か妹に当たるのだろうか。

当たって欲しくは無い。少なくとも人間の家族でいて欲しいのだが。

「オレからも質問していいか？」

これまでは一夏が問い、スプリングが答えるという形で会話が行われていたが、今度は逆にスプリングの方から一夏への問いが投げられた。

「ああ、いいぜ。これだけ色々と答えてもらったんだ。

冥土の土産は俺も渡す分で丁度いい」

「……いつまでそうやって、『死を悟った』ふりをしているんだ？」

スプリングはその春の名に相応しくない程に冷たく、  
パネの名に似合わない程固い

視線を向ける。

「オレの目を誤魔化せると思うなよ。お前が生き延びる事を全く疑っていない目をしている事なんてお見通しだ。

言っただろう？ オレはお前に一目惚れしたとな」

そんな冬の氷の様な眼差しを10秒ほど受けた一夏は、大きく深く、ため息を吐いた。

「……その嘘告白やめろ。なんて、嘘をついた俺が言えた事じゃないな。

あーあ。俺はほんつとうに交渉事に向いてねえな！」

自嘲を叫んで、スプリングに向き合う。

「……あるぜ。お前の予想通り、ここから脱出する術を俺は持ち合わせている。  
フロントムタスク

亡国機業のプロジェクトの正体を突き止め、亡国機業を潰すその時まで、俺は死ぬつもりはない」

「……決意表明ありがとう。

んで？ 嘘をついてまでオレから聞きたい事はなんだ？

お前さんの事だ。冥土の土産と称して情報を聞いたらそのままトンスラこくつもりだったんだろ？」

「バレバレかよ。慣れない事はするもんじゃねえな。

ま、いいや……コードネーム“T”、グルゼオンの正体を教えろ」

一夏のその問いに対して、スプリングは誤魔化しではなく疑問の意味で首を傾げる。

「……？ お前も、気づいているんだらう？」

なんでそんなわかりきった事を……？」

「……早く答えろ。

でなきや、俺は脱出にお前について来させねえぞ」

「へいへい。グルゼオン、“T”の正体……いや、この場合は本名って言った方が正しいな。

ヤツの、あの女の名前は——」

五分前の闘争の喧騒が嘘の様に静まり返った空間で、スプリングはその名前を諳んじ

る。

それを聞いた一夏は唯無言で拳を握りしめた。

「………ついてこい、情報料だ。この基地から脱出させてやる。

——変身！」

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

HEAD : HA | 1 1 1

CORE : CA | 2 1 5

ARMS : AA | 1 3 5

LEGS : L2MA | 1 3 1

R ARM U :

L ARM U :

怒りか、悔しさか、哀しさか、緬い交ぜになった感情を押し殺す様に変身する。

「……なんだそりゃ?」

スプリングの疑問符も当然だ。

漆黒の機体は両手に何も持っておらず、代わりに背中にはその姿を覆う程に巨大な『ナニカ』が積まれているのだから。

OVERED WEAPON:GRIND BLADE

「六連超<sup>グラインドブレード</sup>振動突撃剣。俺のとおっておきだ」

【パージします】

一夏の言葉と共に、周囲の空気が一変する。

【不明なユニットが接続されました】

熱い。

とんでもない熱量が、黒い鳥ダークレイヴンから発せられる。

あまりにも絶大な力の波動は、空間そのものを焼き焦がしているようだ。

ISを纏っていないければ、全身の皮膚が放射熱で焼け爛れていただろう。

【システムに深刻な障害が発生しています】

弾け飛んだ左腕部装甲との接続部にグラインドブレードから伸びたアームが接続され、右肩部のチェーンソーの刃に火が灯る。

六基のチェーンソーはバサリと広がる。

それはまるで、燃ゆる鳥が羽ばたく様に。

【直ちに使用を停止してください】

焔の翼は折りたたまれ、束状に連なり回転を始める。  
一回転一回転毎に、周囲に熱気が振りまかる。

大気は熱に悲鳴を上げ、床は耐え切れずに溶け始め、スプリングはその灼熱に目を奪われる。

ドクン

アレが生だ。

猿を人に進めた、叡智と原初の火だ。

ドクン

アレが死だ。

人を灰に還す、破滅と終焉の火だ。

ドクン



ああ、ああ、ああ！

ドクン

なんと美しい！なんと穢らわしい！なんと愚かしい！なんと愛おしい！

ドクン

オレの目に狂いは無かった！ スプリングは今にでも狂乱したかった。

ドクン

胸が高鳴る。なるほど、先程までの嘘告白が本物恋心に変わっていく。

「行くぞ……！」

基地が自爆するまで残り5分。

しかし、この力の前に地下30階の壁は1分も持たない程に脆い。

有り余るエネルギーをブースターに送り込み――

――紅蓮の右腕を掲げ、天井に打ち込んだ。

ギユイイイイン!!!

――

ドゴオオオオン!!!

【システム 通常モードに移行します】

地表を突き破り、勢いそのままに高所に飛び上がった一夏の変身が強制的に解除され

る。

一夏が規格外兵装・六連超振動突撃剣を多用しない理由がここにある。

機体をハックして限界以上のエネルギーを供給するといった理屈を飛ばして述べるなら、使用後に変身解除され6時間に及ぶ起動不可時間が発生してしまうのだ。

その使いづらい性能の為、臨海学校以来使う事もなかったが、その威力は一夏の知る兵器の全てを凌駕するものである。

それはさておき、生身で高所に放り出された一夏は、このままでは当然重力に導かれザクロのように弾けるだろう。

(さて、そろそろ呼びますか…)

(『通信状態良好。いつでもいいよ』)

だが、そうならないと一夏は確信している。

絶対にここで見せ場を持っていくヒーローがいる事を知っている。

「スウ……」

だから叫ぶ。叫ぶ為に息を吸う。

唄うのは、吟じるのは、呼ぶのは、アイツの名前。

高慢で、傲慢で、貪欲で、高貴で、絢爛で、優雅で、美麗で、可憐で、親友で、戦友で、盟友で——

——そんな一生の友の名前を叫ぶ。

「セシリアッ！」

キィィィン……

「承りましたわ！」

大気を裂いて青が飛ぶ。

一夏の声に応えたセシリアは猛スピードで駆けつけると速度を落としてキャッチ。

「あ、今はティアだったな」

「その軽口が叩けるなら大丈夫そうですね。」

ま、貴方が死ぬ訳無いと思ってましたが」

「嘘こけ、目が泳いでるぞ」

日本時間にして18時。

全員の生還が確認された。

ドガアアアアアン!!!

その後、楯無と風子が待つ安全圏に移動した一夏は、自爆する地下基地を眺める。後6時間たつぷり変身できない一夏を除いた3人は、残党に警戒してISを纏ったままだ。

腹に響く轟音。目を焼く閃光。肌に痛い熱気。

それらを浴びながら、スプリングは脱出しただろうか考える。

なにせ、あのイラつく雰囲気も、ISコア反応も周囲にないのだ。気になりもする。

グラインドブレードで掘り進めている時に後ろを振り返る余裕は無く、もしかしたらあの爆炎に吞まれてしまっているのかもしれない。

(それでもいいや)

脱出の手引きはした。生き延びる方法を提示した。

そこで自分からの礼は終わったのだ。従って生きても、従わずに死んでも一夏の知るところでは無い。

お忘れがちだが、この男。命の価値がわかった上で殺すクズである。

「しかし、まあ、貴方の口から聞いていましたが……凄いい威力ですわね、『六連超振動突撃剣』」

「威力に見合うリターンが少ないんだがな…。

いかんせん威力だけが突出し過ぎて、手加減も継戦も出来ないから使いづらい。

強敵との生死無用のタイマンとか、今回みたいなぶつ壊せば後は誰かがフォローしてくれる時しか使えない」

「……ちなみに、AC世界では何回使ったので？」

「ひい、ふう、みい……10から先は覚えてないな」

そんなオーバーキル上等のリスクリターンが釣り合わない代物を、何度も使わなくてはいけない修羅の国っぷりにセシリアは感嘆する。

(風子さんの剣技といい、一夏さんのとっておきといい、まだまだ超える壁は高いですわね)

悪くない。明確な目標は、成長の実感を得やすいからだ。

「はい……はい……え!？」

雑談に興じる2人を他所に、作戦の顛末について連絡をしていた楯無から驚愕の聲が上がる。

「レイヴン、ティア、大変よ！」

………IS学園に、サイレント・ゼフィルスが現れたらしいわ!」  
「なんだって!？」

—————

悲鳴を上げて学園の生徒達が逃げ惑う。

当然だ。

突如降り立ったISが、辺り一帯に<sup>殺意</sup>レーザーを撒き散らしたのだから。



「ほう…鳳鈴ファンリンイン音か」

平穏な放課後を、一気にスクリーマーな時間に変えたマドカの元に2人の少女が立ち  
はだかる。

その内の1人を見て、マドカは口角を上げる。

「アレは、文化祭の時にセシリアを襲っていたISS…!」

茶髪をツインテールに纏めた小柄な少女、鈴。

「確かキャノンボールの日にも現れたっていう…名前は、サイレント・ゼフィルス…」

水色の髪をショートの切り揃えた少女、簪。

カフェでゆつくりと、鈴と一夏の関係修復について話そうとしていた2人は、騒ぎを  
聞きつけてここに駆けつけた。

その2人の内、鈴の方にマドカの瞳が向く。

『あたしの親友に：： なにしてんだああああ  
!!!』

マドカにとって、鈴には斬撃を浴びせられた因縁がある。

鈴にとって、マドカには親友を傷つけられた因縁がある。

だからこそ己に刺さる殺意を理解する。

だからこそ理解できない感情がぶつけられる。

敵に対する殺意もあるが、鈴が現れた事に対しての喜悦の感情が鈴には理解できない。  
い。

「先ずは貴様らか」

「前菜だと思つと、痛い目にあうわよ。  
オードブル

簪、準備できてるわよね？」

「もちろん出来てるよ：：打鉄式式、変身！」

「甲龍！」  
シエンロン

だが、ぶつけられる感情を深く考える時間は無い。  
光と共に、鈴と簪はそれぞれのISを纏う。

「……いくわよ！」

「来い鳳鈴音…甲龍。精々、愉しませてみる」

6時を知らせる鐘が鳴る。それを合図に戦闘が始まった。

しかし彼女達は知らない。

織斑一夏と共に送る『明日』など無いという事を。

# 08-23 その祈りは慟哭

「打鉄式式…変身！」

シエンロン  
「甲龍！」

己のISの名を叫び、変身した2人は目の前のマドカを見据える。

「アイツの実力は本物よ。連携でいくわよ、簪！」

鈴は二振り的大型青竜刀『双天牙月』を両手に構え、

「了解！」

簪は超振動機構内蔵の薙刀『夢現』ゆめうつを両手で構える。

「フン……『インターセプターII』」

戦闘態勢に移った2人に、マドカは装備名を口頭で挙げるといふ初心者用の手段で、金属ブレード『インターセプターII』を両手に展開し挑発する。

ご丁寧に、サイレント・ゼフィルスを始めとしたBT兵器搭載機体の代名詞とも呼べるビットを収納してまでだ。

「……ナメてくれるじゃない！」

その言葉を皮切りにして、鈴は右手の青竜刀で切りかかる。

それに合わせて簪もまた、綺麗な弧を描いて薙刀を振るった。

キーン！

鉄の音を響き渡らせ、二刀流となったマドカは弾き飛ばす。

「はあああああああ!!!」

鈴は青竜刀を振るう。

降るって振るって振るい続ける。

研ぎ澄まされた連携と共に放たれる薙刀の刃も合わさって、剣風が轟と嵐の様に吹き荒ぶ。

しかし、時間と共に激しくなる間断のない攻め手が続いているということは、切り付ける対象が未だに存命しているということの意味している。

マドカは双剣を縦横無尽に駆り、鈴と簪の剣戟を受け止め、いなし、あるいは躲す。バイザーの奥の瞳には聊かの曇りも見出せず、冷淡な表情で2人の攻撃を見切り続けている。

——強い。今までの誰よりもずっと。

これが亡国機業。  
フアントムタスク

自分が相手取ったゴーレム等比較対象にすることすら烏滸がましい存在。

こんな相手を、セシリアは2度も相手取ったというのか。

怖くて怖くてたまらない。

自分自身の存在を真つ向から否定する殺意が臆面も無くぶつけられる。こんな状況を、一夏は何度も味わおうというのか。

これで手加減されているのだから笑えない。

鈴という力は、簪という力は、まるで足元に及んでいない。

それもそのはず。マドカはこの地上において最強と言つても過言ではない操縦者だ。

五角形のレーダーチャートで操縦者の能力を表した時に、特殊能力の部分だけグラフを突き抜けるのがセシリアで、グラフ内で綺麗な五角形を描くのが鈴だとするのなら、マドカのそれはグラフいっぱいには五角形を示す。

要は鈴の上位互換なのだ。器用貧乏を超えた器用万能、『戦闘巧者』こそが彼女の異名に相応しい。

(それでも……！)

勝たなければならぬ。

勝たなければ、明日は無い。

思えば自分には何も無い。

一夏の様に数多の修羅場に裏打ちされた「目」も無い。

簪の様に姉に追いつくその一心で積み上げた「知」も無い。

セシリアの様に格上すら戦かせる天井知らずの「才」も無い。

箒の様にあのコスミックホラー（ノ）から祝福（呪）を受ける「血」も無い。

無い無い尽くしだ。羨むことすら馬鹿らしい。

だから、「心」だけは負けてはいけない。

一夏への未練とはまた違う暗い気持ちを斬撃に乗せる。

——鋼音が響く。

セシリアへの嫉妬とはまた違う暗い気持ちを斬撃に乗せる。

——鋼音が響く。

混濁した名前もつけられない感情を刃に乗せて振り下ろす。

——鋼音が響く。



明日が良きものになるか、悪しきものになるか、それを決めるための意志を込めて青竜刀を振るう。

——鋼音が響く。

幾十幾百の鋼鉄の旋律を奏で、拮抗する戦況。  
それを崩したのは鈴であった。

「喰らいなさいー！」

空間自体に圧力をかけ、衝撃を砲弾にする不可視の衝撃砲『龍砲』を剣閃の雨に混ぜる。

この山や城壁にも等しい防御に剣を振るい続けても、勝機は見いだせないどころか、いずれは剣戟に飽きたマドカに蹴散らされるのがオチだ。

相手がこちらを見くびり加減するのなら、すべき事は悔しがらる事ではなくその慢心を突くこと。その為のタイミングが今だった。

「ぐ……！」

衝撃砲の物理的なダメージに、マドカはタタラを踏んで後退する。

それによって出来た距離は僅か。音速を超えるISからすれば虫の歩みに等しい。

青竜刀と薙刀、2つの切っ先を受け止めた右手のインターセプターが弾き飛ばされる。

さしものマドカも、受け流す事も両手を使う事も無しで2人がかりの斬撃を受ける事は出来ない。

チャンスだ。鈴と簪の思考が同期する。

手数が多く小回りの効く双剣は守勢に回せば城塞の如き防御力を誇るが、それは2振りあつてのもの。

その内、一つでも潰してしまえば防御力は半分以下、文字通り片手落ちだ。

「鈴、決めて！」

左手のインターセプターを簪が抑える。

これでもう、マドカを守るものはない。

鈴は青竜刀を振りかぶる。その剣筋は、外す事は無いだろう。

「フン…温いぞ！」

「ウソ…!?!」

事実鈴の唐竹割りには寸分狂う事なくマドカの正中線を捉えた。

しかしながらその一撃は、弾き飛ばした筈の右手のインターセプターが受け流した。

ラビッドスイッチ  
高速切替。

一夏もどきが使う似非ではない純正の技術を以ってして、一瞬の内に予備の剣を展開コイルしたのだ。

「そら、呆けてる場合か」

マドカは手に持つ二刀で突きを放つ。

鈴と簪は武器で受け、二度三度打ち合い互いに距離を取る。

その距離、数字にして30m程。

IS 同士の戦闘では決して安全圏と呼べないその間合いで、必中の連携が打ち破られた鈴と簪は冷や汗を垂らす。

攻撃が当たらない程速い訳ではない。

しかし、防がれてしまう。

攻撃が効かない程硬い訳ではない。

しかし、躲かれてしまう。

無敵ではないが、倒せる未来が見えないのであれば同じ事だ。

「鈴、このまま同じ手でも埒があかない」

—— わかったわ。前衛は任せて。

鈴の了承を受けて、簪は薙刀をしまい、背中に搭載された2門の連射型荷電粒子砲『春雷』しゅんらいを構えて更に多連装ミサイル『山嵐』の発射準備を整え始める。

「それなりに厄介な連携だな…」

——なら、打鉄そつちの方から潰つぶしてみるか。

左手のインターセプターを、ビームマグナム『スターブレイズmkⅢ』に持ち替えたマドカは、今度はこちらの手番だとばかりに翔ける。

「ぐ、クウー！」

ビームマグナムから紫電を迸らせるマドカの目標は、鈴の後方で攻撃態勢を整える簪。

相手が前衛と後衛に分かれたのなら、後衛を優先して潰すのは当然だが、それにもビットを持ち出さないとこは強者の余裕故か。

「あたしを無視してんじやないわよ！」

そうはさせないと鈴の青竜刀が行く手を阻む。

しかし、振り下ろされた刃は地面を砕くに終わり、それに合わせてインターセプターが甲龍シエンロンの装甲に吸い込まれる。

「いっ……」

怯む鈴を無視して、簪めがけて光の弾丸を放つ。

荷電粒子砲と相殺する紫電の残滓を突っ切りながら、マドカはブレードを振るう。

鈴の青竜刀を受け流す。簪の荷電粒子砲を捌く。

鈴の龍砲を剣で受ける。簪の防御を砕く。

鈴の青竜刀をあしらう。簪を切り裂く。

鈴の龍砲をかわす。簪を撃ち抜く。

二対一を徹底して一対一に持ち込むマドカの技巧に、簪はただ悲鳴をあげる事しか出来ない。

「どうした、動きが鈍っているぞ」

その言葉は嘲笑か愉悦か、マドカは右手のブレードをミスディレクションの素材とし、左手のビームマグナムから3点バーストを放つ。

「がは……あ……」

風前の灯火もかくやな簪は、後ろに跳ぶ事で相対的に衝撃を和らげる事しか出来ない。

空中で体勢を崩し、地面に転がる銀色の機体に、マドカはブレードとビームマグナムをしまい銃剣ライフル『スターブレイカー星を砕く者』をコールド展開。

ラピッドスイッチ高速切替によって取り出されたそれは、マドカの手に収まる前から光の収束を始めており、その急速なチャージは後3秒で最大充填となる。

（あの威力は、マズい！）

打鉄式式のシールドエネルギーは最早ゼロに近いだろう。その状態であのビームを

受ければ最悪命に関わる。

思考と同時に鈴の背面の地面が、大きく抉れ消し飛ぶ。

爆発的加速で倍増させた威力をマドカに振るう。

後方から迫るそれを、マドカは振り返りざまに銃剣の剣部分を用いて、斬撃を虚空へ誘導し、文字通り空を切らせる。

「させないわよー」

無論、渾身の一撃が届かぬ事は織り込み済み。これまでの手練手管が防がれて尚、この一閃が効くと思う程自惚れてはいない。

加速の慣性を用いて、呻き声をあげうずくまる簪と、フルチャージされたライフルの引き金を引くマドカの間に滑り込む。

鈴の真の目的は攻撃ではない。シールドエネルギーの残りに比較的余裕がある自分自身が、避け得ぬ一撃を受ける盾になる事だ。

迫り来る暴虐の光に、青竜刀を構える。

そんな鈴の様子を見て――



「…チツ」

——マドカのバイザーの奥の瞳から熱が消えた。

鈴の目と鼻の先まで迫る光は、マドカの舌打ちと共に偏光制御フレキシブルによりグニヤリと曲がる。

眩しい閃光は、甲龍シエンロンの装甲に限りなく肉薄し、されど一部たりとも掠りもしない軌道を描いて打鉄式式に着弾する。

「ぎやああああ!!!」

機体と操縦者。両者が悲鳴を上げて変身が強制解除される。

フルチャージを受けても五体満足なのは絶対防御の面目故だが、それでも身体に入ったダメージは大きく動く事は叶わない。

「え……? かん……ざし……?」

背後にて倒れゆく簪に、鈴は呆気にとられる。

知っていた。偏光制御（そういうもの）があると知っていた。

聞いていた。セシリアからマドカは偏光制御（そ）を使うと聞いていた。

ならばとるべき手段は防御ではなく攻撃。撃たれる事への対処ではなく、撃たれない様に立ち回るべきであつた。

“どうせ防がれるから”という諦観と、目の前の相手が怖い”という恐怖で無意識のうちに攻めの選択肢を消していた。

そんな後悔を心中で渦巻かせる鈴に、マドカは冷淡な目をバイザー越しに向ける。

「……その程度か、失望したぞ、（ファンリンイン）鳳鈴音」

「なに、を……」

なにを言っているのよ。

口から出る言葉は、途中で止まる。

「セシリア・オルコットが追い抜きたいライバルと語っていたから、文化祭の時では見えなかった“なにか”があるのかと思つたが……」

……興醒めだ。よもや、戦いの最中で己が格下にも拘らず、防戦の選択肢を選ぼうなどという身の程知らず未満のゴミとはな」

ガツン。

殴られた様な衝撃が脳内に響く。

鈴の左手から、双天牙月の一振りがスルリと抜け落ちた。

「フン……おい、更識簪だったか？」

「……ッ！」

最早気にする価値も無いとばかりに、マドカは鈴から簪に視線を移す。

地面にうつ伏せで動けずにいる簪は、僅かに動く顔で睨みつける。

「無様に地に伏せようと戦意だけは陰る事も無いか。そのそいつよりは見所がある。

……生き延びたいなら答える。織斑一夏はどこにいる」

心にも無い面持ちのマドカの問いに、簪は心底不思議そうな顔をしてそして何かを理

解した。

「……いないよ」

「あ？」

「今この学園に織斑はいないし、なら今どこにいるのかも知らないって……言ってるんだよ…」

嘘だと思うなら、私の腹を開いて臓腑を見ればいい…隠し事なんてなにも無いと理解できるよ」

「………ほう、そうか、なら死ね……む？」

死に体の簪にトドメを刺そうとするが、そこに「T」からの通信が入る。

無視しようかと思ったが、簪の発言から優先順位を1秒で考えて通信を取った。

「なんだ「T」、今忙しいのだが」

『なんだじゃないわよエム！ IS学園を襲撃するだなんて…独断専行にも程があるわよ……！』

「独断専行とは人間きが悪いな。これにはれつきとした指令が下っている。」

『……』  
第一、私が上からの命令に逆らえないのはよく知るところだろう？」

マドカは組織には従順でないため、命令違反を起こさないよう体内に監視用ナノマシンが注入されており、いざとなれば遠隔操作でその命を奪われる。

その事を知っているからこそ、マドカの悪びれもしない物言いに、  
“T” は言葉を詰まらせる。

『……誰から下ったのよ、その指令は』

「シーズンのスプリングだ。『織斑一夏との戦闘データを取ってこい。方法は任せるし、その過程の生死諸々は関与しない』とのお達しでな。

織斑一夏は学園から出る事はそう無いだろうと踏んで、こうやって正面から乗り込んでみたが……出てきたのは『ここにはいない』という言葉だけだ」

『スプリング、アイツ……！』

……言っておくけど、その言葉は本当よ。それは私も確認してる。

だから、IS学園でなにかする際には担当者である私に連絡を入れなさいと……』

「その手のお小言は後で聞く、ではな」

『あ、ちよつと、今から…』

“D”の言葉を最後まで聞く事なく切ったマドカは、クルリとライフルを手中で弄ぶ。

こともあろうにこの女、『無人機テロで外出自粛している状況ならいるだろう』というアバウト極まる精神で乗り込んできたのだ。

「だ、そうだ。まあ命が助かったと喜んでおくんだな」

「報連相ぐらい……しつかりしなよ……」

「耳に痛いな。お前達が無謀なら、私は無知だったという訳か。」

謝罪代わりに……更識簪、その鳳鈴音ソイッについて1つ忠告してやる」

ガラにもない。

平然と他人を殺害しようとする性格を自覚しているマドカは内心自嘲する。

それは一夏不在への肩透かし故か、それとも鈴への期待外れ故か。

ともあれ、普段から心の奥底で煮え滾る激情は、今だけはその熱を灼熱のマグマから焼きだてのトースト程度に下げていた。

「忠、告……?」

「ああ、我ながら珍しい、親切心というやつだ。

——今すぐ代表候補生から下ろしておけ。ソイツは戦場に立てる奴じゃない」

ガキイン!

慈悲も侮蔑も無い、ただ懇々と事実を述べる様なマドカの言葉。

それに一瞬遅れて、金属と金属がぶつかる音が鳴り響いた。

音の出所は、両手で振り下ろされた双天牙月とそれを片手で受け止めた星を砕く者スターブレイカー。軌み合う刃の主達は、焦燥と恐怖、冷徹と失笑とそれぞれの視線をぶつける。

「……ッ……アアアッ!」

「自覚は無いのかと思っていたが、目を背けていただけか。

滑稽だな。身の程を知っていても弁えてはいないというものは」

「なに、を……!」

「お前は諦めている……私を倒そうという事も、セシリア・オルコットに追いつこうという事も、なにもかもを……！」

「うるさい！ アンタに、アンタになにがわかるっていうのよ！」

「はっ知るか！……雑魚の無念など！」

激昂する鈴から、青竜刀を器用に絡め取ったマドカは、無手となった相手の胴を蹴り飛ばす。

「くッ……ア……！」

受け身を取る事も出来ず、地を転がる鈴は、睨みつける事しか出来ない。その視線にライフルの射線を合わせてマドカは嗤う。

「……消えろ」

再び、ライフルの銃口に光が収束する。

迸る紫電は空気を焦がし、大気が悲鳴を上げる。



本来なら、マドカは鈴に構わずに帰還すべき立場だ。

言い渡された任務が『一夏との交戦』な以上、即座に戻り指示を待つべきなのだ。

しかし、ナノマシンで命令に背けないのならその命令を曲解しようというのが、マドカの基本だ。

『ミッシヨンの失敗を確認し、離脱の際に追われないように痛めつけた』と報告すれば  
なにも咎められる事は無いだろうと判断して、フルチャージされたライフルの引き金を  
引く。

放たれた光の威力は絶大。

双刀で防御しているならいざ知らず、今の無防備な鈴ではひとたまりも無いだろう。

「逃げてええええ!!!」

それを我が身で知っている簪は叫ぶ。

満身創痍故に叫ぶ事しかできない彼女は声を張り上げる。

しかし、悲しきかな。

祈りで止まる殺意は存在しない。

紫電は寸分狂なく鈴を射抜くだろう。

バジユウウウ!

——そこへ飛び込んだ“白”の影が、迫る光を、輝く刀で切り裂いた。

「<sup>びやく</sup>白……<sup>しき</sup>式………?」

## 08-24 刻限の鐘が鳴る

「簪ちゃん！」

「鈴さん！」

夜のI S学園。

11時半の保健室に、ファントムタスク亡国機業との戦いから帰還した楯無、一夏、セシリアが、焦燥の表情と共に扉を蹴破らんばかりの勢いで飛び込む。

「お姉ちゃん……帰って来たんだ。それに……織斑」

保健室の2人の内、痛ましく包帯やガーゼを全身に包まれた方である簪はチラリと、しかして疑い深く一夏の顔を見る。

「セシリア、一夏……」

その視線に一夏は何事かを問おうとすると、軽く絆創膏を貼っただけの鈴が不安げな面持ちで見つめた。

2人のその視線に、一夏がたじろいでいると、後ろから声がかかる。

「戻ったか、一夏。……少しジツとしているろ」

「箒……？」

肩ほどまでの黒髪を揺らして、箒が一夏の肩を掴む。

前、後ろ、右に左、一夏の外見をくまなくチェックしていく彼女に、一夏は戸惑いを隠せない。

そんな動揺に構わず、「ふむ」と一人勝手に納得した調子の箒は一夏の襟を直した。

「……一夏だ。正真正銘本物の」

「……？」

箒の言動に、一夏は当然としてセシリアと楯無も首を傾げるが、鈴と簪の表情にやや

安心したそれが示される。

困惑の一夏に、遠目にはミイラと化した簪が口を開く。

「織斑、1つ聞きたいことがある……。内容は言わなくていい、今日の6時ごろに……。I  
S学園にいた？」

「学園にはいなかったけど、藪から棒になんだよ。簪お嬢、今重要なのはお前らを襲った  
襲撃者について——」

「その襲撃について……。関係があるから……。言ってるんだよ。」

「……………特に織斑、貴方が与り知らなくても……。きつと無関係じゃないから」

「それは、一体……。どういう事だ？」

「サイレント・ゼフィルスから襲撃を受けたって事は知ってるよね。私がボロクソに負  
けた所から話すけど——」

「更識簪の回想」

私が負けて、そして鈴に向かって光弾が放たれた時。

あの時、時間が止まるのってこういう事かって思ったよ。

撃ったゼフィルスも、撃たれた鈴も、地に伏す私も、突如として現れた“白”の影に目を奪われた。

「あれ、は………！」

私の頭は真っ白になったよ。

レーザーを切り裂いたその純白の機体に、見覚えがあつても見た事は無いからね。

「白……式………？」

目の前の“それ”は確かに倉持技研くらもちぎけんの白式びやくしきだった、だけど白式であつて白式では無かった。

記憶の中の白式と同じく滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインだったけど、細部が違ったんだ。

とりわけ違ったのは見知った白式には無い、巨大な左腕の装備。他の2人と違いIS

の装備に造詣が深い私にはそれがなにかがわかった。

(あれは多機能武腕……！ 白式の武装は……雪片ゆきひら式しかた型かただけの筈なのに……)

倉持技研が白式の解析に成功して新武装を搭載したのだろうか。  
そしてその武装を持ってして織斑千冬が援軍に来たのだろうか。

——違う。

振り返った白式の操縦者が、私の直感が弾き出した答えを否定した。  
目の前にいる白式の操縦者の顔は千冬ではない。

「……織斑？」

眼前にて白式を纏っている男の顔は共同開発者にして、襲撃者であるゼフィルスの標的の、世界で唯一の男性 I S 操縦者『織斑織一夏方』のものだった。

……いやうん、わかるよ。その困惑。

だけど今は、話をさせて？ ……うん、織斑はいい奴だね。

(まずい…マドカは織斑と殺し合う為に学園に…)

緊急時ではわからない事は捨て置いて、わかる事で迅速に判断していかなければならぬのは承知だよな。

だから私は「何故白式を使えるのか」「所用とはなんだったのか」「そもそもそれは白式なのか？」それらの疑問を一旦放り、唯一動く口を開いた。

「織斑、逃げて…！ ソイツは織斑を狙っている、早く先生がいる方に逃げて！」

でも、白式の操縦者は動かなかった。

それどころかお望みの獲物が目の前にいる筈のゼフィルスも、想い人が助けに来てくれた筈の鈴も動かない。

動くどころか目を見開いて、信じられないものを見るような目をしていた。



「誰だ…お前は……!!」

「アンタ、一体誰よ……!!」

「……え？」

そんな彼女達の口から放たれた言葉に、私は耳を疑ったよ。

「マスター鈴、及び敵性個体エムによる質問を認識、照合…出力を許可。『白』の一夏』  
が適切な回答と判断します」

その後の、白式の操縦者の、自己紹介とも取れる言葉にもね。

-----

「……その後は？」

「何もせずに飛んで行った…。ゼファイルスは……それを追っていった」

「……本当に俺だったの？」

「織斑だった。…少なくとも顔はね」

「……チツ」

痛む頭を抱える一夏には、思い当たる節があった。

『もう1人の織斑一夏の噂』と『零落白夜を操る何者か』

(光を切ったという刀の性質は間違いなく零落白夜…そして俺と同じ顔…ガルシルドからの報告にあつた通り、この2つには関係はあつた。

だが、解せない。IS委員会の重鎮であるガルシルドでさえも容易には掴めないほど、奴は足取りを残してない)

——— どうしてこんな、明らかに記録に残る現れ方を…？

「……鈴か、簪お嬢の内どちらか…或いはそのどちらも喪う訳にはいかなかった？」

「だろうね……。」 白の一夏と名乗った…織斑のそっくりさんは私達には敵意らしきものは向けてなかったし」

2人の会話を静観していたセシリアが、「鈴さん、1つ質問が」と口を開く。

「その白式の操縦者ー本人曰く『白』の一夏ですが、どうして今日の前にいる一夏さんと『違う』と判断したのか教えてくださいませんか？」

『織斑一夏』と『白』の一夏の風貌は瓜二つだ。それこそ簪が見分けがつかない程に。

だがしかし、鈴とマドカは別人であると見抜いた。ならば見分けるポイントがあるのでとセシリアが思うのは当然の事だ。

問われた鈴は俯き、肩を少し震わせる。

「……わからない」

「わからない？」

「どこが違うのか、わからないの」

「うん、私も聞いたけど……どうしてかはわからないって。

織斑が目の前に来てくれたらわかるかもって、そう思ってたんだけど……」

か細い声を庇うように簪が回答を替わる。

セシリアも精神的に参った様子の鈴を問い詰める事なく、視線を簪に移そうとするが、鈴は簪は手で遮った。

「鈴……？」

「簪、アタシの気を使ってくれてありがとう。でも大丈夫。ちゃんと、話すよ」

すうーはあーと深呼吸を繰り返して、セシリアと目を合わせる。

「簪より近くにいたアタシの眼からしても、<sup>〃</sup>白<sup>〃</sup>の一夏は一夏とそっくりだった。

目も耳も声も背丈も同じで、それでもアレは、一夏じゃなかったと確信を持ってしまったわ。

具体的に何が違うのかはわからないけど……見た瞬間から心が軋む感触があったのよ」  
『『違い』はわからずとも、『違うこと』はわかる、と……

俺の無人機感知と同じ理由か……？ だとするなら奴は……」

ふむ、と一夏は腕を組んで考え込む。

（亡国機業が『織斑一夏』のクローンを作っていない事は確認済み。  
フアントムタスク

マド力を見た時にそうじゃないかと思ったがハズレだったか。なら一体、何者だ？

……いや、奴の正体もそうだが、憂慮すべきは白式のような機体の方か。零落白夜はなんてどうやって…）

ワンオフ・アピリテイ  
 単一仕様能力『零落白夜』  
れいらくびやくや

消滅エネルギーによる刃を形成し、対象のエネルギー全てを消滅させる能力。

相手のエネルギー兵器による攻撃を無効化したり、シールドバリアを斬り裂くことで相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられる「対IS兵装」とも言える恐るべき力である。

この力を振るえるISは3機。

まずは千冬と共に世界最強に駆け上がった機体『暮桜』  
プリユンヒルデ

しかし、一夏でも白式とは違うとわかる形状であり、一夏よりもISに詳しい簪が見

間違えるはずもないので、学園に来たのはこの機体ではない。  
なにより現在行方不明の機体だ。

次に一夏の専用機となる予定であった機体『白式』

学園に現れたのがこれという線もない。

外見で言えば一番の有力線だが、臨海学校でのなりすまし案件以降、一夏が直接倉持技研に向かい、黒い鳥ダイクレイヴンと共に照合を行なって始めて持ち出せるという嚴重な体制に変わっている。

最後は厳密には機体とは言い難いが『VTシステム搭載機体』

当たり前だが、これが1番有り得ない。

開発が禁止されているとかそういう問題ではなく、そもそもVTシステムを構築する為のデータが少な過ぎるのだ。

公の場で白式が使用されたのは一夏と千冬の一戦のみ。どう考えてもサンプルには足りない。

零落白夜を目当てにするのなら、現役時代の千冬のデータから暮桜を引っ張ってきた方が何倍もいい。

## 閑話休題。

現状では考えるだけ無駄と捨て置き、一夏は箒の方を向く。

「なあ箒。お前は『白』の一夏と俺の違いはわかるか？」

「そもそも会ってもいない。会ってみなくてはわからん。

情け無いが、駆けつけた時には全てが終わっていた」

「……駆けつけた時、他に誰かいたか？」

「一緒に向かった先生方がいたな。あ、後……」

「……後？」

「木の陰で、如月が様子を伺っていたな」

「……………ふーん」

箒の言葉に何を感じたか。

一夏はそれ以上質問せずに、鈴と簪に見舞いの言葉をかけると保健室から出て行く。急に変わった一夏の様子を、セシリアは不思議そうに見送り、簪は不機嫌そうに見送った。

「一夏さん、一体何を…?」

「さあ…? 時間も時間だから寝るんじゃない? ほら…貴女やお姉ちゃんと一緒に…どこに行っていたのかは知らないけど、ハードな仕事だったんでしょ?」

「いや、そうでしたけれどね? 簪さん、あーいう時の一夏さんは…」  
「だから、心配はいらないって事だよ…セシリア。」

「過程はどうあれ…結果的に貴女の利になる事をする奴だよ。織斑は」

「……確かに、一夏さんはそういう人ですが…。」

あの、簪さん…怒ってませんか?」

「そうだね、ちよつとムカついてるよ……!」

私の可愛い機体に傷つけてくれたゼフィルスにも、大口叩いた割にボロクソな自分にも……」



「鈴が傷付友達いているのをわかって、それで尚「ついてくるな」と背中で語る織斑にもね」

---

『いいのかい？』

「……なにがだよ」

保健室を出、廊下を歩く一夏に財団が問いかける。

ぶつきらぼうに返事する一夏は、質問の内容を理解していた。

「ああ、クソ。わかってるよ、そのぐらい……」

鈴が見るからに憔悴していたのはわかっている。

「気遣う方法を考える前にまず側にいろ」と簪が目で訴えていたのもわかっている。

『一夏、少しバカになれ』

嘗ての箒の言葉に齒噛みする。なかなかどうして、彼女は的確だ。それでも、今夜中にケリをつけなければいけない事があるのだ。

薄々察していながら、今までズルズルと先延ばしにし続けた事。

人に裏切られる事に怯えていた自分にとって、延々と目を逸らしていたかった事。

だけど、もう――

「――ユメ  
日常の終わりだ」

己に言い聞かせるような呟きと共に、青いペンキ塗りの鉄扉を開く。

目の前に広がる夜の学園の屋上は、月明かりの下妖しい雰囲気の中にあつた。

「待たせたな」

「全くね。待たせすぎよ、織斑くん」

満月に照らされる闇の中に佇むのは、1人の人影。

手入れを怠り艶のない黒い長髪は、星の光を吸い込む影となつて夜風に揺られ。ボサボサの前髪から覗く瞳は、普段教室で会う時とは違うものを宿し。それらが示す漆黒は、白い制服をより際立たせていた。

「悪い悪い。ごめんな、如月さん。こんな夜中に呼び出しちゃつてさ」

彼女の名前は如月奨美。

入学早々にパイルバンカーの素晴らしさを一時間講義した、パイルアデイクシヨン。学園仕様のラフアールでありながら、AICを掻い潜りパイルを見舞える実力派。学業の成績さえも優秀な、正しく文武両道の体現者。

「いや……グルゼオン。それとも“T”って呼んだ方がいいか？」  
「……」

そんな如月は、一夏の口から出た言葉に驚くでもなく空を仰ぐ。

グルゼオン。それは亡国機業ファントムタスクのISであり、黒と赤の全身装甲フルスキエンが特徴の機体。そして「T」とはそれを操る操縦者の名前。

その名で呼ばれた如月の態度は、己がその名が指す人物であると示していた。

「…そうじゃないかと思っていたが、本当にバレてたんだな」

「…それが、アンタの本当の口調か。」

聞いてないのか？ ああの心底ふざけた女から」

「ふざけた女…スプリングか。聞いてないさ。」

引つかかっているとは思っていたが、どこで気づいたのか、教えてくれないか？」

纏う雰囲気を変え、「それでも自信はあったんだ」と眉尻を下げて微笑む如月の問いに、一夏は顔に月光の陰を落とし、優しい笑みを返した。

「デュノアの一件や、夏休みでの俺との会話で見せた観察眼もそうだけど…。」

1番は、レゾナンスでの、グルゼオンとしての初邂逅時に見覚えがあったからだよ」

——なんだこの、アイツに感じる既視感は何？

「そういえばあの日、電話で僕の用事を聞いて来たな。まさか、その時から疑われていたとはな」

——私の1日はね、パーティだったわ

「いや、あの時の電話は無意識のうちにかけててさ。そんな意図は無いよ。でもまあ、こうして振り返るなら、直感的に気づいていたんだろうな。」

……あの電話は、如月さんがグルゼオンだと結びつける1つのピースになった。だって、ガーダインはその日パーティになんて行ってないもん」

——IS委員会のガーダイン委員が来てたわ

「そういえば、ガーダインとの直通番号を持っていたな。ウソはバレるものとはよく言う。」

……品川でのあの眩きは、確信とまでいかなかったも、ある程度は目星がついたという

事か」

——やっぱ、そういうことか…

「……ある程度、だったよ。だから俺は目を背けた。目を逸らして、楽しい日常に溺れた。」

仲良く机を並べて勉強したり、本を貸し借りしたりしてさ…懐かしいよね、夏休みでみんなとバーベキューしたの」

互いにこれまでを逡巡しながら、一言一言噛み締めるように語ってゆく。

如月の瞳は髪に隠されわからないが、一夏の茶の眼は悲壮感と彷徨たる思いがあった。

「この世界に帰ってきて、初めて出来た友達が如月さんだった。俺を『普通の高校生』と言ってくれた事は本当に嬉しかった」

仕事相手から裏切られる事は一夏にとって日常茶飯事だ。

報酬を支払われただけならまだ有情で、己を殺す為に偽りの依頼で呼び出された時もある。

それでも、彼が人を信頼できるのは彼の保護者である千冬やファットマンが裏切らなかつたからだ。

精神的に一夏を支える支柱となつた彼等の存在は、殺伐とした世界の中、持ち前のお人好しでいる事を許した。

そして、マグノリア・カーチスは彼を置いて逝つた。

一夏の強さに惹かれたが故にだ。その記憶は、例え何があつても忘れないだろう。

織斑一夏は契約を裏切られる事に慣れていても、信頼を裏切られる事には不慣れなのだ。

「最初から、ファントムタスク亡国機業として俺に近づく為だったのか？」

だからこそ、一夏は親しい人に、信頼の置ける人物の裏切りを酷く嫌う。

学園で出来た新しい交友関係が、実は半数が亡国機業ファントムタスクでしたという近況も相まって、如月の正体がグルゼオンだという事実に一夏は多大なるダメージを受けていた。

「……ああ、そうだ。その為に僕は、この学園に来た。君と友達になる為にね。」

言い訳じみてるけど、楽しい時間だったさ。パイルを1時間語る事も、文化祭でカフェを切り盛りするのも、学園生活の全てが楽しかった」

さあ、と風に揺られ如月の双眸が露わになる。

瞳に湛えられた強い意志を見て、一夏は血が滲む程拳を握る。

「感傷だ。茶を飲み交わす日々はもう戻らない」

その言葉は如月か、はたまた自分にに向けた物か——グラインドブレード使用から6時間が経過し、起動可能となったISを構える。

「1つ聞かせてくれるか。どうして、君1人で来たんだ？ 言っってはなんだが、他の人……生徒会長やセシリアさんが相手取った方が、物取りには向いていただろう？」

「……如月さん。聞いてると思うけど、俺は親しい人を殺して来た。」

兄弟子も、先輩も、愛しい人でさえも……敵に回れば全員殺した。

——だからだよ」



心腹の友が敵になったとして、戦いたくないとそこで引くのか。

それは、他の奴に任せるといふ事だ。

ああ、そうだ。これが現実だ。

どうしようもない。決断しなければならぬ容赦の無い現実だ。

「俺の葛藤を、俺の自己満足を、他の誰にも踏み込ませない。——譲る訳にはいかねえんだよ！」

「……絶対に自分が、グルゼオン<sup>ポ</sup>を仕留める為に、一対一の状況を作る。

酷い自己満足だな。他の誰にも手は汚させない。僕と関わりがあるのが君だけとでも言う気かい？」

「これが俺の心、感情の答えだ。傭兵つてのは依頼をこなす利口さはあるが、命と死を謳

う理屈はいらないんだよ」

「そう。それが君の、織斑一夏の愛で弱音で……怒りなんだな」

「……………そろそろ御託も終いだ」

「そうだな、始めよう。この長い長い……日常の終わりを」

ダークレイヴン  
「黒い鳥」

「メインシステム 戦闘モードを起動します」

「グルゼオン」

風が吹き、雲が弛やい、月が隠れて闇となる。

影の中で、IS学園の白い制服を覆う2つの黒い装甲は静かに相手の様子を伺う。

「……………」

「……………」

風が吹く。

雲が弛やう。

月光が屋上を照らし、12時を告げる鐘が鳴る。  
それを合図に、両者は動き出す。

「オオオツ！」

「ハアアア！」

夜風を裂いて鋼音が響く。

夜光を浴びた鎧衣が煌く。

夜闇にぶつかる2つのISは、品川の一戦よりも眩い攻防を繰り広げる。

そして……十分後か、それとも一時間後か、かくして闘争の喧騒は止み——

——この日を持って、織斑一夏と如月奨美の2名は消息を絶った。  
[MISSION 8 COMPLETE]

MISSION 09 Original  
09101 DARE DEVIL

『僕はこの世の者じゃない』

——  
少女しょうねんは語る。

『そう。それがどうかした？』

——  
向かう女は笑う。

——  
それだけだ。たったそれだけが、彼女かれにとっては至上の救いだったのだ。

——  
この操り人形と手繰り手のみで骨子が組まれた様な世界で、唯一の光だったのだ。

—— 故に、嘗ての女は宇宙に吠えた。

『篠ノ之…東エエエ!!!』

—— 是は、如月奨美の話。

「ああ…もうすぐだ…！」

亡国機業本部の奥深くにて、男は嗤い喜悦に震える。

女と見紛う程に華奢な体躯に純黒のスーツを纏い、普段は柔和な笑みと穏やかな視線を持つ口元と目元は、歓喜の叫びで歪んでいる。

彼の名はジギル・Mファンタジス。

篠ノ之東に並ぶやもと呼ばれる稀代の天才にして、最年少のIS委員会委員。

しかし、彼の本当の姿はそれではない……世界の裏で暗躍する悪の組織 「ファンタムタスク」 亡国機業の首領こそが彼の真の顔である。

「随分と嬉しそうだな」

「それもそうだろう、”T” 。私の一世紀に及ぶ悲願がようやく果たされようと言うのだからなア！」

そんなジギルを冷ややかな眼差しで見る ”T” ……如月は、無意識のうちに腹を抑える。

「…痛っ」

如月は腹部の幻痛を悟られないように振る舞うが、それを気にすることもなくジギルは恍惚の雄叫びを上げる。

「天から注ぐ裁きの光…地を覆う亡骸の鎧…永遠なる体制、”イモータル・プロジェクト

“に必要なピースは揃った……!”

到達点たる、織斑一夏<sup>オリハヤヒ</sup>の消息が掴めていないのは残念な事だが、死んでいないというならよしとしよう。

……なあ、”T”?”

「ああ。織斑一夏は生きているし、今も虎視眈々と亡国機業<sup>コクキヤ</sup>の喉笛を食い破らんとその嘴を磨いている筈だ」

「それはいい。まさか、単身で亡国機業<sup>コクキヤ</sup>に挑もうとするとは予想以上だよ。

流石は、君と同じ未知存在<sup>ブラックビジョン</sup>なだけはある。同類としては何か思う所がないかね?」

「無い。それに、織斑一夏が僕と同類な事とそれは関係無いだろ。  
……ところで、そんな事を言うためだけに呼び出したんじゃないだろうか?  
もしかしてガードインの件か? 彼は順調に手を回しているが……」

うんざりした様子<sup>シメジメ</sup>の如月は、早く本題に入れとジギルに促す。

くつくつと笑うジギルは、その不遜な態度に機嫌を損ねる事なく答える。

「もちろん。ガードイン君の進捗もそうだが……君には”グングニル”の護衛部隊の指揮を執って欲しいと伝えておきたくてね」



「僕がか？」

「そう、君がだ。まだ会議でも決まっていない決定事項だが、私の秘密を知る君ならそうした方が都合が良いのはわかるだろう？」

三度の弱体化を経て、僕の「力」は全盛期の見る影も無い程に範囲、精度の両方が落ちたが、今もなお有効だ。

部隊メンバーは君の好きに選んでいいから準備を今から初めておいてくれ。好きにとは言ったが、あまり選択肢が無いのは勘弁願うよ」

ジギルの言葉に如月は目を見開きその後考え込む。

5秒ほど熟考した後、大きく息を吸って口を開く。

「なるほど。確かに今のなけなしのアンタの力を活かしたいと言うなら……そうした方がいいか。

でもいいのか？ 僕はアンタにとって織斑一夏と並ぶ危険因子だ。それに計画の心臓部を任せるようなマネをしては、心中休まらないだろ」

「構わないさ。君の意志が本物だという事は、10年前のあの日にわかっているのだからな。

私と同じく、その鋼鉄の意志は揺らぐことは無いだろう。だからこそ任せられる」  
「……そこまで言われたら、任されない訳にはいかないな。

全く、マドカが怖いぞ」

その後、一言二言交わした如月は部屋を出て一息つく。

「ん……んんっ！」

背中を大きく伸ばして深呼吸。

脳に酸素を送り込み、活動を活発化させる。

そうして開かれた双眸には、ジギルという男への憐憫と侮蔑が描かれていた。

「変わっていくのは当たり前だというのに、  
『変わらせない為に変える』とは……本当  
に救えないな、ジギル<sup>ァン</sup>という人間は」

嘲りの瞳は瞬きで変わり、決意が代わりに込められる。

「さて、始めよう。如月ほ獎美と織斑き一夏みの戦いを。  
 ……最も、君にかかる負担が絶大なのはご愛嬌だ」

『こんにちは、この地球に住む……新しき年を迎えようという70億の人類』

『私はジギル・Mマイファンタジス。IS委員会の特別委員とも呼ばれている。初めましての方もそうじゃない方もいるだろう』

『だが……今この映像配信を行っているのはそんな些細な役柄としてはでは無い』

『ネットの海に住む者達ならば聞いたことがあるであろう闇の組織——ファントムタスク亡国機業。  
 その首領として私はここにいます』

『そして告げよう……我々は、全世界に宣戦布告を行うと！　そして…君達の幸せと希望の一切を粉碎するとここに誓おう！』

『さあ人類よ…見せてくれよう、絶望の恒久を！ 未来は無い、跡形も！ 大いなる闇に沈め！』

それは、突然として始まった。

ズダダダダダダダ…

ドゴオオオオン

12月31日。

師走という「師（僧侶）が走り回るほど忙しい月」が終わろうとし、新しい年と月が始まろうという日の東京では、誰も彼もが走り回っていた。

「うわああああ!!」

「きゃあああああ!!」

否、走り回っているのでは無い。逃げ惑っているのだ。

突如街の中に降り立ったゴレムとレギオルーパーの軍から、人々は混沌と狂乱の騒ぎを奏でて逃げているのだ。

「来るな…来るなああああ!!!」

グチャ!

男は叫ぶ。悲鳴ごと踏み潰される。

「いやあああ!!!」

ターン…

女は泣く。涙諸共撃ち抜かれる。

「お、か、あ、さ、ん！お、か、あ、さ、ん！」

ズバア！

子供は喚く。すぐに静かになる。

「蘭！ どこだ……らーん！」

阿鼻叫喚の人混みの中、五反田弾ははぐれた妹の名を叫ぶ。幸運な事に探し人に声は届き、返事が雑踏から返る。

「お兄！ こつち！」

「蘭！ よかった……怪我は無いか？」

「うん、大丈夫……ねえ、一体何が起こってるの!？」

「わからねえ。でも多分、一夏の奴が前に巻き込まれたテロだ。ここは危険だ、急いで逃げろぞー！」

「うん！」

そう言つて逃げようとする2人の前に、レギオルーパーが現れる。

「っ!?! 蘭、逃げろ！」

蘭を庇う様に立つ弾に向けて、レギオトリガーから光弾が放たれる。

「お兄!?! キャッツ！」

1秒後に奪われるであろう弾の命は、0.5秒後に飛び込んだ水色の影に救われる。  
飛び込んだ影は勢いそのまま、弾を掴んで地面を転がる。

「……大丈夫？」

「お前は確か……河川敷で喧嘩してた……」

「余計な事ばかり覚えてるね君は……！」

素早く起き上がった水色の影：更識簪は、右手中指に嵌められた待機状態の打鉄式式を構える。

「乱暴なエスコート、失礼致しましたわ」

「セシリア、さん…」

時を同じくして、蘭を流れ弾からヒョイと逸らした金色の影：セシリア・オルコットも待機状態の腕時計を構えた。

「変身！」

「B<sup>ブルー</sup>テイアーズ・D<sup>ディー</sup>—N<sup>ネクスト</sup>x！」

ISを纏った2人に、レギオルーパーとゴーレムの視線が集まる。

「簪さん。レギオルーパーには絶対防御が無く、撃破すれば当然命を奪いますわ。

もし、それをしたくないと言うのであれば、私が請け負いましょう」



【VOLCARISER!】  
ヴォルカライザー

「そりゃ、殺しなんて好んでやりたくは無いけど……でも、やんなきゃいけないんだよ。私は逃げない。目を逸らさない。織斑がいない鈴を守る為にも!」

「そう……では、行きますわよ」

2機のISは同時に地を蹴り、己が武器を振るった。

—————

1月15日。

「ただいま戻りましたわ」

人気の無い豪華なホテルの扉を開けて、セシリアが不機嫌混じりのため息を吐きなが

らホテルロビーに入る。

「ああ、おかえりセシリア。なにか情報はあったか？」

「まあ、それなりには……しかし、慣れるものですわね。

ホテル暮らしにもう然程の違和感を覚えませんもの」

「IS学園寮がこの高級ホテルに負けず劣らずだったということだろう。

一夏が失<sup>き</sup>踪<sup>え</sup>てから……もう三カ月程か。その間世界は激動したものだな」

そういう箒の手に握られた携帯端末の画面には、慌ただしく動くスタッフを背景に  
 ニュースキャスターが『○○国、亡<sup>フアントムタスク</sup>国機業に降伏宣言』の見出しと共に、センサーシ  
 ョナルなニュースを伝えている。

「ええ、大晦日の亡<sup>フアントムタスク</sup>国機業首領……元IS委員会委員ジギル氏の全世界へ向けた宣戦布告。

それと同時に世界各地にゴーレムやレギオールパーで構成された部隊が襲撃を開始。  
 しかしされど何を目的とした襲撃なのかは一切不明。

アメリカやロシア等の各国は反攻作戦を開始。襲撃を受けた貴女の日本<sup>く</sup>も、紆余曲折  
 あれど自衛の為に撃退戦を始めましたわね」

「国の中枢にまで亡国に潜り込まれていたがな。それに、反撃を始めようとした世界はその出鼻を挫かれた。」

太平洋上に存在する世界最大のエネルギープラントが、空から降り注いだ光によつて一瞬で消滅する形だな」

「衛星兵器『グングニル』による衛星軌道上から放たれた超高出力のビーム砲。」

ファンダムタスク  
亡国機業もよくまあ密かに打ち上げ：組み立てたものですわね」

「宇宙空間での組み立て作業、か。皮肉だな、悪の組織たる亡国あちらの方が本来の目的に沿つたIISの運用をしているというのもの」

「——ええ全く。忌々しい事この上ありませんわ……！」

それ以上に情けない！ あの地下基地でそれがわかつていたというのに防げなかつたこの身の不甲斐なさが！」

火山の如き怒りを露わにするセシリアに、箒が冷静になれと声をかけようとした時、2人の足音がソファーに座る2人に近づく。

「戻ってたんだ、セシリア」

「私、参上」

「鈴さん、それに簪さん」

足音の主は鈴と簪。これで一年生の専用機持ちは全員揃った。

「…それでセシリア。防げなかったという事実は変えようもないとして、どうやってこの先空飛ぶ兵器と戦うつもりなのかな？」

既に被害は甚大だよ……なにせ、数にして2億が亡国の手にかけている」

「盗み聞きとは趣味が悪いですわね簪さん。まあいいでしょう。」

各国は衛星兵器グングニルの破壊を試みた…いえ、試みようとなりましたわ」

「…した？」

「破壊を行うI S部隊の編成。その会議段階で亡国側から襲撃されるんですの。」

絶対にさせないとばかりにI Sまで持ち出してくるお陰で計画を練る以前の問題だ  
そうですわ」

「どこかから情報が漏れているというわけか？」

「それにしても不審な点が多いのですわよねえ簪さん。多くの人員が動くのならスパイ  
なりなんなりが入っているようなものですがー」

「——なるほど、出だしも出だし。格ゲーで言う所の見えない筈の1フレーム目で

潰されてると。

流石、次期代表。まだ候補の私よりも耳が早いね」

「その立場だけあって制約は多いのですけどもね。現に3日後には——」

ヴーツ！ヴーツ！ヴーツ！

「!?」

突如、各々の携帯端末からけたたましいアラームが鳴り響く。

ニュースを見る為に出していた筈はいち早く確認する。

「臨海地区に有事避難警報……亡国機業か！」  
フアントムタスク

「なら私が行く！ 日本代表候補が日本助けに行くのに文句はつけさせない！」

「私もだ！ 無所属の私なら！」

簪の言葉を受けて筈も同時に立ち上がり、そのまま駆け足でロビーを出る。

異国の代表候補であるセシリアと鈴はそんな2人を見送り、ホテルロビーで佇む。

「……いつちやったね」

「そうですわね。こういう時に動けないのは、本当にもどかしい事ですわ」

「…ねえ」

「はい？」

手持ち無沙汰か、紺碧の腕時計を無意識のうちに弄るセシリアに、鈴は語りかける。

「さっきの警報の直前…なにを言おうとしたの？」

「ああ、その事ですわ。別に、3日後の便でイギリスに戻って来いと命令が下っただけですわよ」

「この状況で？」

「この状況だからでしょうね。優等生かつ問題児の私が、大事な次世代機と共に外国にいるのは都合が悪いのでしょう」

亡国大戦とも呼ぶべきこの惨状で、IS学園はその機能を停止する事となった。

学生達は寮を出て、日本政府の用意したホテルの下、折を見て帰国をする予定だが、旅

客機が撃ち落とされた事もあり、飛行機や船が安全で無い現状では日本の生徒のみが帰宅出来ているのが実状である。

また、日本人である簪や箒、楯無は専用機持ちという事情と、本人の希望もあつて他の生徒と同じくホテルで過ごしている。

そんな状況で帰つて来いと言うのは自殺行為では無いかという鈴の心配を、セシリアはなんでも無いように返す。

「心配ご無用ですわ鈴さん。私はセシリア・オルコット。そう簡単に死ぬ女ではありませんもの」

「……でも、一夏だつてもしかしたら……!」

「そう暗い顔をしないでくださいまし。……そうだ、いいことを聞いてきましたのよ」

俯いた顔かんばせに暗色を浮かべる鈴に、セシリアは己に注意を向けようとパンと手を叩く。

「さういふよ」

ええ、よくきいてくださいまし。と大仰な身振りでセシリアは告げる。

「現在行方不明の一夏さんは…生きてますわ！」



## 09102 THE BARGAIN

——女おとこの話をしよう。

——女おとこは今から16年前に、産声を上げる事なく産まれ落ちた。

——女おとこは産まれたときから聡明であつた。

——女おとこは生後10ヶ月の時には意味のある文章を喋り始め、幼き頃から本と文に塗れていた。

——女おとこは齡3つにして高等教育を修めるに至つていた。それを周囲は、畏れる事無く囁し立てた。

——女おとこの生家は「悪」であつた。暴虐を企てる機構の、手先も手先の、邪悪なる真理を探し求む者達の集まりであつた。

——  
 女は期待された。

『おお。この神童ならば、我等が偉業の穂先となろうぞ』

——  
 女は不幸であつた。それもそうだ。悪徳と邪智なる家系の中、女は規範となる。『正義』を知つており、それが基盤となつていたからだ。

そうだ。そんな時に、僕は彼女と出会つたんだ。

天使と言うには過少で、天女と呼ぶには見縊りが過ぎる。如何なる女神であろうとも、彼女の輝きは引けを取らない。

“外”は滑稽と冗談で煮詰められた人形劇で。

“内”は愚蒙と外道にて組み上げられた地獄変。

そんな現実フィクションに辟易と後悔を渦巻かしていた僕にとつての、唯一の光だった。

『どうしたの？ そんな顔をして。つまらなそうだよ？』

—————

「あ、お前は河川敷の……」

「か・ん・ぎ・し！ というか……二週間前にも巻き込まれてたよね」

大量のスケルトンによる阿鼻叫喚の最中、臨海地区のスタジアム入り口にたどり着いた簪と箒を、逃げ惑う大衆の中から一夏の旧友である弾が見つけ出す。

「それが……二週間前と同じでまた蘭とはぐれたんだ！」

「この状況で、また!?!……きやつ！」

ズドオオン！

「うわわわ、つと……お叱りなら後でいくらでも受けるから、助けてくれ！」

「……わかったよ、私達が助けるから逃げて。打鉄式式、変身！」

「来い、紅椿！」

変身した簪は薙刀・夢現を、箒は二刀・雨月／空裂を手に携える。

未だに民間人がいると言うのに、砲撃武装を使う程、彼女達は愚かではない。

展開装甲とそれによる双刀の遠近両用性を持つ紅椿を操る箒は大雑把に敵陣を薙ぎ払ったり、襲われている人々を精密に助けていき、

元より遠距離偏重の打鉄式式を操る箒は、唯一の近接武装である薙刀を持ってして民間人に接近している亡国を相手する形で、箒のサポートを行っていく。

(新型機が後ちよつと早く開発出来ていれば……！)

歯噛みする思いを己の心中に黙殺し、ブンと手近なスケルトンに刃を振るう。

秒間600万回の振動を持ってして、薙刀はバターの様に鉄の装甲を切り裂いた。

切る。

救う。

斬る。

助ける。

単純作業は人の心を殺すとどこかで言われた様な気がするが、これに関しては単純なのは字面だけだ。

生身の人間に刃を触れさせずに、敵の鋼のみに当て続ける。

針の穴に糸を通し続ける様な戦闘に、『言うは易し行うは難し』ということわざの真理性を実感する。

世界最強の兵器であるISの力は、人間のすぐ側で振るうにはあまりに強大だ。

鉄をバターと例えるのなら、人の肉など砂山と同様の硬度しかもたない。

薙刀を除けば打鉄式式の武器は荷電粒子砲と独立誘導ミサイル。

敵の群れに放つには向いているが、人命救助には向いていない武装群だ。

(蘭ちゃん……ど……?)

簪にとって幸いなのは即時リアルタイム・マルチロール・アクトレス万能対応機である紅椿が味方としている事。

なんでここを襲ったのかわからないぐらいに、いつもと比べて民間人が少ない事。そしてスケルトン程度なら駆けつけた自衛隊で対応できるという事だろう。

「お願いします!」

「了解!」

特に素早く駆けつけた自衛隊の存在は大きい。

簪がスケルトンを剥がせば、後はあちらが保護を行ってくれるのだから。

(セシリアがいればなあ……あの精密起動のビットは人を傷つけずに、相手をつ一級品なのに……)

「ふっ……はっ!」

命辛々また一人。

救って渡してさあ次へ。

そんな最中、打鉄式式のハイパーセンサーにある反応が引つかかる。

「……見つけた!」

スタジアム入り口の階段近く。

その売店の側で倒れている蘭はなんとか逃げようとしているが、足を挫いているのか手でなんとか這いずる形である。

そして運の悪い事に——彼女を狙うスケルトンがいる。

「……マズイ!」

簪の判断は早かった。

背部の荷電粒子砲『春雷』を起動して、狙いをつけると同時にブチかます。

爆風で痛い目見るかもしれないが、死ぬよりはマシかろうと迷う事なく放つ。

ドゴオオオオン！

実際、簪の判断は正しかった。……”既に弾丸が放たれていなければ”の話だが。

打鉄式式の光は正確無比にスケルトンを撃ち抜き爆砕する。しかし、その一瞬前に放たれた鋼の弾は勢いを止める事なく蘭に向かう。

「に……」

逃げて。

そんな言葉が伝わるよりも速い、音速を超える弾丸が蘭に迫る。

ガキーン！

命を奪う凶弾が蘭の肢体を穿つその時、人体ど弾丸が奏でるには、不似合いな金属音



が鳴り響いた。

「え……？」

驚く簪にハイパーセンサーは正確に情報を伝える。

手乗りサイズのカラスを模した金属製ガジェットが、その身を以て蘭を庇ったのだと。

「行け……バンデット！」

どこからか響く、聞き覚えのある声と共に、蘭の身代わりとなったガジェットと同一のものが10程飛来する。

彼等は自由自在に飛び回り、スケルトン達の鳩尾に体当たりを食らわせ吹き飛ばす。

【メインシステム 戦闘モードを起動します】

ズウンツ！

呆気にとられる簪を余所に、更に空から一人の人影が降ってくる。

人影はそのシルエットを着地直前で変化させ、轟音を立てて豪快に降りる。

そのシルエットは簪が見た事が無いが、しかしてシルエットの名前はよく知る所であつた。

「黒い鳥……織斑!？」  
ダークレイヴン

今世珍しい全身装甲フルスキーンの漆黒の鋼鉄。

それは正しく、三ヶ月前に学園から姿をくらました一夏の機体であつた。

—————

一方その頃、ホテルでは

「一夏が生きてるってどういふこと!？」

“行方知らずの一夏が生きている”

セシリアのその言葉に、鈴は彼女の肩を掴んで揺さぶる。

「鈴さん。大戦開始後から流れ始めた織斑一夏と思わしき男がチラホラ各地で見受けられる噂。

目撃情報を繋げると、どうやら同一人物が動いている……という事はご存知ですわよね」

「うん、でもそれは……」

『“白”の一夏かもしれない』……私もつい先程まではそう思っていましたわ。でも、違いましたの……!」

「……どういう事?」

「今朝、このホテルの先生方に、とある国から亡国に強奪されたISが差出人不明で送られてきたらしいですわ……渡鴉の真つ黒な羽を添えられて」

「からすの……黒い羽? まさか……!」

「ええ、 “白”ではなく “黒” ……黒い鳥ダークレイヴンを操るわたし達の知る方の一夏さんですわ」

「じゃあ……じゃあ一夏は無事って事?!」

「ええ、最悪の事態である死亡ではなく、一夏さんは亡国機業に捕まってもおらず…寧ろ戦っているという事は間違いないですわ」

行方不明の一夏は死んでおらずに生きている。ファントムタスク亡国機業と戦っている。その言葉に鈴の目から堰を切ったように涙が溢れる。

「よかつ…た…！」

(全く…戦っているならいるで、せめて連絡を寄越しなさいな一夏さん。別に私は貴方を阻む気はありませんのに…)

肩を震わせる鈴を抱きしめつつ、セシリアは飛び回る鴉に思いを馳せた。

—————

「一夏だと!?!」

「一夏さん!?!」

視点は戻り、簪の言葉に反応する箒と蘭。

特に箒の驚きようは凄まじく、展開装甲によって効いていないとはいえ、スケルトンから撃たれている事に気づいていない。

当然だ。現れたのは行方不明……否、生死不明となっていた嘗ての想い人なのだ。

失踪した翌日、セシリアからこつそりと聞いた任務の内容からして、あの後なんらかの事件巻き込まれた可能性が高いのだから。

そんな事を気にも止めず、左アームに装備されたKUSAKAGE mdl.2ジャをばら撒きスケルトンの動きを鈍くする。

市民への攻撃の手が緩むと同時に、黒い鳥は打鉄式式ダイクツシキにコア・ネットワーク通信を入れる。

『お久しぶり、簪お嬢。早速で悪いけど、頼みがある』

「……10月からどこ行つてたの？」

『要件は1つ。お嬢のミサイルポッド『山嵐』で撃つて欲しい対象がある』

「どこ行つてたの?」

『座標についてはAM<sup>ター</sup>/TG<sup>ゲット</sup>A-131<sup>ガン</sup>のロックオン情報を、コア・ネットワークで…』

「答えろ」

まるで旅行から帰つて来たかのような言い草の一夏に、苛立ち混じりの質問を投げける。  
簪。

一方通行な言葉を簪はスタンハンセンのラリアットが如き強烈な勢いで断ち切る。

通信を捲し立てていたさしもの一夏も口をつぐみ、重たい雰囲気に乗せて再び開いた。

『…そこについては、まだ話せない。でも、いつか話すと言うことは信じて欲しいし、みんなにも伝えて欲しい』

「……………まあ、このタイミングで登場した事を考えれば、織斑の失踪が大戦<sup>ま</sup>に関する事は察せるよ。

でも、織斑はIS学園入学前の2年間はずつと行方不明になつてたんでしょ? 織斑

先生、狼狽えてたよ」

『……めん』

「謝る対象を間違えてるよ。……もういい、要件」

非常に不服そうな態度を隠さない簪だが、無理矢理取り押さえる気はないらしい。それをする暇があれば一機でも多くスケルトンを屠っている。

なんにせよ、彼の介入によって蘭が救われ、事態が好転したのは事実。そこらの恩義も含めて、簪は一夏への追及の手を止め、一夏の用を聞く。簡潔にまとめるならば射的。

“既に居場所を突き止めたスケルトンの親機相当の機械の破壊”である。

「見つけたんならさっさと壊せ」という簪の判断は、「無所属で行方不明の俺よりも、日本代表候補が日本の土地救った方が都合がいい」と返された。

(……鈴が、あんなに悲しんでたのいうのにコイツは)

『撃ち終わったら、その顔面に以前は当てられなかったピンタを食らわしてやる』と簪は決心した。

「ジャマーも万能じゃない……さっさと決める」

——マルチ・ロックオン・システム起動。

起動演算開始。弾頭高電圧流動展開。射出内燃機閥接続。

一夏への怒りと呆れとスケルトンが動けない現状を持つて、焦りから逃れた簪は目の前に表示される複雑怪奇な数字と図形の羅列を一瞬で読み解いていく。

システムは正常に作動しているか、優先順位の高い対象からロックオンを行なっているか、民間人に向かつてはいないか、爆発時の衝撃がどこまで飛ぶか……様々な条件が全てクリアされ、ようやく彼女は「FIRE」と書かれた仮想コンソールをタップする。

「……殲滅しろ」

放たれた48発のミサイルはあるものはスケルトンの群れに、またあるものは黒い鳥ダークレイヴンから渡されたロックオン情報に目掛けて飛んでいく。

それらが齎す破壊の力は先程までの苦戦のしようとは違って、スケルトンのみを残滅し尽くした。



「それで簪さん……一夏さんは何処へ？」

「逃げられた。……逃げ足の速い奴」

戦闘後、後始末を自衛隊に任せ、2人はお叱りの言葉を功績で黙らせて、ホテルへと帰還。

出迎えたセシリアと鈴に、簪は一夏の事を隠さずに伝える。返ってきた質問に苦々しく答えるのも加えて。

加えるといえども一つ。

一夏が現場を離脱したと思われるタイミングで、簪の携帯に捨てアドでメールが届いていたのだ。

鴉の絵文字を題名に置いた本文の内容は以下のもの——『セシリアに伝言。イギリスに帰るための荷物整理はまだ辞めておけ。もつと重要な事が起こる』

お前は鈴に何か一言無いのか。  
 簪の握り拳は更に硬くなった。

「……まあいいでしょう。伝聞以上に息災な様ですしね」

そんな簪の憤怒の形相にため息しつつ、セシリアはメッセージの内容から読み取れた事柄を述べる。

「疑問……どういう事？」

「初歩的な事ですわ、簪さん。 “一夏さんは私が近々イギリスに帰ると知っている”。 つまるところ、一夏さんはこの機密を知れる立場、或いはその立場にある者と繋がりを持っているという事ですわ」

「……ああ、なるほど。……わざわざ私達の前に顔を出したり……このメッセージを送ったりしたのは」

「生存報告と近況報告を兼ねて、という事でしょうね」

“今の自分の身はそれなりに動けるぐらいには安全だ”

これがおそらく、今回の一夏のメッセージ。

ならば所属にしろ、協力にしろ、一夏に情報を流した組織とは何か？

亡国側に鹵獲されたI Sの確保や、今回の援護から踏まえれば、亡国に敵対する組織なのは間違いないだろう。

I S委員会、各国の軍部、I S関係各社……ダメだ、候補が多い。

思考に足る情報が少ないのでここは保りゆ……

「……如月愛美」

「え？」

「織斑と同時に失踪した……如月の実家は？ 覚えが正しければ……デカイ組織だったはず」

「……ええ。たしかに如月さんのご実家である『如月生体研究所』は、近頃目覚ましい発展を遂げるこの国有数の研究施設ですが……おそらくハズレかと。なにせ、軍事にもI Sにも、ましてや我が英国とも関わりは薄い施設ですのぞ」

「英国……貴女の国なんだから、貴女の国の可能性は？」

「そうだ。確かCIAだかFBIだかあつたらう」

簪と、それに追従した簪に、セシリアは肩を竦めて首を横に振る。

「それはありませんし、簪さんの挙げたそれらはアメリカの組織。おそらくMI6の事を指しているのですが、彼等にせよ、そうじゃないにせよ、英国側にいるのなら私に一報ありますわ」

「報告はあつたけど……セシリアが黙つてる可能性は……？」

「オルコット家の誇りにかけて、無いと断言しますわ」

「……セシリアだけ教えてもらつてない可能性」

「……無いと、信じたいですわね」

割と心当たりがある英国の優良問題児が冷や汗をかいていると、会話の蚊帳の外にいた鈴はボソリと呟く。

「……そもそも、なんで一夏は私達とじゃなくて、その人達と組んでるんだらう？」

鈴の言うことは尤もだ。

大戦の二ヶ月前から失踪し、大戦の最中で動きを見せているのだから、失踪の目的は大戦への準備と考えるのが妥当だろう。

しかしセシリアは解せない。

セシリアだからこそ解せない。

一夏が失踪した当日の任務『ファントムタスク亡国機業地下基地強襲ミッション』に同じく臨んでいた彼女だからこそわからないのだ。

あのミッションで得られたのは、大別して四つの事象。

千冬のクローン及び、それらを用いた擬似コアの技術。

衛星軌道掃射砲『グングニル』の存在。

量産型ISとも呼べる『レギオールパー』。

「地下奥深くに潜んだ巨人『ゴリアテ』」

これらだ。

たしかに亡国機業ファントムタスクが大きく動くであろう確証ではあるが、だからといって世界規模の戦争とは当時のセシリアは考えついていなかった。

——いえ、一夏さんと私では思考の前提が異なりましたわね)

フルフルと頭を振るって思い直す。

一夏が過ごした世界は、常に大規模の戦争がある世界であつた。

ならばその住人ならではの勘というものがあつたのかもしれない。

一夏という男は目的こそ感情的なものを多く含むが、手段においては己の心と擦り合わせた最大限の合理性を求めらる。

この「己の心と擦り合わせた」という所が重要で、つまり一夏は絶対許せないハードルは設けているがそれ以外はなんでもするタイプという訳だ。

さて、一夏の立場になってこの場合のハードルを考えてみよう。

大戦が有るとわかっていたと仮定して、その場合一夏が防ごうとする理由は2つ。

1つは、学園の機能停止。

卒業しなければAC世界に行けない事を踏まえれば、それを妨げるものは排除せねばならないだろう。

もう1つは、千冬や箒、鈴に五反田家等の安全確保。

こちらについては解説するまでも無いだろう。一夏は身内に傷がつく事を忌避する男なのだから。

(大戦による学園の停止は防げなかったとして……後者を守りたいのなら私達と一緒にいた方がいい筈。……ならば)

——守りを捨ててでも、やらなければならない事があった？

—— もしくは、攻めに転じた方が良いと思える情報があつた？

「わっかりませんわねえ……」

「セシリアも、わからない？」

結局の所、情報が足りない。仮定に仮定を重ねた推理しか出来ないのだ。後手後手に回っている以上、これから動いていくしか無い。

「ええ。一夏さんとは互いに強い友情で結ばれているという自負はありますが——  
ですが、彼の思考を読みきれないのもまた事実ですわね」

「そこは……仕方ない……。貴女とアイツは……極論他人……サイコメトラーでもない限りは不可能」

「そうですね。現状、確証のある事は何もありませんが……確信が持てる事はありますわ」

「ふうん……それは？」

「それは如月さん。貴女が言っていた彼女の实家は関係無いでしょうが……彼女が一夏



さんの居場所に関わっている可能性は、まず100%と言っていていいでしょう」

「まあ……同じ日に消えた2人が無関係って事は……無いでしょ。」

とりあえず私は……如月の実家を調べてみる。関係は無くとも……手掛かりはあるかもしれない」

「頼みますわ、簪さん。正直日本の事はお手上げでしてね」

——それはいい。だけでも。

瞬間。簪の纏う空気が変わる。

「セシリアに1つ聞きたい……もし今後、織斑一夏を発見したらどうするつもり？」

嘘も戯れも許さない。

そんな視線で見つめる簪に、セシリアは少し顔を俯かせる。

「簪……？ セシリア……？」

2人の間に急に立ち込めた、険呑な雰囲気。鈴は不安気な声を上げる。

「そうですわね。……見逃すと、寧ろ積極的に逃すと思いますわ。

この大戦を終わらせるには、それがいいと私は判断致します」

「それで悲しむ……鈴がいても？」

「……ええ」

「……私は。私は絶対に捕まえる……！ ……捕まえて、鈴の前に引つ張り出す……。その邪魔をするのだったら……その時は容赦しない」

「……そうですか。では私も……その時は例え簪さんであろうとも、容赦なく」

語気と共に殺伐とした空気を徐々に強める2人。

その間に、慌てて渦中の人物である鈴に飛び込む。

「ふ、2人共ケンカはやめて！」

「……ごめん、鈴。ちよつと焦ってた……」

「申し訳ありませんわ、鈴さん。反省致します」

そう言つて、鈴に頭を下げた2人は、自分の部屋へと戻つていく。

その背中を、鈴は無意識のうちに祈る様に手を握つて、見送るしか出来なかつた。鈴と一緒に残された箒は、気まずそうに声をかける。

「あーなんだ、その……2人共、互いが憎い訳じゃないと思うぞ。こう、主張がぶつかりあつただけで」

「でも、それは……」

私が原因。

鈴の虞おそれに箒は口を噤んでたじたじとなる。

鈴もみんなも笑顔になる未来を重視して、泣いている現在から苦渋の思いで目を逸らし——否、見つめながらも、一夏がやろうとしているプランを支援しようとしているセシリア。

鈴が悲しんでいるという現在を重視して、亡国を打ち倒す未来が遠くならうと——  
—否、一夏がやろうとしているプランよりも早く打ち倒そうとしている簪。

どちらも間違つてはいない。

それが故に簪は言葉に詰まる。

そも人と人の諍い等、どちらも正論だから勃発するのだ。かの未来から来た猫型ロボットも言っている。

「私の所為だ……」と落ち込む鈴に、簪がワタワタと慌てていると、いつの間にか近づいていた影がヒョイと鈴の手をとる。

「ティナ……？」

手をとつたのは金髪碧眼の少女ティナ・ハミルトン。

鈴のルームメイトであつた彼女は、その手を優しく握り微笑む。

「もう…鈴はまたそうやって落ち込んで…」

「でも、」

「『でも』じゃない。そうやって鈴が気に病んでいると、あの2人は余計に火花を散らすよ」

「……」

「……気にしちゃうよね。私でよければ、いくらでも話に乗るよ」

「あ、うん……」

癒す様な、慈しむ様な、ゆっくりとした調子で鈴に語りかけるティナ。

ここにおいても邪魔かと思つた箒は、少し頭を下げて去つていった。

—————

「しかし、気に病むのも止むなしと言つたところだな……」

自分の部屋へと戻るべく、廊下を歩く箒は、意気消沈といった面持ちの鈴を気にかける。

（二夏の件もそうだが、なにも出来ていないという己の現状が、心を苛んでいるのだろうな）

更識簪。セシリア・オルコット。

彼女達が情報を集めるのに使う「コネ」というものを、同じ候補生ながら鈴は持つていない。

それも当然だ。

暗部や貴族、そして代表候補生として長年動いて来た2人ならばそこまで築き上げた人脈があるが、持ち前の才能で半年という短期間で登りつめた鈴だからこそ持つていないのだ。

（姉さんとは連絡がとれないし……ううむ、私の存在価値は真面目に姉さんと紅椿に依存しているしな……）

そう言った事には詳しくない筈だが、情報収集に人手が必要だという事ぐらひは理解

している。

それを超越出来る人物とのコネクションは己も持つてはいるのだが、どういう訳か現在音信不通。

いつもの事といえはいつももの事だが、あの姉が世界IS大戦に黙っている筈は無いだろうと、思っていたのだが。

そう筈が、訝しんでいると……

くく♪

「……？ 非通知？」

携帯が、鳴った。

「もしもし……？」

怪訝な面持ちで筈は通話をとる。

『白びやくしき式・雪羅せつらの記録ログを参照……照合完了。マスター箒と認識しました』  
 「…!? きさ、まは……!!!」

スピーカーから響く音に凍りつく。

脳はその声を記憶の中の人物のものと判断するが、心は違うと叫びたてる。

——ああ、これが前に鈴が言っていた『心が軋む感触』か。

焦慮に揺れる感情の中で、どこか冷静にそう思う。

震える唇で、なんとか少しずつ言葉を紡ぐ。

「白しろの……一夏!!」

『はい。自己の個体名は白しろの一夏です』

篠ノ之箒。



「……どうやってこの番号を知った。答える！」

セシリア・オルコット。

「せめて、私だけでも相談してくだされば……」

凰鈴音。

「情けなくて……みつともなくて……。私が一番、私をぶっ飛ばしたいよ」

更識簪。

「新型機を一刻も早く完成させる……！ ……ああつ、吹っ飛んだ!!!」

そして、2人の一夏。

「悪い…鈴」

『質問入力…回答、出力。…この番号は、ドクター束の端末から採取しました』  
彼らを巡る運命の歯車は回り出した。

最早、止める事は叶わない。